

池田大作全集

36

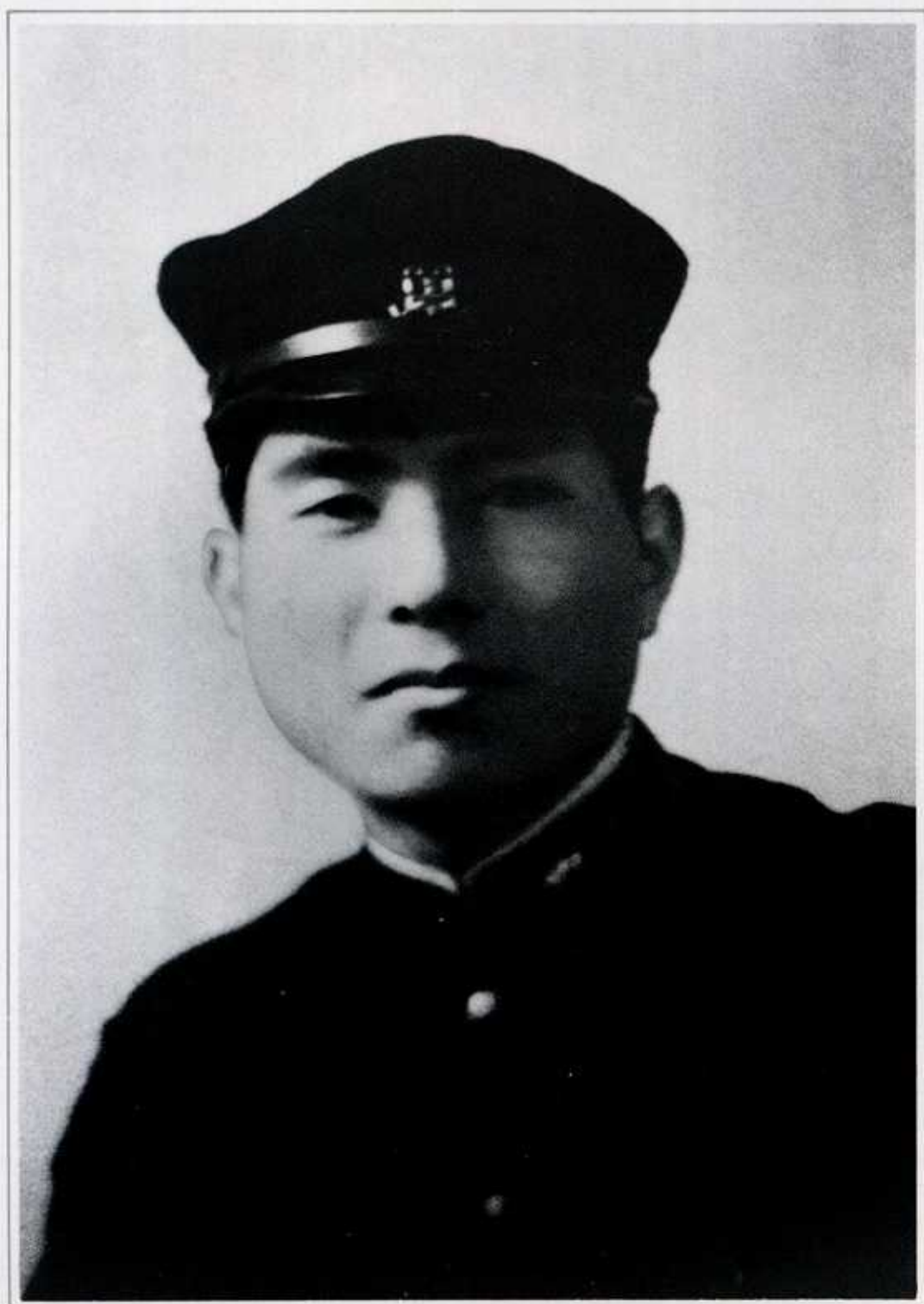
日 記

池田大作全集

第三十六卷

日
記





若き日の著者

目 次

はじめに 9

若き日の日記〔上〕

昭和二十四年（一九四九年）

五月 15

六月 16

九月 31

十月 34

十二月 43

昭和二十五年（一九五〇年）

一月 47

昭和二十六年（一九五一年）

五月

.....

49

六月

.....

74

七月

.....

93

八月

.....

103

九月

.....

115

十月

.....

129

十一月

.....

147

十二月

.....

165

一月

.....

179

二月

.....

206

三月

.....

230

四月

.....

251

五月

.....

268

六月

.....

281

昭和二十七年（一九五二年）

十二月 289

昭和二十八年（一九五三年）

一月 313

二月 329

三月 334

四月 341

六月 344

十月 354

十一月 369

十二月 371

昭和二十九年（一九五四年）

一月 375

昭和三十年（一九五五年）

四月	三月	二月	一月	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月
.....														
604	585	555	535	526	513	507	497	464	431	422	407	396	382	

後記

「池田大作全集」刊行委員会

729

十二月

717

十一月

694

十月

652

九月

636

七月

635

六月

633

五月

609

扉イラスト 佐藤 哲也

はじめに

さきに週刊言論編集長ならびに幹部諸兄から、是非にとの強い要望があつて、「週刊言論」に掲載した「若き日の日記から」が、今回、会長就任七周年記念出版委員会の手によつて、単行本として二巻にまとめ、上梓される運びとなつた。

この七年間、私と苦楽を共に、広宣流布への道を歩んだ同志が、さらに次への新しい出発を、心から祝福してくれる気持ちに、深く感謝しつつ、本書の出版を諒承した次第である。

日記なぞ、人前に見せる性質のものでないことは充分承知している。しかし、私共は、同じ兄弟の仲だ。私の過去のありの儘の姿を、飾らず知つて貰うこともよいと思つた。

ただし、この日記は、断片的に走り書きに残したものであり、主観的なものであるから、全般に亘つて、意味のわからぬことも多いと思う。まして、はじめの、昭和二十四、五年といえ、二十一、二歳頃であり、何の、重大な内容も、時代背景も書いてない。したがつて、何等、重要な意味もないことを大前提としていただきたい。

また、個人的なことで、他に影響あるところや、会社等について、不必要な内容は削除さくじよしたことを、あらかじめ予めお断わりする。

さらに、内容については、読み易くやすしていただくために、編集・校閲こうえつの関係者の方々に、用語の統一、句読点等について、種々検討けんとうの上、仕上げていただくことをお願いした次第である。

なお、題名は単に「若き日の日記」としたことを諒承していただきたい。

昭和四十二年五月三日

池田 大作

若き日の日記〔上〕

昭和二十四年

—一九四九年—



五月三十一日（火）

小雨

人生には、あまりにも仮面者が多い。真実を尊しとしてゆかねばならぬ。特に青年は。一生、真実を追求しゆく人は、偉大なる人だ。

戸田先生の会社に、お世話になって、早^{はや}、半年。実に、波乱激流の月日であった。あらゆる苦悩に莞爾^{かんじ}と精進しゆくのみ。生涯の師匠、否、永遠の師の下に、大曙光^{しやこう}を目指し、信念を忘却^{ぼうきやく}せず前進せん。

少年雑誌『冒険少年』七月号でき上がる。自分の処女作となる。純情なる少年を相手に、文化の先端を進む、編集を、自分の親友と念^{おも}い、恋人の如く思うて、力の限り、向上発展をさせよう。

「今日の使命を果たすべし」

これ、将来に光りあらしめる所以^{ゆえん}なり。

歸りに、新橋にて、映画を観賞。

七時、起床。十二時、就床。

若人^{わこうど}は、豊かな心を、作り上げねばならぬ。寛大^{かんだい}な生命を、持たねばならぬ。信心に
て。

〔五月〕——池田名誉会長は二十一歳であつた。入信から一年九カ月たっている。前年四月より大
世学院（現・富士短期大学）政経科夜間部に籍を置いていた。この年の一月から戸田第二代会長（当
時、理事長）の経営する出版社「日本正学館」に入社して、少年雑誌「冒險少年」の編集にたずさ
わり、五月、同誌の編集長になる。戦後の学会再建も緒につき、会員数も戦前の最盛期三千人を
上回り、七月には機関誌「大白蓮華」が創刊された。

六月一日（水） 晴

「嘘^{うそ}つきは、人生最大の^{げれつ}下劣であらう」

然るに、現実の社会は、すべて、虚意に生き、方便に消えてゆく。情けないことだ。

大使命に生きてゆく、吾が身の前途を、猛省することを忘れてはならぬ。地獄に行く道、意義ある、真実の人生を、闊歩しゆく道。この二道が、青年の足下に今あるのだ。

先生より、要、略、広の、仕事上の、また、渉外上の指導、注意を受ける。

薫風千里、新緑の六月。血潮湧く青年時代を、悔いなく、前進させねばならぬ。

夜、「法華経」講義を休み、K氏の「大白蓮華」の校正を少々手伝う。広宣流布の、先陣である「大白蓮華」の発展こそ、私達の真に願うところである。

室が狭く、御本尊様を、お粗末にしているような気がしてならぬ。誠に申しわけない。御本尊を、粗末にすることは、自己の生命を、粗末にすることと同じだ。一日も早く、厳かな御座に、御安置したい。

今夜は、実に素晴らしい月光だ。地球上に、人類の上に、あの月の世界と、星辰のまたたきがなかったなら、どんなにか、淋しく空虚なものであろうか。

人生は、確信なり。人生は、努力なり。人生は、慈悲たれ。

確信の無き人生は、はかなく、果敢を知らぬ。水溜まりの如し。

努力なき人生は、狡猾に世渡りし、剛腹厚顔の下卑なる盗人の如し。

慈悲なき人生は、現今の学者、政治家の如し。便乗に長ずる人気者は、枯葉を知らず。

確信ある人生の、強烈さ、信念。

苦悩、苦難に打ち向かう、雄々しき努力家の、尊き姿。

威厳にして、玄泊、慈悲に満ちみちた人格者のお姿、戸田先生。

ああ偉なるかな、生命の完成。

六月二日（木） 晴

涙に濡れ、涙に新たなる力を感じ、涙に、云い知れぬ感激を胸奥に湧きいだす、青年時代。詩想豊かな青年、感激と努力に生きる青年。その尊き青年の生涯こそ、芸術上の極致

の生き方なりと表現したいものだ。

文学に、詩歌しいかに、音楽に。

青年らしく、自らの道を違たがえぬことを祈る。

所詮しよせん、絶対に、御本尊を信ずるのみ——苦悩の打開、人生の目的の成就、人類救出の偉業においては。大使命を感じながら、生きねばならぬ。大曙光しよこうを目指し、前進せねばならぬ。

人間は、皆、虚栄を張るものだ。自分も、その一人だ。しかし、これからの指導者は、確固たる力をもつ人間でなくてはならぬ。古人、先覚者達の姿を忘れず。

時代は、一日一日、前進する。前進に追いつき、否、前進の先駆をきれる、自分となりたいものだ。

私は、子供が可愛い、未来の夢を実現する後輩なれば。日本人、全体が可愛い。何時いつでも、誰人にも、抱擁ほうようし、握手してみたい。しかしそれは、許されぬ、社会おきての掟か。

私は、人類を愛する。恋人の如くに。しかし、私の口で絶叫しても、到底、届かない。世界の人々よ。今こそ、真の宗教、日蓮大聖人の教えに、従う時が来ているのだ。私は、金鐘きんしょうを打つ。暁の静けさを破つて。乱響らんきやうの鉛鐘えんしょうに負けずに。

六月三日（金）

曇

朝から、涼しかった。午後より、雨になりそうであつたが、降らなかつた。

毎日、忙しい。だが自分に、与えられた課題に、真正面から取り組むことだ。なれば、意義ある仕事になる。苦しくとも、実に楽しい。先生の会社を、日本一の会社にしたい。日本一の雑誌を作り上げねばならぬ。

学会の発展、闘争に、心を打たれる。

父を信心させねばならぬ、一時も速やかに。我が家を、根底から、改革させねばならぬ、一日も早く。まさしく、自分の使命なりと痛感す。

決断なき人生は、事を為すに非ず。私は、意気地いけぢなし。これで、宗教革命を、真に成

就しゆく青年といえるか。真の青年として、起て。真の青年として進め。

夜、「三世諸仏総勘文教相廢立」を拝読。

末代の学者何ぞ之を見ずして妄りに教門を判ぜんや大綱の三教を能く能く学す可し、頓とん（空）と漸ぜん（仮）と円（中）とは三教なり是れ一代聖教の総そうの三諦さんたいなり頓・漸の二は四十二年の説なり円教の一は八箇年の説なり合して五十年なり此の外に法無し何に由つてか之に迷わん、衆生に有る時には此れを三諦と云い仏果ぶつかを成ずる時には此れを三身さんじんと云う一物の異名なり之を説き顕すを一代聖教と云い之を開会かいえして只一の総の三諦と成ずる時に成仏す。

ああ、無限に進動する大宇宙。連綿れんめんと創造されゆく歴史。火宅に包まれ、右往左往する社会。闘争に闘争を廻めぐらす人生。人智の及ばぬ、大自然の秩序ある流転るてん。一体何をもつて、多感の青年の、解決、解答の鍵かぎとすべきか。いま、御書を拝し、歓びよろこにふるえる。

すべての本源、根底を諦あきららかに説き、真実の幸福を示唆しさされた、仏法。

何人よ疑わん。人類最高の指導原理ここに有り。政治家よ、文学者よ、科学者よ、覚醒かくせいせよ。信ぜよ、大白法を。

六月四日（土）

晴

前進には、革命には、様々さまざまの圧迫がある。それを、打開しゆくのが青年の青年たるゆえんだ。冬に耐え、春の大地の萌芽ほうがの如くに。

青年よ、いつまでも、甘い考えを抱いておってはならぬ。現実には、厳しい。向上、成長と、墮落との戦いが、青年時代だ。青年は、真剣に、目的に進む時、最も尊い。されど、決して、微笑を忘れてはならぬ。常に快活であれ。

二時より、編集会議。『冒険少年』の改名問題がでる。日本一の少年雑誌に、何が何でも、仕上げねばならぬ。これが、自分の使命である。戸田先生に御恩をかえす所以ゆえんでもある。

六時より、青年部会。自分と、K君とで、邪宗仏立宗を破る法論の発表をなす。先輩各位の、熱の無いのには驚く。

いよいよ、自分の真っ先に進む秋ときが来たか。広宣流布のために、大聖人の大哲学を、

ひっさげて。

六月六日（月） 曇

心身共に、疲労^{ひろう}。毎日が激務だ。

嵐^{あらし}の中の青春。これこそ、深く、遠く、幽^{ゆう}である。ベートーベンの弾^ひく、力強き調べの如き青春。ダンテの、狂わしきほどの、詩情溢^{あふ}るる青春。嵐に耐えゆく、雄々しき若木。嵐に光る幽美な樹木。碎かれても、碎かれても、なつかしき土の香り。芯^{しん}まで、風雨に打たれても、悠遠^{ゆうえん}の美を忘れ得ぬ魂の躍動。嵐の中の青春よ。やがて来る、光り輝く、太陽を忘れず、前進することだ。

朝より曇天。会計長より、早く出勤し、整頓するよう、みな注意をうける。女子職員も可哀想だ。資本家と、労働者との不合理を、まざまざとみせつけられる。

いずこの会社でも、笑って、信じ合って、働き得る日の来るのを待とう。いや、待つのではない、作るのだ。自分達の手で。

街では、東交労組の三支部、目黒、広尾、柳島でストだ。

公安条例反対デモで、橋本金二と云う人が死んだ。殺伐たる日は、依然続く。

広宣流布の、一日も早く来るように。

祈る、祈る。唯祈る。

会社にて、九時四十分まで仕事。皆帰り、唯一人。誰も見てなくても、真剣に働くことは、実に楽しい。

帰宅、十一時二十分。遠くて困る。

そして、うどんが一皿。

六月七日（火） 小雨

梅雨に入るか。しとしとと朝から雨だ。

東洋人は、特に日本人は、自然に対する詩想の情が強い。戦災復興の民族も、かわら

ず、かくありたい。

しかし、現実の庶民は、入梅にゆうばいになると、ヒステリックになり、ますます感情の悲劇が展開される。痛ましき次第なり。

身体、非常に疲れてならぬ。朝寝坊になって困る。人間革命が、信心の目的だ。頑張らねばいかん。

一年毎ごとに身体の丈夫になって来ることを自覚出来る。

溺れおぼれゆく若人わこうどに、悶もだえ苦しむ老人に、剛腹ごうふくな人々に、真実の信仰の歓喜、情熱あふに溢るる五体、大使命しやうじんに精進する、若き意気を、示しゆかねばならない。

「正義によって立て、汝なんじの力二倍せん」

画家、I氏と、二時間近く、フランスの芸術、政治、社会に関して語る。

雨が夕刻、次第に降る。

静かな編集室で、一人読書。これから、うんと勉強しよう。負けてはならぬ。特に、政治面、経済面の学問をも。

六月八日（水） 雨

今日も雨、寒いぐらいだ。

『冒険少年』八月号の割り付けも大体終わる。ほっと一息だ。八月号こそ、大発展させねばならぬ。

「仏法は勝負なり」

正しき社会観をもった、日本正学館が、他社に負けてはならぬ。

仕事上、多くの画家、作家と会う。先生々々といわれる人々。会ってみれば、がっかりだ。世に偉大なる人とは、人格者あるのみ。

現今の芸術界に、何人、尊敬すべき人ありや。芸術家は、偏屈へんくつで良いのかもしれぬ。だが、何度、足を運ばすのだ、この貴重な時間に。

帰り、蒲田駅近くの靴屋にゆく。古靴一足購入。

社会は、矛盾むじゆんが多すぎる。正しく生き、働いて、物質に恵まれぬ人。働かず、要領よく

生きて、物質に事欠かぬ人。様々だ。

所詮、人生の勝利者とは、物質の獲得者か。つまらん……。自己の境遇を、じっと見るべし。そして、大いなる打開をして、未来の実証となす。これ信仰ではないか。

青年よ、決して、悲観することなかれ。羨むことなかれ。

六月九日（木） 雨

梅雨……梅屋敷駅まで、歩く。

道行く人々も、みな五月雨に濡れている。一人、女学生達の白服が目につく。乙女達よ、君達の前途は……何も考えていないかも知れぬ。しかし、君達は、たしかに人々を潤している。君達こそ、偉大な芸術の要素をもっている。君達そのものが、芸術の権化であるかも知れぬ。清新な君達が、もし、いなかったら、この町も、社会も、世界も、なんと淋しきことだろう。殺伐であらう。家庭に花なく、天に星辰の輝きなきと、同じことだ。一人一人の、乙女等の、前途に祝福あれ。米人の、仏人の、スペイン人の、乙女達も同じく。

雨の中、帰宅十時五十分。自宅まで、びしょ濡^ぬれた。全く情けない。
孤独なれど、その半面、脈々と、将来への曙光^{しやこう}を思い、感泣^{かんきゆう}す。
夜食。パン一皿。

六月十三日（月）

曇

朝から頭が痛む。身体を大事にせねばならぬ。

変遷^{へんせん}に変遷^{へんせん}を重ねゆく心境。目的を凝視^{ぎやうし}していながら、ふらふらしている自己の悲しさ。勇躍し、はち切れそうな青春時を実感したかと思うと、魔に流され、断崖^{だんがい}に立つ思いをなす、自己。

宗教革命と、大理想を、思惟^{しゆい}したかと思うと、現実の嵐に、境遇に、戦^{おの}く、淋^{さび}しき自己。

青年よ起^たち上がれ。前進だ。それ以外に、人間革命はないのだ。

現実の渦中^{かちゆう}に、飛び込んで戦え。恐るるな。大使命を痛感せば！

神田にて『パスカル冥想録』『情熱の書』他一冊、計三冊購入。合計、百二十円也。

今日は、幹部会。躍進しゆく学会の雄姿^{ゆうし}。取り残されてはならぬ。ただ、仕事の都合上、思うように、学会活動の出来得ぬことが、残念であり、無念である。この五体をば、大聖人に捧げるとは、何と幸福であらうか。

折伏をせねばならぬ。学問も遅れている。明日は学校(夜学)にゆきたい。ずいぶん休んだ。友人が待っていることだろう。

六月十四日(火)

曇

爽やかな朝であつた。身体の調子、芳し^{かんば}からず。九時三十分、出勤。

みんな来ているので、きまりが悪い。明日よりは、もっと早く出勤することを、決意する。

六月十六日（木）

雨

戸田先生より、叱咤^{しつた}ある。苦しい。

自分が、悪いのだ。猛省^{もうせい}せねばいけない。

先生を信じて、どこまでも、頑張るきることだ。自分の悪いことは、常に反省し、革命してゆける人にならねば……。しからずんば、哀れな自身をみるよりほかの人生は、ないであらう。

全精力を発揮して、又、前進だ。

過去の偉人の、少年時代、青年時代を、思い浮かべよ。

〔六月〕——昭和二十四年には、インフレ抑止^{よくし}のためにドッジ・ラインが実施された。連合軍総司令部の意向によって行われたこの超引き締め政策のため、国内経済は一転してデフレ不況に向かった。中小企業の相次ぐ倒産、失業者のはんらんという事態に全国で労働争議が激化した。五月三十日の東京都公安条例反対デモで死者が出たことに抗議して、六月二日に東交労組がストを行い、さらに六月十日、十一日の両日、国電がストを行った。国電のストでは各地でレール座り込みなど「実力行使」^{ひんぱつ}が頻発したため、連合軍総司令部がスト中止命令を出すほど重大な事態となった。

このほか十三日にはソ連抑留^{よくりゅう}日本人の送還問題をめぐって、連合国防日理事会を舞台にソ連と

米国の非難合戦が表面化するなど、深刻化する東西の冷戦は日本にも濃い影を投げ始めていた。

九月二日（金）

台風

キティ台風いたり、濁水の街、続出す。今日も、朝より豪雨、気が痛む。

使命を自覚する人は、隣人以上に、自己を清浄にして、一日一日を送らねばならぬ。

偽善者となることなかれ。柔弱な人格者となることなかれ。社会の人々より、尊敬せられるのも、表面上の、形式の賞嘆であってはならぬ。そんな、名誉を欲するのは、人間として、惨めな輩である。

若人よ、真つ先に苦難に進め！ 信念と正義の、偉大なる人生を、生きんがために。国のため、人類の幸福のために。

いかなる圧力にも屈するな。希望と大志を胸に。

正義の剣を持し、戦う者は、必ず、歴史が証明することだろう。大聖人の照覧なれば、断じて恐れてはならぬ。卑屈になつてはならぬ。

雄々しく進め。大胆に進め。若いのだ。若いのだ。

常に、伸びるのだ。

飛躍を忘れてはいけない。

今日も、自分自身を反省しよう。

自己に、偽りありや。罪を、犯しておらぬか。真に慈悲を、痛感し得るや否や。

さあれ、昨日までの人生は、最早、劇であり、過去であり、夢である。今だ、今からだ。未来が、檜舞台であり、償いの道場なのだ。

「御義口伝」を拝読。

御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難来るを以て安樂と意得可きなり。

九月四日（日）

壘

今日の問題は、何か。今日の一日の使命を果たすことだ。今日の使命とは、何ぞ。自己の境遇にて戦うことなり。その戦いとは、如何^{いかに}。自己を発揮し、全力を尽くして進むことだ。

明日の問題は、何か。明日とは、瞬間瞬間の連続であり、今日の延長か。いかに、今日が苦しくとも、明日を夢みるとき、希望は湧^わく。

今日の日に、最上を尽くすとき、未来は、必ず光明に輝く。歡喜の焰^{ほのお}は燃えたつてくる。その刹那^{せつな}刹那の実感が、永遠に連続し、人間革命をなしてゆく以外にない。

人生の最大の問題は何か。それは、死の事なり。死とは何か。人類の歴史、五千年。幾多の聖賢、世に出^いず。然^{しか}るに、真底より死を解決した人は、ありや。その死を、実証しきつた衆生は、何処^{いずこ}に。

この死を、解決出来得る、唯一^{ただ}一つの道こそ妙法なのだ。この問題を、解明し、解決し、実証せねばならない。

この法なくんば、二十億の人類は、不幸の淵^{ふち}に、遊戯^{ゆうぎ}しているに等しい。

人類を救出する原理は、妙法しかない。この根本の重要さを、切実に痛感する。

弱き自己よ。進め。勇猛精進^{ゆうみしょうしん}ではないか。此の一年、大聖人の弟子として、有意義に、奮^たい起て。

〔九月〕——八月三十一日、神奈川県に上陸し、東日本一帯を総なめにしたキティ台風（当時は米国の習慣にならって台風は女性名で呼ばれていた）は、死者六十八人、行方不明三十九人、都内浸水家屋十万户以上という十一年ぶりの風水害をもたらし、復興途上の国土に深い傷跡を残した。また、六月から九月までの間には、下山国鉄総裁が死体で発見された下山事件（七月六日）、国電三鷹駅で無人電車が暴走した三鷹事件（七月十五日）と戦後の混乱を象徴する大事件が相次いでいた。

十月二十四日（月）

晴

昨日、第四回創価学会総会を終え、本日も、続いて、秋晴れの、爽^{さわ}やかな日であった。

午前中、O部長より、会社の将来の説明を聞く。

なお『冒険少年』の題名を、『少年日本』と改名して三か月。事業、大資本に押され、多難の模様。しかし、それは、私の分野ではない。私は、私に与えられた、仕事をするにとだ。

『少年日本』——なんと、豊かな、力強い、言葉だろう。未来に伸びゆく少年。春の如く快活な動作。秋空の如く、澄んだ瞳^{ひとみ}。曠野^{こうや}の如く限りない希望。純情な少年は尊い。未来の、次代の、社会の建設者なれば、日本の宝と思わねばならぬ。

今年、これらの少年を、友に、相手にして精進できたわけだ。尊き仕事と、確信したい。

少年よ、日本の少年よ。世界の少年達よ。願わくは、常に、一人も洩^もれなく明朗であれ、勇敢であれ、天使の如くあれ。

正午より、M作家、I画家の宅を訪う。少年達の、夢を画^{えが}いてもらうために。新年号の。

I画家宅は、新天地ともいえる、南多摩であった。快活な先生に、理解を戴^{いた}く。静かな

大地。黄昏たそがれの静寂の草地をわけ、六時二十分、小田急の人となる。彼は、キリスト信者という。気魄きはくはあれど、真に、自己を知っている人ではない。私には、何も、教わるものになかった。

大空には、三日月が皓々こうこうと冴さえていた。

七時三十分、社に帰る。先輩と、種々打ち合わせ。十時、帰宅。

十月二十五日（火） 雨

朝、曇天。やがて、秋雨と化す。うっとうしい一日であった。

『少年日本』休刊が発表される。全く意気消沈しやうちん。午前中、編集室、事務室で、客と応対するばかり。

自転する地球が、急停止したら、その反動は、大である。飛びゆく飛行機が、瞬間にエンジンが止まったら、大変だ。

昨日まで、全生命を賭した仕事が、急停止したのだ。驚くのは、当然だ。

ただ、世法の人々の曲解を、私は恐れる。戸田先生の御人格と大使命を、観ずればこそ。

先生の指示のもと、私は、再び、次の建設に、何でも、お尽くししてゆけばよい。そう思えば、社員の、あわてふためいている姿は、滑稽にみえる。信心している者も、ない者も。

戸田先生の人格は、嵐や、波浪で、押し流されるようなものでない。最終の事業によって、その偉大な、人格の勝利は、決定されるものだ。浪を越え、嵐を越え、最後に、その力と、高貴なる感化は、満ち溢れ、万人の尊敬と、渴仰の金字塔となることだろう。

大衆は、愚人が多いともいえる。しかし、賢である。また、歴史は、偉大なる人物を、置き忘れることもある。

されど、私は、真の人格者たる先生は、その光輝ある力は、消えうせることは、決してないと信ずる。

A画家を、秋雨の中、訪う。不幸な人。

大聖人の哲学を話す。早く、幸福になることを念じつつ。

夕刻、銀座文庫に、I氏のペン画『マゼラン太平洋発見』を、受け取る。

帰り、新橋にて、一人、映画観賞。座談会に出席しなかったことを、痛切に苦しむ。

さあ、明日だ。希望の明日だ。

十月二十六日（水）

快晴

爽やかな、秋晴れ。元気で出勤。

『少年日本』の跡片付けだ。あとかたづ一日も早く整理し、一日も早く、先生の次の旗揚げを、待

とう。そして、光輝の秋を送りたい。

午後、H画伯を訪う。最後のお別れかも知れぬ。利害の付き合いは淋しい。さび大家、少年の心を、知らず。

靴を、修繕する。一金百円也。

身体が疲れてならぬ。夜学は、無理の様子。

先生も、非常に、大変な様子。

君の目的は何か。それは、宗教革命だ。

宗教革命とは何か。それは、人類幸福への直道だ。

宗教革命する方法は、何だ。

自らが、この大哲理をば、実践しゆくことだ。

そして自らが、根本を会得、感得しゆくことだ。

十月二十七日（木） 雨

秋雨蕭条。正午まで雑談、編集室にて。

嵐が発生したとの予報あり。今年ほど、嵐の多かったのも、珍しいであろう。その原因如何。ただ自然現象と、放言出来得ぬものがあるはずだ。

I氏を、厚生省にたずねる。相変わらず、元気な友人の顔をみて、嬉しい。ダンスに夢中らしい。溺れねば良いがなあ。心配だ。多忙のため、少々の雑談で別れる。

風雨、益々強し。

五時にY先生と、大森駅に待ち合わす。五時三十分、来られる。二人して横浜小湊のH宅の座談会に出席。雨のため、市電遅れ、七時過ぎに、到着。五十人ほどの求道者あり。なかなか、意義ある座談会であった。十時閉会。Iさんと、蒲田まで帰る。

台風、いよいよ激しい。題目をあげながら、嵐の中を帰宅。十二時。

十月二十八日（金） 雨後晴

台風一過。十時頃より、秋晴れ。

仕事、残務整理。午後より、机にて、本を読む。

『少年日本』最終刊印刷出来上がる。これが当社の最後の雑誌か。大した出来ばえに非

ず。実に、残念だ。刷^すりといい、紙といい、惜しく思うのみ。

五時半、ソバを食す。社を、やめようとする人のあるを感じる。已^やむを得まい。

私は、また、明日より、強い、明るい力を発揮して、頑張ろう。若いんだ。青年なのだ。

久しぶりに、夜、風呂にゆく。

次第に老いゆく母を、可哀想に思えてならぬ。

十月二十九日（土）

曇

朝八時、出勤。

社員達と、神田通りを少々散歩する。みな元気なし。

途中、小雨降る。

三時より、新事業への会合をする。

戸田先生の経済観を、胸を高鳴らせて聞く。

共產經濟と、資本經濟と、信用組合との連関性等。

なお、先生の事業体験談。一生涯を貫いてきた、努力、情熱、苦心談等、尊いお話であつた。他の社員はどう聞いておるか知らぬが。

六時、分割払いの給料を貰う。床屋にゆく。給料が安い。私も、皆も、大変だろう。

十月三十日(日)

晴

ゆっくり休む。九時、起床。秋晴れ。

高らかに、題目を唱える。姪めいと昼食時まで戯たわむる。可愛い子等は、人生のオアシスだ。

尊い、幼少の子供等を、万人が、お互いに大事にしてゆけば、自然に、戦争回避かいひの一大思想になると思うが。

午後より、出勤。途中三か所、全国競技大会の聖旗の走持者と会う。真白きランニングに、逞たくましい力を思う。

夕刻まで、編集室にて、残務整理。読書。

夜、K宅を訪う。種々懇談^{こんだん}。

帰ると、母、ぐっすり寝ている。偉大なる母よ。

〔十月〕——日記中に靴の修理代百円とあるが、昭和二十四年当時の物価をあげてみると、白米（二等十⁺）三百九十三円、食パン（半斤^{はんしん}）十円十三銭、大根（百匁^{もんぶ}）三百七十五[㌔]）六円六十二銭、牛肉（百匁）百七十四円十七銭、鶏卵（百匁）百十四円七銭、牛乳（二合^{にがう}）百八十[㌔]）十円八十二銭、ビール（二本）百十四円四十四銭、靴下（綿）百二十六円十七銭、入浴十円、新聞（一カ月、ただし一日二[㌔]）四十五円となっている。

十月二十八日に最終号（十二月号）が出来上がった雑誌『少年日本』は、『冒険少年』をこの年の八月号から改題したもので、若き日の池田名誉会長が編集にたずさわっていた。このところから、戸田第二代会長（当時、理事長）の事業は不振となり、十月には日本正学館の雑誌の休刊が決まる。

十二月四日（日）

曇時々小雨

身体^{すこぶ}の調子、頗る悪し。健康第一だ。勤行以外に、改造の道なし。

いやな天気。曇りの日は、心まで曇るようだ。宇宙現象は、全く、自己の小さな身体を、勝手に、動かしてしまふものだ。

今日から、新事業への、仕事を始む。

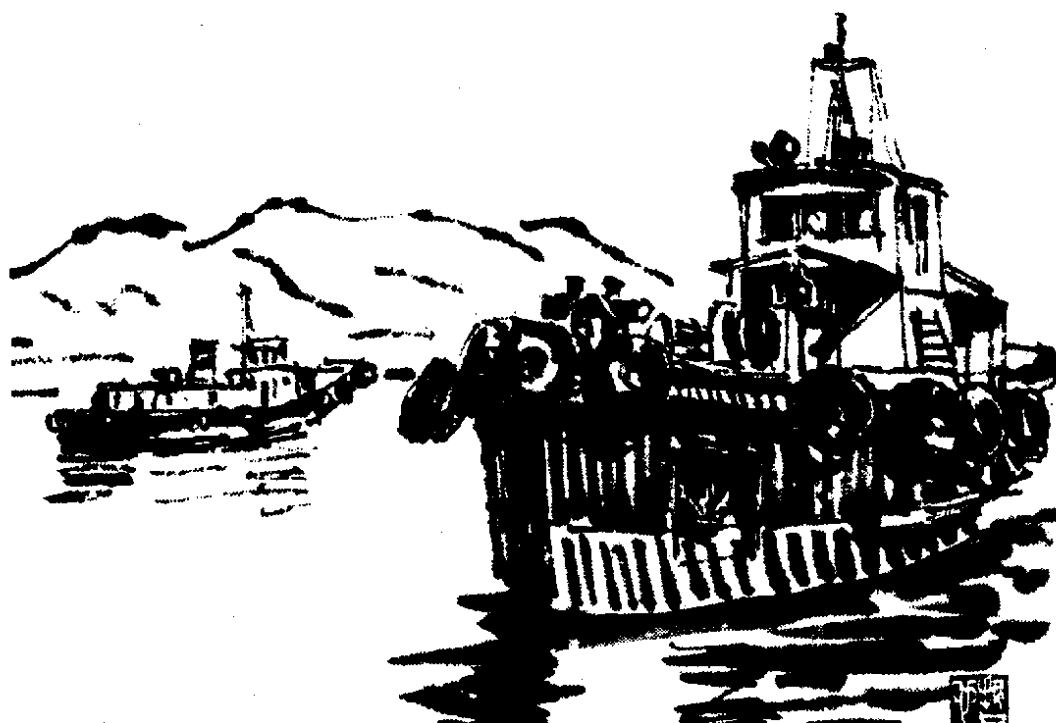
夕刻、K教授、I教授等と、仕事のことで会う。全く、立派な教育者は、少ないものだ。

帰宅、十一時。読書。

〔十二月〕——日記にある新事業は、戸田第二代会長（当時、理事長）がこの年の夏から経営に着手した東京建設信用組合であり、日本正学館の社員は、十二月から組合の社員として業務を開始した。当時の不況と失業の嵐の中で事業の成功は望めず、襲い来る危機を克服するため、戸田理事長が会合に出席する日は減少していった。一方、学会員の増加にともなう指導、訓練は、一歩もゆるがせにできないところから、新たに総合座談会が企画され、十一月二十七日を第一回として、二カ月に一回程度行われていった。毎回、数百人の会員と多数の新来者が参加し、戸田理事長の折伏を学んでいた。

昭和二十五年

——一九五〇年——



一月一日(日) 雨

朝十時まで寝てしまふ。隣室のおばさんに起こされ、雑煮ぞうじを御馳走ごちそうになる。アパートの一人住まいは、気軽であるが、侘わしい。

大急ぎで、勤行。先生宅へ。

先生を囲み、K、I、Y、I氏等数名にて、御馳走ごちそうを頂戴ちやうだい。種々御指導ごしどうを戴いたく、夕刻まで。意義ある正月であつた。

「辨惑観心抄」(編注・日蓮正宗第五十六世日応上人著)の講義をうけたまわる。

初日の出、吾われを、照らせよ、今年こそ。

日に日に新たににして、また日に新たなり。(大学)

一月二日（月） 曇

早朝、四時四十分起床。寒い寒い。

初登山。元気で、大森駅まで歩く。六時・東京発の列車に、品川にて、六時十二分に乗る。

同志の人々と、元氣一杯に会う。

悠々^{ゆうゆう}たる人生を、忘れてはならぬ。

M君と共に、先生の隣に腰掛け、お話を、うけたまわる。——『永遠の都』の……。

二時、御開扉。大御本尊様にお目にかかる。

今年こそ、今年こそ、力ある一年を歩みたい。

列車の中にて、沼津より品川まで、学会歌、同志の歌を、高らかに歌いつづけて帰る。

一月三日（火） 晴

午前中、休む。一人して。疲れる。疲れてならない。家にゆかれぬことが残念だ。
母のことを思う。

午後、読書。夕刻より、二、三人の友人と雑談。明日より出勤だ。

〔二月〕——昭和二十五年は、マッカーサー連合軍総司令官が年頭の辞で日本の自衛権を強調したことに始まり、一月には聖徳太子像のついた千円札が発行され、四月にはタバコの家配給が廃止されるなど、政治、世相面で新しい動きが次々とみられた。しかし半面、三月には東京・八王子職安で自由労働者が完全就労を要求して座り込み、六十八人が検束され、以後、東京各地で同様の事件が続発するなど、戦後の経済苦はまだ色濃く影を落としていた。

五月九日（火）

快晴

あな、嬉し、
恩師に遊ぶ

吾が生命

悠久とわに……

朝寝坊し、少々遅刻。あわてて神田食堂にて、二食分を食う。一人者は非常に吞氣のんきだ。そこに、生活の不規則がおこり、欠陥を呼び起こしゆくことは必然だ。

家を離れて、早くも、一年。

永遠の生命の、一瞬間に、不思議にも、因を、縁を、結びし親だ。苦勞に苦勞を重ね、私を一人前の人物として育はぐくみ、苦しんで下さった親だ。忘れることは出来ない、瞬時たりとも。親孝行をしなくてはいけない。今に見ろ。

五月十日（水） 小雨

仏になる道には我慢がまん偏執へんしゆの心なく南無妙法蓮華經と唱となへ奉るべき者なり。

（法華初心成仏抄）

疲れてならない。題目しかない。重苦しい中を、仕事のこと、部長と、〇学園にゆ

く。また、O第一小学校に回る。事業は、劇の如く、戦争の如し。

夜、少々早めに帰る。実家の安否を、しきりと念^{おも}う。

隣室の子供をはじめ、数人の子等と遊ぶ。一晚中、嬉^{うれ}しそうに、騒いでいた。可哀想な子等を、何とか、仏法で導き救わねば。

五月十一日（木）

雷雨

昔は一切の男は父なり・女は母なり・然^{しか}る間・生生世世^{しやうじやうせせ}に皆恩ある衆生なれば皆仏になれと思ふべきなり。

（上野殿御消息）

若き生命。何と力強き表現であらうか。

この生命を、どう生かし、どう消耗させてゆくか。有意義な仏道修行に、まかせることだ。

六時、O氏、T女史を、部長と共に、G軒に招待。久しぶりに、ゆっくり食事をする。

若き人々よ、明日に生きよう。

過去に、とらわれるな、全て夢だ。

五月十二日（金）

曇

父母の家を出て出家の身となるは必ず父母を・すくはんがためなり。

（開目抄）

暑い日であつた。激戦に、多少、疲労を感じず。

人類に、一大哲学を絶叫しつつ進軍する、青年の姿こそ、尊く、美しい。

事業は、劇の如く、戦争だ。男らしく、思う存分、檜ひのき舞台で、活躍する面白さ。

夕、K宅にて、座談会。

帰宅、十一時三十分。明日の戦いに備そなえて、早く休む。

五月十三日（土）

曇

銅鏡等は人の形をばううかかぶれども・いまだ心をばうかべず、法華經は人の形を浮うかぶるのみならず・心をも浮べ給へり。

(神国王御書)

善戦、ここに半月。本日も惜敗せきはいす。

部長と一日中、歩く。老いたる姿をみていると、眼に痛むものを感じる。事業をして、忘れ得ぬ、貴重な人と吾人こじんは思う。先生を、護まもっている人なれば。

悪戦に、疲れたのか。身体の調子、頗すこぶる悪し。

大聖人の弟子が敗れて、たまるものか。大信念よ、燃え上がれ。信仰よ、奮たい起て。

本日より、左の事項に付いて注意する事。

一、教学のこと

二、経済面の縮小

三、価値生活の確立

五月十四日（日）

快晴

心なき女人の身には仏住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し釈迦仏の月宿らせ給う（中略）法華經の法門も亦かくの如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ給う、始はしらねども漸く月重なれば心の仏・夢に見え悦こばしき心漸く出来し候べし。

（松野殿女房御返事）

非常に有意義な一日であつた。歡喜寮（編注・昭倫寺）にて、心ゆくまで、題目を唱えることが出来た。清浄になつていくようだ。また、小学校の先生、Tさんを、折伏することが出来た。

久しぶりに、実家に帰る。母の健在な姿に胸おどる。

帰り、吾が家の近所の、友人等と会う。皆を、激励、折伏して帰る。皆、何の信念も、目的観もない。可哀想な友達になつてしまった。

帰宅、十時三十分。I氏がドアの前で待っている。事業の失敗で相談とのこと。信心な

き、飛ぶ鳥をも落とす勢いの、事業家の哀れさに、同情する。

五月十五日（月）

晴

心根は猿猴の如くにして 暫くも停まる時あることなし 若し折伏せんと欲せば 当に勤めて大乘を誦し 仏の大覺身、力無畏の所成を念じたてまつるべし。

（觀普賢菩薩行法經）

宇宙大の生命の心境。悠久の美を追う觀念。鉄火の如き堅固なる信念。以上は吾人の修得せんとする所なり。

人類、世界に、尽くすために。民族を愛し、指導せんが為に。

笑う人は笑え。怒る人は怒れ。人の悪口なぞ何かせん。

眞の仏道修行を、達成することだ。それには、人一倍の努力が必要となる。その努力が、また必ずや、幸福の大道に続いていることは確かだ。

激戦、今日も激戦。戦いに負けてはならぬ。弱き者よ、それは不幸を意味する。敗走者よ、汝の名は、惨めと、命名されよう。

戦え、そして、勝て。そして、敗走者、弱き者どもを救ってやれ。これ、勝者の正義感ならずや。

五月十六日（火）

曇

水あれば魚すむ林あれば鳥来る蓬萊山には玉多く摩黎山には梅檀生ず麗水の山には金あり、今此の所も此くの如し仏菩薩の住み給う功德聚の砌なり、多くの月日を送り読誦し奉る所の法華経の功德は虚空にも余りぬべし。

（四条金吾殿御返事）

久しぶりに、早く家に帰る。八時。

室代を、支払う。

戸田先生も、攻防戦が、大変の御様子。私も、そろそろ起ち上がる決意をせねば……。革命児の奮起する時は、近づいてきた。

この汚ない、六畳の室^{へや}も、有意義な思い出になることだろう。

青年は、恐れるものが、あつてはならない。

小心は、青年の最大の欠点だ。

青年よ、いかなる人生劇場においても、出演者たれ。

五月十七日（水）

壘

汝^{なんじ}後生^{ごしょう}をば余^よ処^せの事とのみ思ふあはれさ、我身^{われみ}を思はぬ者かな。人間^{しやう}に生を受る事は盲亀^{めうきん}の浮木^{うきぎ}に値^あるが如しとこそ仏^{ぶつ}は説^と給^{たま}へ。（中略）夢幻^{むげん}の如くなる一旦^{いつたん}の身を思ふて、生涯^{むなし}空^{くう}く暮^くして今^{いま}かゝる憂目^{うれめ}を見ることの愚^ぐさよ。

（十王讚歎抄）

社会^{かっとう}の葛藤^{かつとう}、これ、生存競争の本能なりや。生きるため、栄えるためには、已^やむを得ないことなのか。しかし、何と浅ましきことか、暗き心になる。

吾等^{われら}は、さにあらず。窮極^{きうごく}は、その姿の本質、本体を知覚して、合理的な、法則を見出

さねばならぬ。偉大なる思想、政治は、そこにこそ生まれる。大哲学が、その終結を決すは、明らかなり。

五月十八日（木）

曇

当世・法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん。

（開目抄）

初夏の候となる。汗も次第に流れ、一段の忍耐も必要となる。

I氏を折伏。

昨日、先生より「御義口伝」講義、唯以一大事因縁ゆゑんの事を拝聴。もう一度、拝読する。

自己の仕事を、真剣に考える。先生をお護りまもする自分を、嬉しく思いつつ。

大成は、小成の延長なり。小成の連続が、大成の一步と自覚せねばならぬ。勝利は、現在的一步一步を、忍耐と建設によつてのみ、達成出来るものだ。

毎日、地味な、誰人にも知られぬ仕事。これが大事だ。自分の振る舞いを、満天下に示すのは、時代が決定するものだ。

正法を奉持し、一日一日を、少しも侮らず、励まんや。

五月十九日（金）

晴

魚の子は多けれども魚となるは少なく・菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし、人も又此くの如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る者は少し。

（松野殿御返事）

暑くなつて来た。今年、一番高温の模様。

目下、先生の尖兵として、外交戦、専門。

外交は、苦しい仕事だ。しかし、実力の評価は、最大にわかるものだ。

日本の政治も、力ある、智慧ある、外交官が必要だ。優秀なる外交官のいない政治は、世界の檣舞台^{ひのき}には、進出できない。世界平和への、歴史的貢献は出来得ない。

一国は、世界、国際に、直結し、国際の一分子が、一国と考えてゆくのが、これからの時代だ。

外交。個人も、一家も、一会社も、一国も、大事なことだ。武力でなく、財力でなく、一個の人間の力を根本とした外交。

度胸と、智慧と、誠実の修行は、外交をおいてない。先生は、外交の出来得ぬ者は、一社の重役にはしないと語っていた。

K宅にて座談会。意義ある一夜であった。

帰宅、深夜。

五月二十日（土） 雨

父母の御恩は今初めて事あらたに申すべきには候はねども・母の御恩の事殊に心肝に染みて貴くをばへ候、飛鳥の子をやしなひ地を走る獣の子にせめられ候事・目もあてられず魂もきえぬべくをばへ候、其につきても母の御恩忘れがたし。(刑部左衛門尉女房御返事)

勇氣は青年の特技だ。父を、母を幸福にするのも、事業の再建も、生活の確立も、国を救うのも、勇氣が根本だ。

大聖人様の、母を念う御氣持ち、ただただ感泣するのみ。

古来、幾百万の孝人が、母のことを、歌に詠み、詩に書いたことか。母を讃え、母に泣いたことであらう。

夜半まで、読書。腹がへって困る。

五月二十一日(日) 晴

人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・薬を病人にあたらう病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか。

(撰時抄)

久しぶりに、ゆつくりとした日曜日を迎えた。友人と朝風呂にゆき、朝食を取る。外食券食堂にて。

アパートの子供等に、大森駅前の店にて、おもちゃを買って与える。嬉しそう。

アパートの管理人、信心の悪口を云いに来る。隣室のI氏夫妻も、厳しく批判してゆく。全く、世人の口はうるさい。

詮ずるところ、起つ以外ない。進むほかない。生き抜く勇氣しかない。唯、何といわれようと、前進だ。慈悲の下に。

夜半まで、読書。一時、就床。

五月二十二日(月)

晴

一日中、身体の具合悪い。題目をあげねばならない。

立派な人は、泣く事を知る。叱責しつせきすることを知る。じつと忍ぶことを知る。人の悩みを

知る。大聖人様の弟子として、立派な人間の完成をしていきたいものだ。

青年は、小心であってはならない。偉人伝を読むことも大事だ。自分は、これでいいと思つては、絶対にいけない。

一日中、仕事に励む。働くことは貴い。要領のみで生きる人は、乞食^{こじき}、泥棒のような場合と等しい。

汗ばんだ、蒲団^{ふとん}にもぐる。一時。

五月二十三日（火）

曇

青年ハ、如来ノ、使タレ。

青年ハ、革命ノ、闘士タレ。

人類ヲ、愛スルガ故ニ、

苦難モ、怒濤^{どとう}モ、如何^{いか}ニセン。

帰室、十時。

法華經を読む。全く難しい。

六難九易。

法華經宝塔品第十一に曰く「諸余の經典しよよ きようでん 数恒沙かずごうじやの如し 此等これらを説くと雖いえども 未だ難し
と為なすに足たらず 若し須弥しゆみを接とつて 他方の 無数の仏土むしゆに擲なげ置かんも 亦未だ難しと
為せず 若し足の指を以もつて 大千界だいせんがいを動かし 遠く他国なげうたに擲なんも 亦未だ難しと為せず 若
し有頂うちように立つて 衆しゆの為ために 無量むりようの余經よきようを演説えんぜつせんも 亦未だ難しと為せず 若し仏の滅後
に 惡世の中に於おいて 能よく此の經を説かん 是れ則すなわち難しとす」云云。

此の實踐には、偉大なる勇氣が必要だ。

一時、寢床に入る。

五月二十四日（水）

曇

日蓮生を此の土に得て豈吾が国を思わざらんや。

(一昨日御書)

初夏の候となる。

一日一日が、大事な激戦だ。

世界の激流が、膚を打つ。胸に響く。

六月四日投票の参院選、追い込み近づく。池田蔵相は、帰国。総理と語り、四か国会談は、急を告げた感じ。『冷たい戦』が、暗く国民の中に漂う。戦争は、罪悪だ。いかなる大義名分ありとも、武器をもった戦は絶対にならぬ。

正義の定義は何か。力等に依って、評価されるものではない。真の正義とは、宇宙の大法則よりの原理でなくてははいけぬ――。

学会より、未来の大政治家、大指導者が、ぞくぞく出現しなくてはならない。

就寝、一時。

五月二十五日（木）

曇

仁は不殺生戒、物を憐む故に物の命を断ざるなり。義は不偷盜戒、万の理を失はざる故に、人の物を主に知らせずして我が物とせず、又押ても取らざるなり。礼は不邪淫戒、淫は必ず礼を破る。愛心あればさるまじき人なれども、邪なる振舞をなす。是を守れば上下濫れず、行法もたゞしきなり。云云。

（戒法門）

日蓮大聖人。ああ、吾人は、御仏の弟子なり。仏弟子なれば、恐れるものが有つてはならぬ。ただ、大慈悲を受持し、突進あるのみ。觀念にては、事を為さず。觀念の弟子は、眞の弟子に非ず。吾人に、迷いなきか。吾人に、信心実践の大生命力、發揮しているや否や。

經文の如く、俗衆増上慢、近隣に盛んなり。無能にして、批判のみしている、寮室の人々よ。憐れなる人々よ。夢の、また夢に、競々としている人々よ。

いかに、それらの人々を覚醒さすべきか。吾等の使命は大なり。吾人の苦難も、又益々

多大なり。

五月二十六日（金）

小雨

身を挙ぐれば慢ずと想い身を下せば経を蔑あなどる松高ければ藤長く源深ければ流れ遠し、幸なるかな楽しいかな穢土えどに於て喜樂きらくを受くるは但日蓮一人なる而已のみ。（聖人知三世事）

身体の具合、非常に悪し。生命力が減退したのか。題目の数あるのみ。

生活上の、根本問題から、改革する事なきか。反省、反省、反省なくして、前進はな
い。

青年は、決して、斃たおれてはならぬ。前進だ。前進だ。死ぬまで、前進だ。広宣流布のため。永遠の生命の会得えとくのために。

五月二十七日（土）

雨

蔵くらの財たからよりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり。

（崇峻天皇御書）

身体の調子、非常に苦しい。九時五十分、出勤。本日の戦い、出発より敗北だ。

今月は全く苦戦の月であつた。公私共に。あますところ、あと四日。最後まで頑張らねば。先生も、大変な御様子だ。

吾^われは男子なり。人生の船出して、茲^{ここ}に早^{はや}二十年。歓喜と希望の年齢でなくてはならぬ。理想に向かつて、燃え上がる年ではないか。

前進だ。唯^{ただ}前進だ。

今に見ろ。この青年を。この人を。この活躍を、確信を、理想を、実践を。

大聖人様、そして、戸田先生――

偉大なる母よ、同志達よ。

明日より、書体を、丁寧^{ていねい}にすべし。

K氏宅、座談会。

帰宅、十二時。就床、一時。

五月二十八日（日）

雷雨

午前八時三十分、起床。歡喜寮にゆく。

仏法を学ぶ者の心構えを、切実に考えさせられた。日蓮大聖人の信者、眷属なる吾人。断じて、斃れてはならぬ。

自己の信心を反省する。大仏法を、受持し、広宣流布する者の、大使命の段階を、思えばなり。

大願を起こせ。大使命と、大苦難に、莞爾と進め。

若いのだ。雄々しく、歡喜を湧き出して、前進するのだ。

大御本尊様、未来の青年を、広布成就への確信に、照覧あれ。

五月二十九日（月）

晴

恩沢普く潤し慈被すること外なく、苦の衆生を摂して道跡に入らしめん。

（無量義經）

人生の船出して、二十年。本年も、早半はやなかば過ぎ去る。本年の、しのぎよき季節となる。

青年——何と頼もしき言葉であらう。この言葉の如く、意義ある、そして、思い出に満ちみちた、青年時代を進もう。

吾人ごじんの使命はなんぞ。広布の人材になることに尽きる。文豪もよし、大政治家もよし、大実業家もよし。若き生命力の有らん限り、ただ、今日の山に向かって、進むことだ。活躍することだ。

そしる者には、そしらせておけ。笑う者には、笑わせておけ。そんなものが何だ。

吾人を、照覧するものは、大聖人様あるのみ。

小善に、死すること勿なかれ。大善に生きよ。

人の為、世の為、法の為に。

五月三十日（火）

小雨

只一心に信心おはして靈山を期し給へ、ぜにと云うものは用に・したがつて変ずるなり、法華經も亦復是くの如し、やみには燈となり・渡りには舟となり・或は水ともなり或は火ともなり給うなり、若し然らば法華經は現世安穩・後生善処の御經なり。

(弥源太殿御返事)

久しぶりに、床屋にゆく。

先生の事業、なかなか大変の模様。膚にひしひしと感ずる。

本有常住。いかなる心で、苦しむも、泣くも、喜ぶも、同じだ。

吾人は、進む。火宅の中を。大敵に向かおうが、決然と。

これが、真実の吾人の取る、唯一つの道だ。

御本尊様、照覧あれ。

母のことを、念う。

五月三十一日（水）

小雨

汝等、当に共に一心に精進の鎧を被、堅固の意を發すべし。

（法華經從地涌出品）

新緑の五月は過ぎぬ。涼しい日であつた。身体の具合、少々良好。此の調子で頑張ろう。大馬力をかけて。

明日より、六月。青葉、若葉の薫り、床しき律動の青月。人生なれば、青春。ああ、心は、躍らん。心は、弾まん。若人の活躍の月だ。

過去は夢なり。未来も夢なり。過去の夢は、月の如く寂にして、情火は燃えぬ。未来の夢は、太陽の如く、朝日の如く、曙光と感激の溢るる夢が生ずる。

青年は、未来の夢を追って、生きねばならぬ。

『富士宗学要集』全十一冊を購入。金、三、五〇〇円也。

〔五月〕——昭和二十四年の暮れから業務を開始した東京建設信用組合の経営は、二十五年春から

苦境に陥^{おち}っていた。そのなかでも戸田第二代会長（当時、理事長）は、四月十九日には第十期法華經講義を開始し、四月二十三日には第三回総合座談会を開催するなど、広布の歩みを決してとどめることはなかった。当時、池田名誉会長は、六畳一間のアパート生活をおくり、戸田理事長の事業を支えながら悪戦苦闘を続けていた。しかしそのなかにあっても連日のように座談会に出席し、活動に励んでいた。

昭和二十五年は占領の終了・対日講和条約問題が表面化した年であった。講和条約については全面講和か単独講和かで国内の議論が沸騰^{ふっとう}し、五月三日には吉田茂首相が全面講和論を唱える南原繁^{なんばら}東京大学総長を「曲学阿世^{きよくくあせい}（学問を曲げ、世におもねる意）の徒」と非難して、大きな話題となった。国内の反論を強気で押し切ろうとする吉田内閣の人氣は低落し、五月十九日富山県入りした吉田首相が労組員の赤旗とヤジ馬の波にとり囲まれ、立ち往生するという事態もおきた。

当時の経済問題としては国際通貨基金（IMF）への加入、外国資本の導入などが焦点となっていた。五月二十四日の項に「池田蔵相は、帰国」と記されているのは、これらの問題の交渉のため当時の池田勇人蔵相が訪米し、二十二日に帰国したことをさす。また「四か国会談」とは、当時のリー国連事務総長が冷戦の終結を図ろうと英仏米ソの四力国首脳に開催を提案していた首脳会談のこと。ここでリー総長は軍縮、原子力管理などと呼びかけようとしたが、実現にはいたらなかった。むしろ東西の冷戦は深刻化していた。五月末には連合軍総司令官マッカーサー元帥が、東側に対抗するため当面は米軍基地を確保する必要があると発言し、かつて同元帥が述べた「日本は東洋のスイスであることを希望する」という中立を志向する見解との隔^{へだ}たりを印象づけた。この時期になると占領政策の変化はかなり明瞭になり、日本は「西側」のなかで一定の役割を求められるようになった。

六月一日（木） 雨

薰風をきって、水無月のスタートをなせり。

一、健康に注意すること。

一、勉強をすること。

一、価値生活の実施。

信仰を根本に、充実した、前進の月を期す。

大善と正義の前に、堂々と進もう。

あな嬉し。あな面白や。

M氏宅の座談会に出席。帰宅、一時三十分。

六月二日（金） 雨

請^こい願^{ねが}わくば道俗法の邪正^{じやしやう}を分別して其の後正法に就て後生^{ごしやう}を願え今度人身を失い三惡道に墮して後に後悔すとも何ぞ及ばん。

(守護国家論)

日本橋、高島屋に、部長とゆく。A氏宅を訪うために。近代の粹を集めたる、デパートの雑踏に驚く。富める人が、いかに多いかと。人の波、化粧の匂い、目を奪う商品の陳列の山。

事業は、時代を動かし、時代を作るものか。事業は、健男児の、檜^{ひのき}舞台か。事業にも、幾種類もの事業がある。一大事業は何か。それは、恒久平和を築く、全人類の幸福の為に通ずる、事業でなくてはならない。

友人、来室、雑談。一時、寢床に入る。

六月三日(土) 小雨

日蓮其の身にあひあたりて大兵を・をこして二十余年なり、日蓮一度もしりぞく心

なし。

(辦殿尼御前御書)

反省と前進。苦悩と光明。雑念と清浄。

これ、青年の持ち悩むところなり。青年の批判、正義感、進歩への情熱は、満ちみちていなくてはならぬ。

口のうまい、壮年の言語が何だ。左右されてはならぬ。若人わこうどの革新の息吹いぶきに依つてのみ、老いたる社会の眼を覚さますことが出来るのだ。

青年は、卑怯ひきような、意気地のない、老人の如き姿と化してはならぬ。それこそ、早く、ずるい妥協の、淋さびしき人生となってしまう。

青年よ、快活であれ。青年よ、理想に、厳粛に進め。

六時三十分より、青年部会あり。意義ある、総合打ち合わせ会が出来た。

先生、見ていて下さい。きつとやります。

六月四日(日) 雨

慈を以って身を修め、善く仏慧に入り、大智に通達し、彼岸に到り……。 (法華經序品)

参議院選挙は、棄権する。

人生の目的、善悪の基準。これは、吾等人類にとって、重大な課題である。これを、明確に、断言して、教えてくれる人がいたら、大偉人といえよう。

大仏法を、実践、勉強し、自ら、確証と信念を持つことだ。これ大事の中の大事だ。

吾人、今日の生活に間違いなかりしか。いや、青年が、いちいち、躊躇する必要はないか――。

青年は、前に進めばよいのだ。正義感と、情熱を、信念を、持ちつづけて。

革命児には、先覚者には、苦難はつきものだ。青年には、苦悩がつきものだ。ただ、それらを打開して進むことが、革命だ。

六月五日（月）

晴

日蓮をば日本国の上かみいちにん一人より下万民に至るまで一人もなくあやまたんと・せしかども・
今まで斯かうて候事は一人なれども心のつよき故なるべしと・おぼすべし。（乙御前御消息）

仕事繁多、自分になれない仕事故か。

毎日が、激戦！ 若人わこうどは戦う、

全生命力を、賭として。

それが、尊く、それが美しい。

疲労の中に、起たち上がる瞳ひとみ、

そこに、希望が湧わく、未来が生まれる。

そこにこそ、天の大聖曲が聞こえる。

戦うのだ、正義の為に。

闘うのだ、大善の前に。

今、大衆の目は閉じている。

だが、大衆の目は、必ず開くだろう。

否、開かせねばならない。

小生の室^{へや}にて、座談会開催。K兄出席。

小人数なり。淋^{さび}しいけれども、そこに、修行有り。

六月六日（火）

晴

世人の心は、豆よりも小なり。英雄のみ英雄の心を知ると、詠^{うた}った人がある。また、笑うものは、汝^{なんじ}の笑うにまかせん、誹^{そし}る者は、汝の誹るにまかすべし、といった人がある。

大聖人の大原理が、愚^{おろ}か者にわかる道理がない。批判する者は、勝手に、批判するがよい。而^{しか}し、諸君等がいるが故に、自己は、仏になれるのだ。

共産党、中央委員二十四名、追放さる。

世界、日本の思潮、今や、激烈たり。

若人^{わこうど}の起^たてる秋^{とき}は、遂に來たる。

詩人、革命児よ、宗教革命児よ。

六月九日（金） 小雨

K宅、座談会。帰宅、十一時三十分。

梅雨^{つゆ}、しきりなり。

不幸に喘ぐ^{あえ}人々を、根本より、大慈大悲をもって、救っている宗教が、いずこに有ろうか。ああ、なんと不合理な社会か、政治か。

一生は、夢の如く去る。五十年の人生。

如来の使いとして、御仏の弟子として、尽くすことは、最大の誇りといえよう。

六月十日（土） 雨

大地はささばは^外づるるとも^{おそら}虚空をつなぐ者はあるとも・潮の^満みち^干ひぬ事はあるとも日は西より出づるとも・法華經の行者の祈りの^叶かなはぬ事はあるべからず。

（祈禱抄）

身体の疲労重なる。調子、頗る悪し。

今夜、実家にて、長兄の法事とのこと。戦死して、五年余。二十六歳、独身で死ぬとは、誠に、可哀想な限りだ。吾が室より、最大の功德を、送り申そう。

『ゲーテとシラー』『樗牛全集』等を、神田にて求む。

過去、幾百億年、未来、幾千億年の、現在、師となり、弟子となり、親となり、子となる、結合を、密かに、不思議と思う。

六月十一日（日） 雨

身体、瘦せてくる。自分でよくわかる。病魔に負けては、絶対にならぬ。

清浄なる生命、歡喜に溢るる紅顔、この実相の生命を築くことが信心なのだ。汝自身に打ち勝った、姿がみたい。

午前、中野・歓喜寮にゆく。帰路、友人達と、S宅を訪問。

梅雨^{つゆ}しきりなり。健康に注意せねばならぬ。

御本尊、吾^わが身の健康だけを、救い給え。

六月十二日(月) 雨

吾^わが家に帰る、七時。皆の元気な姿を覩^みて、非常に嬉しい。特に、母の肥^{ふと}った姿。蒲田にて、下駄を求めて、差し上げる。

H君と、Yさんと、三人にて、東邦医大に寄る。H氏、R氏達を、折伏。

誠心こめて、唯^{ただ}、その人の幸福を願って、大仏法のことを、話せる心境。これ以上の、地上における尊い仕事、心境は、絶対にあり得なからう。

明日も、前進だ。唯、戦い進む以外に方法はない。

六月十三日（火） 雨

願くは我を損^{そん}ずる国主等をば最初に之を導かん、我を扶^{たす}くる弟子等をば釈尊に之を申さん、我を生める父母等には未だ死せざる已^{いぜん}前に此の大善を進めん。
（願仏未来記）

「我れを生める父母等には、未だ死せざる已前に、此の御本尊様に、帰依させよ」との仰せだ。

ああ、吾^わが信仰の愚かなることよ。父母の他界も、吾れより早期は必然なり。一日も速やかに、成仏するよう、永久の救出に、努力を怠^{おこ}ってはならぬ。

一日中、豪雨。傘^{かさ}が無くて困る。

六月十四日（水） 雨

今日も、豪雨。傘^{かさ}を求める。夕方近く、晴れてきた。

新聞には、各地の被害、洪水の報道しきりなり。

「雨壤を碎かず」の、広宣流布の日は、いつの日ぞ。全人類が、朝な夕な、夢みている理想郷は、いつ来るのか。平和な、明るい、笑いの尽きぬ、世界は。

さあ、青年は、明日に、遅しく生きよう。御本尊のお力を、お借りして。

六月十五日（木）

曇

たのしくして若干の財を布施すとも、信心よはくば仏に成らん事叶い難し。縦ひ貧なりとも信心強くして志深からんは仏に成らん事疑い有る可からず。
(身延山御書)

一步前進、

努力だ。

吾が大道に、一步一步、山を越え、谷を越え、進むことだ。

忍耐だ。

衆人の、批判の嵐あらし、怒濤どとうを、莞爾かんじとして、耐え、時を待ち、時を築け。一段、一段と。確信だ。

いかなる闘たたかいにも、確信に、しくはなしだ。一念三千の大波動を、常に、つくりゆけ。信念だ。

苦闘の連続、その中に、生き、勝ち、証明してこそ、偉大なことなのだ。

本の歴史は、間違いだらけだ。自己の歴史には、自己の胸中の歴史だけは、一分いちぶんの、嘘うそも、飾りも書けぬことを知れ。

六月十六日（金） 晴

久しぶりの上天気。帰宅、十一時三十分。

輝き渡る、太陽の下で、働けることは、幸福なことだ。雨、長く続いて、初めてわかる。

夜、K宅にて、座談会。K氏、慈悲論の講義をする。立派な講義。偉い人物だ。私は尊敬する。

信仰——多くの人が、実行し、多くの人が、知っている大切な言葉。そして、多くの人が、遠ざかろうとする意義。だが、真の対境たる本尊が、邪であり、低であり、無であれば、真実に、信仰とは云えぬことを、知らない人の多きことよ。

三大秘法の御本尊様に、題目を唱えて、初めて、信仰といえるのだ。そして、必ず、生活の上の現象、体験が、幸福と現れなくてはならぬ。なお、時と処とを選ばず、誰人にもあてはまる普遍性が存しなければいけない。生きた法則でなくてはならない。

帰室、十一時三十分。室が湿っぽくて、困る。

六月十七日（土）

曇

今日の、戦いの結果はどうか。

ただ、頑張った、私らしく。

今日の、戦いに、悔いはないか。

あるといえはある。ないといえは無い。

今日の、戦いに恥ずる所なきか。

女々^{めめ}しい戦いでは、なかつたはずだ。

明日の前進の、準備はよいか。

大丈夫、千里の道、進まずして、着くわけがない。

明日の向上の、心構えは、確信は良いか。

大丈夫、山登らずして、頂^{いただき}は望めぬ。

明日の建設の、信念は良いか。

大丈夫、一日の建設をなさず、次の完成はない。

人生の目的に、忠実なりや。

努力する。ただ努力する。

人生の究極の、使命を忘れざるや。

忘れない。忘れたら、何もなくなる。

O部長に、神田にて、夕食を御馳走^{ごちそう}になる。

帰室、十一時。

六月二十二日（木）

小雨

石を金^{こがね}にかうる国もあり・土をこめ^米にうるところもあり、千金の金^{こがね}をもてる者もうえて^餓死ぬ、一飯^{いっばん}をつとにつつめる者に・これをとれり、経に云く^世「うえたるよには・よねたつ^米とし」と云云、一切の事は国により時による事なり、仏法は此の道理をわきまうべきにて候。

（上野殿御返事）

時代、社会、世界、思想。共に人類歴史、未曾^{みぞう}有の、多事繁雑なる時代に入りなき。
将来、如何^{いか}にして、日本も、世界も進行してゆくつもりや。誰人も、何人も、知覚出来得ざるや。

国際間の緊張、日増しに激重たり。心痛せる者、吾^われ一人に非ざるや。

朝寝坊し、部長より注意受く。

今日は、早く休もう。十一時半、床につく。

六月二十三日(金)

晴

K宅にて、八時より十一時まで、指導員会議。帰り、良き先輩K氏を、自宅まで送る。

帰宅、一時。

出席者 K K

T U

R S

六月二十四日(土)

三十二度 晴

一日中、暑い日であった。

朝、大森駅にて、友人O君に会う。若干、じやつかん金子をきんす手渡す、お互い様と思って。悩める人。O宅の問題に、頭痛める。あわれなる学校長の末路。

八時、K宅、座談会。非常に疲れる。

十一時三十分、床に入る。

今日の激闘は、終わる。明日は又敢闘ある已^{のみ}。

六月二十六日（月）

晴

凡^{ぼん}夫は我が心に迷うて知らず覺^{さと}らざるなり、仏は之を悟^{さと}り顕^{あら}わして神通^{じんずう}と名^{なづ}くるなり神通^{たふし}とは神の一切の法に通じて礙^{さわり}無きなり、此の自在^{じざい}の神通は一切の有情^{うじよう}の心にて有るなり。

（三世諸仏總勘文抄）

北鮮と南鮮の、戦火、遂に上がる。世界大戦の導火線になることを憂う。

世界は、刻々と動く。地球は、もはや、小さな戦場、劇場の如しだ。

人類は、再び、悲しみと、苦しみと、淋^{さび}しさの、苦悩の渦に巻き込まれてしまふのか。

三界は安きことなし、猶^{なほ}火宅の如しだ。

吾^{われ}等の、決然奮起^とする秋は来たのだ。

まず祈り、実践だ、広布への。

見よ、人類よ。この吾等の、人類を愛し、平和を希^{ねが}う、勇姿を。

六月二十八日（水） 雨

世界的情勢、危機をはらむ。

遂に、来るか。人々、決戦の覚悟。

平和を希^{ねが}う。絶対、戦火を拈^{ひろ}げてはならぬ。

吾人の覚悟は、泰山^{たいさん}の如し。

何も、恐れることはない。

しかし、弱き人々を思う。

されば、吾^わが心は、痛む。

みな、長寿して、安穩であらんことを祈る。

〔六月〕——六月四日には参議院の半数を改選する第二回の参議院議員選挙が行われた。この選挙

ではそれまで最大会派だった緑風会と保守中間政党の国民民主党が大幅に後退し、それに代わって自由党が第一党になり、一方、社会党も大きな躍進を示した。参議院にも政党化の波が早くも

押し寄せ、二大政党時代を迎えつつあったことを物語る。実際にその後、保守合同と左右社会党の統一を経て、自社二大政党が支配する「五五年体制」へと政界は向かっていった。

社会生活の面では、戦後五年近くなってもまだまだ庶民の食糧事情は窮迫^{きゆうぱく}し、主食の米は依然として厳しい統制下におかれていた。外食券食堂以外の飲食店、すし屋などで客に米食を出すことと自体が統制違反とされており、六月二十一日にも東京・有楽町のすし屋の経営者らが米食提供のかどで検挙されるという事件もあった。この事件について当局者は、今後悪質者は身柄を逮捕、留置するなどと述べている。こうした話題にも当時の食糧事情の厳しさがうかがえる。

また、梅雨どきの豪雨が各地に大きな被害をもたらした。長野県では雨のため列車が脱線、死者を出したほか、諏訪市の中心街が浸水した。都内でも床下浸水家屋八百八十戸の災害をだした。この水害に、六月十三日付け「朝日新聞」の「天声人語」欄は「雨が降っても風が吹いても直ぐ災害が敏感に伴うようになった。国土衰弱の徴である」と慨嘆^{がいたん}している。

六月二十五日に、戦後史の転機となった朝鮮戦争が勃発^{はつぱつ}した。二十七日には国連安全保障理事會が開かれたが、ソ連欠席のまま北朝鮮に対する軍事制裁を承認したため朝鮮半島に駐留していた米軍は国連軍として行動することになった。その間にも北朝鮮軍の「南攻」は続き、二十八日は京城^{ソウル}が陥落^{かんらく}、韓国の首都は大田^{テジヨン}に移った。米国防総省は一切の作戦をマッカーサー元帥に委ね^{ゆだね}ることを決定した。日本の米軍基地が作戦行動に使われることになり、国内でも緊迫した事態が続いていた。

七月一日（土）

曇

意義ある、青年部会であつた。

集いし数、男女、二十数名。

神田・学会本部にて。

青年部も、未来の怒濤^{どとう}、嵐^{あらし}に向かつて、船出せり。

吾^われも進む、全生命のあらん限り。

七月二日（日）

晴

天気晴朗。十時まで、眠る。

K氏来る。苦心して、若干^{じゃつかん}、金子融通^{きんす}する。

弟、妹、久しぶりに来る。唯^{ただ}一人の妹、良く指導し、幸福な人にしてあげたい。

吾^わが室^{へや}で、座談会。集まる人、全く少なし。多事多難なり。

七月三日（月）

曇

心地觀經しんじかんぎょうに云く「有情輪回うじょうりんねして六道に生ずること猶車輪なわの始終無きが如く或は父母あるいと為なり男女と為り生生世世しやうじやうせせ互いに恩有り」等云云。
(女人成仏抄)

映画「きけ わだつみの声」を、地球座にて観みる。思うこと多し。

戦争は、罪悪だ。絶対に、避けねばならぬ。真の宗教の必要性を、切実に感ずる。

折伏を、断行せねばならぬ。偉大な、死に方をしたいものだ。

帰宅、十時三十分。

七月四日（火）

曇

今日も、一日、奮闘。善戦。悔いはない。

自分は、最大に、幸福の境遇にあることを感謝する。

自分は、自分の努力、精進が、実りゆくことを、心から^{よろこ}歡ぶ。
自分は、ただ、落ち着いて、勉強出来ぬことを、残念に思う。
自分は、親兄弟、親類をば、信心させ得ぬことを、心痛する。

七月五日（水）

曇

今日一日も、元気に敢闘。

先生も、経済的に、なかなか大変な御様子。

仕事に追われ、学会活動の、思うように出来ぬことを、淋^{さび}しく思う。

K君、H君に、仕事のこと、済まぬことをしてしまった。

七月七日（金）

晴

七夕^{たなばた}様。本年度、最高の温度とのこと。

實際、暑い、苦しい一日であった。

K宅にて、座談会。帰宅、十一時三十分。

T氏等と共に帰る。

一、決して、自惚^{うねぼ}れぬこと。

一、人の悪口を、云^いわざること。

一、柔弱な人に巻き込まれぬこと。

一、無駄使いを、せぬこと。

一、多弁を、慎^{つつし}むこと。

以上、反省して、床に就く。一時。

七月八日（土）

快晴

夕刻、中野・歓喜寮にゆく。勤行、唱題。

非常に、暑い日がつづく。全く疲れて困る。体重、十三貫がきれたとは、全く驚く。しかし、今の姿と、この苦惱、苦難を打開した、五年後の、厳然たる人間革命の姿を、誰人ぞ知らん。

十二時、帰室。T君等来る。肩を揉んでくれる。済まぬ。

明日は、又、お寺にゆこう。嬉しいことだ。

七月九日（日） 晴

今日は、涼しい一日であつた。

先生も、私も、一日一日が、悪戦苦闘の連続だ。先生の事業、日増しに、苦境に入るを、明らかに感じて来る。

先生の御身体の具合も、芳し^{かんば}からざるを、深く感ず。

戸田先生の後継は、私しかない。

死んではならぬ。斃^{たお}れてはならぬ。

波浪ハ、障害ニ、遇フゴトニ

ソノ頑固ノ度ヲ増ス。

七月十四日（金）

快晴

K宅、会合。

K先輩、M兄と共に「御義口伝」の読み合わせをなす。

唯々、深固幽遠なる、大哲理に、感涙あるのみ。

人生は、社会は、力のある者が、善人となるのか。敗れし者は、みな悪人とされてしま
うのか。実に、恐ろしいことだ。

明日は、I宅に、御本尊送りだ。嬉しい。

七月十六日（日）

曇

先生の事業、非常に、苦境の模様。内外共に、その兆候あり。

今日も、出勤、午前中、少々休んで。

同志の、退職してゆく姿に、胸が痛む。

学会も、事業も、真^まっ先に、責任もって、起^たちゆける者は、一体誰だろう。

自分の使命は、益^{ます}々重なり、大なり。

七月二十日（木）

曇

時代は、夥^{おびただ}しく、変遷^{へんせん}をきたす。人心は水の如く動く。先生を批判せし〇部長に、猛然と噛^かみつく。

会社、事業、非常に苦しいらしい。先生のお弱りの様子、目が痛い程。

魔は多くなった。いよいよ注意して、進むことだ。真実の同志の少なきことよ。近隣の友がどしどし魔と化してゆく。これらを、突破して、進むことだ。

大悪は、大善の瑞相なり。

如何にせん、事に有って、撓まぬ人たれ。

.....

荒狂う怒濤に向かいて撓まぬは

日の本 背おう 若人なりけり

七月二十二日（土）

晴

現実の戦いは、刻一刻と激しさを加える。吾が社の動き、全く危険と聞く。危うき時に、奮起する人は、立派な人だ。偉大な人物だ。そういう人物になれ。

K宅にて、座談会。

帰宅、十二時三十分。公私共に、精進せねばならぬ。

明日は、日曜、客が多き事だろう。

先生を、安心させたい。何といっても、私は若い。しっかり頑張ろう。

苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき苦樂ともに思い合せて南無妙法蓮華經とうちとなへ居
ゐさせ給へ。
(四条金吾殿御返事)

七月二十五日(火)

快晴

炎天が続く。今日は、朝方と夕方、二度、慈雨の洗礼あり。自己の胸中を、癒すが如くに。

社の機構、人事、運営を、根本的に、刷新、改革せねばならないと思う。

自分は、その立場に非ず。如何せん。如何せん。

いかなる時代であつても、

一、自己の成長を忘れざる事

一、仏教哲理の研究を怠らぬ事

一、様々の勉強を忘れぬ事

七月三十一日（月）

小雨

広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的まととするなるべし、ともかくも法華經に名をたて身をまかせ給うべし。

（諸法実相抄）

毎日、十二時過ぎの帰宅となる。一寸ちよつとこたえる。

来月は、一年間待ちに待った、総本山の講習会。行こう。断じて参加しよう。

炎暑の七月。この七月も、とうとう勝ち抜いた。明日よりは、立秋を迎える。吾等われらの月だ。再び、若き情熱をもって頑張ろう。

理想に生きる青年らしく。歡喜に燃える青年らしく。

人生、社会の波は高い。そして激しい。また、その山は峻けわしい。されど、人々が皆、曲がりなりにも、進んでいるのだ。

正法を受持した青年が、断じて、進めぬわけがない。

行こう、勇敢に。そして、次の世界を開こう。

〔七月〕——昭和二十五年は、朝鮮戦争の軍需品注文が日本に舞い込み、「特需景気」になるまでは不景気が続き、中小企業は不況にあえいでいた。六月三十日に発表された経済白書は国民の生活水準が戦前の七六―七八％にすぎないことを報告し、「戦前に回復しているのは主食だけで他は軒なみに低く、特に被服費は戦前のわずか三〇％、手持品の食いつぶしでやりくりしている」と述べている。

その上、「朝鮮動乱」によって東京はじめ全国の都市では食料、衣料品など生活物資の値上がりが激しくなった。それはブローカーやヤミ屋などの思惑買いや悪宣伝が原因であった。動乱をタネにひともうけをねらって高値をあおり立てる動きに、消費者が乗じられたためである。これに対し当局は七月十八日から四日間、都内主要駅でヤミ屋など千七十五人を検挙するなど取り締まりを強化したが、はね上がった物価を抑えることは難しかった。

八月二日（水） 小雨

戸田先生と、小一時間、話し合う。先生も、実に大変な御様子。私も、全く苦悩の連続だ。明日の予定を、先生は、深く期待しておられる。なかなか思うようにゆかぬことが残

念だ。

戦おう。全性格を発揮して。

八月三日（木）

雨

社会は、全く厳しい。信用のいかに重大であるか、思い知る。

今日も、善戦。雨と、苦悩と、努力との激闘であつた。

自分は、生涯、戸田先生を、お護り^{まも}する使命があるのだ。他の部長等に、関係はない。私の活動が、直接、先生に通じないことが淋しい^{さび}。

今日ほど、戸田先生の、私に対する不満の顔をみたことは無い。悲しいことだ。

私は、忠実に、私の仕事に、全力を尽くす術^{すべ}しかない。一社員にすぎない。先生は、部長等より、私に、大きな期待を持っておられるのだ。困った存在だ、今は。

戸田先生、私が、必ず最後は、奮闘し、仕上げます。何卒、少々待っていて下さい。曲解をしないで下さい。……私が、必ず大船の舵かじを取って、怒濤どとうを乗りきってみせます。勇躍、出帆させてみせます。この池田が――。

花を見るものは有る。花を感じる人はない。

八月十日（木） 雨

苦闘の一月であつた。このようになった原因は、何処いずこに有るのか。生涯、今日の日より、苦しいことは、少ないことであらう。

病氣。職業の失敗。経済の破綻はたん。信用の低下。

先生、実にお気の毒の様子。決起して戦う自分。而し、利あらずして、全く思うようにいかぬ。社員達の、不満が悔くやしい。

万難 来るとも 恐るること勿なれ

地涌の菩薩なれば 汝^{なんじ}よ

御仏の み前に誓う 若人^{わこうど}の

使命は 重く 奮^たい起^たつのみ

吹かば吹け 起^たつならたてよ 荒波^たよ

汝^{なんじ}の力と 吾^われと試^{ため}さん

八月十一日（金） 雨

戸田先生、全くお気の毒なり。先生、A氏よりひどく叱られる。自分も叱られる。なれど、みな、修行なり、社の実情、弥々^{いよいよ}苦しくなる。

先生を、唯々^{ただただ}、なんとか護^{まも}りたい。

余は、余である。余はあるが儘^{まま}の余である。

余の名を、知らんとするものは、余を知らないものである。名を問わず、それ自身を触れよ。

八月十三日（日）

雷雨

夕刻、「観心本尊抄」の研究会。

先輩K氏と、戸田先生の様子、将来、再起等に関し、種々、談合。十一時三十分、失礼する。

吾^われは、疲れたり。されど、意気、弥々盛んなり。

八月十五日（火）

快晴

敗戦記念日。感無量なり。

桜咲き、紅葉散り、富士の山に雪降り、太陽は、炎熱となり、早、茲^{ここ}に五年。

吾^わが社の状態、急迫^{きゅうはく}となる。事、重大と期す。十時三十分まで、重役会議。人々は、再び去って行く様子。責任重大なり。重大なり。

次期の建設、次期の推進、次期の方途は、誰人の力に依るや。

トルストイの『懺悔^{さんげ}』を読む。

大覺世尊は此^{これ}一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁^{きょうりょう}・大船師・大福田等なり。(開目抄)

八月十九日(土)

晴

残暑、厳しい一日であつた。

午前中、部長級にて、会談。

午後、更に重大会議の段階に入つた模様。無事に完了することを祈る。

次第に、精神的、肉体的、経済的に、負担の蓄積を受く。

夜、「観心本尊抄」の読み合わせ。

いかに、事業難とはいえ、信心と教学だけは、忘れてはならぬ。

十二時、帰宅。月光輝く夜道を、一人歩む。思うこと多し。

八月二十日（日）

小雨

各各思い切り給へ此の身を法華經にかうるは石に金こがねをかへ糞ふんに米をかうるなり。

（種種御振舞御書）

久しぶりに、ゆっくり休む。非常に疲れているらしい。明日の激戦のことを思うと、頭が痛む。

一、勉強をしたい

一、仕事に打ち勝ちたい

一、身体が丈夫になりたい

N宅に、午後ゆく。帰宅、十一時。

感傷の湖に、遊びたくなる日がある。現実の葛藤かつとうの巷ちまたに戦う、感激を思う日もある。

信ずるのは、汝なんじ自身だ。その汝自身を、覚知させてくれるのが信仰だ。

八月二十二日（火）

晴

会社、業務停止が決定。

戸田先生と、最後の盃さかずきをかわす。先生より、先生の大願を、お聞きする。そして、敗れゆく、悲惨なる、覚悟をお聞きする。

ああ、吾われ、断腸の思い有り。無念、無念。

しかし、私は再び、次の建設に、先生と共に進む。唯ただこれだけだ。前へ、前へ、永遠に前へ。知る人ぞ知る、吾が運命。

八月二十六日（土）

曇

御いのりの叶い候はざらんは弓のつ強よくしてつる絃よはく・太刀つる剣ぎにて・つかう人の臆病なるやうにて候べし、あへて法華經の御とがにては候べからず。

（王舎城事）

一日中、仕事に奔走。夜、会社に戻る。先生お待ち下さる。遅くまで打ち合わせ。夜遅く先生宅に。奥様驚いて居られる。

大敗の中、悠々たる先生。夜中に、将棋を二局。終わって、一緒に俺の布団ふとんに寝ろといわれる。失礼して、一階の坊やの休んで居る中に、そっと入れて戴くいただ。

思い出深き一夜。

八月二十七日(日)

曇

朝、先生と御一緒に勤行。朝食も、先生と二人で、食す。奥様も、お疲れの様子。先生は、厳然と、事業家の一度や二度の失敗で、落胆するとは、大なる過ちあやまなりと戒めていらつしやる。

御一緒に、電車にて、神田の事務所に。

思い出多いが、胸の中は、暗い日曜日。

会社の整理に、信心のことで、兄より忿懣ふんまんの手紙受け取る。全く、不信用の的に、自分がなつて来た。

身体の具合、全く悪い。肺病らしい。

夜遅く、理髪店に。

八月二十九日（火）

雷雨

義理の姉が食券、洗濯物を持って来て下さる。有り難いことだ。感謝する。家の者も、大変心配しているそうだ。全く済まぬ気がする。

戸田先生より「君を頼る」との力強い激励を受ける。誰よりも、信頼し、期待をかけられし自分を、心から歎^{よろこ}ぶ。

先生の激励に応え、再び、世紀の鐘を、私が鳴らそう。先生より、離れる者は、離れろ。

若き戦士となり、若き闘士となって、先生の意志を、私が実現するのだ。

字が乱れる。字が乱れてならぬ。

八月三十日（水）

小雨

一日一日、落ち着いて来ると、同時に、会社内の負債の、深刻なる動きが漂う。小生には、内容が、さっぱりわからぬ。

ただ、前途が、暗黒であることを感ずる。

先生の胸中、父母の心配を思うと、胸が痛む。

地に依って倒れた者は、地に依って起つ以外ない。

この現状を、再起させれば、最大の活躍の証明となる。先生に心から飲んで戴けることだ。阿修羅の如く、奮い起とう。

一、次期経済の樹立方法

二、企画徹底の成就

三、整理の方針の推進

なお、①O部長とは、一緒に仕事をせぬこと。②先生と直結で、出発すること。③W氏より、早く返金して貰うこと。④後続部隊の養成。

明日は、N氏と、国税庁にゆくこと。

『レ・ミゼラブル』を読み終わる。

八月三十一日（木）

晴

秋来たる。

月光に、虫の音に、詩人の胸は、泉の如し。

秋は、静かなり。

動乱と、激流に、詩人の意思は動ぜず。

秋は、尊し。

慈愛の思念と、正義の戦に進む、鏡の如き季節なり。

秋は、澄みたり。

善悪の、網の真中に、詩人の胸奥きようおうは、清らかなり。

秋は、思うこと多し。

〔八月〕——戸田第二代会長（当時、理事長）の事業は窮地きゆうちに陥りおちい、再起を期して発足した東京建設

信用組合も、八月二十二日、ついに業務停止のやむなきにいたった。債務を背負った戸田理事長は、学会に累を及ぼすことのないよう学会の役職を退くことを決意し、八月二十四日の法華経講義終了後、理事長辞任の意向を伝えた。このとき、池田名誉会長は、信用組合の整理に奔走し、苦境に立つ戸田会長を公私にわたって守り続けたのである。

社会では、国鉄が東京―大阪間を八時間で走る「新特急」の試運転に成功（八月二十九日）したというニュースが話題になった。この特急は当時最新鋭の電気機関車で浜松まで客車を引き、浜松から大阪までは当時日本最大のSL・C六二型蒸気機関車で走った。この時に電気機関車が出した時速九十五^{km}は戦後最高記録であり、平均速度も時速七十二^{km}・一^{km}に達し、それまでの特急「つばめ」「はと」の平均速度六十四^{km}・五^{km}を大幅に上回る快挙だった。

九月一日（金）

晴

嵐の前夜を思わせる、一日一日である。刻一刻と深刻なる事態の肉迫を受く。

二十二歳の、青春――これが、決定されていた、師弟の縁か。

小局と戦い、大局に動ぜず。

先生も、本当に、お苦しい様子。悔し涙が一杯。そして、師に続き苦しみゆける、感涙が一杯。

百年の計を決して忘るな。百年の計を、決して、過たずゆけ。

九月二日（土）

晴

日蓮が弟子等の中に・なかなか法門しりたりげに候人人は・あしく候げに候。

（上野殿御返事）

今週も終わる。

内外の、批判、誹謗ひぼうの声、しきりなり。

先生、重役達と共に、大宮方面に、事業の打開策を講じにゆく。重役達も先生を信じていない様子を、感ずる。

信ずるものは、大御本尊様あるのみ。

寂寞は、人をして、深く、己れを知らしめ、同時に、彼をして、其の心を真面目ならしむ。
国家を愛する者だけが、国家を愛する者を知る。

九月四日（月） 晴

会社の整理、遅々たり。社員的心、動揺あるを悲しむ。互いに人間なれば、已むを得まい。

S宅を、一か月ぶりに訪問。氣心痛むものあり。良き時は、笑顔。悪しき時は、他人の如き扱い。

帰り、長月冴ゆ。詩の、空想の世界に遊ぶ念い、しきりなり。
而れども、現実の渦中は、空想のみでは、許されぬ。若人の胸は、戦く。

希望。大志。——新たなる、人生の船出。嵐は覚悟の上だ。

九月九日（土）

曇

国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るるが故に万民乱る。

（仁王經）

身体の具合非常に悪し。健康を害しきつては、何事も不可能だ。留意を要す。
九時に、床につく。

良く眠る。一年間の、休息をしているようだった。

題目をあげる以外に、打開の道はない。心身共に――。

勝利を信ずる、原動力は、題目だ。

若いのだ。進もう。一直線に、吾が道を。

若いのだ。働こう。天より与えられしものを作る思いで。

若いのだ。勇気を出せ。師の下に戦うは、総てが、善に通ずるを確信して。

若いのだ。快活であれ。負けても、勝っても。苦しくとも、淋しくとも。

九月十一日（月）

晴

帰宅、十一時三十分。

今日も、力の限り奮闘。

だが、嵐あらしの前の静けさだ。吾わが社も、気象時報も。

大宮に、O重役とゆく。大宮のK氏も、乱れる心となっている。全く、頼れる人では、決して無い。

学会幹部の人々と、先生と共に、将来のことを懇談。会社の事務所にて。

九月十二日（火）

曇

一日一日、人間革命の日である。

一日一日、新進の日であれ。

身体の事で、先生より激励される。

本部にて、先生、御本尊に、御祈念して下さい。

生命力が弱っている、弱っていると、強き強き叱咤^{しった}。

先生の、真剣な御様子に、驚く。感激、恐怖、厳肅。……

K氏と、大森駅まで帰る。

帰宅、十一時。

今夜より、良く眠れることだろう。

九月十六日（土）

快晴

一日中、暑い日であった。

先生宅の座談会に、出席。先生の生命論をお聞きする。皆嬉し^{うれ}そう。

先生は、未だ学会の理事長であられる。どうして会長になられぬのか、深く考える。

T氏、来る。信心のこと、会社のこと、小一時間語る。いい人だ。

就床、十二時三十分。

現実と理想、理想と現実。

現実を逃避する者は、卑怯^{ひきよう}なり。理想を抱^{いだ}かぬ者は、又、生ける死者と、同じなり。

九月十七日（日）

晴

九時まで休む。一日中、室^{へや}に居る。今日が初めてなり。誰人も来ず。
明日の、構想を練る。

洗濯をする。左隣の室^{へや}のおばさんに、夜遅くの勤行は安眠妨害だから止めるよう、厳しく叱られる。

その隣のおじさんに、早く帰って来い、何を、いつも、うろろうしてるのだと、たしなめられる。

管理人の若主人からも、御本尊を持^{たも}つために、何やかやと注意される。

夕刻早めに、食堂に一人ゆき、二食分食う。朝、昼なしで、本当にうまかった。

室^{へや}を、久方ぶりに掃除をする。

十時少々前に、休む。静かな室。

九月十八日（月）

雷雨

トルストイの『日記』を読む。

偉大な文豪たりとも、生涯、苦悩の連続であつた。深く思念することをおぼえる。

所詮^{しよせん}、人生^{じんせい}に於^{おい}ては、最究極の道にゆくため、求道者は、限らない努力をするものだ。しかし、吾等^{われら}は、妙法という、絶対最極の原理を、すでに知つたのだ。幸せなことだ。偉大なことだ。

一日早く、妙法を知れば、一日早く、幸福に、平和になるわけだ。一日躊躇^{ちゆうちよ}すれば、一日、幸福と平和が遅れることだ。

いかなる有名人、学者たりとも、妙法を持たざれば、結局は、決して人生の解決とはいえない。だから、不幸者となる。

帰宅、十一時三十分。

一人、滝廉太郎の「荒城の月」を聴く。

春高楼の花の宴……歴史の変転、勇者の面影が、侘しく映る。

九月十九日（火）

雷雨

七時四十分出勤。混む電車に、疲労が、倍加する思い。

自己を偽^{いつわ}ることは、非常に罪惡だ。人みな、義務、権利を、正しく実行できる社会であるべきだ。自分の思ったこと、正しいと思うことが、率直に実行出来ぬことは、辛い。人も、皆、あまりにも偽りが多すぎる。悲しいことだ。

いやな葛藤^{かつとう}が多すぎる。万人の性格の違いは、いかなる宿命によるものか。少年、青年

のみは、もつと、正しく伸びのびと成長させゆくよう、未来のため、大人が、責務を持つてもらいたいものだ。

十一時、帰室。

御書を拝読。全く難しい。

九月二十一日（木）

小雨

鳥は人の害せん事を恐れて木末こずえに巣くふ、然れども食のために地に下をりてわな網にかかる、魚は淵ふちの底そこに住みて浅き事を悲しみて穴を水の底に掘りて・すめども餌えに魅ばかされて鉤はりをのむ。

（四条金吾殿御返事）

会合の後、先生に歌を差し上げる。先生、非常に喜んで下さる。

先生より、和歌、二首、返歌として、即座に下さる。

幾度いくたびか 戦いくさの庭に 起たてる身の

捨てず 持つは 君の太刀ぞよ

色は褪せ 力は抜けし 吾が王者

死すとも 残すは 君が冠

若人の感、無量なり。

一層の決意、漲れり。

九月二十二日（金）

曇

秋風、肌に爽やかに感ずる候。

一日中、涼しい、清い気持ちの日であつた。夕刻近くは、寒きが如くであつた。

本部、「御義口伝」講義。約五十名。K氏と大森駅まで、種々語りながら帰る。

生涯、年齢、時代の推移を超越し、公明正大に生きたいものだ。質実剛健に進みたいも

のだ。重責を担^{にな}い、堂々たる人生でいきたいものだ。

帰宅、十一時過ぎ。蚊が少なくなつて助かる。

九月二十三日（土）

晴

涼しい一日であつた。十二時、帰宅。

身体具合、良好になる。

歓喜で働ける日、苦しみながら戦う日、様々だ。^{さまざま}だが、これ程、真剣に戦えば、絶対に悔いはない。倒れても、誰人も見ていなくとも。

御本尊様のみ、すべてを解決して下さる。唯、^{ただ}反省は、自己の信仰に、^{ほうぼう}謗法ありや、否^{いな}やだ。

K宅、座談会。

歌をつくる。

荒猛^{あれすき}ぶ 曠野^{ひとり}に 一人 決然と

光掲^{かか}げん 先覚の子は

一、反省を怠らぬこと

一、一步一步、邁進^{まいしん}を忘れぬこと

一、物事に迷わぬこと

一、信仰を、厳しくすること

九月二十八日（木）

曇

此の経は能く一切衆生をして諸の、苦悩を離れしめたもう。此の経は能く、大いに一切衆生を饒益して、其の願を充満せしめたもう。

（法華経藥王菩薩本事品）

七時三十分、出勤。

何となく、涼しくなった。Yシャツ一枚の青年。上着がほしくなった。電車内では、皆

着ているのに。

I君に、一杯食わされる。悪い奴だ。

人を騙^{だま}して、見栄を張って生きるなんて、人間として最低だ。

目的のある苦勞は、張り合いがある。目的なく、苦勞して、死んでいく人は、奴隸^{どれい}のように見える。

「三重秘伝抄」講義拝聴。

帰り、雨となる。全く寒くなってきた。T氏と、大森まで帰る。実直な人だ。

〔九月〕——九月三日にジェーン台風が神戸に上陸して日本海から東北地方を襲い、阪神地方を中心に死傷者九百九十六人、家屋全壊六千三百四十七戸という大被害をもたらした。この災害に当時の新聞の社説は「災害対策については……財政力の関係でなかなか当局はにえきらない。それにあきらめが心の底にコビリついていて、対策の要求が国民的な運動となって現れて来ない」（朝日新聞）と述べている。貧しさのなかで災害にもあきらめがちだった国民の心理がうかがえる。

朝鮮戦争の状況は、九月十五日になって、米軍を中核とする国連軍が仁川に上陸したことで一

変した。これは南攻していた北朝鮮軍の背後をついたもので、マッカーサー国連軍総司令官が陣頭指揮をとり、国連軍反攻の皮切りとなった。上陸した国連軍は激戦のち二十六日には京城^{ソウル}を完全に奪還^{だうかん}、国連軍側が攻勢に立ったが、三十八度線をめぐって南北の激戦は続き、朝鮮半島の戦火は長期戦の様相を示していた。

文化の面で見ると、昭和二十五年は、いまだ戦争の記憶を強く残しながらも新しい時代の空気を呼吸しようとする戦後の文化の揺籃^{ようらん}の時代であった。それは当時の世相にも色濃く反映されている。映画では「きけ わだつみの声」「暁の脱走」がヒットする一方、「自転車泥棒」も人気を集めた。流行歌では「白い花の咲く頃」「夜来香」などがヒットした。また「エチケツト」「ナイター」などの外来語が流行語となった。

当時のベストセラー（九月期）は次のような書物だった。①『風と共に去りぬ』（ミッチェル、三笠書房）②『哲学用語辞典』（アテネ文庫）③『ボヴァリー夫人』（フローベル、岩波文庫）④『随筆宮本武蔵』（吉川英治、六興出版）⑤『谷崎潤一郎作品集』（創元社）。ベストセラーのなかに世界文学の古典や哲学辞典が入っているところに、荒廃の時代に確たる指標を得ようとする人びとの思いがうかがえる。

十月二日（月） 雨

夕刻、恩師と共に、小岩のK宅を訪う。二人して、電車中にて、種々仕事の話。

帰り、小岩駅前にて、おすしを御馳走になる。

帰りの車中は、エミールの話、文学の話に花が咲く。目黒駅まで、お送りする。

帰宅、十一時。先生のお宅まで、お送りしなかったことを悔ゆる。

法華経は初は信ずる様なれども後遂る事かたし、譬へば水の風にうごき花の色の露に移るが如し、何として今までは持たせ給うぞ是・偏へに前生の功力の上・釈迦仏の護り給うか、たのもしし・たのもしし。

(松野殿女房御返事)

十月四日(水) 雨

一妙真如の理なりと雖も悪縁に遇えば迷と成り善縁に遇えば悟と成る悟は即ち法性なり迷は即ち無明なり。

(当体義抄)

自覚するということとは、最も大事なことだ。事に処して、自覚なき人は、風波に消えてゆく。自覚こそ、理念の根本といえようか。

社会には、勝つ人もいる。敗れる人もいる。運、不運は計りしれない。而れども、勝つても、永久にその^{よろこ}歡びは続くものではない。一時負けても、自覺の有る人は、勝者以上に、より高く、広く、深く、将来の、偉大さを、築きゆけるものだ。永久に、敗れざる限り、次への一步一步の、勝利を確信して生きぬくことだ。

敗れしことを、味わった人こそ、真実の、勝利の歡喜を知ることができよう。勝って^{おど}驕っている人の顔。敗れて悲しんでいる人の顔。所詮、^{しよせん}滑稽な^{こっけい}ことだ。何を目指して、いかに自覺して、生きているか。これが、大事だ。この自覺こそ、信心よりないのだ。

S宅、K宅、H宅を、重役と共に訪問。帰宅、十二時。

十月七日(土)

快晴

六時三十分、起床。

靴が毀れて来て、全く困る。

洋服が破れて来て、全く弱る。

青年よ。

君達は、若いのだ。

若いということだけで、誰よりも強いのだ。

その、自覚を忘れずに、人は修行をすることだ。

君達が、歓喜して、生きずして、

人類の、歓喜は、どこにあるか。

君達が、迷う姿、驚く姿は、

それは、若芽が、大気に戦く幻影にすぎない。

君達よ、若葉が香る。暑さにも、寒さにも耐えぬいて。

この、生命の姿を忘れてはならぬ。

君達の、思念、努力、精進、実践。

それは、すべて、未来の血肉になることを忘れてはならぬ。

社会は、遊戯場ではない。

いかなる、社会でも、時代でも、耐え尽くせる、自己を作ろう。

帰宅、十一時。御書拝読。疲れる。

十月八日（日）

快晴

八時、起床。朝食抜き。

午前中、洗濯。綺麗きれいにならず、その儘まま、室内に干す。

午後、読書。音楽を一人聴く。

夕刻、附近を散策。B店にて、ミルクコーヒーを飲む。

「仰ぎ見よ、大空を」の詩を作る。

夜、先生より、電話あり。

直ちに、お伺うかがいする。種々、指導を受く。

帰宅、十二時。

十月九日（月）

曇

一日一日が激務。身体がひどい。

而し、大願に立ちたる先生の苦悩を知れば、苦しいなどといつてはいかん。師より樂をしようとは、悪い弟子だ。

若人^{わこうど}よ。

太平洋の悠々^{ゆうゆう}たる、うねりを知れ。

奥山の嚴肅なる、境地を知れ。

太陽の赫々^{かつかく}たる、情熱を知れ。

紅葉の優美なる、色彩を知れ。

若人よ。これらを忘れず、生きぬくのだ。

これらを感じて、前に進むのだ。

若人よ。

今日の戦いに、勇敢であれ。

明日の理想を、祝福せよ。

過去の夢を、忘れ去れ。

未来の夢に、^た起ち上がれ。

若人よ、進め、進め、

永遠に、前に。

一時、就寝。

十月十一日（水） 雨

静かな、秋の夜である。雨が少々降った。

所詮^{しよせん}、人生は、自己自身との戦いである。そして、対外的のものとの、戦いでもある。

人生にあって、敗れる程、悲惨なことではない。勝つ者と、敗ける者は、努力、智慧の相違か。福運の相違か。宿命的なものがあるのか。

一度、現実到大敗しても、それを土台にしての飛躍が、最も大事となる。その存在、体験を通して、これをいかほど、真正面から、対処して戦ったか、自分が、いかほど、深く、高く、人生を社会を、思念したかに、価値があるのだ。

一、意思

二、勇氣

三、誠実

この三つが、大事なことだ。

皆、破れてしまい、靴下一足もなくなる。困った。自分で、明日の間に合わせに、一足繕う。^{つくろ}

就寝、一時三十分。

^{なんじ}汝自身を信ぜよ。

汝の確信と、責務とを。

十月十三日（金）

晴

我常われに此ここに住すれども 諸もろもろの神通力じんずうりきを以もつて 顛倒てんどうの衆生しゅじようをして 近いしと雖えも而しかも見え
ざらしむ。
（法華經如来寿量品）

十一時、帰宅。

S氏に出した、折伏の手紙、全部送り返される。
正法を求める人の少なきを悲しむ。

戦いは、毎日激烈きわを極まむ。唯ただ、勝つことを願ひ、前に前に進む以外の道なし。

仕事も大事、而し、御書の研究を、確実にすることを、決して忘れぬこと。

思う存分、活躍しきることだ。

進め、叫べ、戦え、

若いのだ。若いのだ。

今、活躍せずして、いつの日か、青春の戦う日があるのだ。

就寝、十二時三十分。

十月十九日（木）

快晴

何事につけても・言^{ことば}をやわ^和らげて法華經の信を・うすくなさんずる・やうを・たばかり
人出来^{しゅつたい}せば我が信心を・こ^試ころむるかとお^思ぼして各各これを御^{教訓}けうくんあるは・うれし
き事なり。

（上野殿御返事）

人、いざという時に、頼りになる人は、少なきものだ。所詮^{しよせん}、人生は、利己主義なもの
だ。けだし、吾^わが振る舞いを見ている、妙法、そして、師の有るは、最大の幸せなり。

今日は、一日、頭が重い日であつた。

明日より、一層、発展に、頑張ろう。

誰も、社員を頼らず、自分が、自分の力を發揮して、戦おう。

一人起^たてる時に、強き者は、眞の勇者だ。

一、O会社の、大発展の企画を熟慮すること。

一、T信用組合の、整理を急速に致すべきこと。

一、先生の、戦いのしやすきよう、経済を早急に確立すること。

十月二十一日(土) 小雨

歴史は、停滞することなく、作りあげられる。一日、一日、一年、一年と。

今、過去数千年の歴史は、刻まれ、否、未来五千年の歴史の第一歩を、記^{しよ}しているのである。

それは、偉大なる事実だ。

戸田城聖先生、吾人^{ごじん}に、将来の事を、細々^{こまこま}と託し、語らる。先生の御真意、胸奥^{きようおう}に響く。

泣く者は、泣け。喜ぶ者は、喜べ。

いざ、人類よ。この厳肅なる、世紀の鐘の響きを、聞き忘るるな。

十月二十二日（日） 小雨

中野・歓喜寮に、二か月ぶりに行く。T氏と共に。

法友は尊い。友人は、有り難い。

一日中、頭が重い。信仰の不足か。

入信、茲^{ここ}に満三年を過ぐ。次の段階への節とし、新たなる自覚の信心を、要するのだ。次の幕を開きゆく、題目を唱えねばならぬ。弱き自分に、鞭打^{むち}って。

帰り、M宅の座談会に出席。

帰宅、十一時三十分。

一、精進を忘れぬ事

一、眞実を愛する事

一、自分らしく生き抜く事

就寝、一時。

十月二十六日（木）

曇

六時三十分、起床。

フランス・ベーコンの『随想録』を読む。意義あり。

伊東に、I氏宅訪問。先生の代理として。使命やや達す。己^{おの}れの希望、使命が、成就されるときは、最も嬉^{うれ}しき時だ。

最近、頭が非常に疲れる。

帰宅、十二時少々前。

信仰も、仕事も、青年時代も、なべて、中途半端で終わってはいけない。強く自覚して、頑張ることだ。

さあ休もう、唯一人で。こんな呑気な生活は、生涯無いことだろう。

懃懃の行者は分段の身を捨てても即身成仏、捨てずしても即身成仏也。

(授職灌頂口伝抄)

十月二十七日(金) 快晴

さもあらばあれ仏勅を重んぜんにはしかず、其れ世人は皆遠きを貴み近きをいやしむ但愚者の行ひなり、其れ若し非ならば遠とも破すべし其れ若し理ならば近とも捨つべからず、人貴むとも非ならば何ぞ今用いん。

(星名五郎太郎殿御返事)

個人の悩み、一家の悩み、これで人々は苦しむ。最も近く、最も大事な問題。

政治、科学、制度、教育等々、これも解決法の一理であろう。而し、更に身近な、自己、家庭の、苦悩の解決は、実感として事実の上で解答を与えてくれぬ。どうしても、根本的な解答は、正しき信仰に尽きて来る。

正法を持つ^{たも}つ人は少ない。経文通り、小楽に満足し流され、大楽を願わざるものか。
笑う者よ、笑うがよし。誇る者よ、勝手に、誇るがよい。嘲^{あざけ}る人よ、また、自由に嘲る
もよからう。

仏法真実ならば、因果の理法また、厳しきことである。

十年後の、学会を、吾^われを、見よ。

二十年後の、学会を、吾^{われら}等を、見よ。

悩みながらでよし。唯^{ただ}、宗教革命に、前進しよう。

十月二十八日（土）

快晴

七時三十分、出勤。十一時、帰宅。

夕刻、七時より、新橋にて映画を観^みる。疲れて、半分以上寝てしまった。

三十分程、ベートーベンの「運命」を聞き、休む。

十月二十九日(日) 小雨

午前中、先生宅にて、部長と三人して、今後の会社の方針打ち合わせを為す。
午後、先生、奥様三人して、種々談合。意義ある一日であった。
昼食、夜食を御馳走になる。

帰宅、七時三十分。

ホイットマンの『草の葉』を読む。

室^{へや}が、北側のせい^へいか、一段と寒き感じ。

半年以上、布団^{ふとん}を干さぬので、衛生上よろしからず。

就寝、十一時三十分。

十月三十日(月) 雨

大宮方面に、部長と共に一日中社用。

帰宅、十二時。駅より、雨のため、輪タクに乗り帰る。

青年。青年には夢が多い。恐ろしき夢。美しい夢。憧憬しょうけいの夢。苦難の夢。

多感の青年。夢は日増しに多く、苦楽共に、意義がある。虹を追いかけてゆく青年の夢。努力と、前進と、忍耐と、希望とを、車輪として、夢を追いかけてゆくことだ。

不純と、狡猾こうかつなる現実社会に、当たって碎ける勇敢さで、努力することだ。されば必ず、一步道が開かれる。悔いは浄化される。

十月三十一日（火） 雨

思い出多き、十月よ、さらば。

苦しいこと、楽しいこと、いやなこと、嬉しいこと、

こもごもの一か月。

現実の荒波と、感傷の湖と、天空の虹の希望との、葛藤かつとうの一か月。

この貴重な、一か月の劇場は幕となった。

青空の澄みし、大気は清い。

黄昏^{たそがれ}の、月光に、天地は美しい。

大自然の、背景の大舞台に、

人工の、凄まじき劇は繰り返される。

勝つも、敗^まけしも、舞台裏は見えぬ。

ある人は、無目的の船である。

ある人は、小目的の戦闘船に勇まし。

ある人は、大目的の戦艦に、波高し。

船のない人。溺^{おぼ}れ仆^{たお}れている人。

小船に乗れど、どうどう巡^{めぐ}りしている人。

小船に乗りすぎ、まさに、沈没するを知らざる人。

目的と、大船と、共に兼ねる人生でありたい。

〔十月〕——十月一日から、第三回の「新聞週間」が始まった。標語は「新聞は民主社会の安全保障」であった。一日には日本新聞協会が「新聞大会」を開催し、平和と秩序の確立のために貢献

することを決議している。これにはGHQ（総司令部）からも代表が出席し、「言論の自由」を強調した。しかし、皮肉なことにGHQによるレッド・パージ（共産主義者などの職場追放）は大学教官にも及び、それに抗議する学生たちの試験ボイコットが相次いでいた。

十月十三日、日本政府は一万九十人にのぼる戦後初の大量の追放解除を発表した。昭和二十一年から翌年にかけて戦争責任を問われた各界の指導者層約二十万人が連合軍の指示により公職追放処分を受けたが、そのうち追放解除を申請した三万人の中から初的大量解除が行われたのである。その背景には朝鮮戦争にともなう極東情勢の激変に応じて、日本国内の反共産主義勢力を強化しようという連合軍の意向があったといわれる。

十月二十四日は五年前のこの日に国連憲章が正式に発効したことを記念する「国連の日」であった。当時、まだ占領下に置かれて国連に加盟していなかったわが国でも、東京で記念大会が開催され、国連本部から贈られた国連旗の贈呈式が行われるなど、多彩な行事が繰り広げられた。吉田首相は記念大会で国連精神の理解を強調したが、こうした国連への熱意に一日も早く国際社会への復帰を果たそうとする当時の空気がうかがわれる。

十一月一日（水） 小雨

総じて日蓮が弟子と云つて法華経を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ、さだにも候はば釈迦・多宝・十方の分身・十羅刹じゅうらせつも御守り候べし。

（四菩薩造立抄）

秋晴れ深く、菊花^{かんば}芳し。

二十二歳の人生も、余すところ二か月余となる。

午後、小学校の友人、S君の結婚式にゆく。

同期の友の妻帯に、自分の境遇を思いかえす。

帰宅、十時。読書。記憶力が減退して困る。

十一月四日（土） 晴

六時。月例青年部会。出席、二十名内外。

皆、真剣の様子なれど、強き青年部の脱皮見られず。

閉会、八時。友人達と、水道橋駅まで帰る。皆に、なかなか融け込めないのが残念である。

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり。

十一月七日（火）

小雨

釈尊と我等とは本地一体不二の身也。釈尊と法華經と我等との三つは全体不思議の一法にして全く三の差別無き也。しゃべつ

（授職灌頂口伝抄）

一、広宣流布ノ為、先驅トシテ、進ミキル、真ノ青年ニナルベキコト

一、学会首脳ニ関スル、明確ナル判断ヲシテユクベキコト

一、御書ノ徹底的研究ト、実践ヘノ猛省もうせい

一、自己ノ与エラレシ支部ヲ、決然トシテ發展セシムコト。並ビニ組織ノ確立ヲ急グ

コト

一、先生ノ事業發展ヘノ思索

一、自己ノ信念ノ深淺ヲ反省

一、自己ノ經濟問題ト、新家庭ノ時期

經濟全く困窮。先生宅も、大変な御様子。一日も速やかに、お楽になつて戴いたきたい。そ

して、広布の陣頭指揮を請い願うのみ。

十一月八日（水）

晴

稲^{いね}變じて苗^{なえ}となる・苗變じて草となる・草變じて米となる・米變じて人となる・人變じて仏となる。

（王日女殿御返事）

社員、同志たるY氏宅に、全快祝いにゆく。十一時までいる。若き友人、同志の尊く美しき結合。

久しぶりに、詩吟を三度、朗吟^{ろうぎん}。

K氏、U氏も、深く感銘した模様。

帰り、M宅に、挨拶^{あいさつ}により、帰宅。

十一月十日（金）

曇

法華経は三世の諸仏・発心のつえ^杖にて候ぞかし、但し日蓮をつえはしらとも・たのみ給

うべし、けはしき山・あしき道・つえを・つきぬれば・たをれず、殊に手を・ひかれぬれば・まろぶ事なし、南無妙法蓮華経は死出の山にては・つえはしらとなり給へ、釈迦仏・多宝仏上行等の四菩薩は手を取り給うべし。

(弥源太殿御返事)

七時三十分、起床。十一時三十分、帰室。

寒くなり、着替えのシャツが無く、少々困る。

一日中、五軒、十軒と、先生の代理として、部長と共に、得意先を回る。いつの時代でも、かつ社会でも、信用が最も大事であることを知る。

十一月十二日(日)

曇

創価学会、第五回総会。教育会館にて。

遅々たりといえども、学会の闘争、充実した感あり。此の中より、未来十年——昭和三十五年の学会の世界に、幾人残るや。

吾人^{ごじん}の、師につく決意^{いよういよ}弥々堅し。同志の進み、成長しゆく姿をみて、自らを省^{かえり}みることが大事なり。自己流のみでは、真実の向上がわからなくなってしまう。

戸田先生、見ておって下さい。此の私を。必ず、先生の遺志は、実現してゆきますと、先生の講演中、決意は漲^{みなぎ}る。

十一月十三日（月） 晴

百千合せたる薬も口にのまざれば病愈^いえず蔵に宝^{もて}を持ども開く事をしらずしてかつへ懷^{ふところ}に薬^{もち}を持ても飲まん事をしらずして死するが如し。
（一念三千法門）

帰宅、十時。

昨日の、先生の記録を整理する。夜半までかかる。厳肅な気持ちとなる。

先生の、後を継ぐ者として、当然な気持ちなり。

此の心奥、いつの日か、誰人に語らん。

先生は、一往、昨日の総会の席上、理事長職を、Y氏に譲った。そして、次の時期を待っているのだ。誰人が、学会の組織上の中心者になっても、師は、戸田先生しか、私にはない。

十一月十四日（火）

快晴

再び、先生の代理にて、伊東にI宅を訪う。午後七時着。風強く、寒き晩であった。九時、失礼し、M旅館に泊まる。なかなか、静かな、良い旅館であった。温泉に入り、十二時近くまで、ワイルドの『獄中記』を読む。

非常に、身体を無理している。実際、自分で、自分自身の運転が出来得ない状態に苦しむ。

一人して、旅館に泊まるは、人生始まって、はじめてである。計、四百三十円也を払う。

十一月十五日（水）

晴

仏になる道は豈^{あにきようち}境智の二法にあらずや、されば境と云^いうは万法の体^{たい}を云い智と云うは自

体頭照の姿を云うなり。

(曾谷殿御返事)

七時十四分発、熱海行き電車に乗る。熱海駅にて、乗り換え、四十分待ち、東京に十時三十分着。寒い朝であつた。疲れが出たのか、列車内にて、よく眠る。

十一時、出勤。先生に種々報告。

十二時より、仕事にかかる。なかなか疲れてならぬ。

帰り、新橋において、映画「レ・ミゼラブル」を観^みる。

十一月十六日(木)

快晴

十二時、寝る。室^{へや}が寒くて、困る。火の気、全然なし。

M宅にて、臨時座談会を催す。猛反対の出席者に、対治^{たいじ}悉^{しつ}檀^{だん}をなす。

昼、戸田先生と、日大の食堂にゆく。

民族論、学会の将来、経済界の動向、大学設立のこと等の、指導を戴く。いただ

思い出の、一頁となる。

十一月十七日（金）

晴

火にたきぎ薪を加える時はさかなり、大風吹けば求羅ぐらは倍增するなり、松は万年のよはひたもを持つ故に枝を・まげらる、法華經の行者は火と求羅との如し薪と風とは大難の如し、法華經の行者は久遠長寿の如来なり、修行の枝をきられ・まげられん事疑なかるべし。

（四条金吾殿御返事）

八時、学会本部より、T氏と共に帰る。

「如説修行抄」拝読。

勇気ある信心を、深く自覚する。

南無妙法蓮華經。

詮^{せん}ずるところは、信力と行力に尽きる。御本尊様には、法力と仏力があらわれるのだ。この御本尊様の、偉大なる大法則の力を、実証し、実験し、体得するには、自身の信心よりほかに何もないのだ。

午前一時、就寝。

十一月十九日（日）

雷雨

譬^{たと}えば如意宝珠の玉は一珠なれども二珠乃至無量珠の財^{たから}をふらすこと・これをなじ、法華經の文字は一字は一の宝・無量の字は無量の宝珠なり。
(日妙聖人御書)

午後六時三十分、先生宅にて、講義拝聴。

「草木成仏口決」及び「二生成仏抄」。

先生の、次期の学会指導者の養成に、自覚、更に新たなり。

出席者、K女史ほか数名。

夜食を御馳走になり、帰宅、十時三十分。

十一月二十日（月）

快晴

心を観ずるに心なし。顛倒てんどうの想おもひより起るおこ。此かくの如そき相そうの心は妄想もうそうより起る。空中の風の依止えしする処ところなきが如し。

（観普賢菩薩行法經）

戸田先生と共に、一日中、社の建設のことにつき、談合。

全く、多事多難である。全く、多情多感である。

私の、凡愚の智では、なにも出来ぬ。以信代慧を確信し、唯々ただただ、題目をあげ、第一にも努力、第二にも努力して、建設に向かおう。

私の、先生に対する、忠誠は……。

帰宅、十一時。

室が寒くてならぬ。題目をあげると、生命全体が暖かくなる。誠に、不思議なことだ。

十一月二十二日（水） 小雨

我^{われ}も亦^{また}為^なれ世の父 諸^{もろもろ}の苦患^{くげん}を救^{すく}う者なり。

（法華經如来寿量品）

M君と一日中、仕事のため、外出。

O部長の臆病^{おくびょう}には、ほとほと弱る。先生も、戦争中、若き将校は勇敢であつたが、指導的立場の将軍が、意気地がなくなつたのと同じだよと、慰めて下さる。

此の一年が、会社も、私も、学会も大事であると深く思考する。一つの広布のギアとして、人それぞれ、お互いに懸命に勝利を導くことだ。

O宅座談会に出席、新しき人なし。

帰宅、十二時五十分。

静かなる、月光であつた。久しぶりに、詩を吟じながら帰る。感多し。

何かの書に、書いてあった。

心軽ければ、其の仕事も軽い。

賢明な思考よりも、慎重な行いが重大であると。

十一月二十四日（金）

小雨

再び、先生の代理として、伊東に出張。I氏、S氏と会見。当人達の、話の変化に苦しむ。私には、老成者の、微妙な腹芸が、わからない。

四時過ぎ、列車に乗車。月下の東海の静寂なる、金波、銀波に、瞬時、現実の世界より、夢の、聖なる芸術の世界に、佇みし思いとなる。たえず七時、東京着。

社に帰り、直ちに、先生宅へ。

種々、報告申し上ぐ。先生、頗る御機嫌悪し。すこぶごきげん

帰宅、十一時五十分。

十一月二十六日(日)

小雨

十時、起床。寒い朝であつた。冬型の季節となる。オーバーが無い。此の冬も、オーバーなしで通そう。

T氏と一緒に、M宅に折伏に行く。入信せず。一人の人を、折伏することは大変なことだ。而し、これ以上に、尊い、偉大な、且つ最高なる活動はない。

今、一人の人が入信せずとも、幾百千万の人々が、吾等^{われら}を待っている。二人して、悠々^{ゆうゆう}と帰る。

夜一人して、大森にて、洋画「ベーブ・ルース物語」を観^みる。

帰宅、十時三十分。寒い。お茶でも飲みたい。なんにもないことが、未来の思い出ともなることだろう。

十一月二十七日(月)

小雨

夕方より小雨。九時少々過ぎに帰宅。勤行後『宇宙の謎』を夜半まで読む。

身体の具合、少々良好となる。嬉しい。

早く帰っても、何となく、物足りぬ思いがしてならぬ。

本日、営業部長に、昇格する。

一、経済の勉強を致すべき事

一、事業の発展に、責任を一段と深くすべき事

一、学会の前進に、遅れざる事

十二月二十八日（火） 小雨

譬^{たと}えば頭をふればかみ^髪ゆるぐ心はたらけば身うごく、大風吹けば草木しづかならず・大地うごけば大海さはがし、教主釈尊をうごかし奉れば・ゆるがぬ草木やあるべき・さわがぬ水やあるべき。

（日眼女造立釈迦仏供養事）

寒い一日であつた。一日一日、寒くなる。身体の調子、順調となる。功德であると確信する。

今月で、三か月給料遅配。本日、少々いただ戴く。帰り、大森にて、シャツ等を購入。金、百六十円也。

帰宅、九時三十分。

『世界文学全集』を読む。第七巻目に入る。

十一月二十九日（水） みぞれ

朝より雨。寒波。本年、最高の寒さの様子。

半日、先生と共に語る。私が、師の遺業を、継ぎ、実現せねばならぬことを、沁々しみじみと指南して下さる。

午後より、先生は、大蔵省にゆかれる。寒さの為、震えて帰ってこられる。

先生曰く「世の中は、寒いなあ」と。笑って居られる。

“大作、自分は、決して負けたのではない。敗れたのに過ぎぬ。本当の戦いはこれからだ”と。――

先生に、学会に、指一本指させぬ覚悟で戦う決意、更に燃え上がる。

I氏に、気を付けねばならぬ。彼は味方である振りをして、陰で先生に対し、策動している。

帰宅、十一時。明日は、大宮方面に。

十一月三十日（木） 小雨

十一月も遂に終わりぬ。決戦の師走を明日に控える。

大宮に午後より出発。十時三十分、帰宅。事業は、五十年の体験活動なるも、仏道修行は、永遠にわたる根本修行なるを、忘れてはならぬ。

トルストイの『少年時代』を読む。暴君の少年時代と、吾が少年時代とを、対照して考
えに耽る。

〔十一月〕——十一月十二日、東京・神田の教育会館で、牧口初代会長七回忌法要に引き続き、第
五回総会が行われた。この席上、戸田第二代会長（当時、理事長）の理事長辞任が発表されたので
ある。事業の失敗の責任が学会に及ぶことを深く憂えての辞任であった。しかし、講演では、
仏勅について語り、「広宣流布は、仏意であり、仏勅であります」と、広布への確信と決意を言明
している。

戸田理事長は、理事長職を辞任した後、池田名誉会長をはじめとする青年の代表に対し、御書
の講義を通して、全魂を傾け、訓練を開始している。とくに名誉会長に対しては、毎日曜日、お
よび早朝を利用して、政治、経済、法律、科学など万般にわたって個人教授が始められた。この
個人教授は、その後数年にわたって続けられるが、後に名誉会長は「それはわが生命に刻印され
た無形の財産となっている」（『私の履歴書』）と述べている。

社会では、十一月三日に三度目の「文化の日」を迎えた。この年の文化勲章受章者は土井晩翠
（詩）、田辺元（哲学）、正宗白鳥（文学）、小林古径（日本画）、牧野英一（刑法）など七人であった。
また、この日には、戦後の六・三制教育改革の功労者や優良健康児の表彰式なども行われている。
これらの行事は、六・三制がようやく軌道にのり、児童の栄養状態も次第に改善されつつあるこ
とを物語っているといえよう。

二十五年当時は全国的に電力不足が深刻で、例年冬季に入るとしばしば「緊急制限」が行われ停電となった。十一月七日の朝も東京、神奈川一円で約一時間すべての送電が止まり、国鉄・私鉄の大部分が運転不能になって通勤・通学の足が奪われた。関西でも電力低下のため工場動力の緩運転やエレベーターの運転停止が相次いだ。これは発電が水力中心で、その時の気候条件に発電量が大きく左右される状況が続いていたためであった。

膠着状態が続いていた朝鮮戦争の戦局は、十一月、中国軍が国境を越えて介入したことで一変した。二十八日には国連軍総司令官マッカーサー元帥は二十万余の中国軍が越境したことを発表し、戦争終結の望みが遠のいたと声明した。加えて三十日にはトルーマン米大統領が朝鮮戦争に原爆の使用も考えていることを言明した。こうして極東情勢は第三次世界大戦の危機をはらんで、戦後最大の危局を迎えることになった。

十二月一日（金） 雨

弥々、^{いよいよ}本年最後の月に入る。自分も、二十二歳を送ることになるか。――

元気に、皆より早目に出勤す。

一日中、外出。思う存分働く。

小林多喜二の『独房』を読む。若き左翼作家の苦悩が、ありありとわかる。
思想の過ちあやまの、結末の厳しき運命を思う。

現実の、矛盾むじゆん、悲惨——罪なき者の、罰則を憎む。——所詮しよせん、強くあらねばならぬ。

帰宅、十一時三十分。——室寒へやし。

十二月二日（土） 晴

人身は受けがたし爪の上の土・人身は持ちがたし草の上の露、百二十まで持ちて名を。
くたして死せんよりは生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ。
腐（崇峻天皇御書）

十二時五十分発、松島号にて、先生と共に伊東に商用。I氏に面談にゆく。
車中、「観心本尊抄」を、講義して下さる。

I 館に一泊。二人して、温泉にゆつくり入る。種々、雑談——先生、様々の事を思い巡らして居られる様子。

夜、I 氏等、再び来る。

明朝、再び、私が挨拶にゆくことに決まる。

今夜は、東京では定例青年部会。はじめて欠席——。

十二月五日（火）

曇

凡そ仏法を信ずる人は仏と経との二を明らむ可き也。

（法華大綱抄）

早朝に、M 氏、N 氏来室。少々懇談。出社遅れぬよう、急ぎ、バス停留所まで駆け足。

苦闘よ、苦闘よ。

汝は、その中より、真の人間が出来るのだ。

汝は、その中より、鉄の意思が育つのだ。

汝は、その中より、真実の涙を知ることができなのだ。

汝よ、その中より、人間革命があることを知れ。

帰宅、十一時。

十二月七日（木）

晴

小波小風は大船を損ずる事か^難たし・大波大風には小船をやぶれやすし、王法の曲るは小波・小風のごとし・大国と大人をば失いがたし、仏法の失あるは大風・大波の小船をやぶるがごとし国のやぶる事疑いなし。

（神国王御書）

起床、六時。元氣。元氣に出発。

夕刻、アパートを世話してくれた親娘三人を、有楽座に招待する。ロードショーの洋画を^み観る。

「嵐ヶ丘」。ヒースクリップとキャサリンの、愛別離苦の描写に胸を打たれる。帰り、日

劇地下で、ちらしを御馳走する。喜んで帰った。

招待もよいが、折伏で救うことが、真実の御礼である気がしてならない。
帰宅、十時五十分。

十二月九日（土） 雨

身つよき人も心かひなければ多くの能も無用なり。

（乙御前御消息）

警視庁記者クラブにて、K記者と会談。共に、虎ノ門、喫茶店において、記者論を交す。面白し。

社にて、夜半まで読書。

「草木成仏口決」「一生成仏抄」「生死一大事血脈抄」を拝読。

帰宅、二時。

十二月十日（日）

快晴

午前中、洗濯、その他雑用。

午後より、先生宅にお邪魔する。

「生死一大事血脈抄」の講義をして下さる。

夜遅くまで、種々指導賜る。

自分で、先生の指導が、わかったつもりで、なかなかわからぬ、無能を悔^{くや}しがる。

十二月十一日（月）

晴

「人生とは、闘争の異名なり」と、叫んだ哲人がいる。

正^{まさ}しく、人生は、戦争の如く、厳しく、目まぐるしい感を抱く。何も知らなかった少年時代が、懐かしい。だが、一步も、退くことは、許されぬ。

人生は、闘争だ。

だが、闘争の中にも、休息は必要だ。

その休息の中に、次の理想を浮かべることだ。

そして、その理想の中には、必ず、個人も、社会も、大善がある理想を忘れぬことだ。

更に、その理想を実現してゆく、色心の力を燃やしきることだ。

そのために、休息は、必要だ。

結局、人生は、究極まで闘わねばならぬ。

最高の理想たる、広宣流布の実現を目指して。

十二月十二日（火）

晴

此の大法を弘通せしむるの法には必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし。

（曾谷入道殿許御書）

人間の感情ほど、微妙なものはない。昨日まで、水魚の仲の親友も、今日は、腕を振るう敵となる。今朝まで、心から愛していた人が、夕べには、水の如く、心移り変わる。先

日まで、親しく会話していた客人も、一瞬の心の動揺にて、血相を変えて怒る。

我が胸変わらざれども、対境の恐ろしさ。

若人^{わこうど}は、周囲から、踏まれても、吹かれても、若芽が、黒色の大地より出ずるが如く、力強く、もくもくと起^たち上がっていかねばならぬ。若々しき、清浄なる生命力で、生ききらねばならぬ。

青年という、宇宙最高、最大の特権。且^{かつ}つ、信心ある、確信の青年にそれがなくては、魂のなきが如しだ。

社会は、混迷している。負けることは、悲しい。敗れゆくことは、不善の第一歩になる恐れあり。

帰宅、十一時。

十二月二十三日（土）

晴

本年も、あと一週間となる。

この一年、実に大悪の連続であつた。妙法は、此の大悪を、大善に変えてくれるわけだ。

最後の日まで、法刀を振りあげて戦い抜こう。先生のため、自己のため、学会のため、社のため、日本民衆のため、人類のために。

会社も、学会も、朝日が今、闇^{やみ}を蹴^けり、正^{まさ}に昇^あらんとしているのだ。

夜、M宅に仕事の用事でゆく。二十数名の人、集まっている。種々、説明をする。

帰宅、十一時三十分。

十二月二十七日（水）

快晴

晴天、爽^{さわ}やかな朝であつた。

身体の具合、良好。

一日中、思いきり動く。先生に対する非難、どうごうたり。私は、断然、戦う。

先生の大使命を、最も知っているのは、私だと確信する。先生の意中を、最も理解して

いるのは、私一人だと決意する。憤然として、命を張って、戦いきろう。

帰宅、一時二十分。就寝、三時。

十二月二十八日（木）

快晴

人生は、生涯、戦いの連続だ。ただ、その戦いが、何を目的としているか、何を根本としているかが、大事なことだと考える。

自己の戦いの目的が、微塵^{みじん}も悔いなければ、最大の幸福の戦いだ。今、全く悔いなきことを自覚している。なれば、莞爾^{かんじ}として、進軍あるのみだ。

戦いには、自分らしく、立派に活躍しきって終幕を飾りたい。勝敗は第二義として。

——而^{しか}し、その戦闘の、能力、実践力、確固、責務——これらを、完全に発揮しきってゆくことを、第一義とせねばならぬ。

ナポレオンは、戦勝した。次に、大敗、又戦勝。最後は、敗戦の英雄であった。

ペスタロッチは、五十年の人生の戦いは、完敗の如くであった。而し、最後は、遂に勝利の大教育者として飾った。

今、自分は、どのように戦い、どのように終幕を飾るかが重大問題だ。

所詮、しよせん題目に、生ききってゆく以外の、なにものもなからう。

帰宅、十一時三十分。就寝、一時三十分。

十二月三十一日(日)

快晴

午前中、社の掃除にゆく。

夕刻、帰宅。室の中を、少々掃除。へや。久しぶりにて、風呂に入る。帰り、すし屋で一人食事。

来年は、夜学に再び行きたい。

来年は、思うように勉強したい。

来年の、自分の運命は、どう動くか、考えられぬ。

来年も、又、私の師の、指導通り動くことが、私の人生の総てであらう。

二十二歳の、青春は、過ぎていった。あまたの歴史と思い出を、因果の二法と胸に刻んで。

就寝、十二時五十分。

〔十二月〕——十二月七日付けの日記にしるされている「嵐ヶ丘」は一九三九年製作のアメリカ映画（ウィリアム・ワイラー監督作品）である。エミリ・ブロンテの原作を格調高く映画化した文芸映画の傑作とされている。当時は戦争で映画輸入が中断していたため、戦前、戦中に作られた外国映画が盛んにロードショーとして公開された。ちなみにこの年に評判になった外国映画には「わが谷は緑なりき」（一九四一年製作）、「無防備都市」（一九四五年製作）などがある。

昭和二十五年には「星の流れに——こんな女にだれがした」という歌が流行した。池田名誉会長はこの歌にまつわるエピソードを『私の履歴書』に次のようにつづっている。戸田第二代会長と出かけたある日の帰路のことだった。「私はその歌詞をもじって、ふとユーモアをまじえながら『こんな男にだれがした』と歌ったのである。星が冷たくまたいたっていた美しい師走の夜だった。すると戸田先生が振り返られて『おれだよ』といって屈託なく笑われた。生きるか死ぬかのような、苦境の時である。私は『おれだよ』の一言に熱いものを感じた。どんな自分になろうと、私はついていた。感動の思いが五体を走った。師とは冬のあらしのように厳しく、また春風のように暖かくもあった」

昭和二十六年

——一九五一年——



一月六日（土）

壘

十一時三十分、先生宅。薄ら寒い正月。先生と共に、会社等の書類の整理。

一晚中、先生宅にて、種々お手伝い。及び指導、薰陶^{くんとう}を賜る。先生の、なみなみならぬ決意をひしひしと感ずる。

先生は、正成^{まさしげ}の如く、吾^われは、正行^{まさつら}の如くなり。奥様は、落涙。此の日の、感動、厳肅、感涙、使命、因縁、生き甲斐^{がい}は、生涯、忘るることはない。後継者は、私であることが決まった。

激越^{げきえつ}の、年も刻々と明けて来た。いかなる苦悩にも打ち勝ちて、男らしく、青年らしく、若人^{わこうど}らしく、本年も戦いきろう。

学会も、会社も、黎明^{れいめい}の年であれ。

一月七日（日）

曇

一日中、先生宅。

先生との勤行に、胸はずむ。昨日と同じく、種々、書類等の整理。

先生の悠然^{ゆうぜん}たる姿。余りにも大きい境涯。

未来、生涯、いかなる苦難が打ち続くとも、此の師に学んだ栄誉を、私は最高、最大の、幸福とする。

一日中、寒い日であった。

帰宅、十一時。御書を開くも、全く頭に入らず。

就寝、一時。

一月八日（月）

晴

汝^{なんじ}よ、汝は、いかにして、

そんなに、苦しむのか。

汝よ、汝は、いかにして、

そんなに、泣くのか。

汝よ、汝は、いかにして、

そんなに、悩むのか。

苦しむがよい。

若芽が、大地の香りを打ち破って、

伸びゆくために。

泣くがよい。

梅雨の、彼方^{かなた}の、太陽を仰ぎ見る日まで、

已^やむを得まい。

悩むがよい。

暗き、深夜を過ぎずして、

尊厳なる、曙^{あけぼの}を見ることが出来ぬ故に。

帰宅、十時。読書、ミルトン『失樂園』。

一月十日（水） 雪

春だ。

若人わこうどの、躍動、若人の闘魂の舞う春だ。

春だ。

若人の、苦悩の寒雪に、暖かな金風の吹く春だ。

生き生きとした自然、

福運を告げゆく季節、

苦楽の夢を飾りし舞台。

春だ。

緑も、花も、鳥も、思いきり生きてゆく。

哲人も微笑ほほえみ、黒き心にも、輝く太陽は差し込んでゆく。

春だ、自由なる春。

生命の歡び、若人の胸は躍る。

春は、間近だ。地球の春は。人類の春も。

一月十一日（木） 小雨

信 仰

信仰あるが故に、

永遠の、不可思議なる生命を、智解出来得る。

信仰あるが故に、

醜き生存競争の中にあつて、

淨くして、勝利の人生を闊歩なし得る。

信仰あるが故に、

鉄鎖と、火宅の人類の中にあつて、

我此土安穩の、自由の人生を、歩み得る。

信仰あるが故に、

諸行無常の夢に非ずして、

常樂我淨の、うつつの人生を、覚知出来得る。

信仰あるが故に、

矛盾と不合理に満ちた社会も、

因果の二法に、堂々と確信をもって前進出来得る。

信仰あるが故に、

大波にも、微動だにもせじ、

永久の大船に乗りし故に。

信仰あるが故に、

価値と、大善と、生命力と、

人間革命の幸福を、感受出来得る。

一月十二日（金）

曇

三日以来の、急性気管支炎、少々良好。

十時、先生のもとに訪問。種々、打ち合わせ。

十一時、奥様を激励、社にゆく。先生のみえぬ社は、面白からず。実に、淋しく、腑甲斐ない。

一日中、喉、頭が痛む。非常に疲れている模様。否、心配なことは、先生のお身体のことだ。

夕刻、W氏、K氏、O氏と会う。仕事のことにて。——現実の戦いは、勝つことだ。信心と、勇気とで、道を開き、勝つことだ。

一月十三日（土）

曇

なにともし思はぬ人の酒をのみてえいぬればあらぬ心出来り人に物をとらせばや・なんど思う心出来る、此れは一生慳貪にして餓鬼に墮つべきを其の人の酒の縁に菩薩の入りかはらせ給うなり。

（妙法比丘尼御返事）

七時起床、身体疲れてならぬ。

大文豪、ユゴー。

革命の大叙事詩、小説家ヴィクトル・ユゴーの『九十三年』完読。感多し。

我が国でも、彼の如き、大小説家の出現を、望んで止まぬ。

ああ、大哲理、大思想、大宗教に、立脚せし大文豪は、いつの日にか出でなん。

ああ、大情熱、大革命、大理想に、燃えたぎった、世紀の大文学者よ、一日も速やかに
出で来たれよ。

先生の御容体、良好の模様なれど、お瘦せになる。出社できるようになり、全く嬉し
い。

夜、鶴見方面に仕事。S氏宅、Y氏宅、T氏宅を訪問。

非常に寒い夜である。十二時帰宅。

一月十四日(日)

晴

画にかける鬼には心なけれどもおそろし、^{後妻}とわりを画にかけば我が夫をば・とらねども・そねまし、錦のしとねに蛇^{わろち}をおれるは服せんとも思はず、身^熱のあつきにあたたかなる^温風いとはし。

(妙法比丘尼御返事)

十時起床。非常に寒し。

歓喜寮に、二か月ぶりにて参詣する。思いきり、題目をあげる。不思議に、元氣が^い出で、闘魂が湧く。嬉しき^{うれ}哉^{かな}。——明日よりの戦闘の要素よ。——

夕、五時三十分、戸田先生宅着。

六時三十分、講義。

一、建治二年十二月、「松野殿御返事」。

一、学会の使命等のお話。

十時三十分、先生宅を失礼す。

本年中にて、最高に寒し。

一月十五日（月）

快晴

石は玉をふくむ故にくだかれ・鹿は皮肉の故に・殺され・魚はあぢはひある故に・とら
る・すいは羽ある故にやぶらる・女人は・みめかたち^美よければ必ずねたまる・此の意なる
べきか、日蓮は法華經の行者なる故に三種の強敵あつて種種の大難にあへり。

（弥源太殿御返事）

極寒――

「成人の日」自分は、二十三歳。

昨日の疲れ、重なり、身体の調子悪し。

十一時まで、床にいる。

お茶もなく、食物もなく、着る物もなく、来る人もなく、丁度^{ちようど}良いと思つて。――

午後、S氏宅、N氏宅、訪問。尚^{なお}、四時より、Y氏宅を訪問する。

帰宅、十時三十分。

一月十六日（火）

雪

若し善比丘^{ぜんびく}あつて法を壊^{やぶ}る者を見て置いて呵責^{かしやく}し駟遣^{くけん}し挙処^{こしよ}せずんば当^{まさ}に知るべし是の人は仏法の中の怨^{あだ}なり。

（涅槃經）

行学の二道を励み候べし云云。仏道修行を離れて、私達の眞の人生の価値はない。

会社を、初めて休む。先生のお姿を考えると、苦しい思い。

去年一年の、活動、実践を振り返ってみる。又、本年一年の目標、実践を思索してみ
る。蒲団^{ふとん}の中で。――

S氏、Y氏、T氏、M氏、夕刻見舞いに来てくれる。友は有り難し。

一、勤行、五座三座を実行の事。

一、寺院に、少なくとも月一回は参詣の事。

一月十七日（水）

快晴

総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思^{おもひ}を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然^{しか}も今日蓮が弘通する処の所詮^{しよせん}是なり、若^もし然^{しか}らば広宣流布の大願も叶うべき者か、剩^{あまつさ}え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し。

（生死一大事血脈抄）

暖かな陽気なれど、身体^{すこぶ}の具合頗る悪し。昨日の取り返しのため、午前中より仕事に奔走。S宅等に行く。

学会、戸田先生の「立正安国論」の講義開始。

青年の心は、いやが上にも高鳴る。

夜、荻窪^{おぎくぼ}に、O氏宅訪問、十二時まで、談合す。

帰り、先生宅に一泊させて戴く。^{いただ}K氏も、見えて居り、一泊してゆく。
歴史ある一日一日を、有意義に、吾が胸中に足跡として留めおこる。

一月十八日（木）

晴

女人となる事は物に随つて物を随える身なり夫たのしくば妻もさかふべし夫盗人ならば妻も盗人なるべし、是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と華と果と根と葉との如くにておはするぞかし、木にすむ虫は木を食・水にある魚は水をくらふ・芝かるれば蘭なく松さかうれば柏よろこぶ、草木すら是くの如し。
(兄弟抄)

冬来りなば、春遠からじ。

極寒の冬なれど、春近しを思えば、胸はときめく。いかなる苦難に遇つても、希望を決して捨ててはならぬ。

或る人、苦難の連続にあつて、春近しの画を、朝な夕な見、自らの激励とせしと聞く。
最後に、事実、一家の春訪れ、その絵を、宝としたと。——況や、妙法を受持せし人を

や。——何に況や、妙法を護持せる青年においてをや。——

人生は、人間は、生きねばならぬ。強く——強く——。

大東亞戦に、若き花と散った青年達よ。それを思うと、今、同じ青年として、生きてい
ることが感謝にたえぬ。

銃を持ち、戦場に活躍した若人の心境よ。操縦桿を握り、敵機と闘った、青年の心境
よ。

何処の国でも、青年だけは、大事にせねばならぬ。未来の祖国の為に。未来の人類の為
に。

二十代で死すも、死の一瞬は、刹那なり。

五十代、八十代で死すも、同じく死は一瞬刹那なり。

悔いなき人生を生きるとは、実に難しい。更に、立派に死すことは、もっと難しい。

仏法以外に、解決の途なきを沁々感ずるなり。

人生は劇か。人生は、厳肅なるものか。

就寝、十一時三十分。

一月十九日（金）

曇

先生、十時頃出社。一日中、暖かな日であった。

折伏をする。必ず批判がある。不思議なくらいだ。

慢じているという人あり。非常識だと批判する人あり。顔色を変えて怒る人あり。

法華の慢は、許された慢である。即ち、妙法流布の、信念、確信の姿をいうなり。非常識云々たりといえども、求道の姿は、虚飾きよしよくの常識にては、計ることは出来得ぬなり。

顔色をなして怒るは、これだと思う人まで。何と、理性と、信念と、包容力のなきかを思うばかりなり。

青年よ、何といわれても進め。折伏だ。大聖人の弟子らしく。戸田先生の門下らしく。折伏だ。折伏だ。最高の男子の闘いは。

K宅に、夜伺^{うかが}う。

帰宅、十一時。

燃え上がる信仰を、生涯続けゆきたいものだ。

一月二十日（土） 小雨

夫れ老狐^{ろうこ}は塚をあとにせず白亀^{はくき}は毛宝^{もうほう}が恩をほう^報ず畜生すらかくのごとしいわうや人倫をや。

（報恩抄）

阿育王……仏滅後一百年の頃、印度^{インド}の王として、大いに仏教の弘布^{くふ}に尽くす。

先生の健康全く優れず。胸臆^{きょうおく}より心配す。

自分も、疲れ、建設的意思の動揺あつては絶対にならぬと叱責あり。

今夜ほど、先生のことを思考した夜はない。

明日は先生の講義。

一月二十一日(日)

晴

六時、本部にて講義。

「諸法実相抄」

学会ノ使命、折伏法ノ徹底アリ。

先生のお身体を心配する。

先生の側近として、軽率な言語を反省、猛省する。

一、師弟ノ道ヲ、学会永遠ニ、留メオクコト

一、コノ三年ニシテ、学会、社ノ基礎ヲ完壁ニスベキコト^{かんぺき}

大寒に入り、特に寒き日であつた。

水仙の花の高さの日影かな 智月

一月二十二日（月） 快晴

つるぎ剣なんども・すすま不進ざる人のためには用る事なし、法華經の劍は信心のけ勇なげなる人こそ用る事なれ鬼に・かな鉄棒ぼうたるべし。

（經王殿御返事）

身体すこぶの調子、頗る悪し。

寒風身しに沁み込む。

午後より、出張。Y氏宅にて、二時間ほど、身体を休ませて貰う。熱下がらず。夕刻、帰社。種々先生より、指導、叱責あり。頭が痛む。謗ほうぼう法か――。

ただ一人、四畳半にて休む。明日も又、寒かろう。心身共に――。
帰宅、十一時。就寝、一時。

一月二十三日（火）

快晴

八時、起床。天気晴朗。

おお急ぎで出社。——身体の具合悪し。健康を害しては、戦いは出来ぬ。健康であることが、第一の闘いだ。体質を変えてゆくのは、丈夫になるのは、当然、信心以外にはない。なんでもいいから頑張ろう。——

午後、神奈川方面に出張。

帰り、社にゆかず、真っすぐ帰宅。

就寝、十時少々前。

一月二十四日（水）

晴

会社を休む。発熱四十度。

一日中高熱にうなされる。

午後より、K君来室——。看病して呉れる。

社のことを思うと、胸が痛む。

頼りになるのは、汝自身である。所詮、信仰以外には無い。本日ほど、信仰の偉大さを身に感じた日はない。

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經。

一、来年より、大折伏を断行の事。

一、御書精読の事。

一、「御義口伝」「六卷抄」拝読の事。

一、事業面の確立を致すべき事。

一月二十五日（木） 快晴

天気晴朗——。今日も一日、床にいる。ぼんやりすごしてしまった。K君、泊まって、看病して呉れる。済まぬ。

夕刻、T女史、結婚問題で相談に来る。賛成する。嬉しそうな様子であつた。不幸な人々が、皆、幸福になつて行く。——妙法の力を、他人の姿を、冷静にみていればわかるものだ。

雑誌をみながら、一晚送る。面白からず。

一月二十六日（金）

快晴

事業の失敗。青年の純情なる意思。将来の光輝ある大望への汚点。友人達の曲解。知人等の批判。エネルギーの消耗。一念の嵐。あらし——

人間の心は、複雑なものだ。強く、遅くたぐま生きてゆくのは、大変な事だ。特に、正しき信念を持して生きゆく事においてをや。

本有常住。因果俱時。宿命。宿習。瞬間。この生命の連続の实在を思う時、自らの、無能に泣く。強き、信仰の力を持す以外に、何ものもないことを知るなり。

戦闘。人生劇場。戦勝。敗北。努力。諦観^{ていかん}。地獄。夢。仮の宿。善悪。誠実。虚偽。

様々な^{さまざま}、人生航路がある。所詮^{しよせん}は、御本尊に南無し奉る以外に、人間本性の、正しき生き方はないものか。――

一月二十七日（土）

晴

妙覚Ⅱ仏の悟りは、究竟^{くきやう}円満にして思議し難き故に妙覚という。故に妙覚の二字は常に仏を顕わす。

声高らかに題目を唱え、出勤。暖かな日であった。

午後、鶴見にS氏を訪う。

三時、先生と、新宿のKにてお会いする。種々、未来の事業の打ち合わせ。――

七時、N氏等と夕食を共にする。帰りN宅に寄る。九時三十分帰る。

一月二十八日（日）

晴

我が頭は父母の頭・我が足は父母の足・我が十指は父母の十指・我が口は父母の口なり、譬えば種子たねと菓子このみと身と影との如し教主釈尊しやうだいによ もつけんそんじやの成道は淨飯じやうはん・摩耶まやの得道・吉占きつせん師子しし・青提女・目犍尊めけんそん者は同時の成仏なり。

(忘持経事)

九時三十分、起床。暖かな、日曜日である。

B 夫妻、S 君来る。早朝の来客には困る。

朝食、昼食を十二時に並食して、S 氏宅に仕事にゆく。S 氏、日曜日のため、ゆつくり談合でき得る。

七時二十分——先生宅の講義。遅れてしまい叱責あり。全く自分が悪いに決まっている。

「総在一念抄」完了。偉大なる法門に、ただ、南無あるのみ。

帰宅、十一時。種々、思うこと多し。

一月二十九日（月）

快晴

悪夢のせいか、寝起きより、疲れしきり。

一日中、暖かな日和ひよりであつた。

先生より、厳しい指導を賜る。自己の信心の欠点、ほぼわかつて来る。

折伏だ。広宣流布のため、全生命を打ち込んで、活躍してゆくことだ。観念論、思索のみでは、何もならぬ。青年は、唯ただ、実践、実行が、生命なのだ。――

信仰が、吾わが人生の根本である事。

清純なる信心が、生活の根本である事。

弱き自己。意気地なき自分。悩み苦しむ自己。所詮しよせん、題目以外に解決の途は、絶対にな
る。

信心の究極は、己証を感得することに有るか。――

夜、N宅、S宅を訪問。

一月三十日（火）

小雨

汝^{なんじ}自身を知ることとは、大変なことである。

苦悩も、失敗も、自身を知らぬことから、出発するのもかも知れぬ。

運命、宿命、性格、全く、自身をどうしようもない場合がある。自分もしっかりせねばなるまい。良き環境も大事だ。力ある指導者、教師も大切になる。だが、やっぱり、大御本尊と、信心によるほかはなくなって来る。

敵多くして、立派な人がいると思う。敵多くして、悪人である場合も考えられる。

味方多くして、立派な人がいると思う。味方多くして、八方美人の、人間の屑^{くず}である場合も考えられる。

人間の生き方を考える。

就寝、十一時五十分。

一月三十一日（水）

小雨

今年も、早一か月を送る。早いものだ。今日は、永久に、今日一日しかない。過去、未来にわたり、今、一瞬しかなく、消えてゆく。――

太平洋の広さの如き、境涯で、一生を送りたいものだ。

太平洋の怒濤どとうの如き、生命力で、一生を戦たたかいたいものだ。

太平洋の黒潮の如き、情熱で、一生を潑刺はつらつと送りたいものだ。

帰宅、十一時三十分。

〔二月〕――昭和二十六年は東西冷戦が深刻化するなかで明けた。マッカーサー連合軍総司令官は元日の年頭声明で集団安全保障を強調して日本の再武装化を示唆しきしている。また、朝鮮戦争も激化し、一月四日には北朝鮮軍が京城ソウルを占領して攻勢に出るなど、緊迫した国際情勢下での年明け

となった。一方、三日にはNHKが第一回「紅白歌合戦」をスタジオから放送、五日、歌舞伎座が復興、開場するなど、国民生活には落ち着きとゆとりもうかがえるようになった。

十三日の日記には日本の文学について述べられているが、戦後文学の状況は、永井荷風、谷崎潤一郎らの巨匠が復活した一方で、革新的な手法と文体を採用した「近代文学」をはじめとして「群像」「文芸」「人間」「新日本文学」など、多くの雑誌が創刊され、新しい世代の台頭が目立っていた。二十六年当時の話題作としては『野火』（大岡昇平）、『炎の人』（三好十郎）、『禁色』（三島由紀夫）、『真空地帯』（野間宏）などがある。

当時の政界は自由党、民主党、社会党の三党並立時代である。十九日から二十日にかけて一斉に党大会が開催され、一連の大会で決まった各党首脳は、自由党・吉田茂総裁、佐藤栄作幹事長、民主党・苫米地義郎最高委員長、三木武夫幹事長、社会党・鈴木茂三郎委員長、浅沼稻次郎書記長の顔ぶれであった。当時の政財界の論争点は「再軍備」問題で、各政党の大会では党内各派の動議や修正案が続出するなど、白熱した論議が繰り広げられた。

一月二十五日、対日講和を進めるため、トルーマン米大統領の特使としてジョン・フォスター・ダレス一行が来日し、吉田首相と会談するなど、日本の主権回復の道をめぐって各界の指導者と会見した。ダレス特使の来日は、終戦以来続いていた占領状態がいよいよ終わりに近づき、日本の独立・主権回復が迫ってきたことを示す象徴的な出来事であり、それ以来講和条約締結のあり方をめぐって国内の論議を呼ぶものとなった。

占領下でまだ主権の回復を果たしていなかった当時の日本は、国連のどの機関にも加盟が認められていなかった。しかし一月末、ユネスコ（国連教育科学文化機関）への日本政府の加入申請が同事務局に受理され、ユネスコ加盟への道が開かれることになった。このことは、日本が次第に国際社会における「市民権」を回復し始めてきたことを物語っているといえよう。

二月一日（木）

晴

天候が良いと、心まで明るい感じた。

今日も、懸命に、与えられた道を、真一文字に進んでゆこう。公私共に。――

洋服が破れ、うまく縫えぬので困る。

就寝、十一時二十分。

二月二日（金）

快晴

信仰――これほど、深遠にして、且つ、尊く、力強い実践はない。

忠言耳に逆うのか――良薬口に苦しなのか――折伏をすると、必ず反対する。今、信心している人々は、本当に、福運に満ち、絶対に幸福者になることは間違いないだろう。

今、信心している人々は、先覚者だ。大聖人様の御賞賛も間違いなからう。

戸田先生——「御義口伝」講義あり。

暖かな夜である。感傷的になる。

十二時、夢路ゆめじの旅に入る。

風、弥々いよいよ強し。

明日も頑張ろう。元気で。

二月三日（土）

晴

身体の具合悪し。なかなか起きられぬので困る。

冬に、身を鍛え、心を鍛えん。

次に、暖陽だんようの、春が待っている。

桜花の舞いに、夢散らすなきを。

宿願つとめの使命、尽くしゆく道に、

心しゆかん、今日の目覚めざめを。

諸經多しと雖いえども未だ両眼ふために触れず法華の中に諸經を破るの文之有りと雖も諸經の裏うらに法華を破るの文全く之無し、所詮しよせん已今当の三説を以て教法の方便を破は摧さいするは更に日蓮聖人の莠言ゆうげんに非ず皆是れ釈尊出世の金口なり。

(四十九院申状)

帰宅、十時三十分。就寝、一時。

二月四日(日) 快晴

珍しきほど、暖かな良い天氣が続く。

一、月例青年部会、欠席。心重し。

一、N教諭を訪問、教育論を十時まで論ず。

一、今日より、健康のため、寝ざわに、ウイスキーを少々服すことにする。

疲れた。――

同じはずなれども今生のはぢは・もののかずならず・ただ後生ごしやうのはぢこそ大切なれ、
獄卒ごくそつ・だつえば懸衣翁懸 衣 婆 けんね おうが三途河のはたにて・いしやうをはがん時おぼしめを思食して法華經の道場
へまいり給うべし、法華經は後生のはぢをかくす衣なり、經に云く「裸者の衣を得たるが
如し」云云。

(寂日房御書)

帰宅、十二時。就寝、一時三十分。

二月五日(月)

快晴

朝、外食券食堂で、二食分食う。不節制な生活がつづく。いつも、自分で、自分の身体
を悪くしているようなものだ。

業因、業果、善因、善果、この理法は、誰よりも悉くことごと自己自身が知悉ちしつしているものだ。
所詮しよせん、誰人を責めるものでもない。誰人の責任でもない。――

夜、先生宅。「三世諸仏総勘文教相廃立」の権実相對終了す。実に難しい。

講義後、先生より、種々叱責あり。結局、自分自身の生意氣、慢心を戒めて下さるのだと強く反省。

帰宅、十一時。『頼朝』を読み終わる。

先生のが、頭から離れぬ。

信仰。人間革命。広宣流布。起^たち上^あがれ。

二月六日（火）

晴

一日中、機嫌悪し。寝不足か――。

一日中、仕事の能率上がらず。いやな一日であった。

夕方、自宅にて座談会を催す。新人、一人も来たらず。出席者、K氏、T氏、H氏のみ。誠に淋^{さび}しく、――。

感情の激しい人がある。理性的な人がある。どちらが幸福か――。

自分自身に、十年先を頑張ろうと、心にいいきかせ寝ることにする。
時に、十二時三十分。

二月七日（水）

快晴

七時三十分、起床。三座終え、勇んで出勤。

事業の前進にぶる。その原因は何か。自己の前進、成長のないことに尽きる。

夕刻、Nさん等と会食。計六百円也の支払いとなる。実に痛い極みであった。

帰宅、十一時二十分。寒い。

二月八日（木）

快晴

青年部の、集合——小岩、I宅。七時、宗教革命の若人^{わこうど}十四名、勇躍、師の下^{もと}に集まる。

厳肅たり。躍動たり。今夜の歴史的会合、実に三時間以上に及ぶ。皆、真剣なり。

最後、「三大秘法稟承事」の大講義に、猛然たる心となれり。末法、化儀の広宣流布の定義を示唆し下さる。

次に『永遠の都』の感想発表を、一名ずつ行う。

吾人は、革命には、大別して三種類あり。即ち、政治革命、経済革命、宗教革命なりと。

いま此の書は、明治維新の革命と同じく、政治革命なりと思うと。共產革命は、経済革命なりと。吾人等の断行せんとする革命は、それらより本源的な、宗教革命なりと。即ち、真実の平和革命であり、無血革命なりと。大意の感想をのべたり。

今日の、十四名が、十年後、昭和三十六年二月八日には、どのように存在して居ることか。祈る、一人も落伍なきことを。健在にて、健闘して居ることを。――

寒き道、寒き車中を、U氏等と共に、自宅に。

帰宅、十二時四十分。

二月十日（土）

晴

確信——常に、確信、確信と云う。そして書く。そして論ずる。而し、確固たる確信は、到底掴めぬものである。幾度か、死線を越え、苦悩の大河を渡らねばならぬものか。

信心——これこそ、唯一の確信に、生き抜ける途なのだ。結局、勇猛精進あるところに、真の確信は、掴めて来ることであらうか。

二月十一日（日）

晴

十時、起床。昨日の疲労やや抜ける。B君に起こされる。良い天気が続く。食堂に行き、のんびりと朝食兼昼食を済ます。一人ものは呑気なものだ。

十二時過ぎ、歡喜寮にゆく。折伏した、M氏、U氏に約束破られる。悩む。吾人は而し、若いのだ。卑屈になつてはならぬ。

一切、大御本尊様の照覧があると思えば、実に、人生は明るい。その反対、又厳しい。

六時、戸田先生宅に伺う。

「三世諸仏総勘文教相廃立」第二段階に進む。益々、先生と共に、広宣流布に邁進しゆくことを決意する。

先生の、お誕生日であつた。先生に、御挨拶しなかつたことを淋しく考える。帰宅、十一時少々前。

二月十二日（月）

晴

先生に嘘をつく。一日中いやな気持ちであつた。心奥よりお詫び申し上げます。身体の場合、余りにも悪く、苦悩の叫びであつたか。小生の弱さを、意気地なさを、情けなく悲

しむ。

午後、神奈川にゆき、引き続いて、小岩N氏宅訪問。N君等三人で種々懇談。

詮^{せん}ずるところ、自己の完成しかない。妙法に照らされ、恥じる所なき自己。何ものにも動揺せぬ自己。

一、折伏を常になす事。

自行化他の、信心なれば。

一、勤行を怠らざる事。

一切の生活、活動の原動力なれば。

一、建設、成長を忘れざる事。

若人^{わこうど}の、価値なれば。

二月十三日（火）

晴

二月も、早中旬。S宅に伺^{うかが}う。オーシャン・ウイスキーを、一本買ってゆく。

M宅で座談会のため、早く仕事を切りあげる。京浜蒲田駅で、I氏達を五十分待つ。遂に來たらず。折伏の難しさを、つくづく知る。

座談会後、K氏とY女史と、共に、小生へ、反省せよとの忠言ある。事業と信仰とのことについて。Kさんまでが、私の立場、心奥をば知解^{ちげ}して貰えぬかと思うと、情けない。Y女史なぞに於^{おい}ては言を俟^またず。——先輩にへつらい、盲目にして生意氣な女性よ。——断じて、私の現在が課されている行動に、悔いはない。絶対に、吾^わが道を行くべし。自分分は、戸田先生の弟子である。戸田先生を、中心としての一切の活動であり使命であり、実践をしているのだ。

一時三十分、帰宅。Y君来ている。二時まで語り、帰る。良い奴だ。同志だ。——

二月十四日（水） 雪

起床、八時。三座で、大急ぎ出勤。

天氣の様子がおかしくなる。二時まで在社。先生と、重要談合これ有り。御自宅の担保の事。明日まで解決せねば取られてしまふとの事。小生必ず解決させねばならぬ。題目だ。題目の力で。

本年三度目の雪、紛々ふんぷんと降り始む。複雑混乱の頭も、社会の泥沼の戦鬪の心身も、清く流して貰いたい雪だ。

雪の如き信心と云う御金言が浮かんで来た。而ししか、寝不足のためか、夢を見ながら歩いている様だった。

夜、Y氏宅にゆく。良く共に頑張つて呉れた。感謝にたえない。生涯、心に留めてゆこう、此の一家を。——可哀想な、路傍ろぼうの石の如き一家よ。——私は思う。立派に活躍して勇んでいる人より、この一家こそ、埋うずもれた尊き同志なりと。——心から愛する。心から信賴する。——

七時三十分、帰宅。何かとぼんやり思念する。要は生命力を落としてはならぬ。断じて、負けてはならぬ。

二月十五日（木）

雪

十五年ぶりの大雪となる。国電も不通。

一面、見事なる銀世界を作り上げる。

昨日の用件解決のため、休社するわけにいかず。電話にて種々打ち合わせ。十二時より、O氏宅訪問。

一日一日、良く反省して進もう。自分の悪しき事は、充分反省せねばならぬ。決して、慢心が有ってはいけぬ。――

青年部の十四人の会合――七時、小岩、I宅に集合。されど、先生お見えにならず、淋しき限りなり。「諸法実相抄」の読み合わせをいたす。終了、九時二十分。Y君、吾^わが家に来る。吾が同志だ。

一、Tさんを精進成長せしむる事

一、自己の反省（半年間の）

二月十六日（金）

曇

勤行三座にて、大急ぎ出勤。性急な性分、人生だ。――

一日中、小岩方面に仕事にゆく。

「御義口伝」講義にゆけず、残念なり。Kさんに会い度し。――種々打ち合わせたまわる。

人間は、どうして、こんなに愚かなのか？

人間は、どうして、こんなに不幸なのか？

人間は、どうして、こんなに増上慢なのか？

人間は、どうして、こんなに利己主義に出来ているのか？

人生の目的、因果俱時、幸福、――

南無妙法蓮華經

帰宅、十一時。

二月十八日（日）

晴

戸田先生宅。「三世諸仏総勘文教相廃立」講義有り。

五百塵点劫ノ当初・凡夫ニテオワセシ時云云。
そのかみ

大聖人の肝心なることを承る。
うけたまわ

実力が欲しい。力が欲しい。頭脳明晰めいせきになりたい。

一、二十五歳までに、広宣流布に生命を捧げられる用意をなす事。

一、二十五歳までに、指導力を養い、先生の御意志を継げる決意を固める事。

十時三十分、帰宅。Y君来る。

二月十九日（月）

晴

六時四十五分、起床。Y君と、大急ぎで、大森駅にゆく。早いと、電車は、すいてい

る。だが寒くてたまらぬ。

午前中、早稲田にO氏を訪問。午後、大田区方面に、Yさんと共に回る。

一日一日の仕事を、御本尊に、胸奥きょうおくから、願ねがいゆくことに尽きる。

南無妙法蓮華經

帰宅、十時三十分。早目に休もう。

二月二十日（火）

晴

暖かな一日であつた。

身体の具合、少々良好。題目の力だ。

嬉しいことだ。色心不二である故に、身体健全にならぬ道理はない訳だ。

信仰の絶対性。——正しいことだ。今の宗教界は、不純となつてしまっている。

世界の動乱は、限りなく展開されて来る。共産勢力の進展は如何いかに。宗教否定の、この力に對し、いかに処すべきや。その唯一の解決は、不惜身命、勇猛精進の、地涌の菩薩の突

進に尽きるのみ。――

真の地涌の菩薩、幾人有りや。――

「立正安国論」「三大秘法抄」をば、血涙の流れ出るまで、色読せねばならぬ。

使命を痛感せり。広宣流布の旗頭は――。

生涯、永久に、広布の人材を育て上げることこそ重大なり。重大なり。

人材を見つけるには、自己が慧眼えげんでなくてはならぬ。そは、信心の眼でなければならぬ。

人材を作り上げるには、長き時間、期間を要す。そは、信心の力で、境智冥合きょうちみょうごうさせゆく道しかあらず。

帰宅、十時四十分。

二月二十一日（水）

晴

今日も元気で戦おう。

今日も元気で進もう。

若いのだ。若いのだ。

春だ。春だ。

もうじき、希望に燃える春が来る。

大志も、情熱も、草木と共に伸びてゆく。

春だ。春だ。

生きることの楽しさを知らせる。――

所詮、信ずるものは、大御本尊様也。永久不変の大真理也。そして、自己自身也。その自己の正報ありて、依報の同志、強く、遅^{たぐま}しく続かんや。――

若人^{わこうど}よ、起^たて。若人よ、進め。若人よ、行け。前に、前へ。岩をも、怒濤^{どとう}をも恐れずに。

ロッシの如く。ブルーノの如く。ナポレオンの如く。アレキサンダーの如く。ホイットマンの如く。ダンテの如く。

帰宅、十一時。就寝、一時。

二月二十二日（木）

小雨

新宿、先生の社にて、青年部会。

集合、十四名。「諸法実相抄」の講義。

先生より、法華經第一の巻と、方便品第二との関係をはじめ、数度の質問有り。

小生の、不勉強に心痛む。先輩を見習わねばならぬ。

先生の、弟子に対する訓練、次第に深く感ずる。宿命の代表の弟子も吾れなりと、心苦しむ。皆で、この師の遺業を立派に果たしたいものだ。今は、罵詈雑言倒されてゐる師、学会。而し、吾等の成長せる、十年後、二十年後を見るべしと、心奥に、岩の如く感情が湧く。

吾等は、宗教革命の闘士だ。

そして、社会革命達成の先駆者だ。

吾等は、大思想流布の闘士だ。

そして、世界平和の樹立者だ。

吾等は、民衆救済の闘士だ。

そして、民族を愛する如来の使いだ。

所以は、
ゆえん

大仏法の真髓が流布される秋だからだ。
とき

見濁、衆生濁、命濁の根本解決法を、持しているからだ。
じ

民衆救済の大指導原理があるからだ。

伸びゆく民族、滅びゆく民族の根本解決法を覚知しているからだ。

二月二十三日（金） 雨

雨しきり。ゆっくり休む。身体の具合良好となる。

夕刻、どしゃぶりの中を、先生宅にゆく。講義なし。永遠の生命について、宿題あり。
全く困る、難しくて。

帰り、I兄、吾が室に泊まる。寒いので、風邪を引かぬよう、申す。
十二時、一つ蒲団に休む。

二月二十四日（土）

曇

暖かな一日となる。春が一步一步、近づいて来たのだ。
若人の胸はふくらむべきだ。楽しくとも、苦しくとも。

『三国志』全巻、読み終わる。

構想大なり。人心の機微よく画けり。大戦乱に、活躍せし、武将、政治家の一大絵巻の感あり。策あり、恋あり、涙あり、意気あり、力あり、教訓多々なり。

建設、革命の青年、劉備玄德の姿——。

頭が痛む。疲れか。謗法であってはならぬ。吾が梶谷支部のことを考える。一人、Kさんの奮闘に頭が下がる。——

就寝、十二時。

二月二十六日（月）

小雨

春爛漫——晴れわたる桃花の季節。

若き、革命児達の季節に似たり。

三月、四月、五月と天地は開く。

若き、革命児達と共に生いたち咲き薫れ。

吾等、君達、共に恩師の御教えを護る名誉の花ぞ。

若き、革命児達よ、

永久に、名を残す、花と咲き、散ってゆこうぞ。

楽しき者、苦しき者、明るい人、悲しい人、富める同志、悩める同志、感激に生ききつ
ている革命児、涙で生ききっている革命児。

共に、妙法の使徒だ。大聖哲の子供だ。恩師の弟子だ。常に、励ましあって、目的達成

まで、戦うのだ。進むのだ。頑張るのだ。不退転でゆくのだ。

二月二十八日（水） 小雨

給料日なので、菓子等を買って、夕刻、Y宅訪問。――

十数人の人々集まっている。仕事のことにて。皆して、菓子等を食しながら、雑談。楽しそうに小二時間過ごすことが出来る。嬉しいことだ。

いかなる戦乱、動乱、激乱の時代、社会にあっても、大御本尊を、疑わず、絶対の大功德あると信じて進むことだ。それだけ出来得れば、立派な人であり、大信者であると思う。

帰宅、十時四十分。二月も過ぎた。

三月と聞くと、何となく、暖温を感じるものだ。

〔二月〕——二月八日の日記に見られるように、理事長を辞された戸田第二代会長は、事業が苦境下でありながらも、後事を託す青年たちの訓育を全魂込めて行っていた。御書を拝し、また、小説をテキストにしながら青年たちに広宣流布の構想と丈夫の精神を教えるこの会合は、昭和二十五年秋から二十六年にかけて約半年間続けられた。最大の逆境時に行われたこの会合が、やがて昭和二十六年の青年部結成の核をつくり、二十七年に発足した水滸会の淵源となった。

戦後、日本は航空事業はもとより、飛行機を持つことも操縦することも連合国の極東委員会から一切禁じられてきた。しかし二月五日、運輸省は、条件つきで日本資本による航空事業を許可するとの連合軍総司令部覚書にもとづき、国内航空の開設に向けて準備を始めていることを明らかにした。それによると飛行機も操縦士もすべて外国から借り入れるというものではあったが、ともかく日本人による国内航空事業はこの時から再建されることになった。

このころになると、戦後の激しいインフレも収まりつつあったが、二月十七日、当時の物価に対応するため大蔵省が五十円札の発行を準備していることが伝えられた。図柄は表に第七代日銀総裁・高橋是清の肖像を配したもので、これは同年十二月から市中に出回った。なお、二十六年当時の物価は、白米十^キ・五百五十八円、ビール一本・百二十一円、入浴料大人・十一円、新聞一カ月・百二十四円、くつ下綿一足・七十二円などであった。

一九四七年にノーベル文学賞を受けたフランスの文学者アンドレ・ジードが、二月十九日死去した。ジードは『狭き門』『背徳者』『法王庁の抜穴』などの小説のほか、音楽、美術批評など幅広い分野で活躍していた。そのほか当時広く読まれた外国文学にはゲオルギウの『二十五時』、カミュの『異邦人』、スタインベックの『気まぐれバス』などがある。とくに『異邦人』は、広津和郎と中村光夫の論争が話題を呼び、ベストセラーとなった。

原爆被害調査の公表が許可されたのもこの月であった。日本の科学者によって、被爆直後から

三年がかりで行われてきた広島・長崎の原爆被害調査は、戦後久しく連合軍総司令部の意向で公表が禁じられてきたが、ようやく公表を許可され、報告書が刊行される運びとなった。この調査は物理学者の仁科芳雄博士を中心とする学界の専門家によるもので、その調査資料の発表によって、それまでベールに隠されていた原爆被害の実態が次第に明るみになることになった。

三月一日（木） 雨

明るい三月に入った。

仏法ハ勝負デアル。勝つか、負けるかとは、幸福になるか、不幸になるかということか。建設、成長しているか、退歩し破壊してゆくかということか。

今月も、自分に勝ち、境遇に勝ち、社会への前進の勝利をしるしたい。

青年期に、何とか、本を出版したい。大論文を作り上げておきたい。

一、仏法根底による、政治観、科学観、教育観等。

一、信仰の絶対必要性を知らしめる、生命論等。

一、広宣流布し、活躍しゆく学会の歴史等。——大意。

帰宅、十一時。

三月二日（金） 曇

暖春。花は咲き、希望にときめく季節、陽気。溢れる生命力で、自己の建設に邁進した
いものだ。そして、明朗快活に、隣人を救っていききたいものだ。

先生より「仏法必ず、王法に勝れり」との宣言あり。その確証を、吾れ確信せりとの、
宣言の意であられた。

夕刻、「御義口伝」の講義に出席。尚「顕仏未来記」の御書講義も含まる。「御義口伝」
は世尊大恩の事。

帰り、同志と語りゆく。同志と語るは、最大の喜びなり。吾等、革命児として。

久しぶりに、バーバーにゆく。

帰宅、十時二十分。

三月三日（土）

曇

私は今、幸福感に満ちている。これで良いのかと思うぐらいである。全てが一段と、成就し、不思議に満足して来た。

苦難の嵐に^{あらし}たち向かった方が、青年は生き甲斐^{がい}が有る場合が多いものだ。次の嵐に再び向かって進もう。それが、建設しゆく青年の、勇敢さと、情熱の発露だ。

民主主義ということを考える。今、叫ばれている民主主義に、どうも矛盾^{むじゆん}多きを感じてならぬ。真の民主主義とは、いかにして出来得るものかを、漠然^{ばくぜん}と考える。――

『トルストイ全集』四冊目を、読み終わる。

帰宅、十時。就寝、一時三十分。

三月四日(日)

快晴

青年部会。

集合、男女約三十名。元気あれど、何となく空まわりの感あり。

一、対外的ニ更ニ勇敢ナル活動ヲ展開ノ事。

一、革命ノ闘魂ト、青年指導者トシテノ養成。

一、学会ノ先驅ヲ進ム、青年部ノ自覚ト実践ト荣誉等ヲ持セシメル事。

右、吾人^{ごじん}ハ主張シタイ。

終了、八時十分。帰り、神田日活で、久しぶりに映画を観^みる。

三月五日(月)

晴

夜、先生宅にて講義。「三世諸仏総勘文抄」終了す。終わって、十界論、空觀論の説明

をくわしく承^{うけたまわ}る。覺者の大理論に、驚嘆あるのみ。

定期券を失い困る。予算なく、当分、切符を毎朝買うことにする。

三月六日（火） 雨

食を有情に施すものは長寿の報をまねき、人の食を奪うものは短命の報をうく。衣を人にほどこさぬ者は世々所生に裸形^{らぎよう}の報をかんず^感。

（法衣書）

神奈川関係の支部にて「諸法実相抄」「松野殿御返事」の読み合わせをする。教学を知ってゆくことは、信心を更に増しゆくものだ。実に嬉^{うれ}しき限りだ。

『モンテ・クリスト伯』を読む。思うこと多し。

帰宅、十一時。

三月七日（水） 雨

一日一日、感謝と感激に満つ。大御本尊様の偉大なる功德が次第に了解できて来る。甚深無量なれば、更に精進あるのみ。

信心の、この実証、この事実、この体験、誰人か知らん。これ程、巖然たる、生命、生活に体得せし法理やあるべし。この力、現象を、否定するな。科学を否定するに通ぜん。

「聖愚問答抄」に曰く、

聖人云く人の心は水の器にしたがふが如く物の性は月の波に動くに似たり、故に汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻^{ひるが}へさん魔来り鬼来るとも騒乱^{そうらん}する事なかれ、夫れ天魔は仏法をにくむ外道は内道をきらふ。

明日の構想を考えつつ、床につく。零時三十分。――

三月八日（木） 晴

私共は最高に幸福者である。師の下^{もと}に、慈愛深く育てられている故に。御期待に応え

て、成長せねばならぬ。——責任と義務がある。

一、信仰を確立しゆくこと。

二、社を、立派に確立しゆくこと。

三、先生の弟子、後継として、力を養いゆくこと。

夜、A宅の座談会に出席。多数出席者あり。賑やかなれど、自分は、何となく淋しい気持ちで帰る。一人。——

「木絵三像開眼之事」

人の声を出すに二つあり、一には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす是は随他意ずいたいの声、自身の思を声にあらはす事ありされば意が声とあらはる意は心法・声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて心を知る色法が心法を顕すなり、色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意みこころあらはれて法華の文字となれり、文字變じて又仏の御意となる、されば法華經をよませ給はむ人は文字と思食事おぼしめすなかれすなわち仏の御意みこころなり。

一、一日一日、反省を怠らざる事。その根本は、信心のほかなきを知る事。
一、生命力が強ければ、いかなる境遇にても、楽しきこと。その根本は、信仰のほかなきを知る事。

希望、

- 一、学会の組織を、速やかに新組織化の要あり。
- 二、会社の人事を、抜本的に改革すべき必要あり。

三月十一日(日)

晴

七時、起床。急いで食事にゆき、教育会館に飛ぶ。創価学会の総会である。恩師戸田先生が、元気で出席なされたことは、私の最大の喜びであった。

皆は知らぬ。而し、吾人は、いかほど先生を陰でお護りして来たことか。吾れは泣く。吾れは嬉し。先生の師子吼に。

「諫曉八幡抄」をお引きになられる。勉強せねばならぬ。

集合人員、数百名か。――

三月十二日（月）

曇

健康再び勝れず。苦しい。大事にせねば。――

七時、常泉寺にゆく。先生の友人F氏の母の三回忌との事。先生と共に、追善法要、供養に出席。場内満員なり。寒き風が吹きすさぶ。風速十七、八米メートルとの事。

帰路、K君と二人して、カツを食う。外交論を論じ合う。

三月十三日（火）

快晴

一、身体を、健康に仕上げる事。

一、先生と共に京橋のT社にゆく。

一、実家に帰り、家族の元気な姿を見る。

一、御書を、真剣に勉強しゆく事。

一、カバンを購入する事が出来た。

金、六千五百円也。

疲れ、早目に休む。九時四十分。

三月十五日（木）

晴

夫れ水は寒積れば氷と為る・雪は年累かさなつて水精と為る・悪積れば地獄となる・善積れば
仏となる・女人は嫉妬しつとかさなれば毒蛇となる。法華經供養の功德かさならば・あに竜女が
あとを・つがざらん。

（南条殿女房御返事）

自己の性格。この性格は、善か悪か。自分ではわからぬ。この性格が、最高に發揮さ
れ、いかなる職業が、最も適するかを考える昨今。

青年期の心は、如何いかにして、刻々と變化してゆくものか。如何にして、かくの如く、動

揺変転極まりなく流れ変わりゆくものか。——自分だけか。人々は違うものか。——

小岩、I宅にて、先生をお囲みし、青年十四名集合せり。「生死一大事血脈抄」の講義あり。

三月十七日（土） 小雨

頭痛激し。謗法の因は何であるかに悩む。御本尊様を持たせた人々に連絡をなす。

S君、Kさん、K君、Tさん、M氏、I君の六世帯である。

正午、仕事の合間に、Y女史、K君と三人して、新宿の喫茶店で、コーヒーを飲みながら、恋愛論、その他にふける。小一時間。——

暖かくなり、外套がいうも必要なき陽気。——助かる。

四時半より、戸田先生宅に於ておい「聖教新聞」発行に関する打ち合わせ企画会を催す。M君、K女史、I君と私の四人。日本一、世界一の大新聞に発展せしむる事を心に期す。

広宣流布への火蓋^{ひぶた}は遂にきられた。決戦に挑む態勢は準備完了。参謀総長の責務は、更に重大となれり。

信心の上の技術、信心の上の学問、信心の上の知識、信心の上の外交、信心の上の闘いの大事、肝要を沁々^{しみじみ}と知る。

三月十八日（日） 晴

身体の調子、一日中悪し。夕刻五時まで休む。弟、見舞いに来てくれる。可愛いやつだ。何もして上げられず、可哀想な思いがしてならぬ。

五時三十分、起き、仕度し、先生宅に。

「諫曉八幡抄」中程まで講義進む。なかなか頭に刻み込めず、残念でならず。勉強だ、勉強だ。

法華経に曰く、

「經どくじゆを讀誦しよじし書持しよじすること 有らん者を見て 輕賤憎嫉きやうせんそうしつして 結恨けつこんを懷いだかん乃至其の人
命みやうじゆう終しゆうして 阿鼻獄あびごくに入らん 一劫いつこくを具足ぐそくして 劫尽こくきなば更生またまれん 是かくの如く展轉てんでんし
て 無數劫むしゆこくに至らん」等云云。

「人有につて仏道を求めて 一劫の中に於おいて乃至持經者じきやうしやを歎美たんみせんは 其その福復ふくまた彼に過
ぎん」等云云。

題目をしつかりあげ、床に入る。

十一時五十分。――

三月十九日（月）

晴

折伏せふくという事は、実に難しい。吾等われらより、庶民の中に生き、数多くの折伏をしぬいてい
る婦人の方が、幾百倍も偉きことよ。――

春風千里。一年毎ごとに、色心共に、春を楽しく感受出来得る人生を築きゆこう。

夜、御殿山の座談会。出席者、数名。新人来たらず。

法華經に曰く、

「若し悩乱する者は頭七分に破れ、供養する有らん者は福十号に過ぐ」等云云。（取意）

帰宅、九時五十分。

『スカラムーシュ』を読む。

三月二十日（火）

晴

安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す^な在世の衆生は傍なり滅後を以て之を論ずれば正法一千年像法一千年は傍なり、末法を以て正と為す末法の中には日蓮を以て正と為すなり。

（法華取要抄）

身体の具合悪し。小宇宙ともいふべき自己の生命の不調和、悪循環には、必ず信心の狂いが有るものと思う。

朝晩の勤行を、完全に正しく実行してゆくことだ。そこに原因が明瞭にわかる基^{もと}がある。

此の五尺の凡身を、妙法に捧げることが、根本的感謝がなければ駄目だ。

自己のことだけに終始して、大は達成出来ぬ。而^{しか}し、自己の建設なくして、偉業も実現出来るものではない。仏法には犠牲はない。一生成仏をなす為の、広宣流布であり、広宣流布を自覚して、一生成仏は為^なし得るのだ。自転と公転の関係の道理か。――

T専務、O顧問と、京橋事務所にて会見。針のさす隙間もなき老獺^{ろうたけ}の雄に驚くのみ。あまりにも、利害の葛藤^{かつとう}に、いやな気持ちとなる。

戦うという勇氣。平和、平凡を愛する勇氣。力ある青年は、両者があって、正しい勇氣の持ち主といえるか。

帰宅、十一時。

三月二十一日（水）

曇

彼岸の中日。うららかな春暖の一日であつた。

寺院に、参詣できぬことが残念。

九時近くまで、寝る。十時四十分、出発。先生宅、訪問。種々お打ち合わせをし、指導賜る。

六時より「聖教新聞」の編集会議。

自分も、一幹部として、大事な法戦の一翼を担^にっていく。嬉しい哉^{かな}、楽しい哉。――

「唱法華題目抄」に曰く、

此の経を信ずる者の功德は分別功德品・随喜功德品に説けり謗法と申すは違背^{いはい}の義なり
随喜と申すは随順^{ずいじゆん}の義なり。

帰宅、十時三十分。読書。

三月二十三日（金）

小雨

「御義口伝」講義、藥草喻品等。——尚「寂日房御書」の講義も有り。

一日も速やかに、先生の、広布への陣頭指揮を望むのみ。——心ある同志の悲願なり。
もうしばし、秋^{とき}を待つのみ。——

良き同志あり。悪しき同志あり。信頼できる同志あり。何となく、信頼でき得ぬ同志あり。先生は、御存知であるや否^{いな}や。——いや、妙法の法理の鏡には、どうしようも無いことだ。時^{すべ}が総て解決して見せてくれよう。

「法華初心成仏抄」

譬えばよき火打とよき石のかどと・よきほくちと此^{みつ}の三寄り合いて火を用ゆるなり、祈も又是くの如しよき師と・よき檀那と・よき法と此^{みつ}の三寄り合いて祈を成就し国土の大難をも払ふべき者なり。

三月二十五日（日） 曇

先生宅。「諫曉八幡抄」の講義完了す。

種々指導あり。

吾人^{ごじん}は、感情家らしい。

先生宅に泊めて戴^{いただ}く。思い出の一夜。

三月二十六日（月） 雨

一日、一日、暖かくなつて来た。正^{まさ}しく春だ。苦しくとも、楽しくとも、政治の推移がいかならうが、どこにどのような事故があろうが、春だけは、それ等と関係なく、きつちりとやって来る。それら悉^{ことごと}くを包容しながら……。

此の世に、生を受けたこの身。厳然たる、この事実。若き地涌の菩薩として、立派に生き死にたいものである。三世十方の諸仏、諸菩薩に護^{まも}られ、照覧されながら――。

帰宅、十一時。就寝、十二時五十分。

三月二十七日（火）

晴

一暖、また、一暖。

孝養に三種あり。衣食を施すを下品げほんとし、父母の意に違はざるを中品とし、功德を回向えこうするを上品とす。存生の父母にだに尚功德なむを回向するを上品とす。況や亡親いわんにをいてをや。

（十王讚歎抄）

仏道修行。これ仏になることだ。故に、最高、最大の幸福生活を意味することに通ずる。何と文化的な、何と理想的な、何と価値ある修行か。――

その道中に、難有り、批判あるは、当然のことなり。釣つりに行くに、潮風と、波を恐れ何がある。山にゆくに、嶮けわしき道と、岩なくして何がある。

信仰なき人は、所詮しよせん、何と空虚なことか。

帰宅、十時五十分。明日は座談会に出席しよう。

三月三十一日（土）

晴

三月も終わんぬ。喜怒哀樂を繰り返し、あつと云う間に過ぎ去ってしまふ。将来、十年、二十年、三十年先も、瞬間のうちに終わってしまふような気がしてならぬ。

時間を、一日を、大事にしなくてはいいけぬ。その大切にすること内容が、又問題となるわけだ。

信念も、基準もなく、批判のみしている人が、賢明に見える社会である。信念、基準を持てる人は、一往、受け身になるようなれど、結局は強く、幸福であることを忘れてはいけぬ。

理念を持し、進む者は強し。王者の帆に打ちあたる風波は、一番強烈なのだ。恐るるな。恐るるな。

蒲田関係の指導員会議。K宅。

帰宅、十二時三十分。

T氏の赤児亡くなったとの連絡有り。

〔三月〕——三月十七日の日記に見られる通り、戸田第二代会長の構想のもとに発刊準備が進められていた「聖教新聞」は、四月二十日、月三回の旬刊、ブランクett判二階建て、発行部数五千部で歴史的な創刊をみる。ちなみに当時の一般紙は週五回四階、二回二階建てであった。戦後、連合軍総司令部の検閲と用紙統制を余儀なくされていたが、この年の五月に用紙統制が撤廃されるなど、新聞界にも独立・自由の空気がみなぎり始めていた。

アジアの青年が四年に一度集って力と技を競うアジア競技大会の第一回大会が、三月四日、インドのニューデリーで開催された。この大会には日本をふくむ十一カ国が参加して、陸上・水泳など六種目の競技が行われ、日本は参加国中最高の二十四個の金メダルを獲得した。アジア競技大会は戦前の極東選手権大会と西アジア競技大会が合併して復活したもので、その開催はアジアがようやく安定の兆しを見せ始めてきたことを物語っていた。

戦後の教育改革は昭和二十二年四月の「六・三」制の導入によって始められたが、昭和二十六年の新学期から新しい学習指導要領に改訂されることになった。三月十日に公表されたその内容によれば、戦後しばらく中断されていた中学での日本歴史と柔道、小学校での習字が正課として復活したほか、小学校での家庭科が男子も学習する科目となっている。戦後まもないころの急激

な改革が軌道修正される一方、男女平等の新しい教育理念が定着していく傾向がうかがえる。

昭和二十六年には国民生活のほとんどの分野が戦前の水準に回復していたが、そのなかで改善が進まないものに電話事業があった。二十六年度の計画では加入電話の施設計画八万五千台に対し、申し込み数は七十一万台と需要に応じ切れない状況であった。サービス面でも、ダイヤル市内通話が二回半に一回しか完全にかからないという状態であった。こうした事態に当時の新聞は「電話はいつになっても引けないもの、かからぬものであるかとさえいいなくなる」と慨嘆がいたんしている。

四月七日（土） 雨後曇

夜、青年部月例部会。

出席者、約数十名。男女共に。愚かな、気どな、幹部が気に入らぬ。町の青年会の、幹部のつもりでいる。軽薄なる二、三人の態度を、私は心から不満と思う。

先生は、青年部のことは、一切お委まかせの御様子。先生の真意を体した、優秀なるリーダーが、新しく、ぞくぞく出ねば、発迹はつしやくけんぽん顕本は出来得まい。

広宣流布、信心の事について、幹部より、指導、講演あり。

終了、八時三十分。

帰宅、十時。

四月八日（日）

曇

十時、起床。K君来る。弱い青年だ。人は実に良し。引き続き、Y君来る。三人して、食事にゆき、日光を浴びて、気持ち良いほど、朝風呂にひたる。

三人で勤行をし、大森駅にS氏を待つ。歓喜寮に、二時三十分着。読経、法話、五時まで。――

S氏の御本尊送りを、Mさんで行う。一幅の御本尊送りの喜びは、筆舌に尽くせぬ、最高度の幸福感である。

九時三十分、N宅訪問。

「乙御前御消息」

いかなる男をせさせ給うとも法華經のかたきならば随したがひ給うべからず、いよいよ強盛の御志あるべし、氷こおりは水より出でたれども水よりもすさまじ、青き事は藍あゐより出でたれども・かさぬれば藍あゐよりも色まさる。

隣人は、吾等われらを指し、半狂人という。宇宙の根本基準より見れば、そう批判せし人こそ、狂人なることを知らぬ。本末顛倒の社会の、此の実相。——吾われ、何をか云いわんや。

帰宅、十二時。

四月九日（月） 雨

一日中、雨となる。

千葉浦安のN宅訪問。浦安の町は初めて行く。単調な、貧しき漁港。ここにも、妙法の灯は輝いているのだ。彼も、元氣に成ってくる。嬉うれしい。——

夜、K宅にゆく予定、実現出来ず残念に思う。

九時少々過ぎ休む。

四月十日（火）

曇

午前中、雨。昼過ぎ晴れて来る。

二時まで、先生と共に、雑談。将来の種々の計画を練る。

六時三十分、小岩にて、先生の「四信五品抄」の講義。青年部有志、十四名の会合なり。K先輩欠席。

先生の、大哲学者には、唯々ただただ驚くのみ。知識に非ず。覚者の智慧より出ずる、泉の如き、斬新ざんしん的な法理、道理、確信、信念、予見、理論なり。……

帰宅、十時五十分過ぎ。――

勝てる名声を読んだ時

英雄の勝てる名声や偉大なる將軍の勝利を読んだ時、

私はその將軍を羨み^{うらや}はしない、

大統領のその統治や宏莊な邸内の富を羨みはしない。

然し愛人等の仲が、どうであつたか、

危険や非難を通り、長く長く變らずにいかに生涯を共にしたか、

青年を過ぎ中年と老年とを過ぎて

いかに断乎として情深くそして誠実で彼等があつたかを聞いた時、

その時こそ私は物思ひに沈む、

たまらない羨ましさに充されて急いで歩み去るのである。

（カラムス 勝てる名声を読んだ時）

就寝、一時三十分。疲れる。温。

四月十二日（金）

快晴

若き夫妻等が夫は女を愛し女は夫をいとおしむ程に・父母のゆくへ行方をしらず、父母は衣ころも薄うすけれども我はね國や熱あつし、父母は食せざれども我は腹に飽あきぬ、是は第一の不孝なれども彼等は失とがともしらず、況いわんや母に背そむく妻・父にさか逆へる夫・逆重罪にあらずや。

（一谷入道御書）

温暖の一日。桜の花も散りにき。吾わが青春に悔いなきや。

戦時中、N鉄工所の作業所に、“散る桜、残る桜も、散る桜”という句があつたのが、脳裡のうりに鮮明に焼きついている。

青年らしい、日本人らしい、潔いさぎよい句であり、生き方の表現である。けだし、仏法は、生命を最も尊ぶ。新たに、生き方、死生観を考えなおす。……

戸田先生より、種々叱責受く。叱られる度たびに、奈落ならくにおちゆく感じなり。行き詰まってしまう。誰人も、激励し、助けて呉れる人なし。

明後日は、本山にゆこう。新しい、決意の出発を再びしよう。

昼休み、K君、Y女史と春の街を散策。四月の陽気は明るく爽やかだ。春夏秋冬の変化のある民族は、優秀であり、幸福だと、つくづく考えながら。――

帰宅、十一時。

四月二十日（金） 小雨

末代の凡夫此の法門を聞かば唯我一人のみ成仏するに非ず父母も又即身成仏せん此れ第一の孝養なり。

（始聞仏乘義）

朝方小雨。昼頃から晴れる。一日中、暖かな日であった。

午後より、神奈川方面に。M宅、N宅、S宅、Y宅、K宅訪問。――訪問し、いやなこ

とが有っても、強くいきたい。強く頑張らねば、勝者にはなれぬ。

夜、戸田先生の講義。「簡御器抄」。

一、我が地区に、折伏の聖火を上げたい。

一、折伏が出来ずして、大聖人の弟子なりと思うことが苦しい。

就寝——十二時五十分。室へや、暖かし。

四月二十一日（土） 小雨

一日中、単調な日であった。

身体の調子、頗すこぶる悪し。残念なり。八時に帰り、早目に床に入る。

静養なき戦いは、敗因を作らん。明日の戦いに、今日は休むなり。されば、休むことも、戦いとならん。

四月二十二日（日）

曇

諸の国王・大臣・公卿・殿上人等てんじようびとの身と成つて是れ程のたのしみなしと思ひすくな少きを得て
足りぬと思ひ悦びあへり、是を仏は夢の中のさかへ栄・まぼろしの・たのしみなり唯ただ法華經
を持ち奉り速すみやかに仏になるべしと説き給へり。

（主師親御書）

夜、大田区M宅の座談会に出席。

実に、盛況であつた。一度に、数名の新人の入信をみる。堂々たる折伏をする。痛快で
ある。

戸田先生の講義を休みしを、残念に思う。

帰宅、十時少々過ぎ。レコードをかけ、ホイットマンの詩を読む。

嵐の傲おごる音楽、

実に自由にその驀進ばくしんを吹き起して、大草原を鳴り渡る、

森の梢こずえの激しい唸りうな——山々の風、

人に擬する朦朧たる形 匿かくされた管絃樂オーケストラの汝、

『自然』の律呂に諸国民のあらゆる言葉を交じへ、

神速の樂器を持てる幻像セレナードの夜曲の汝、

(秋の小川 嵐の傲る音樂Ⅱ前出)

四月二十四日(火) 晴

暖、日一日増す。アパート内も、活気を呈し、騒音誠にうるさし。

七時三十分、外出、食事、会社へ。

『寺田寅彦全集』を、電車で読む。

夜、疲れ、遅くなったため、Y宅に一泊する。はじめての外泊。夜半まで、青年達と「開目抄」の読み合わせをする。

難解なれど、大聖人の御確信、胸に響く。乱世に、この貧しき家で、貧しき青年等が、

大聖人の哲学を学びし姿、実に尊かなき哉。――

皆、真剣である。皆、純情である。垢^{けが}れなき青年達の心に、大聖人の大慈悲は、強く深く、入ることであらう。

皆して、読み合わせ終わり、月光の窓に出る。ある青年は、未来を語る。ある青年は、希望をのべる。ある青年は、意気を詩吟に託す。貧しき青年達よ、貧しき革命児達よ、前途に、祝福あれ――。

穢^{よど}れたドンブリに、タクワン少々にて、夜食とする。思い出とならん。――邂逅^{かいこう}十年後に。

四月二十五日（水） 晴

夜、Y宅、入仏式、M宅、入仏式。

先生と共に、参加する。

先生の決意、次第に厳然たり。何か深く思念されし様子なり。学会の前進も、先生の前

進、決意にて、全部決定されゆくなり。

細井尊師、T尊師とお目にかかる。十年後の宗門を思惟しゆいすると歎喜生ず。

夜遅く、愚弟来る。涙が湧く。

就寝、一時半。――

四月二十六日（木）

快晴

和やわらかに又強く両眼を細めに見・顔貌かおばえに色を調ととのへて閑しずかに言上ごんじょうすべし。

（教行証御書）

此の法華經の本門の肝心・妙法蓮華經は三世の諸仏の万行万善の功德を集めて五字と為せり、此の五字の内に豈あに万戒の功德を納めおさめざらんや。

（教行証御書）

身体の調子全く悪し。謗法ほうぼうなるかを深く思う也。

立川にT氏訪問。悪い人だ。こんなにずるい人とは知らず、誠実に付き合っていた事を悔しく思う。学校の先輩という美名に――。

夜、青年部会。「四信五品抄」。

先生より、二処三会の宿題を出される。

深く思索し、体系化した教学を学び、信心よりの教学を打ち立てねばならぬ。吾れ、浅学を恥ずるなり。奮起あるのみ。

小岩駅にて、淋しさびそうにしている、弱きU兄を激励する。嬉しうれそうな瞳ひとみが、脳裡のうりに残る。

帰宅、十一時半。――

四月二十七日（金）

晴

生涯、初めて、執行吏の様子を見る。法律の厳しさ、否、弱者の悲惨さをまざまざと見

せつけられる。可哀想でならぬ。——これが、現実か。社会の複雑さ、厳しさを、少々知って来た感じ。今まであまりにも、清純のみで、唯、理想主義であつたことを知感せり。

学会の前進、次第に高まれり。吾が地区も頑張らねばならぬ。折伏精神と、組織の確立を根本原因とせねばならない。ともあれ、自分が頑張ることだ。自分が責任を持つことだ。

一日中風が吹く。

夜、『土田杏村全集』を少々読む。

「佐渡御書」に曰く、

悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人かたうどをなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、云云。

就寝——二時過ぎ。

四月二十八日（土）

曇

一日中、暑い暑い風が吹く。

何となく、身体調子悪し。空虚な一日であった。

T建設組合の総会、午前中有り。

夜、鶴見のS宅の座談会に出席。新人来たらず。活気なし。

日蓮御房は師匠にておはせども余にあまりこはし我等はや柔はらかに法華經を弘むべしと云んは
螢火ほたるびが日月をわらひ蟻塚ありづかが華山かざんを下し井江が河海をあなづり烏鵲かささぎが鸞鳳らんほうをわらふなるべ
し、云云。

（佐渡御書）

読書。

三時過ぎ、就寝。

四月二十九日（日）

小雨

十時まで休む。疲れた身体に、疲れが、あとからあとから出て来るようだった。ここ数年間の疲労の蓄積か――。

N氏、B氏来宅。強く議論する。

久方ぶりに、バーバーにゆく。帰り、浴場（バス）にゆく。一日中、蒸し暑い日であった。身体具合全く良からず。

吾^わが地区の前進のため、なつかしの馬込地区W氏宅を訪問。W氏留守にて、二時間の無駄足をしてしまう。淋^{さび}しく、肅々^{しゆくしゆく}と帰る。

来月五日夜は、M宅に折伏にゆこう。先生、必ず吾が地区も前進させますから、お許し下さる。

読書。

就寝、二時過ぎる。

〔四月〕——四月三日には新憲法施行後二回目の地方選挙が告示された。第一回選挙で立候補を禁止されていた戦時中の市町村長や助役にも立候補が認められたが、町村関係では無投票当選者が続出し低調な選挙となった。全般的な傾向としては革新が後退し、自由、民主両党の保守系が優勢を占めた。ちなみに各党別の都道府県議会議員当選者は、自由一〇七四、民主二八五、社会三三四、農協二二、労農六、共産六、社民三などであった。

この時期の大きな事件としては、終戦以来連合軍総司令官の地位にあったマッカーサー元帥の解任があった。トルーマン大統領は四月十一日、マ元帥が米国政府と国連の政策を支持しないことを理由にマ元帥を解任する旨を発表し、後任にリッジウェー中将を任命した。この背景には朝鮮戦争の延長として中国共産党との全面戦争を主張していたマ元帥と、東西両陣営の戦争を回避することをめざした大統領とのあつれきがあった。

国内の事件では、四月二十四日、京浜東北線桜木町駅構内で、国電の車両火災のため死者百人を出した「桜木町事件」がある。事故の原因は架線から出た火が電車の屋根に燃え移ったことだが、この「六三型電車」は、窓がガラス節約のために小さな三段窓になっており、そのため乗客が車内に閉じ込められたことから大惨事となった。輸送力の増強に追われて、安全対策に手が回らなかった時代状況が生んだ惨事でもあった。

五月三日（木）

晴

第二代会長、戸田城聖先生の会長推戴式^{すいたい}。

——場所、向島常泉寺。

晴天、午後二時開始。祝賀会を終えて解散午後九時。

遂に戸田先生は会長とられる。待ちに待った、吾等^{われら}門下生の願望であつた。生涯の歴史とならん、この日。

集まりし同志、約一千数百名か。——

進まん、法旗を高らかに。広宣流布を目指して。二十億の民ぞ待て、吾^わが学会の進軍に。——

新組織の発表に、幹部の顔は、晴ればれなり。講演に、決意に、確信発表に、皆元気に、やらんかなの意気盛んなり。

吾人^{ごじん}は、一人、集会の中央に、静かに、先生の、先輩諸氏の話聞き入るなり。

十年先の、学会の前途を、見定める青年ありとは、先生以外に、誰人も知らざるを思いながら。――

先生を、最後に、胴上げせしは、忘れざる思い出なり。H兄の、学会を思いゆく瞳ひとみが、忘れられぬ。――

帰り、創価学会常住御本尊様を、拝持する御供養を、玄関にて、集む。――
帰宅、十一時少々前。

五月十二日（日） 晴

唯ただ、南無妙法蓮華經――所詮しよせん、信心以外に、何もものないことを感じて来る。
策も、方法も、努力も、智慧も、思うようにゆかぬものだ。人生、妙法を会得する以外に、自由闊達かつたつなる幸福建設は、無いようだ。

社員一同にて、十一時より、三越劇場に、観劇。

夜、先生宅にて「当体義抄文段」開始。全く難しきなり。無駄口をきかぬよう注意して
ゆこう。

「乙御前母御書」

昔女人^{好夫}すいをとをし^のびてこそ或は千里をもたづね・石となり・木となり・鳥となり・
蛇となれる事もあり。

明日から又、頑張ろう。常に、否、生涯、自分を、自分で叱咤^{しつた}して、進んでいく以外に
ないものだ。

読書。――

就寝、三時。

五月十四日（月）

曇

蒲田支部、Y女史の入仏式。七時より。

戸田先生出席。私も出席する。

S宅の一家は、明るく福々しい。戸田先生が大事にし、可愛がっておられることも良くわかる。

信心していても、とても良い感じの人、一家、悪い感じのする人、一家があるものだ。やはり、良い感じの人、一家は、信心も純粹であり、素直な、幸福なことを、意味するよ
うに思えてならない。

夜半まで、読書。思うこと多し。

いつの日か「宗教革命」と題し、長編詩を書きたいものだ。

五月二十日（日）

曇

M氏、Sさん来る。入れかわりにY氏来る。共に、大森に折伏にゆく。自分の折伏の下
手くそに全く困る。

夕方、早めに室^{へや}に帰る。何となく侘^{わび}しい日でならぬ。何となく苦しい日であった。

横になり、雑誌を読む。

就寝、十一時。

五月二十一日(月)

晴

天気実に良し。

頭^{あたま}脳が痛む、疲れているのだ。

昨日の、悪夢に疲れたか。——本日、虚無感——戦いに負ける。

午後、M宅を訪問。弱くして、善良な一家。——

帰り、Y宅を訪う。毅然^{きぜん}たる態度で、対談に臨む。少々感じたらしい。

性格は運命を決定してゆく。丈夫^{じょうぶ}の心は強けれど、苦しむことも又多い。

「持妙法華問答抄」

只須すべからく汝な仏にならんと思はば慢驕のはたほこをたをし倒忿いりの杖えをすてて偏ひとえに一乗に帰すべし、名聞名利は今生のかざり我慢がまん偏執へんしゆうは後生ごしやうのほだ細しなり、嗚呼ああ恥ちづべし恥ちづべし恐るべし恐るべし。

就寝、一時二十分。

五月二十二日（火）

曇

暑い日であつた。仕事順調に非ず。困る。一步前進、二步後退という言葉がある。而しかし、信心以外には、打開の道は断じて無い。

本年、第一回目の、大森地区の座談会を催す。新規の人、四名。予想外には本当に驚く。

どうして、こんなに、正法を、信仰を、求めぬのだろうか？ 淋さびしくなる。悲しくなる。最後まで頑張ることしか無い。一波二波、千波万波と動くことだ。

妙法の力により、いつかは、必ず、信心させて貰いたいと、乞うて来る日が来ることだろう。それまで、頑張ろう。頑張らねばいけぬのだ。頑張っていれば良いのだ。

同志は皆、頑張っている。偉い。本当に、偉い。兄弟達に、祝福あれ。幸福の華ぞ咲け。――祈りたい気持ちである。

五月二十三日（水）

小雨

明るい一日であった。

Mさんと、午後、二時間ほど種々語る。良く頑張って下さる人だ。心から感謝する。

夕刻より、I宅にて「開目抄」「波木井殿御返事」の講義を、十数人の同志にする。皆、嬉しそう。同志が少しでも元気になって呉れることは、何よりも嬉しいことだ。

八時五十分、帰宅――。「大白蓮華」の原稿、書きしも、全くまとまらず、意気消沈――。思うように、書ける日は、いつの日ぞ。

Uさん、T君を、今月中に、折伏できるよう、お救い下さるよう、御本尊様に願う。
就寝、十二時。

五月二十五日（金）

晴

夕刻、戸田先生より、青年有志十四名に講義あり。

「佐渡御書」であつた。頑張らねばならぬ。

自分が、思うように前進できぬことが悔しい。苦しい、泣きたくなる思いの日がある。

吾が大森地区が心配でならぬ。地区が完璧になるよう、御本尊に祈る。

青年の心は、どうして、転々と動くものか。感激、失望、歓喜、苦悩、向上、停滞、元
気、心配、楽天、細心と。……

所詮、唯々、青年らしく。若人らしく。

就寝、三時。

五月二十六日（土）

壘

夜、本部にて、戸田先生の御書講義。

「総在一念抄」

明日は、T青年部長をはじめ四名と、栃木方面に一泊にて、地方折伏だ。

吾人の、地方鬭争への初陣である。嬉しき哉。

吾が地区は、反省するところ多々ある也。

夜遅く、T氏、U氏達来る。学会の人達はもう少し、常識があつて良いと、心に思う。

無作は尊い。しかれども、正しき無作であらねばならぬ。他人に迷惑を掛けゆく行動は決して、本有無作とはいえない。否、仏法利用と断定できるものだ。

礼儀と常識の有作は、無作を光らしめる有作であり、有作のための有作ではない。

正法が、一人一人に理解され、時代の原動力、原理になりきったら、いかほどか、根深き国家が出来ようか。いかほどか、光輝ある、合理的な社会が建設されようか。いかほどか、矛盾なき、行き詰まらざる人生を歩むことが出来ようか。

正法を、深く、汝自身なんじが理解することだ。

正法を、広く、汝自身が広めゆくことだ。

正法を、強く、汝自身が生活に生かすことだ。

正法を、高く、汝自身が宣揚しゆくことだ。

正法を、清く、汝自身が生命の奥底に流しゆくことだ。

帰宅、十一時三十分。就寝、二時。

五月三十日（水）

晴

天竺国てんじくこくをば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国ふそうこくをば日本国と申すあに聖

人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかならず在世は但八年なり、日は光明・月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり、仏は法華經謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充滿すべし不輕菩薩の利益此れなり、各我が弟子等はげませ給へはげませ給へ。

(諫曉八幡抄)

一日一日、夏型の陽氣。

第一に、御本尊を信ずること。

第一に、御本尊を疑わざること。

第一に、御本尊に祈りきること。

第一に、御本尊を離さざること。

第一に、御本尊に訴えきっていくこと。

帰宅、十一時。

五月三十一日（木）

小雨

五月も終わんぬ。

丈夫の心は、苦難があれば、あるほど、

勇敢でなくてはならぬ。

情熱が湧かねばならぬ。

大白法流布に生きる若人^{わこうど}、運命、使命。――

広宣流布に進みゆく、若人、青春、決意。

真の同志は、幾人いることか。

真の同志は、誰人なりや。

真の同志は、自己が心から感じている人なりや。

信ずるものは、大御本尊様あるのみ。大御本尊を信じきっている人が、真の信じられる同志なりや。真に信じられゆく同志は又、真に、大御本尊様を信じゆける人か。

就寝、一時半。

〔五月〕——五月三日、戸田第二代会長就任式が、東京・向島の常泉寺で約千五百人の同志が参加して盛大に行われた。席上、戸田会長は烈々たる気迫で七十五万世帯の折伏達成を宣言したのである。あわせてこの日、理事室の新体制のほか指導監査、財務、講義、指導、婦人、青年、男子、女子、企画の各部部长が発表され、学会は戸田会長のもと、勇躍、広布の大前進を開始していくことになった。

日記の文中にある「大白蓮華」の創刊は昭和二十四年七月。戦前、機関紙「価値創造」が発刊されていたが、十七年、軍部政府の弾圧によって廃刊に追い込まれた。戦後、二十一年六月に謄写版刷りで復刊第一号が出されたが、会員数の増大にともない活版印刷でなければ応じきれなくなり、月刊の「大白蓮華」の誕生となった。体裁はB5判で32頁建てである。この本格的な宗教理論誌の登場により、学会内には折伏・弘教の息吹が一段と高まっていった。

この前年末から赤痢が大流行していた。赤痢の流行は関東地方から始まり、東北、東海地方におよび、結局二十六年だけでも死者一万四千人、患者九万三千人を出した。これはこの五十年の間では昭和十四年、二十年に続く記録的な流行となった。その背景には下水道の不備、公衆衛生の低水準などがあげられ、当時の新聞は「赤痢がその国の文化の低さを語っている」と衛生面の立ち遅れを訴えている。

五月末、昭和二十七年使用の新しい教科書の目録が、文部省でできあがった。特徴は、前年まで文部省著作の『くにのあゆみ』一冊だった歴史の教科書に『日本のあゆみ』『私たちの日本史』など九種類の民間著作の検定本が加わったことである。他の教科でも民間著作の教科書が国

定教科書を圧して躍進し、全体の九二%を占めた。戦後七年にして、ようやく民間教科書の育成が軌道にのったといえる。

六月六日（水） 晴

六時五十分、起床。勤行、色心共に、爽快そうかいの感なり。尊き青春時代を、潑刺はつらつと、息吹に燃えねば損だ。

前進——なんと若々しい、未来を含んだ言葉であろうか。私は、生涯、名実共に、正しい、実践してゆこう。

前進——この言葉の中には、成長がある。希望がある。勇氣がある。若さがある。正義がある。——

一、折伏用の原稿を、十五日までに書きあげること。

一、吾^わが地区を、充実させることに奔走いたすべきこと。

M女史と、Y宅にて、種々語る。

革命家、詩人、大思想家、政治家、教育家、^{ことごと}悉く、仏法の真髓の中には、含まれているものか。――

戸田先生のことを、一人、深く思う。

読書。男は偉大なる程、その愛、また深きものなり。

就寝、三時。

六月八日（金）

小雨

一、「進め、白馬よ」の詩を作る。

一、先生の指導を、整理せざることを、反省する。

一、自己を、過大評価することを、厳に、^{つし}慎むべきことを猛省する。

一、知れるもの、知らざるものを、明確にいたすべきこと。

一、人の良き点を、心から取り入れ、己れの模範とすべきこと。

六月九日（土）

小雨

「種種御振舞御書」

各各我が弟子とならん人人は一人もをくしをもはるべからず、を^親やをを^{妻子}もひ・めこを
をもひ所領をかへりみることに・なかれ、無量劫より・このかた・を^{親子}やこのため所領のため
に命ずてたる事は大地微塵よりも・をほし、法華經のゆへには・いまだ一度もすてず、法
華經をばそ^{若干}こばく行ぜしかども・かかる事出来せしかば退転してやみにき、譬え^{湯沸}ばゆをわ
かして水に入れ火を切るにとげ^遂ざるがごとし、各各思い切り給へ此の身を法華經にかうる
は石に金^{こがね}をかへ糞^{ふん}に米をかうるなり。

新宿、Fにて、鶴見関係の謝礼会。

七時より、戸田先生と二人して出席。

夜遅く、杉並某学園内にての、座談会に出席。

新来者少数。全員入信する。元氣一杯に折伏、指導して帰る。心爽快そうかい。

昭和二十六年も、中盤に入る。早いものだ。十年後の昭和三十六年六月は、自分は、社は、学会は、どのように変化していることか。誰人も知解ちげできぬことだ。

誰人にも、左右されず、堂々と、自己の信念で進みきれる人は、偉い人だ。頑かたくなでなく、偏狭でなく、根本の真理を確信して。――

世には、立派そうな人、偉そうな人は沢山いる。だが、近づいて見ると、情けなくなる。いや、自分は、戸田先生に、ただ、続けば、全部なのだ。

Y女史、K君に、重々注意をいたすべきなり。

六月十日（日） 小雨

大御本尊様にお誓いし、お詫わび申し上げます事。及び、猛省すべき条。

一、折伏化他の行動。

一、吾が地区の、自覚、責務のこと。

一、言語を慎むべきこと。

一、自我主張の欠点への猛省。

一、先輩諸氏に対する礼儀の注意。

以上

Y君に対する、私の行動、言語は、たしかに間違っていた。注意する。反省する。実に悩みは尽きない。

反省したら、前進だ。猛然として、——決然として。それ以外、自分の性分には何ものもない。

六月三十日（土） 小雨

多忙な、激しい闘いの一か月であった。この一年の、上半期は終わった。明日より、否、今より、七月である。

電車の中で、新聞を読む。外国のニュースに、一日も、一年も早く、諸外国にゆきたい衝動にとらわれる。英語の勉強をせねばならぬことを、痛切に考える。

午後、鶴見に、S宅、Y宅、M宅、O宅を訪問。種々、懇談する。皆、良い人々だ。

夕刻、Sさんと、大森駅にて会う。食事を共にする。K君、I君、M君等と、自室で少々会談をする。長く出来なかったことを詫^わびる。

就寝、二時。

〔六月〕——この年の折伏は、三月は九十五世帯、四月は百五十世帯にすぎなかったが、五月三日の戸田第二代会長就任、さらに五月二十日の創価学会常住「大法弘通慈折広宣流布大願成就」の御本尊御下賜以来、歡喜が組織のすみずみにまで波動し、弘教の大波が広がっていった。五月は二百八十四世帯に、そして六月には四百四十世帯へと飛躍し、月々五割から九割の増加率を示している。

昭和二十七年

—一九五二年—



十二月五日（金）

快晴

二十七年の師走に入る。この一年、何と思ひ出多き、一年であつたことか。

十時帰宅。天空に皓々と輝く寒月は、しばし、激戦の渦中にいることを忘れさせる。激流の心も静止させてくれる。この休息が、如何に明日への、未来への、準備となることか。――

色心不二の仏法。この原理が、本年ほど、吾が身に、吾が心に、吾が生命に、痛切に感じられたことはない。むしろ、淋しく、悲しいぐらいに痛感した年はなからう。

戸田先生のお身体、非常に悪し。予の健康も、同じく又。……無念なり。

戸田先生、お身体を、お大事に。私の宿命にも、御本尊の照覧あれ。

大使命に起ち、闘わねばならぬのだ。

『新・平家物語』を読む。

十二月六日（土）

快晴

晴れ渡る日の空気は、万金に勝る。^{まさ}

太陽の偉大なる恩恵を、沁々^{しみじみ}と感謝する日がある。瞬間がある。

大自然の運行よりみれば、如何に^{いかに}小さな、人間の葛藤^{かつとう}か。政治、社会の動乱か。世間、人類の偏狭さか。

太陽と等しき宗教。いや、それ以上大なる、宇宙と等しき大宗教。これこそ、日蓮正宗である。この思想、宗教、仏法以外に、末法万年の闇は、照らし得ないのだ。

二時より、学会本部において、第七回総会の準備をする。K、I、K氏等と私。

八時終了。勤行をする。九時より十時まで、中大講堂に青年部員十名と共に、最後の設

営をする。青年達の献身的態度に、感謝する。

非常に疲れた。十一時二十分、帰宅。

信ずるものは、大御本尊様以外にない。

一時、就寝。

十二月七日(日)

快晴

第七回創価学会総会、晴天。六時三十分起床。直ちに、タクシーにて、会場に——七時三十分到着。

九時十分、歴史的な開会。中央大学講堂を埋めた数、約五千人。司会、小生。三時四十五分、成功裡に終了。続いて、宴会に移る。

帰り、今日を記念し、妻に、マフラーを買う。

久しぶりで、風呂にゆく。一人、風呂の中で、学会の未来を考える。

戸田先生、何となく、お元気なし。心配である。――

就寝、一時半。

十二月八日（月）

晴後薄曇

身体の具合、良好。

立宗七百年、最後の戦いを飾ろう。

夕刻、S氏と会う。共に、矢口のS宅にて、十時より一時間、すき焼きを御馳走になる。美味満点。

本年も、あと二十有余日。立派な年を迎えるため、立派に、この年を送りたい。

来年は、二十五歳の、最も華やかな、活動すべき年齢を迎える。本年も、三障四魔との戦闘の連続であつた。而し、本年は、立派に勝ち通した。来年も、そうでありたい。

漢詩を、少々読み、床につく。

滔滔逝水流今古

滔滔たる逝水 今古に流れ

漢楚興亡両丘土

漢楚の興亡 両ながら丘土

当年遺事久成空

当年の遺事 久しく空と成れり

慷慨樽前為誰舞

樽前に慷慨して 誰が為にか舞わん

(虞美人草)

一穗寒燈照眼明

一穗の寒燈 眼を照らして明らかなり

沈思默坐無限情

沈思默坐すれば 情限り無し

回頭知己人已遠

頭を回らせば 知己 人已に遠し

丈夫畢竟豈計名

丈夫畢竟 豈名を計らんや

世難多年万骨枯

世難多年 万骨枯る

廟堂風色幾變更

廟堂の風色 幾たびか變更す

(偶成)

十二月九日（火）

雨一時霽みぞれ（初雪）

午後より、雪となる。寒い一日であつた。自然の、雨、嵐、雪——生命の中の、雨、嵐、雪、——皆、人生試練の劇である。

大宇宙も十界。吾わが生命も十界。故に、世界に恐れるものは、ないはずである。

埼玉の川越地区へ講義に行く。八時終了。

T氏と、二十分程懇談。

十時近く、戸田先生宅うかがに伺う。奥様と一時間程話す。

戦後、革命という言葉は、実に多く使われて来た。一種の流行語にさえなつた。而しかし、人間革命という言葉は、実に意義がある。所詮しよせん、その革命、即ち、宿命打開は、信仰以外なきことが、わかつて来た。

十二月十日（水）

曇

暖かな一日であつた。仕事順調なり。

十一時三十分、おやじの会社にゆく。元氣な奮闘に、心から喜ぶ。昼、江戸前ずしを御馳走してくれる。

午後六時三十分、座談会。場所、川崎市木月。潑刺^{はつらつ}たる同志の姿に、歓び^{よろこ}たえず。五年も、十年も、この元氣な姿で、同志が頑張ってくれることを祈りつつ、家路に向かう。

帰宅、十一時半。

家庭を持つと、何かと、独身時代とは異なつて来る。良い面、そして厄介^{やっかい}な面、実に助かる面、そして、自由が失われてゆくように感ずる面。

個人も幸福に、一家も、精神的、健康的、経済的、生活的に、和楽、幸福にさせてゆく真道は、近道は、信心以外に絶対なきことを確信する。

十二月十四日(日)

晴

午前中、寝る。良く寝る、といいたいが、夢、悪夢の連続。結局、疲れてならなかった。

午後、女房と共に、大森に洋服をみにゆく。夕刻より、矢口にゆく。幹部達と種々打ち合わせ、会談をする。

明日より、本年最後の、総仕上げにかかる決意をする。学会活動も、社の方も。

一、緻密ちみつなる、企画性

一、整然たる、企画、運営

一、闊達かつたつなる、行動力

一、撓たわまざる、前進

思うこと多し。大志を抱くわこうど若人の胸には。

『新・平家物語』を読む。興味津々しんしん。

就寝、一時半。――

十二月十六日（火） 雨

六時より、水滸会。

集合人員、会長、筆頭理事、指導部長、各部隊長、幹部室、班長代表各五名（各部隊）なり。

『水滸伝』の序文を読み、先生、水滸会の意義、使命、確信を述べられる。此の座に集いし数、三十八名なり。

宗教革命、政治革命、社会革命を断行しゆく鳳雛ほうすうである。皆、闘志満々たり。意気天をつく。確信と勇氣は、大洋をも動かさん。頼もし、頼もし。十年後の姿が、目に浮かぶようである。

一、勉学に励むこと

一、一芸ひいに秀でること

一、勇断なる活動をなしゆくこと

一、思慮、果断の將たること

仙台支部歌を、声高らかに歌い、九時散会。

十二月十七日（水）

曇

暖かな一日であつた。頭が痛む。

三越に買い物にゆく。実家その他の、歳暮のため。

七時、R部隊の会合に出席。総数、八十名。盛会である。一日一日、青年部の成長が為なされている。広布の礎いしずえ、学会の柱は、青年部において断じてない。

人に認められようとするな。汝なんじ自身の行動は、御本尊様に見て戴いたくことだ。予に悔いなきや。ある——大いにあるなり。これを如何いかにせん。

十一時、帰宅。『水滸伝』を読む。

十二月十八日（木）

快晴

いよいよ、歳末の気分も、緊迫感を帯びてきた。京浜デパートで、お歳暮の品を求め、S宅、K宅に挨拶^{あいさつ}にゆく。夜、戸田先生宅に御挨拶にゆく。一時間ほど、種々の指導を賜る。

S紙、頑強に、学会誹謗^{ひぼう}に食い下がる。中傷記事、はなはだ悪質。吾等^{われら}、怒り心頭に発す。

数名にて、談判に行くことを決める。

我が学会が、正しく、仏勅^{ぶつちよく}を蒙^{こうむ}りたる教団なりしを、弥々^{いよいよ}覚知する。他の教団は企業であり、折伏はなく、ひたすら、金銭で自らの弱味を、カバーするのみ。学会は純粋である。権力や、財力や、悪や、魔に、絶対、妥協しない。故に、魔力が仏の生命を奪わんと働くは、仏法の定理である。

先生を護ろう、力の限り。先生を護ろう、吾が生命のある限り。理由は、唯一つ、先生を護ることが、大御本尊流布を護ることに通ずるからである。師弟の道、師弟不二。人類最高の道を、私は、真っしぐらに進むだけだ。戸田先生の偉容が、胸臆きようおくから離れぬ。瞬時たりとも、私には。――

『水滸伝』を読む。就寝、一時半。

十二月十九日（金）

晴時々曇

厳しい一日であった。

S新聞との、闘争の火蓋ひぶたを切った。

三時より、本部参謀会議。H、K、K、B、T、U、H、I、R、及び小生が集合。五時三十分終了。後、青年部幹部打ち合わせ会。

七時、講義を受講にゆく。「当体義抄」。

講義終了後、各部隊五名の調査部員を集め、種々指示を与える。

T、U部長等と共に帰る。

洋服、一二、〇〇〇円にて購入する。

信心。この信心の確立に一生を送ることだ。これが人生の目的であっていいのだ——永遠の生命からみれば。

隣人は批判する。だが、人生の根本問題は、誰人も教えてくれぬ。この根本問題だけは、人に聞く必要のないことだ。ただ、日蓮大聖人の教え通りに実践しゆくことが正しい。

来年は、更に信心に励もう。実践に進もう。教学に徹してゆこう。青年の面目をほどこそう。

『水滸伝』を読む。

十二月二十一日（日）

霧

薄ら寒い日曜であつた。

正午まで眠る。

T氏来る。実に可哀想だ。而し、^{しか}どうすることも出来ぬ。信心をすすめることしかない。私には。――

六時、調査部員、本部に集合す。前進だ、前進だ。情報網の樹立を急ぐ。

八時三十分、先輩、同志等と、すき焼き会を催す。自宅にて。皆、よく食べてくれた。肉も、御飯も、全く足らなくなったとのこと。

十二月二十二日（月）

快晴

七時、本年最後の地区部長会。於本部。並びに忘年会。全く面白からず。

青年を大事にする先輩は少ない。否、いない。自分のことで、精一杯なのか。

先生なきあと、各先輩が、次期の人材を育てることを忘却したら、広布の総仕上げは出来ぬことを反省して貰いたい。信心にかこつけて、尊敬されゆく役職を、私は心配する。

十一時三十分、帰宅。

幸福は、財のみに非ず。快樂に非ず。名誉のみに非ず。所詮^{しよせん}、信心による仏界の湧現に尽きるのだ。

活動、実践、行動の永続するところに、その達成があるわけだ。

就寝、十二時半。

十二月二十三日（火） 晴

暖かな一日であった。

先生、お元気を取りもとされる。

先生、私があれば、御心配なく、御静養下さい。

I氏は、良き先輩である。大人の器なり。護^{まも}ってあげよう。

二時間ほど、自宅にて休み、七時から、支部幹部会に出席。集合人員二百名。本尊流布、四百三十世帯。実に驚異的發展の姿である。来年度は、未曾^{みぞう}有の五百世帯は、悠々^{ゆうゆう}であらう。

今年の戦いに、思い残すことはなかった。良く戦ったと思う。自己満足でなく、慢心でなく。――

十二月二十四日（水）

壘

T氏、御本尊を戴^{いた}く。信心以外に、この人を救う道なし。可哀想でならぬ。私にとつて、生涯忘れられぬ人なれば。

本部幹部会。七時に、妙光寺よりまわる。

終了後、G氏の御本尊送りに、数名にてゆく。謗法ほうぼう払いに、晴ればれとしたおばあさんの姿が、胸に残る。

戸田先生、常に親類、兄弟のことを心配して下され、ただただ胸がせまる。

起たとう。進もう。青年闘士らしく。自己の胸に、そして、人類に、勇ましく、暁鐘きようしやうを打ち鳴らしゆこう。

十二月二十五日（木）

壘

T氏、朝来る。真剣そのもの。――

立宗七百年も、残りは数日となる。常に来年のことを思う。今日も思う存分働く。今日は生活費、逼迫ひつぱくす。全く、金欠病となる。いやはや……。――

R部隊の指導会に出る。青年の元気な姿を見て、心から喜ぶ。

職場も、革命も、組合も、時代も、政治も、教育界も、科学界も、すべて、青年を味方にせずして勝利はない。青年を味方にするか、敵にするかが、すべての戦の鍵である。勝利の鍵である。

十一時三十分、帰宅。

個人にも、家庭にも、社会にも、世界にも、様々な問題がある。而れども、死以上の重大問題は絶対でない。

身体の具合悪し。口をきくのも億劫おっくうなくらいである。熱があるのかも知れぬ。
就寝、一時五十分。――

十二月二十六日（金）

曇後雨

寒い朝であった。

寒風に耐えてゆく吾が身、吾が心の試練を考う。強く育ちゆかねばならぬ。人々の、依怙^{こたへ}託^{たく}の人になるには。——今は、師に包まれている。両親に護^{まも}られている。良き同志を持っている。とかく、時代も、順調である。

逆境に遇っても、常にかわらぬ指導者となつて、立派に後輩を護れる人になりたいものである。

同志、兄弟達が、楽しく、無事に、歳末を送らんことを祈る。祈る。——

来年は、本を読もう。読んで読んで読み抜こう。来年は、勉学の年としよう。学会の飛躍に遅れぬためにも。

十二月二十八日（日） 快晴

ゆっくり休む。多少、疲労回復の感あり。

Y君、N君、K君、十二時三十分、来宅。四時まで、食い、且^かつ語り、歌う。更に、来年度の企画を練る。

夜、妻と共に、先生宅を訪問。種々、指導及び注意を受ける。嬉しきことなり。十時三十分、辞去する。

I君は、立派な先輩である。尊敬してゆくことにする。

誇りとできる人を、同志にしたい。友にしたい。先輩にしたい。後輩にしたい。就寝、十二時三十分。

十二月三十日（火）

快晴

私には、静穏な歳末である。

神奈川の〇宅に、一人、歳暮にゆく。身体の具合よからず。

帰宅、三時。直ちに、体温計を入れる。三十八度九分とのこと。

夜、早目に床に就く。雑誌をみることにする。

十二月三十一日（水）

曇

昭和二十七年の、終曲の日。

立宗七百年の輝く終飾の日。吾人^{ごじん}も、二十四歳の青春を送る日。

四時、会社にて忘年会。先生を囲み、一人一人、指導を受く。或^{ある}は厳しく。或るは未来の十年を。或るは経済、外交の問題を。……或るは教学のことを。或るは先生の少年、青年時代のことを。

小生も、食べ過ぎて、腹の具合悪し。皆も、良く食べ、良く飲んでいた。

帰宅、八時少々過ぎ。——レコードを聴く。静かな、平和な夜。幸福と、和楽の家庭。

妙法に照らされ、最高、最大の幸福者であることを感謝する。

〔十二月〕——昭和二十七年は、戦後日本の一つの転換点になった年といえる。四月二十八日にはサンフランシスコ講和条約が発効し、日本は独立を回復した。が、同時に日米安全保障条約も発効し、さらに破壊活動防止法の制定、警察予備隊の保安隊への再編強化など、治安体制、再軍備

を強化しようとする動きが活発化していった。一方、こうした政府の動きに対し、労働者、市民の怒りが爆発した年でもあった。ことに五月一日には「血のメーデー事件」といわれる流血の惨事を引き起こしている。

当時、池田名誉会長は蒲田支部の支部幹事として活躍していた。この年二月に、同支部の指揮を執り、一支部で二百一世帯という画期的な折伏を推進し、後に「伝統の二月」といわれる歴史を開いている。蒲田支部の折伏は、年間では四千十八世帯に達し、全国十六支部中の最高であった。なお、この年、学会は五千七百二十七世帯から出発し、一万六千五百九十七世帯を折伏。目標の二万世帯を上回り、二万二千三百二十四世帯となった。

十六日の日記中にある「水滸会」は男子青年部の人材育成機関であった。戸田第二代会長自ら、佐藤春夫の『新訳 水滸伝』をはじめ、古今東西の名著を教材に広布を担^{にま}う人材の育成にあたった。なお「水滸会」は翌二十八年七月に第一期四十三人で再発足し、以後、期を重ね、戸田第二代会長亡きあとは池田名誉会長を中心に行われ、第五期まで結成を見ている。メンバーからは今日の創価学会の中枢幹部のみならず、政治、経済、文化等、各界に人材が雄飛している。

十二月十七、十八日には、この年の秋以来、国民生活をゆさぶっていた炭労と電産の両労働争議が相次ぎ妥結し、暗かった師走の街はようやく「光と熱」を取り戻した。この争議では、炭労が参加延べ人員一、一五七万人という、日本労働史上始まって以来の大ストを展開した。電産も四力月にわたり、十五次の電源スト、停電ストを敢行した。結局、政府の緊急調整権発動という、労組側には厳しい状況下でのスト収拾となり、総評はじめ、組合幹部の指導性が問われる結果となった。

昭和二十八年

——一九五三年——



一月一日（木）

快晴

七時、起床。

元日や 戦う途に 華ぞ咲け

初日の出 己が心も 初日の出

十時、学会本部。本年最初の勤行。

集合人員、幹部数十名。

同志の歌、仙台支部歌を、それぞれ指揮をとり、十二時四十分、解散。人間革命の、本年の第一歩を印したわけである。

先生、本山へ。東京駅に、お見送りにゆく。先生、至極、お元気の御様子。喜びにたえず。

夜、来客。七時まで、遊び、語る。

「祈禱抄」

行者は必ず不実なりとも・智慧はをろかなりとも・身は不浄なりとも・戒徳は備へずとも・南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給うべし、袋きたなしとて金を捨る事なかれ・伊蘭らんを憎にくまばせん檀だんあるべからず、谷の池を不浄なりと嫌はば蓮を取らざるべし。

妙法護持の勇士、広布に指揮をとる戦士、すべての者、此の確信で進めよかし。

一月二日（金）

曇

誕生日、二十五歳となる。

師の後を闘いきらねばならぬ運命を、沁しみ々しみと感ずる昨今である。

病床に倒れず、ともあれ、起きて、働き、且かつ、戦って来られたことを、心から謝す。

十一時東京発の列車にて、初登山。

理境坊にて、会長より、第一部隊長に就任の発表あり。戦う、第一歩の正月となり、こ

れからの一年を象徴した如くである。

健男子として、何ものにも恐れず、青年を率いて起^たとう。

一月三日（土）

快晴

理境坊にて、朝の勤行。七時三十分。

富士の山、輝^{そび}き聳^{そび}ゆ。霊峰というより、秀麗の山、雄峰^{たいざん}の泰山、男性の山といいたい。盤石である。厳肅の中に、輝く文化の香りを常にただよわしている。

実に、いい山だ。富士の山、不二の山。この山が、日本にあることが不思議である。

多宝富士、大日蓮華山。——日蓮正宗と、境智冥合している山だ。大聖人を、非情の山にしてみたならば、富士の山の如く思えてならない。

九時、御開扉。御祈念多し。来年の、初御開扉の日のことまで。……

三時、下山。列車、非常に混雑せり。

八時、帰宅。S宅の人々来る。皆で会食。楽し。

一月四日(日) 快晴

正午まで、ゆっくり床にいる。

午後より、来客多し。休養もした故、皆、会うことにした。

七時より、仲間の同志達に、すき焼きを御馳走する。出席者七名。

十二時まで語り、食べる。同志は、全く良い。益友は、実に楽しい。

いよいよ、明日より、決戦開始だ。

一月五日(月) 曇後雨

初出勤、九時。

十二時より、新年宴会。於N園。

吾々^{われわれ}にて、先生に、「星落秋風五丈原の歌」を、お聞かせする。先生、涙を浮かべ、幾度となく、繰り返して歌わせる。四時三十分、散会。

五時三十分、小岩支部長交代式に列席。向島、常泉寺。先生の、愛弟子^{まなでし}を思う心に胸痛む。

今日も学会にとって、大事な歴史の日となることだろう。本格的な、広布への、先生の指揮を感じる、その第一歩の日であれば。

帰宅、十一時。無数の星斗^{せうと}よ、吾等^{われら}に輝け。強き同志にも、弱き同志にも、悩める同志にも、笑える同志にも。……

一月六日（火）

快晴

朝、先生より『法律原論』の講義をうける。弥々^{いよいよ}、本格的に朝の勉強が始まる。毎朝、冴^さえた頭で聴講できる自己を築かねばならぬ。

負けじ魂。根性。意地。俗言なれど、男の持つべき、命ともいうべきだ。

十年後を、勝負と決めて、戦おう。十年後をみよと、勉強し、頑張ることだ。

六時、池袋、常在寺において、新部隊長等の就任式をなす。「五丈原の歌」を、幾度となく、先生、歌わせる。そして、先生自ら、さんさんと泣いて居られた。何のために、泣かれるのか――、この未熟の弟子に悲しまれるのか。

自己の未熟なるに、あきれる。二十五歳。勉強せねばならぬ。……自己を練っていかねばならぬ。修養せねばいけぬ。浅薄な自己を見せつけられるごとに、愕然がくぜんとする。

帰宅、十時三十分。

一月七日（水）

晴後曇

暖かな日であった。

戸田先生と、一日中、お会いすることができず、淋しき極みなり。

夕刻、社員達と「血闘——スカラムーシュ」を有楽座で観る。

遅く、I宅の座談会に出席。

本年は、最低五十冊、読破することを決意する。今日より、始む。出発、頗る良し。

一月八日（木） 快晴一時曇

二時、R宅にゆく。交通事故の弁償金、八万円也を、整理してあげる。心からの礼もいわず、いやな同志と思う。利己主義と、權威主義の同志ほど、情けなきものはなし。

第一回、部隊長会議を、本部にて開催。活気を呈して来る。任務、弥々重し。九時、閉会。

一月十五日（木）

快晴

成人の日。

四時より、部隊長会。於新宿のレストランG園。先生、悲憤なさる。激越なる叱責あり。暴風の如く——全く、全責任は、私にあり。先生、お許し下さい。

今後、猛省を期す。師に対する道は、最も自覚しているのに。——先生の恩恵にあまえ過ぎし、自己の軽率を悔やむ。我が身の不覚を、鏡に写された如くである。

同じ石に、二度、躓くは愚かなり。反省したら、明朗に、堂々と、又進もう。

帰り、代表して先生を、お宅まで、お送りする。

帰ってみれば、同志、一人もおらず。憤りをおぼゆ。——

一月十六日（金）

快晴

先生、お風邪を引かれ、午前中、休まれる。昨日のお詫^わびにゆく。

先生いわく、

「骨身に沁^{しみ}みたであろう。あとは確信を持って、行動せよ」と。なんたる、嚴愛の言葉であらうか。――

浅薄なる自己を、益々^{ますます}反省する。誠に、己^{おの}れの浅はかさを、猛省する。

本年の金曜講義始まる。「当体義抄」本日で終わる。

遂に、本年度の、広布の火蓋^{ひぶた}は切られた。

第一部隊旗を、高らかに掲げ、進軍だ。

一月二十二日（木）

曇後快晴

春光をおびた、良い天気。

戸塚に、K君と出張。のどかな東海の薫りを、胸一杯吸う。

七時より、第一部隊、最初の幹部会を催す。意気天に沖す。

床につきながら、先生のことを、いろいろ考える。吾人は、果たして、先生に、今日まで尽くしきったか、否かを。

誠実一途でありしや、否かを。恥なき師弟の道を、歩みきったか、否かを。

不肖の弟子であることを、恥じる。ああ。

二時、ペンを置き、目をとじる。

一月二十三日（金）

快晴

良き天候が続く。

世界の情勢、多事多難である。新聞紙上に、明るいニュースはなくなってしまった。恐怖の世界である。

若き胸に、痛いほど感じてならぬ。

命を捨てきって、大胆に、己^{おの}が信念で進むほか、安穩はない。

『法律原論』順調に進む。先生の講義、先生の思索、山よりも高く、海よりも深し。

鶴見方面に、Y君と、本年、初めての訪問交渉にゆく。

馬上の若武者、ゆくところ、必ずや勝利で飾らん。

一月二十五日（日）

晴後曇

先生、お身体の様子悪しとの連絡あり。小生も、身体の調子すこぶる悪し。十時近くまで休養。

昨日の、小岩支部幹部会、M宅の会合の元気ない様子を見、種々考える。出席者、約六十名であつた。皆、歡喜なく、自信を失っている模様。

砂漠の如き此の地に、大情熱をもつて、奮^たい起つことを心に決める。而^{しか}し、小生の此の

意氣を受けようとせぬ、幹部達の無氣力、大使命への無認識を悲しむ。

私は、どこの支部も、どこの同志も、幸福であつて貰いたいのだ。潑刺はつらつと、團結して、学会を、日本の、世界の、学会にすることを夢みているのだ。それが、取りもなおさず、われわれ吾々全学会人の幸福に通ずると確信するからだ。

戸田先生の意こころを知らぬ、二、三の最高幹部の偏見と狭量を、私は悲しむ。

午後、先生宅にお見舞い。先生、非常に喜んで下さる。来客、一人も無かった様子。帰宅、十時三十分。

一月二十六日（月）

曇

元氣一杯に、一日働く。

本年、第一回目の講義をなす。ますます益々、学問をせねばならぬと、自覚するのみ。

夜遅く、会社の友人達と、私宅にて会食。——二十年後を夢みて、共に思う存分語る。

先生のお具合、良好ならず。今日も、お休み。いかなることでも、喜んでお供し、戦うことを、心に誓う。そして、不肖の弟子の挽回ばんかいを、絶対にせねばならぬと、堅く決意す。

就寝——十二時半。

一月二十七日（火）

雨後雪

寒き一日であつた。

先生、本日もお休み。ゆっくりと静養して戴くいただことが、最も良いと思う。

雪、紛々ふんぶん。『法律原論』を、私を中心に勉強。次第に進む。

八時、帰宅。早目に、休むことにする。

一念、一心。石に矢の立つためしあり——の格言を、思う。

先生の「常に信心、信心ほど強く偉大なる力なし」との言葉が、少しずつ感ぜられる昨

今となる。

一月二十八日（水）

曇

本年、最初の地区講義にゆく。鶴見市場。元氣にて、思う存分講義す。

先生の指導で、今日より『十八史略』を読み始む。

夜遅く先生宅、訪問。お元氣になられた模様。「明日より、出るよ」との言葉。――

一月二十九日（木）

晴

先生、お元氣になられる。嬉し。

夜、本部において、教学部員講義あり。

その都度、勉強せねばと思うなり。

講義終了後、部隊長会議。帰り、部長、部隊長等に、S園にて、食事を御馳走する。
帰宅、十二時。

人生を、青春を、謳歌して、進みたいものだ。

一月三十日（金）

快晴

学会、本部幹部会。厳粛の感あり。皆、真剣である。皆、闘魂に溢れている。広布達成をめざし、奮い起つ菩薩界、仏界の縮図を思わせる感あり。而し、前途は、嶮山あり、大暴風あること眼前なり。

吾等の時代に、広布の達成は、出来得るか。五十年後か、百年後か、二百年後か。——
詮ずる所、二百年までの覚悟と、確信とを持し、夢みながら、今世を折伏戦に戦いきり、死する以外はなからう。——

一月も、早過ぎぬ。

帰宅、十時三十分。

「二月」——昭和二十八年当時の男女青年部の編成は、男子部四個部隊、女子部五個部隊であった。これに対し、支部数は十六で、一つの部隊がいくつかの支部にまたがって活動を進めていた。また、部隊は男子部が班・隊・分隊、女子部が班・組によって構成されていた。池田名誉会長が部隊長に就任した第一部隊は小岩、向島、城東の各支部の青年からなり、二十七年十一月末の時点で三百十七人の陣容であった。

日記にある「星落秋風五丈原」の歌は、土井晩翠ばんすいの詩集『天地有情』に収められた同名の詩に曲をつけたものである。作曲者は不詳。中国の魏・呉・蜀の三国時代に劉備りゅうひ玄徳への忠義に生きた蜀の国の丞相・諸葛亮孔明の姿をうたっている。新年宴会の席上、池田名誉会長らによって披露されたこの歌は、総本山を外護し、日蓮大聖人の御遺命である広宣流布達成のため、不惜身命の実践を貫いていた戸田第二代会長の胸中に響き、その後、学会のなかでも歌われるようになった。

この年、一月十五日には国鉄、私鉄が運賃を値上げするが、税制の改正にともない、酒税、入場税などが下がり、酒類や映画の入場料は、やがて値下げになる。昭和二十八年当時の主な物価は次の通り。国鉄運賃（三等）は東京—大阪間で八百七十円。清酒（二級）は五百二十五円から四百四十五円に、ビールは百三十円から百五十円に。映画の入場料は一般百三十円が百二十円に。また精米十*六百八十円、新聞（一カ月）二百六十九円、ハガキ五円。

二月一日（日）

快晴一時曇

青年部の同志、三々五々と、指導を受けに来る。

六時、月例青年部会に出席。本年一年間の堂々たる出発をみる。歛よろこばしい。先生に、かくれた吾等われらの団結と、成長を、いつの日か見て戴いただこう。

私は、教学の重要性について、述べる。即ち、自己が先驅をきり、模範とならねばならぬ。この一年、飛躍することを、自身に誓う。

二月の戦い、公私共に開始。この両腕を、振るい切れることを、男子の本望とせねば。――

二月二日（月）

快晴

教学部講義。「法華取要抄」。

一日中、暖かな日であつた。

『新・平家物語』——平治の乱に入る。感深し。興亡盛衰。人間葛藤かつとうの歴史に、悲惨多し。

強く、正しい人間観、世界観、宇宙観を確立し、無血革命しゆく人が、最も優れた人なりと思う。善悪の基準を超越しても。——

講義の後、K兄を誘い吾わが家に帰る。勉学の友とし、先輩として、大白蓮華の「富士日興上人詳伝」を習う。

帰宅、十時二十分。

二月三日（火） 曇

地区講義——「四菩薩造立抄」。

受講者、四十数名。

力ある講師でなければ、真剣なる受講者に相済まぬ。
講義終了後、個人指導。

人生の真実の悩み、人生の真実の声。これに取り組み、指導、解決を与えることは、人生最大の尊き仕事と思う。

唯、^{ただ}力なきを悲しむ。

二月四日（水）

曇後快晴

身体の具合、悪し。背中に、焼けたる鉄板を一枚入れたるが如し。且つ、^か焼けたる木を、一枝、胸中に入れたる感じなり。

身体さえ、頑強に、健康になれば、何も恐れることなし。そは、信心以外に、解決の途^{みち}はなし。

小岩支部幹部会。常泉寺。六時三十分開会。盛況となる。自分も、思いきって起つ。

帰り、I宅に、先生と共に寄る。

I氏の問題について、学会、仏法の峻厳しゅんげんなる指導をみる。身の切られる思いあり。

先生を、ご自宅にお送りする。すでに、午前一時を回っていた。

これも、思い出の深き、歴史の一夜となろう。

学問をしなくては。——男子は、力ある、偉き人にならねば。

二月八日（日）

快晴

天気良好。春季の薫光を感じる。

大石寺、登山参詣。——先生の奥様と共に。日帰り。七時三十六分、東京発、浜松行きにて。

先生のお身体、芳かんばしからず。痛切に、将来の学会の自覚の念せまる。先生、どうか生き

ながらえて下さい。

自己の身体も、又よからず。私は若い。第六天の魔王に勝つことだ。

車中、疲れ、休む。

二月十日（火）

快晴

心身共に、疲労。――

埼玉、川越地区に講義。――「佐渡御書」。受講者、約五十名。次第に、人材、人物が、輩出して来た様子。

共産主義国対自由主義国、世界の二大陣営の激突に苦悩する。吾々の前進が、その第一段階の橋渡しか。

而れども、今の力なき存在では、如何ともならず。時を待て。時を待て。同志よ。民衆よ。人類よ。――

〔二月〕——二月一日にはNHKテレビ局が東京地域で本放送を開始した。当初の放送時間は一日四時間、受信料は月額二百円、受信契約数は約千五百軒である。受像機の値段は国産17インチで約十五万円。庶民の生活にはほど遠かった。放送内容はニュース、歌、映画が主体であった。商店やレストランでは客寄せのために受像機を置くことが多く、放送開始日の銀座では街頭テレビ前に数百人の人だかりができた。八月には民間放送も始まり、相撲・プロレスの実況放送を伝える街頭テレビは二十年代末から三十年代初めの時代の風物詩となった。

昭和二十八年は不況のなかに幕を開けたが、この年の春には長期欠席者や未就学生徒のため、東京の葛飾、墨田、大田の各区で夜間中学が相次ぎ開校する。二月一日付けの「朝日新聞」東京版によると、すでに開校し、モデルとなった足立四中では「知能、心身とも昼間の生徒に比べ劣っていない」との総合結果が出ており、むしろ向学心は昼間の生徒よりはるかに高かったという。家庭が貧しく、昼間働かねばならなかった青少年にとって、夜間中学の開校はまさに朗報であった。

三月一日（日）

曇

春暖。弥生^{やよい}の月に入る。人生の、理想と、希望とが煥発^{かんぱつ}しゆく候だ。

此の一か月、若さの限り、振る舞うことだ。青春を謳歌しながら。

昨日は、S氏、H女史を、指導、折伏する。生意氣のようなれども已むを得ない。

Sさん、お守り御本尊様を紛失す。生涯の信心を、深く清くなしゆくことだ。これ以外にお詫びはなからう。而し、純真、清純なる心に、大聖人様が、生涯、このことを、苦しめ通しでゆかれることも無いと信ずる。所詮は、その人、その人の真心に尽きると思う。

四時三十分、先生の奥様、来て下さる。

七時三十分、小岩支部幹部会。出席。

三月二日（月） 曇後雨

新教学部員会。約五十名出席。於本部。真剣なる教学の態度に、胸を打たる。此の人達が、十年後、二十年後の学会を、思想界を、立派にリードしてゆくことだろう。頼もし。

本部の帰り、小雨降る。

T兄、S兄、共に家に来る。

「観心本尊抄文段」の研究を始め。

一、学問ヲナスコト

一、研究的デアルコト

十二時過ぎまで、談合。

三月三日（火）

曇

六時、常在寺にて、青年部会。

第一部隊、断然、第一位となる。他の三部隊、驚歎の様子なり。

先日は、班長全員に歌を託す。

ここに、新たに、分隊長全員に檄文げきぶんを送る。

我が部隊より、力ある広布の人材が、ぞくぞく輩出することを祈る。全部隊員よ、一人も退転するなと祈る。全部隊員よ、全員わ吾れより、優れた人材に育てと祈る。

御本尊様の大慈悲を、沁しみ々と感ずる日々である。

三月四日（水）

快晴

先生、扁桃腺へんとうせんとのこと。遅くお見えになる。大事にして戴いたきたい。それには、弟子が速やかに育つことだ。

スターリン首相、重態の発表あり。世界の一大転換期に入る。

七時三十分——私宅にて、青年部員約二十数人と共に、「諸法実相抄」の講義。十時三十分、散会。

身体の調子、少々良好となる。

春來たる。翠光薫る、春來たる。

青年の胸よ、弾ひびけ、羽ばたけ。——

就寝、十二時半。

三月六日（金）

快晴

身体具合、全く悪化。昨夕は、全体会議。先生、荒れ狂うが如く、指導、叱咤しったさる。思うこと、誠に多し。

金曜講義。講義中、眠くてたまらなくなる。こんなことは、初めてなり。

女房の父母、S兄、T兄、来宅。遅くまで談合。おそみんな、吾が家に來ることが、楽しいとの事。十一時過ぎ、帰る。

種々、自分のことを反省する。

就寝、一時三十分。

三月八日（日）

朝雨、晴後曇

朝方、豪雨。

七時起床——早急に品川駅にゆく。T部長らと共に登山の途につく。

十二時——本山着。

一時、お目通りをなす。

二時三十分、御開扉。

五時——下山。

信心して六年。月参りをする事が出来た。実に嬉しいことだ。福運大なり。

人のため、法のため、社会のために、心おきなく活動出来ることは、実に幸せのことなり。これ宿命打開の直道とならん。

ソ連、次期首相にマレンコフとのこと。

三月九日（月）

快晴

本部にて四級講義。剣豪の修行を思わせる先生の峻厳しゅんげんさ。弟子達の真剣さ。教学の度たびに思うことは、勉強不足である。勉学の必要を、深く深く感ずる。

U男子部長と共に帰る。健康を欲する。

学会の幹部は、未来の人、そして、孤独の人、誠実なる人を、心から激励し、擁護してあげねばならぬ。

自己を、深く反省する。決して自惚うぬぼれてはならぬ。建設と、修行と、努力と、教学をば、生涯失ってはならぬ。

帰宅、十一時すぎる。

〔三月〕——昭和二十八年の男子青年部の活動は、他宗派への折伏に重点がおかれていた。三日の

青年部会で発表されたその折伏数は、第一部隊・五十五世帯、第二部隊・二十七世帯、第三部隊・十九世帯、第四部隊・二十世帯であった。一月に池田名誉会長の第一部隊長就任によって、躍進の息吹みなぎる第一部隊の活躍が光った。なお、重体の報の伝えられたスターリン・ソ連首相は五日に死去。次期首相にはマレンコフが就任した。

四月七日（火）

曇

一日中、身体の具合悪し。苦しい一日であった。健康を欲するのみ。

世界は、激しく動く。未だ、学会は、世界にとって、塵ちりの如き存在かも知れぬ。而ししか、十年、二十年、否、三十年後を見よ。必ずや大聖人の大生命哲学が、輝き渡ることであらう。それまで、戦わねばならぬ。それまで、進まねばならぬ。責務と使命ある吾等われらは。――

四月八日（水）

晴

部隊長會議。九時三十分まで。

十九日の総会の準備を、打ち合わせる。一段一段とすべて充実して来た模様なり。

四月、

花は咲き乱れぬ

そして、風と共に散りゆきぬ。

四月、

若人^{わこうど}の心の花よ咲き香れ

若人の前進の歌も、舞いゆかん。

四月、

青春の月、若人の月。

四月、

青年の月、人生謳歌の月。

四月、

ホイットマンも、ゲーテも、

ミルトンも、ダンテも、

みな、心より歌い、戦い、

悩み、進みしは、四月。

夜、読書。

〔四月〕——この月、池田名誉会長は、文京支部長代理に就任した。各支部が飛躍的に弘教を進めるなか、最も低迷していた同支部に対し、戸田第二代会長の打った布石であった。名誉会長は、男子第一部隊長としての激闘の最中、足繁く文京に通い、激励を重ねた。信心の呼吸の合った前進の結果、最下位から中堅へと徐々に上昇した文京支部は、十二月には四百三十一世帯の弘教を達成し、堂々と中堅支部の上位に進出している。

六月十二日（金）

曇

夕刻六時より、分室にて、数名の同志と共に、「開目抄」の校正をする。若き編集時代の日を思い出す。

七時三十分——豊島公会堂にて、金曜講義あり。出席。毎週盛況の模様、嬉し。
先生の確信、先生の名講義を聴講す。実に嬉し。

身体の調子、次第に悪化。実に残念なり。

九時より、K氏等と、イレストランで会食。元氣出ず。苦し。

六月十四日（日）

曇

梅雨。

心身共に苦痛。宿業か、罪業か。

先生、関西総会に出席のため、九時の特急「つばめ」にて、出発される。駅までお見送りをする。

自分も、最早^{もはや}二十五歳となる。

牧口先生は、三十二歳にして、革新に富んだ、世界的な『人生地理学』を著される。

我が恩師、戸田先生も、三十代にして、『指導算術』をはじめ、自力の出版にて、日本を席巻^{せうけん}せらる。

自分は、その年になにを成すか。――

橋本地区総会に出席。盛大であつた。十時九分発にて帰る。
疲れる。本年最大の疲れなり。

六月十五日（月） 雨後曇

心身共に疲労困憊^{こんぱい}。十時三十分まで休む。

K兄には、ほんとほんと困る。

梅雨一入^{ひとしお}深まる。自己の身体の、苦痛の如し。

“健全ナル精神ハ、健全ナル身体ニ宿ル”か。否、心身同時に、健全でなくてはならぬ。これこそ、信心の極理であるのだ。

左の事項を、完遂しゆくこと。

- 一、吾^わが支部の目的達成
- 一、吾が職場の使命達成
- 一、教学の研究

夜、武蔵野地区総会。全く不況。残念である。

最近、頭が鈍って来たようだ。根本的な解決は以信代慧しかない。

就寝、十二時。

六月十六日（火）

快晴

今日より、上衣を脱ぐ。夏らしく暑くなった。

午後、K宅にゆく。長時間、種々懇談――。

良くなったものだ。嬉し――。

夜、水滸会。先生、ひどく怒らる。

我等悪し。全く、魂なく、意気地なきことを反省する。

先生、約一時間にして、退場なさる。

我等、十時まで反省する。心、雲の如し。

一、時間ノ観念

二、部隊長同士ノ団結

三、水滸会ノ目的、決意、熱意

先生の怒りは、全部、吾人の責任と猛省するのみ。

この転換は、信心。信心の力以外に、解決と前進の道なし。

夜半、兄来る。非常に大変な様子。

六月十七日（水）

晴

部隊会。小岩、M宅——道を間違えて、会場に八時着。

出席人員、約百名。皆、元気。希望と、決意と、躍動と。――

嬉しい。この中より、未来、幾人の高杉晋作が、久坂玄瑞が出現することか。

汚れた服――よれよれのシャツ――ばさばさしている髪――而し、未来を指して生きゆ

く、青年の尊き瞳ひとみ。

況や、内証は、妙法の若き革命児の集合なり。

この百人を、千人に、万人にしてゆくことを、胸深く決意する。後輩を大事にしよう。後輩を、吾れより偉くせねばならぬ。これが、先輩の、幹部の使命と自覚する。

十時過ぎ、集会届けの件にて、警察に呼ばれる。一人、小岩警察におもむく。段々、面白くなって来た。

充分事情を説明して、遅く帰宅。

何事モ、戦イ抜ク者ガ

最後ノ勝利者ナリ。

就寝、三時。疲れる。

六月十八日（木）

曇後雨

六時三十分、本部にて、部隊長会議。皆、真剣。非常に意義あり。

議題

一、国柱会破折ノ件

一、仏立宗攻撃ノ件

一、妙福寺問題ノ件（編注・福島、正宗寺院の村八分事件）

一、水滸会ノ在リ方

一、教学振興ノ件

以上

梅雨、しきり。大森駅にて、豪雨に遇^あう。

身体の具合悪し。

就寝、二時少々前。

六月十九日（金）

曇時々雨

心身共に、疲れてならぬ。

一日中、重病人の如き思いあり。悲し。悔し。

嗚呼^{ああ}、罪業か、宿業か。宿命のつらさよ――。

負けてはならぬ。使命あれば、勝たねばならぬ。為^なすべき仕事、多々あるなれば――。

師匠、戸田先生に捧げし、此の一生。

こんなことで、わが意思が崩れてたまるか。

恐ろし。

吾人^{ごじん}の我儘^{わがまま}と、輕率を、反省せねばならぬ。

ただ、ただ、先生に、申しわけなきことばかりなり。

金曜講義。「四条金吾女房御書」及び「四条金吾殿御返事」なり。
実に、感銘深き講義であつた。

偉大なる師匠についた幸福は、正に無限である。

帰りに、同志二、三人に、すしを御馳走してあげる。

疲れた。

六月二十一日（日）

曇時々雨

夕刻小雨あり。

九時少々過ぎ起床。

K氏来る。彼には、ほんとよわる。

S兄、来宅。

二時三十分、星薬科講堂における蒲田支部総会に出席。

盛大であつた。凶に乗らず、撓たわまず、前進されんことを祈る。

来賓祝辞をする。

帰り、H兄と、五反田にて食事を共にする。

友よ、元気で、明るく進まれよ！

六時三十分、T支部長宅。七時三十分より、支部幹部会を開催。

本日までの折伏、百十四世帯。支部発足以来の成果となる。

来月は、二百世帯突破を誓い合う。

着々と学会軍勢の、駒は進む。否、仏の軍勢の白馬は、怒濤どとうを乗り越え、進まねばならぬのだ。

六月二十二日（月）

曇時々雨

身体の具合、全く悪し。

夜、四級講義を休む。早目に帰宅。

友の、元気に講義を受ける姿が目に見え。前進せねばならぬ時、休むことは、これ程

までに辛いものか。

明日の、仕事のことを思索する。元気なし。

題目を、沢山あげることにする。

就寝、十一時。

〔六月〕——六月十二日の日記のなかにある「金曜講義」とは、初信者を対象にした戸田第二代会長の御書講義である。毎週金曜日に行われたことから、この名称で親しまれた。受講者の急増のため、この年の春から会場を東京・池袋の豊島公会堂に移したものの、毎週、都内はもちろん、近県から駆けつけてくる人たちが壇上までギッシリになり、毎回二百人近い人たちが場外にあふれた。それでも場外の人びとは裸電球の下で御書を拝し、窓ガラスに顔を押しつけるようにして講義を聞いた。

水滸会は発足約半年後の六月十六日、会員間にいつか忍び寄った安易な姿勢を戸田第二代会長に厳しく叱責され、再開のめどの立たないまま暗礁に乗り上げた。このことを深く悩んだ池田名誉会長は、水滸会の目的が広布後継にあることを明確にするため①大御本尊に対する誓い②戸田会長に対する誓い③会員同志の誓い、からなる宣誓を起草した。七月二十一日には新編成のメンバーが戸田会長の膝下にふたたび集い「水滸の誓」ともいふべき宣誓書に署名、捺印した。水滸会は蘇った。

十月一日（木）

雨一時曇

蒲田・矢口にて、S夫妻と会う。大阪において、敢闘の由、慶賀にたえず。

“九月度の本尊流布は、文京に破られた”と、口惜しそうであった。善人、善友の多幸を祈る。

夕刻、T支部長宅に飛ぶ、留守。婦人部幹部と、種々談合する。

六時三十分、青年部幹部会――。

各部隊の千名結集と、対仏立宗攻撃等、全幹部に厳しく指導する。

I部隊長に、帰り際に会えず、残念であった。

十月二日（金）

雨後曇

秋雨蕭々^{しやうしやう}。

連日、連夜の敢闘に、自己が成長出来得る境遇に、感謝多々なり。

青年時代、青春期、健児の時代に、全魂を打ち込める仕事、使命、活動を持つ身の福運よ——。

来春は、二十六歳か。

建設、向上、戦闘、前進、精進——唯々^{ただただ}、師の下^{もと}に、生き、戦い、進むことだ。

青年幹部らしく。門下生らしく。革命児らしく。

矢口で、Y君と、仕事の事にて会う。

夜、支部長と共に種々語る。立派な支部に、建設すること。力ある人材を育てゆくこと。この二点を成就する旨^{むね}を、結論とする。

金曜講義。先生、喉^{のど}を痛められている様子。

祈る、祈る。広布の日まで、御健在を。

十月三日（土）

晴

秋晴れ、満天に亘^{わた}る――。

旭光、天地に輝く――。十月は、静かで、深く、広々たり。

青年の大志、希望、思索も、斯^かくありたし。

横浜・黄金町に、K君と共に出張。なかなか、うまくゆかず。信心即仕事と反省する。

朝の、先生の講義、天文学、半^{なか}ばを越える。仏法と天文学の関連性に、胸躍^{おど}る。

帰宅、一時過ぎ。

喜劇と、悲劇の交差が人生か。

十月四日（日）

曇

午前中、自宅。疲れが出る。唯^{ただ}、願わくは丈夫になりたし。

午後、T支部長と共に、神奈川県・橋本にゆく。H氏の入仏式のために。

帰り、新宿にて会食。師匠の事、学会の前途、支部の革新等、種々語る。

十一時、帰宅。革命児は、家に居るのが少ないことは、当然のことである。私達の幸福建設なれば。――

地球も、太陽の焰ほのおも、生命の細胞も、草木の成育も、すべて停滯ていたいするものなし。
広布実現の指導、信心も、止とどまる事があつてはならず。

師を想う、学会を思う、同志を考う。

十月五日（月） 晴

秋晴れ。

雨の日もある。雪の日もある。曇りの日もある。同じく、元気の日、悩める日、悲しき

日、悔しき日、又あるらん。

城東方面に行く。仕事、思うように運ばず。青年の心の動揺は、激しきものだ。強く、正しく、撓たわまず——克こつ己。

六時、全体会議——八時終わる。先生より、種々指導を賜る。帰り、社員等と、銀座を通り帰宅。久しぶりの中心街の夜の変化に驚く。

十月七日（水） 晴

晴れ渡る、秋の一日。

太陽は輝く。天空は、夢の舞台の如し。

人生も、輝いて、此の地球の舞台で、乱舞し衆生所遊樂してゆきたいものである。

天文学、終わる。将来の最良の糧かてとなる。深謝する、先生に。

読書。『織田信長』——勇猛なる将。明晰めいせきなる頭脳。男性の本望たる活動。藤吉郎も、面白き、親しみ深き人物なり。

幾度も、歴史の本を読むよう、常に先生はいわれる。大事は、史観なりと。——

夜、武蔵野地区講義。出席者、約八十名。

帰宅、十一時少々前。

十月九日（金） 小雨

一日中、心身共に、苦痛。

自己の信心の、向上あるのみ。自己を、峻厳しゅんげんに修行させてゆくことだ。

雨の中、Mさんの親戚の、新宅購入の交渉に、横浜市中区に行く。帰り、横浜にて、味覚を楽しむ。

金曜講義。「開目抄」——頭痛にて、講義頭に入らず。先生の、全生命より雄叫おたけぶ氣迫に、涙ぐむ。

先生、何卒なにとぞ、あと三十年長生きして下さい。日本のため、東洋のため、世界の平和のため。私は犬馬の勞をいけません。祈ります。唯ただ、祈る。祈る。

帰り、久しぶりに、第一部隊の班長會議を行う。鬪將、決然と、再び起つ。

十月十日（土） 晴

秋晴れ。

会社のMさんと、会社の将来のことにて、午後まで相談。良い人である。

身体の具合、芳かんばしからず。

夕刻、妻と、銀座にて買い物をする。

疲れ、早く帰り、倒れるが如く休む。

宿命打開の信心。簡単にゆかぬものだ。

疑ってはならぬ。原因は、自己の一念、信心だ。

使命があるのだ。使命が無ければ、地涌の菩薩は、生きている必要はない。人間、使命を忘れてしまつてはならぬ。なれば、強く、撓たわまず、勇敢に信心の精進あるのみだ。

十月十一日（日）

晴

六時三十分、起床。日帰り登山。

車中にて、良く眠る。勉強せねばならぬと、痛切に思う。

御目通り、一時。

御開扉、二時。

身体健全、当面の仕事、部隊の発展を祈る。

帰宅、八時過ぎる。実に疲れる。無理が続いているのか。

十月十二日（月）

雨

一日中、小雨。

灰色の世界。吾^わが心に似たり。

四級講義、休む。

M君の結婚の事で、S宅に談合に行く。帰り、目黒にて食事をする。去年まで住みし地に、懐かしさをおぼえる。

夜、部隊員、二、三人が、指導を受けに来る。可愛い。実に可愛い。退転なきことを切望する。皆、偉い。皆、勇ましく、苦難と戦い、人々を救っている。苦しき生活とも戦っている。

尊いことだ。一人一人を、心から大事にせねばならぬ。巷間は、刹那主義^{せつな}の、無責任の青年の多き事よ。

政府は、此の事実、此の二者を、どのように賞罰してゆくつもりか。

善悪の基準のなき、政治の愚^{おろ}かさよ。

就寝、十二時。疲れた。

十月十三日（火）

晴時々曇

『花の生涯』を読む。

何といっても、教学を深く、備えねばならぬ。

七時、自宅において、班長会議。

「諸法実相抄」の講義をする。自分の講義の反省を要す。

皆、元気で帰って行った。弟より、親類より、縁深く、可愛らしき、後生こうせいよ、友よ、同志よ、多幸を祈る。無事の成長を祈る。

ああ、時は去る。時は去る。

新しい、時よ来たれ。時を待つ。時に生きなん。青年時代よ、有意義な前進だ。

辛くとも、悲しくとも、青年らしく、学会っ子らしく、元気で、明晰に。

反省——先生より、出社遅れる。全くの不肖の弟子と、嘆く。

十月十五日（木）

晴

七時、東京・池袋の常在寺。対仏立宗、上田応声以下、代表四名、青年部八名と会談。春より、惹起している、正宗本尊強奪事件の交渉である。

十時まで、続く。最後のあがきの、彼等の卑怯な行動に、激怒する。

夜遅く、銭湯へ。約一貫目、痩せている。驚く。天高く、馬肥ゆる候というのに。身体の変調しきりなり。自分と戦うことだ。

明夜、先生は、仙台方面の指導である。上野発、十時四十五分、準急とのこと。お見送りに行こう。秘書なれば当然のこと。

就寝、二時過ぎる。

十月十七日（土）

曇後雨

秋雨。

一日一日の過ぎゆくことの速きことよ。大河の流れに似たり。吾れ、いか程の成長ありや。猛省せん。

夜、先生の御家族の奥様、坊や、妻、四人にて、国際劇場に行く。

秋の踊り。思いきり、躍動する、乙女等の踊り、生命の息吹、その姿、頼もし。

帰宅、十時過ぎる。明日の地区部長会の打ち合わせに、幹事二人、来宅。

十月十八日（日）

曇

午前中、読書。

午後、支部長宅へ。五時より地区部長会。皆、元氣である。

嬉しい。唯、各自の生活のことが心配でならぬ。而し、皆、功德に輝いた顔である。よく成長したものだ。よく自分と一緒に戦ってくれた。感謝にたえぬ。その顔、その人、その功績をば、妙法は、永久に照らすことだろう。

私も、一生涯、決して忘れない。

十時より、総会の打ち合わせ会をする。更に、支部幹部会の、企画を練る。

帰宅、一時。

闘え、されば魔は退散せん。進め、されば、雲を破り、仏界の朝日は、必ず出でなん。

十月二十二日（木）

晴

六時三十分、起床。

八時、出勤。千葉、勝浦に出張。

帰京、八時。九時より、教学部助師と勉強。

Y君、少々慢となつて来る。そろそろ嚴重に、指導の要あり。自分が謙虚けんきょになっていると、凶に乗つて来る。自分が指導し、叱しかる以外、誰人も指導は出来ぬだろう。

本年も二か月余となる。

自分も、新たな決意、自覚をもつて、働かねばならぬ段階になつて来た。独身時代の、浅い考え方ではならぬ。すべて、責任をもつていくべき時代に、なつて来たわけだ。

所詮しよせん、一步、一步、信心根本に、撓たわまず、大目的を失わず、進むことだ。あとは、大御本尊様が、解決して下さることだろう。――

十月二十六日（月）

晴後曇

聖教新聞社員等含めて、計三十六名にて、秋季の慰勞旅行。塩原温泉であつた。

戸田先生、御病氣の為、出席出来得ず、誠に残念であつた。

二十五日、朝、八時、市ヶ谷ビル前、出発。二時、塩原、玉屋旅館着。

二十六日、十時。玉屋旅館発。

二時、鬼怒川着。四時三十分発、東京・上野に十時着く。

直ちに、御報告に、目黒の先生宅に。先生、微熱が下がらぬ御様子。みんなの、楽しんで元気な様子を申し上げる。非常に喜んで下さる。

種々、学会、事業等の指導を賜る。

明日は、お出ましの由、嬉しい。

帰宅、十二時を回る。

〔十月〕——昭和二十八年の九月には「聖教新聞」が旬刊から週刊になり、毎週日曜日に発行されるようになった。当時の発行部数は二万一千部である。十月には、登山会参加者の増加にともない、月二回（第一土・日曜日、第二土・日曜日）に分けて登山会を実施することになった。この結果、十月度の登山会参加者は約四千人にのぼった。学会の躍進する息吹は組織のすみずみまで脈打ち、九月以降は毎月五千世帯以上の折伏を達成している。

十五日の日記に記された仏立宗による日蓮正宗の御本尊強奪事件は、昭和二十八年春から起り始め、秋には既遂、未遂を含めて約二十数件に達したという。これは仏立宗から日蓮正宗への改宗者が相次ぐにつれ、信者減少を恐れた仏立宗の僧俗が、改宗間もない学会員宅を訪れ、不法

に御本尊を持ち去り、焼却等に及んだ事件である。青年部では十月十五日に仏立宗の東京方面の中心寺院である乗泉寺代表と会談した。その席上で強奪の事実を指弾し、厳禁の旨、誓約させた。

十一月四日（水）

晴

心身共に、不調。

人生の終幕の如き、悲しき思い有り。

人生の旅路、二十五星霜。倒れてたまるか。

先生のお身体の具合、次第に悪化の様子。

先生、頑張って下さい。私も、断固、頑張ります。

文京支部、着実に前進あり。何と、善良な人々の多き支部よ、吾れは福運あるなり。

豊島の講義の帰り、支部長宅に寄る。何時も、明るく出迎えてくれる一家に、心で謝

す。種々、今後の打ち合わせを、支部長と練る。未来、福運が、山ほど積まれる一家たれ。

十一月十日（火）

曇

初冬。

薪炭^{すみ}が、必要の候となる。

杉並第五小学校にK氏を訪う。

先生の事にて。

——市ヶ谷まで、共に帰る。聡明な先輩である。

夕刻、鶴見市場の講義。「立正安国論」第四段終了。

九時三十分より、十一時まで、質問会をS宅で続行。もっと、文京の幹部の如くなって貰いたいと思う。

『皇女和の宮』を読む。

就寝、一時少々前。

〔十一月〕——昭和二十八年は生活必需品の不足が次第に収まり、庶民の生活水準が戦前並みに回復した。しかし、秋には天候不順、水害等のため、内地米が戦後第一の不作となり、ヤミ米価格が年頭の約二倍に高騰して、庶民の台所を直撃した。配給米が不足し、ヤミ米を買わざるをえない都市住民は、麦や人造米を混合したり、米食を減らしてパンやめん類等の粉食を増やすなど、自衛策を講じなければならなかった。

十二月二十二日（火）

雨後曇

細雨。

次第に、寒さを増す。

朝の講義、法律学、政治学、経済学、化学、漢文と進む。

先生の、身体をいとわず、弟子を育成して下さる恩——吾人^{ごじん}は、いかに返さんや。今だ。力、力、力を蓄える時は。あらゆる力を、後代の準備として蓄えん。

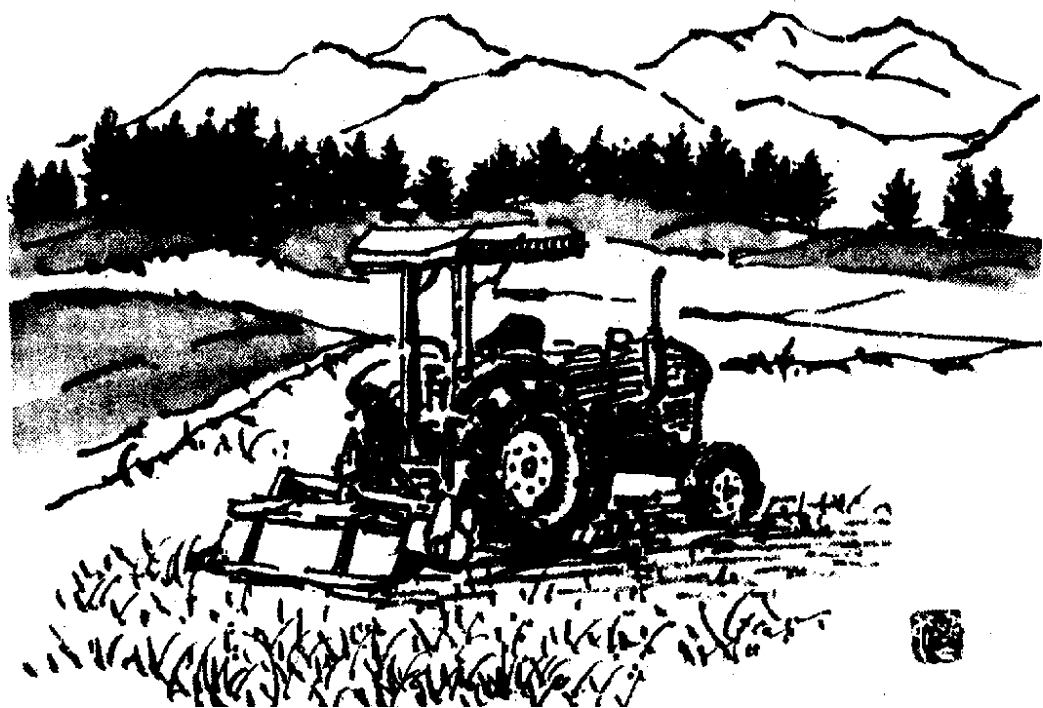
会社の歳暮に、足立を歩み、亀戸へゆき、日本橋を通って帰る。東京・市ヶ谷にて、支部長と、来年度の企画を練る。

身体の具合、すぐれず、早目に帰宅。ゆっくり、妻と二人して、すき焼きを食す。九時少々過ぎ、横になる。

〔十二月〕——昭和二十八年は戦後の混乱期からの脱皮と新時代の到来を予感させる年となった。主な社会的事象として、国内では奄美大島復帰、テレビ放送開始、国外ではソ連のスターリン首相死去と水爆実験成功、英登山隊のエベレスト初登頂等がある。また文化面では洋画に「禁じられた遊び」「シェーン」「ナイアガラ」、邦画に「ひめゆりの塔」「雨月物語」「地獄門」「君の名は」等の名作があり、また「雪の降る町を」「街のサンドイッチマン」「芸者ワルツ」等の流行歌が世相に彩りを添えた。

昭和二十九年

—一九五四年—



一月九日（土）

疊

日亨御隠尊^{にちこうご いんそんげいか}猊^し下の御指南を賜り、畑毛^{はたけ}にて、御書の再校正。
尊い仕事。大事な厳肅な仕事である。

春暖の陽気に、皆、不思議に思い、^{よろこ}歓ぶ。

教学を深めねばならぬ。哲学を深めねばならぬ。

教学が、学会の骨髓になってゆく事は^{ひつじょう}必定であるからだ。

指導者の第一の必須条件となるからである。

情熱も大切。実践も大事。それに、英知が、更に重要となるなり。

畑毛、T旅館に一泊。実に低温が名物の温泉に入る。教授陣、みな楽しそう。

一月十一日（月）

曇

寒い、寒い一日であった。

本年度、最初の青年部幹部会。

神田、教育会館。

六時開会。集合人員、約九百名。

戸田先生を迎え、その歓び^{よろこ}、限りなし。

終了後、約一時間、別室に於て、新年宴会を催す。

先生、次代の学会の世界は、学会の礎は、青年部なりと。皆に託すなりと指導さる。

元氣よく「一高寮歌」を歌う者あり。「荒城の月」を最後に、莊重にして、剛毅^{ごうぎ}な合唱で、九時三十分、幕となる。

先生の最後の言葉あり。

「私は、断じて、革命を断行してゆく。而し、私の革命は、慈悲と道理による、無血革命なり」と。

耳朶に殷々と残る。

一月十二日（火）

薄曇

寒い一日であった。

元気になられて来た先生のお姿に、胸躍る。嬉しい。先生さえ、おられれば、お元気なれば、私は、万々歳なり。あとは、怖いものは、世界にこれ全く無し。

六時、支部長宅、班長会議。

幹部を叱る。可哀想に。心で謝る。

而し、全軍の前進の為には、已むを得ぬ時もあるものだ。

班長会終了後、十一時まで——幹事会。

遅いので、壮年幹事は、疲労の様子であつた。青年と壮年の、年齢差を考えての会議でなくてとはと、帰り道、一人^{おも}念う。

一月十四日（木）

曇

朝の講義、日本歴史、相当進む。

限りなき青空に、わが胸、広くなる感じ。

毎日、少しずつ、御書の校正続ける。今夜は、その交換の日となる。先輩校正部員の偉さを、沁々^{しみじみ}と知る。

六時三十分、御書校正の交換。

九時より一時間、第二会長室にて、小宴会。

皆、歌を楽しくうたい出す。

先生、おられず、小生、全く面白からず。皆の心を疑う。“会長室などで何だ”と。

帰宅、十一時半。

一月十五日（金）

晴

成人の日である。

朝湯に行く。午後、先生宅にお邪魔する。遅くまで、楽しく、歓談して下さる。
七時三十分、失礼する。

十時三十分、K君等来宅。一時間、真剣に話をする。人の心の、変化に驚く。そして、
自己の厳しき叱咤しつたに驚く。

一月十六日（土）

曇

六時——N園にて、子供会。

先生の御招待である。先生のお話を中心にして、結婚した人達の、集いである。

今年の第一回目より、多くなる。北京料理を沢山御馳走になる。皆、幸福そうである。

K氏、R氏、M夫妻、I夫妻、M夫妻、H夫妻、S夫妻、K夫妻、O夫妻、並びに、K夫妻、K女史、I夫妻、B夫妻等々であつた。

師の思いやりに、唯々ただただ、感涙。

一月十七日(日) 雨後曇

小雨。

午後、本部に行く。

M君、R君と、腹ごしらえをして、柳田国男氏宅に『価値論』を贈呈に行く。
成城学園、留守にて、残念。

六時より、八時三十分まで、第一回班長教学テストを実施。

一月十八日(月) 雨一時曇

六時、本年最初の、男女合同部隊長会議。

第二会長室。

先生、御出席。

先生の厳しき指導、吾れに有り。

一、十二部隊長を、四月までに編成の事

一、御書の校正は、厳正であるべき事

一、教学を徹底しゆく事

大要、以上のことであつた。

〔二月〕——戸田第二代会長は新年（昭和二十九年）の本部初勤行で「行くならば貴き御法身につけて こんろんの山も我は恐れじ」と詠んだ。崑崙山は、中国の西の果てにあるとされた伝説上の聖山である。この和歌からも戸田会長の東洋広布への熱き思いを感じとることができる。この年、学会は前年からの飛翔をさらに確実にするため、教学部体制の確立、青年部組織の改変等、組織整備に努め、年末には戸田会長の掲げた十五万世帯の目標を超えて十六万世帯の陣容を誇るにいたつた。

この時期、国民の関心と呼んだのは日本で初めての世界選手権となつた'54男子スピードスケー

ト世界選手権大会（一月十六・十七日、札幌市・田山特設リンク）である。この大会には六カ国十九選手が参加、総合成績では三位までをシルコフらソ連選手が占めた。新王者シルコフをかつての王者アンデルセン（ノルウェー）が担ぎ上げて祝福するなど、国境を超えたスポーツマンシップは、初めて外国選手を見た人びとに感銘を与えた。

二月九日（火）

快晴

昨夜、本部会長室にて、先生、発作を起こされた。

非常に、お具合悪かったとの事。

小生、大事な時に、留守で申しわけなし。

再三、私の名前を呼ばれていたと聞き、更に、胸痛し。

先生のお心、いかばかりか。……

本日は、少々良好の御様子であった。長寿を願うのみ。

先生の、不死鳥の如き生命力を、いつも驚嘆しゆくは、吾れ一人に非ず。

六時、水滸会。『水滸伝』第九巻を完結。小生が司会。七十六名の同志集合す。

十時三十分、会長室にて、先生と懇談。

昨日のことは、全くふれられず、悠々^{ゆうゆう}たる先生。「勉強せよ、勉強せよ」とおっしゃる。

帰宅、十二時過ぐ。

二月十日（水）

快晴

一時三十分、会長室に、先生をお見舞い。

種々、御報告に上がる。先生、オーバーローンの、大蔵省原案を教えて下さる。無知な自分に、あらゆる方面から、教示下さる先生の熱意に、感謝するのみ。

夜、池袋講義。

終了後、再び、十時、イチゴ二箱持参して、先生をお見舞いする。

非常に喜んで下さる。一時間、指導賜る。H氏も共に。――

先生の生命力、無限の御智慧には、本当に驚く。

帰宅、十二時を回る。

二月十一日（木）

快晴

先生の、五十四回目の誕生日。

朝、ワイシャツとネクタイを、お祝いとして、差し上げる。
非常に、お疲れの御様子。

二時、教学試験の面接。Y秘書と共に。

面接者、約四十人。

自己の力無きことを悔ゆる。

勉強せねばならぬ。撓たおまず。

向学心に燃えねばならぬ。青年らしく。

求道心もて進まねばならぬ。求道者らしく。

立派な指導者になる、第一要件なれば。

八時、常泉寺。

第一部隊会——集合人員、三百名。

盛況であつた。

未来の青年の、将来の大指導者の因果俱時の縮図を思う。

帰宅、十二時少々前。

二月十二日（金）

曇

暖冬。

春の、足音が響いて来るようだ。

希望、闘魂、——春なれば、湧出せん。

金曜講義。『価値論』、六時三十五分より。豊島公会堂、盛況。

而し、先生の病氣知れる小生は、お苦しそうな講義に、ひとり胸苦し。

大事な時代が、一日一日、一年一年、到来している。

弟子が、しっかりせねばならぬ。

眞実、眞実。現実、現実。

八時三十分、S宅にて、文京班長会。

帰宅、十一時三十分。

何となく、気分すぐれず。全く疲れた。怒る先輩あり、ねたむ友人あり、反感に満ちた人あり。

目的と、使命持つ人は、いかなることがあれ、莞爾かんじとして、真っすぐに、進む事だ。

二月十三日（土）

曇

十二時三十分、新潟行き準急にて、新潟方面の折伏に行く。

六時、現地着。雪多く、初めて踏む地なり。

歴史ある地、又、生涯の歴史に思い出ともなるらん。思ったより、温暖。東京より暖かなりと、一緒に来た友はいう。

七時、〇宅にて、指導会。出席者、百名。終了後、青年部員十一名と、深夜まで語り、激励する。

此の地よりも、未来の大指導者の輩出する事を祈りつつ。

而るに、幾人の同志が、真に、自分を信頼し、親しんでついて来ることだろうか。

自分の力と思つてはならぬ。妙法の力に、人々はついているのだ。学会の力について、同志は、前進しているのだ。

自分の無能を棚に上げ、知りたげの自分を嫌悪する。猛省、又猛省。

同志と共に、〇宅に一泊。

二月十四日（日）

曇一時雪

在新潟。

小雪。

向島支部員等、八班に分かれ、折伏に入る。

地方折伏の敢行。人材の少ない事を淋しく思う。

指導者は、第一にも、第二にも、人材を見出すことに、懸命でなくてはならぬ。

七時、班長会。

全力を傾注して、指導をなす。

唯今臨終の思いでの、信心、指導でなくては。――

いつの日か、再び、此の地を、訪れんや。――

この二日間の指導が縁で、幸福になれる人ありと思わば。――

終わって、青年部E分隊長に、和歌贈る。

大聖の嵐の因縁

ある地にて

法旗を高く

君等起ちゆけ

夜行列車、十時の準急で、東京に向かう。

二月十五日（月）

晴

新潟発夜行列車にて六時少々前、東京・上野着。

疲れる。K君等と、朝風呂にゆく。

八時過ぎ、出勤。

朝の講義、日本歴史、相当進む。

先生に、新潟の様子を、御報告。

「御苦労」と、一言あるのみ。

二月十六日（火）

薄曇

先生も、病魔との、戦いにたえられる。

自分も、病魔との、連続の戦いである。

燃え上がる信仰心にて、勝たねばならぬ。自分は、若い。これからの人生だ。先生の構想を、実現するエンジンなれば。

一日中、大回転——仕事。

帰宅、十二時を過ぎる。

闘争と、前進以外になき人生よ。わが宿命よ。

二月十八日（木）

雨一時曇

小雨。

社にて『モンテ・クリスト伯』読了。

読書は、智慧も、知識も、指導力も、そして御書の読み方にも、力を与えてくれる。

「生涯、三十分ずつでも、読書せよ。一生の間には、大変な長時間の読書になる」といった人がいた。

七時、文京支部幹部会。

場所、常在寺。

気持ち良い、幹部会であった。本当に、真面目な人々だ。純粹な人達だ。指導者達が、最も大事に尊敬し、賞賛しょうさんしていい、民衆の代表者達だ。

帰宅、十二時少々前。

二月二十日（土）

快晴

九時発、特急にて、先生と共に大阪に向かう。
その夜、青年部会。

二月二十一日（日）

薄曇

午前中、第六部隊（九州部隊）の同志と会う。皆、元気。

大阪に、九州に、四国に、若き地涌の菩薩は、雲集せり。

見よ、十年後を、二十年後を。

正午より、夕陽ヶ丘会館にて大阪・堺・八女の三支部連合総会。

——満員、立錐の余地なし。

五時閉会、六時より会食。

八時十分「明星」夜行にて帰京。

本部幹部、十五名と共に。——

二月二十二日（月）

快晴

七時十分頃、品川駅着。

Y秘書と共に、目黒の先生宅まで、お送りする。

朝食を御馳走になり、四十分程、種々、御指導賜る。

夜、七時より、明和印刷へ、御書の校正にゆく。

帰宅、夜半。

二月二十三日（火）

快晴

先生と、朝お目にかかれず。

一日中、何となく淋^{さび}し。

六時、水滸会。

先生、非常にお疲れの様子。全く、御機嫌^{ごきげん}悪し、七時、閉会。

先生に質問され、返答の出来ぬ自分を、心から恥ず。

自分の成長は、青年部の成長である。

自覚、成長共に、絶対の責務として、頑張れ。日本男子よ。学会青年よ。

帰り、T部長と共に会食。

帰宅、十一時三十分を回る。

就寝、二時。

二月二十五日（木）

晴

一日中、温暖。

午後、仕事の途中、K宅による。K氏も、信心が、強固になってきた。

事業も、順調なりと、喜んでいる。所詮、しよせん全人生の究極の欲求は、終結の願望は、信心の境涯にあらん。

夜、明和印刷にて校正。

終了後、H先生と共に、池袋T宅にて、班長会出席。

二月二十六日（金）

高曇

暖かな一日であった。

明和印刷へ、校正に行く。帰宅、十時三十分。小雨降る。

坊、すくすくと育つ。幸福な家庭。最高潮か。

銭湯に行き、帰って、音楽をかける。

楽しや、初春の、夜の小路。

〔二月〕——昭和二十九年は教学部の充実が大きく図られた年である。二月には第一回の助師、講師の登用試験が行われ、二十五人が合格した。これを契機として各地に教学研究けんきゅうの息吹が高まっていた。教授試験は論文審査となり「永遠の生命に関する御聖訓について」「広宣流布の予言と確信」「種熱脱を論ず」の三題から各自が選択した。審査結果は五月に発表されたが、合格者七人のうち六人は、池田名誉会長をはじめ当時の青年部幹部であった。

この年からプロレスブームが始まった。二月になってタッグ・レスリングの世界選手権を持つアメリカのシャープ兄弟が来日し、わが国の力道山（元関脇）、木村政彦（柔道七段）との間で選手権試合が行われた。その後も大物レスラーの来日が続くが、外人選手の反則に苦しみながらも日本選手が善戦するというプロレスの「構図」は敗戦から立ち上がった国民の心情ともマッチし、テレビの普及とも相まってプロレス第一期黄金期を築き上げた。

科学技術の面では、ラジオ、テレビ、電子計算機などの心臓部を形成してきた「真空管」にとってかわる新たな電子部品「トランジスタ」が、アメリカの技術援助を受け、この年の春から日本でも大量生産されることになった。トランジスタは真空管に比べてきわめて小型かつ軽量で消費電力も少なく、耐久性に優れていた。わが国ではまずラジオに応用され、携帯用のトランジスタラジオは三十、四十年代を通じて輸出の花形商品となった。

三月一日(月)

薄曇

温暖。

待望の、春が来た。

微風も、緑も、霞も、^{かすみ}皆、^{われら}吾等の生命力に、呼吸する如し。

六時、五級講義。

「観心本尊抄文段」

「彼ハ脱、此レハ種ナリ」の一行の段なり。

七時三十分より、一時間。

教学部員全員に対し、先生より、教授法についての話有り。

実に、面白く、深く、味わうべき話であった。

下田歌子の、『源氏物語』の教授法、及び研数学館の、どじょう先生の教授法をも、例として、述べられた。

九時～十一時三十分まで、T、U、H、M、R、私の六人にて、新部隊の構成をば、検討。青年部、十年先の計を思い、真剣であった。

三月二日（火） 小雨後薄曇

本年は、温暖の日が多い。

『後藤新平論』を読む。

進取、先見と実践の闘士であった。力ある指導者。而し、批判し、論すべき点、多々あ

り。桂、伊藤、西園寺等、明治の元勳との交友あり。更に、青年時代の、大胆なる振る舞いを愛する。

その思想、行動は、今論ずる必要はない。

五時三十分――。

本部で、部長及び四部隊長と共に、新部隊長並びに、新部隊の組織を研究。

七時三十分――。

池袋、T宅で、新人指導会。

九時四十五分―十一時三十分。

情報部の事につき、Y氏等と打ち合わせ。

三月四日（木）

曇後雨

熱が下がらず、困る。

無理をおして、出勤する。

六時三十分、男子部幹部会。

於、神田・教育会館。

九時、明和印刷にて、御書校正。

春の、吹雪ふぶきしき頻りなり。電車故障。

やっと、車を見つけ、帰宅。

十二時過ぎる。

三月九日（火） 快晴

本年八月で、入信七年目となる。一大転換期か。

微熱下がらず。どうも、身体具合悪し。

六時。本部にて、水滸会行わる。

『モンテ・クリスト伯』に入る。第二期生、第三期生と、優秀なる青年の輩出を、心から期待する。

先生の觀察、思索、見解の偉大さ、本当に私は驚いた。

帰宅、十一時少々前。

三月十日（水） 高壘

先生、少々、健康を取り戻された御様子。嬉しい、全く嬉しい。
日本史等、終了に近づく。

特に、鎌倉時代、足利時代篇に、興味をおぼえる。

十一時、第二会長室にゆく。

先生と、一時間語る。

- 一、生命論——死と病気とはイコールに非ずという事
- 一、第三代会長、理事長について

一、三年後の学会と、私への指針

一、学会を永遠ならしめていく重要項目について

以上の要点を指導して下さる。

不逞^{みてい}の弟子は、師匠の恩愛に、心から泣く。

夕刻、K氏と「大白蓮華」の編集の打ち合わせ。

三月十一日（木） 雨

一日中、雨。

午後、本部にて面接。十人内外。

個人指導も、なかなか難しいものだ。

先生、先輩の指導は、本当にうまい。その人の悩み、求めている要点を、良くつかみ、解明している。簡単のようで、実に大切なことだと思う。此の指導によって、その人の一生が決まってしまうのだ。

六時、御書校正、明和印刷——十一人の教学部員と一緒にあった。

三月十四日（日） 快晴

在大石寺。七時、起床。

靈鷲^{りようじゆ}の、聖域におれども、われ元気なし。

八時、牧口会長の墓参、読経、唱題。

九時、御開扉、祈ること多々。

富士発、一時十分、東京に向かう。車中の人となる。

六時三十分、常泉寺での第一部隊総会に出席。元気な青年の瞳^{ひとみ}、顔、頼もし。

三月十八日（木） 高曇

早朝——

“永遠の生命に関する御聖訓について”と題し、論文を書く。十五枚。教授試験の論文である。深き思索なき自己を、つらつら反省する。

六時、文京支部幹部会、常在寺。

元気ややなし、激励に力を注ぐ。

八時、「大白蓮華」編集会議。

十名の集合予定が、三名しか、集合せず。先生、非常に怒る。

当然の事なり。

徳川三代将軍の話有り。——先生を、お送り申す車中にてうけたまわる。

唯一人、先生を、厳護する決意深くす。

三月二十一日（日）

快晴

相構へ相構へて心の師とはなるとも心を師とすべからずと仏は記し給ひしなり、法華經の御為に身をも捨て命をも惜まざれと強盛に申せしは是なり。

（義浄房御書）

先生を中心に、職員等二十七名にて、春季旅行。十九日より二泊三日——楽しい旅であつた。

伊豆の蓮台寺温泉に一泊。

二日目、修善寺、南屋に泊まる。

先生も、疲れられた御様子。皆も、ぐったりしていた。

市ヶ谷レストランで、会食をし、それぞれ帰宅。

三月二十三日（火）

晴れたり曇ったり

早朝、原稿を書く。

六時、水滸会。次第に重責を感じてくる。

帰り、支部長宅訪問。

今後の、支部発展について、真剣な打ち合わせをする。

最高幹部の連絡が、支部運営の根本であることを主張。

何に法華經を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹かにの足ひと一つ入れたらんが如し、毒氣深入・失本心故は是なり。
(曾谷殿御返事)

三月三十日(火) 快晴

六時、本部幹部会。豊島公会堂。

本部命令にて、

情報部最高顧問。

参謀室長に任命さる。

一段、一段、学会の中核となつて、広布の推進をせねばならぬ。

これが、自己の使命だ。草花あり、花を咲かせる。これ使命なり。

自己あり、妙法の流布をいたす。これ使命なり。

帰り、支部長Mさん等と、すしを食す。

神と仏と法華經にいのり奉らばいよいよ増長すべし、但し法華經の本門をば法華經の行者につけて除き^{のぞ}奉る結句は勝負を決せざらん外は此の災難止み難かるべし。

(治病大小権実違目)

〔三月〕——この月、青年部の躍進にともない組織の拡充がなされた。三月三十日の本部幹部会では、従来、数支部にまたがっていた男女各七部隊を、一支部一部隊に発展、整備し、男女各十五部隊の陣容が発表された。さらに青年部に参謀室が設置され、室長には池田名誉会長が就任した。参謀室の設置は、広布の伸展を目指しての作戦の企画・立案を意図したもので、その後、池田室長のもと、青年部のみならず、全学会の推進力となっていた。

三月一日、マーシャル諸島ビキニ島で行われたアメリカの水爆実験により日本のマグロ漁船第五福竜丸が被爆するという事件が起こった。三月十四日に焼津港に帰港後、乗員二十三人が致死量に近い放射線を受けていたことが判明し、入院・治療が続けたが、九月になって乗員一人が死亡した。この事件を機に日本国内には原水爆の禁止を求める声がほうはいと起こり、東京・杉並区から始まった原水爆禁止署名運動は海を越えて全世界で約七億人の署名を集めた。

四月一日（木）

薄曇

春暖。

再び、春來たるの感あり。

躍進の候と、せねばならぬ。

楽しみあり、憂いあり——互いに交錯する青春の譜。

六時三十分、青年部会。

於教育会館。

青年部の歩調、実によく揃う。

次期段階を考え、全魂を打ち込む。

この人、この青年、二十年後、必ず檜舞台に立たせねば——。責務重大なり。

命と申す物は一身第一の珍宝なり一日なりとも・これを延るならば千万両の金にもすぎ

たり、法華經の一代の聖教しやうきやうに超過ちやうかしていみじきと申すは寿量品のゆへ故ぞかし、閻浮第一えんぶの太子なれども短命なれば草よりもかろし、日輪のごとくなる智者なれども天死わかじにあれば生犬いけるに劣る、云云。

(可延定業書)

四月二日(金) 雨後曇

朝、I君と、先生訪問。

五時、常在寺に、Tの反逆事件で談判に行く。筆頭理事をはじめ、数名にて。

八時、S宅にて、参謀会議。

講義終えられた先生来たり、原子爆弾の如く、叱る。

青い、青いと。ふるえられ乍ながら、叱って行かれる。先生の真意、全くわからず、猛省もうせいする。

但日蓮一人計ばかり此の事を知りぬ、命を惜おしみて云はずば国恩を報ぜぬ上・教主釈尊の御敵

となるべし、是を恐れずして有^{あり}のままに申すならば死罪となるべし、云云。（一谷入道御書）

四月三日（土）

晴

昨夜のお詫^わびに、戸田先生の自宅^{うかが}に伺う。

時に、五時四十五分。

先生、誠に、御機嫌悪し。

七時三十七分発にて、関西へ。東京駅まで、お見送りする。

なかなかお許しを頂けず、心晴れず。

夜、支部新任幹部のお祝いの為、会食。皆は、至極^{しごく}元気なり。

末法に入つて法華經^{たも}を持つ男女の・すがたより外には宝塔なきなり、若^もし然^{しか}れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり、云云。

（阿仏房御書）

四月四日（日）

曇

午前中、在宅。

午後、妙光寺に参詣。

多数の人の、参拝あり。日蓮正宗の興隆を、はた膚で強く感ずる。

七時、本部にて、種々の会合。

幹部も、一人、二人、自信と勇氣を持して、戦つて来た。

いつの日か、幾千万の大幹部が誕生し、勇躍、広布の総仕上げに前進して行く日も、間近な事であらう。

四月五日（月）

曇

身体の調子、頗るすこぶ悪し。

生麦^{なまむぎ}方面に仕事で出張。一日中、身体苦し。

第一にも、題目しかない。第二にも、第三にも、宿命打開は、題目しかない。実践。

——実行。——勇敢に、撓^{たわ}まず。観念論では、一分の変革もなし得ない。

夜、本部。「大白蓮華」編集会議。

五級講義。

教学部講義。

九時、帰宅。早目に休むことにする。

身体の激痛、続く。

「日興遺誠置文^{ゆづからのおきもん}」

一、学問未練^{みれん}にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事。

一、当門流に於ては御書を心肝に染め極理を師伝して若し間有^{ひま}らば台家を聞く可き

事。

四月六日（火）

雨

一日中、雨。

憂鬱ゆううつな日であつた。

生命力が、幸福の最大要素であることを、沁々しみじみと知る昨今となる。

生きる。社会に働く。そして、やがては死んでゆく。万人ことごと悉く、異なる人生である。不思議でならぬ。真の平等とは、何を指すか。生命の因果の理法が、明確にわかつてくる。

夕刻より、本部。

活気ある本部。而し、職員しかの訓練、指導を立派にし、更に、適材適所に人を配置してゆかねば、将来、行き詰まることを憂う。

先生の下もとという、誇りのみで、官僚化し、己惚かんりようれてゆく事を心配する。

先生は、御存知である。そして、御存知無きことも考えられる。要は、側近の弟子等の自覚と、異体同心の信心あるのみ。

帰宅、十時三十分を回る。

何となく、夜も、気分優^{すぐ}れず。

四月十一日（日）

晴れたり曇ったり

蒲田支部総会。十一時、出席。

清らかな息吹^{いぶき}を、期待すること大。

四時三十分より、六時三十分まで、二次会。

七時、常泉寺、最後の第一部隊会。

皆、別れるのが、淋^{さび}しそう。

良く戦ってくれた。感謝する。

良くついて来てくれた。有難う。

良く耐えて来てくれた。天晴れだ。

君達を、生涯、断固、護^{まも}ることだろう。

帰宅、十一時を過ぎる。

途中、新橋にて、今までの代表幹部、二、三名を誘い、やき鳥を御馳走する。

『永遠の都』の本を贈る。

四月十二日（月） 雨

一日中、豪雨。

正午、H君と、すしを食い、種々談合。友と語るは、楽しきなり。
支部の事、学会の事、仕事の事、青年部の事、同志の話は尽きず。

生涯の友を同志に持つ事は、幸いなり。

信心の友、革命への友を持つことは、幸いなり。

八時、本部。「大白蓮華」第一回編集委員会。遠慮なく、お互いに、思い切った意見あることを切望する。

夜、青年部、各部隊に伝達す。帰りに部長、参謀室と会食。

四月十四日（水）

曇

朝、客と争^{あらそ}う。小生恵し。小さな事で、いい気になる自分を反省する。

夕刻、本部。H君と共に。先生、悠々^{ゆうゆう}と池の鯉^{こい}に餌^{えさ}をなげておられる。坐って、いろいろと、指導をうけたまわる。

二時三十分、S宅にて支部推進会議。

夜は、武蔵野地区講義。

組織が邪魔に思える場合がある。しかし、組織が無ければ、学会も、個人も、信心も、ばらばらになり、所詮^{しよせん}、最大の不幸となることを知る。

組織をきらう人は、我儘^{わがまま}な、我見の、信心出来得ぬ人と断定出来る。

異体同心とは、最高、最優秀の組織必要論である。

日蓮は少^{わか}より今生のいのりなし只仏^{ただ}にならんとをもふ計^{ばか}りなり。

(四条金吾殿御返事)

四月十六日(金)

曇

身体の具合、全く悪し。残念だ。

大望あり、使命あり、つねに前進する革命児、夭死^{わかしに}しては断じてならぬ。

宿命打開の信心の証明の為に。――

東京発二時十九分の列車にて、伊東に出張。I宅訪問。車中にて『牧野伸顕』を読む。
帰宅、十時三十分。

支部の人々が、指導を受けに来ている。

皆、深刻な生活問題——。まだ自分の、恵まれている境涯・環境を幸いに念^{おも}う。
一時、就寝。

四月十八日（日）

雨後晴

小岩支部総会。十二時に家を出る。

朝は、豪雨。

午後より、晴れ渡る春の陽気になる。

中央大学講堂。

少々、形式過ぎる感あり。

五時三十分、終了。

二次会、七時三十分終わる。死ぬほどつらい、疲れている。苦痛であった。

帰路、H理事と共に、常在寺にゆく。

頼もしく快活な支部幹部会であった。

人材が欲しい。人材を育てよ。人材を見つけ出せ。

阿部次郎の『三太郎の日記』を読む。

四月十九日（月）

晴れたり曇ったり

自分を知ってくれる友は、少ない。

自分を信じてくれる同志は、少ない。

吾^われを真実育ててくれる人は、少ない。

吾^{まも}れを本当に護^{まも}ってくれる人も、少ない。

いや、その甘い考えがいけないのだ。

一切法といえども、一念にある。

人を批判する前に、自己を、自分を、吾れをと、反省し、自らの信心の凝視を忘るるな。

御本尊様が見ていくださる。護っていくださる。

師匠が見ていくださる。育てていくださる。

一丈のほり堀を・こへぬもの十丈・二十丈のほりを・こうべきか。

(種種御振舞御書)

貧しき身の、師にこれ程まで、成長、幸福になさんと導かれしを忘れること勿なかれ。

就寝、一時二十五分。

四月二十二日(木)

疊

暖かな、一日であった。

六時三十分に本部。

新部隊長を含め、第一回部隊長会。厳しく指導する。

一、責任ヲ持テ

一、指示、伝達ヲ、的確ニ

一、怨嫉おんしつヲナクセ

一、決シテ、威張ルナ

十時より、K女史と、戸田先生のお病氣、並びに学会内の諸問題について談合する。

第一には日天・朝に東に出で給うに大光明を放ち天眼を開きて南閻浮提を見給うに法華經の行者あれば心に歡喜し行者をにくむ国あれば天眼をいからして其の国をにらみ給い、始終用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさ軍をこり他国より其の国を破るべしと見えて候。

(松野殿御消息)

四月二十九日(木)

晴後曇

朝、晴れ、後薄曇り。

八時頃、起床。朝、講演の原稿を書く。

青年部男女合同の大総会である。さる三月三十日、一支部一部隊制設置にともなう新部隊旗授与式である。

十一時、中央大学講堂にて——予行練習をする。

軍楽隊の勇壮なる曲に、胸躍る^{おど}。

一時開会。集合人員、男女青年三千五百名。

四時五分前に、全部終了す。

五時より、六時三十分まで、先生を囲み会合。

先生、非常にお疲れの様子。早目にお帰りになられる。淋しい^{さび}。

次第に、青年部も成長してくる。

青年部の純粹なる信心、確信が、学会精神でなくてはならぬ。

帰りに友達と神田から、渋谷へ抜けて、すしを食しながら、学会の将来のこと、人事のこと等を語る。

十時近く、雨となる。

〔四月〕——昭和二十九年四月、創刊三周年を迎えた「聖教新聞」は、当時の週刊二冊建てを四月四日付けから四冊建てへと発展充実させた。当時の定価は一部十二円であった。また、会員数の

急増にもなつて、前年末に決定された『日蓮大聖人御書全集』の再版は、予約が相次ぎ、部数は四万部に達した。三月中旬には校正作業を終えて印刷にかかり、四月から配布が始まった。この種のインディアンペーパー使用の出版としては、日本でも未曾有の規模であつた。

昭和二十六年七月に男女合わせて九部隊約二百数十人の陣容から出発した青年部は、三年後の二十九年四月には三十部隊約四千人の結集を遂げるまでに発展した。同月二十九日、新部隊旗授与式が行われ、戸田第二代会長から各部隊長に、えんじの地に白い鶴丸をあしらった部隊旗が手渡された。なお、この部隊旗のデザインが変わるのは、男女青年部が各一千個部隊を突破した三十九年秋のことである。第一〇〇一部隊から男子は群青色ぐんじょうしきの地に驚、女子は濃い赤紫の地に鳳凰ほうおうのデザインとなつた。

海運・造船会社と政府・与党との贈収賄関係が追及された「造船疑獄」の摘発は昭和二十九年の年頭から始まつた。四月、検察庁は開会中の国会に対し、自由党幹事長・佐藤栄作の逮捕許諾きょだくの請求を決めた。しかし、大養健法相は第五次吉田内閣の方針に従つて検事総長への指揮権を發動し、これを認めなかつた。このため捜査は打ち切られ、事件は闇に葬ほうむられたが、世論の批判は厳しく、同年末の吉田内閣の崩壊につながつた。

五月三日（月）

曇後雨

九時三十分、日大講堂に着く。大混雑に驚く。出席人員——二万人か。偉大なる学会の歩みに、吾れ又、感無量となる。

十二時二十五分、歴史的総会の幕開く。

入場式から退場式まで、四時間に亘る力強き、生命力の結集せる大総会であつた。

吾人の存在の、微小なるを思う。

団結の力の、偉大なることを痛感する。

午後八時、全部清掃を終える。黙々と掃除に励む、名もなき男女青年の姿に、頭が下がる。

それにひきかえ、指揮をとる立場の自分が、申しわけないように感ずる。

生涯、陰で苦勞せる人々の心情を、絶対忘れぬことを心に誓う。

八時四十分、本部参謀室に帰る。

青年部の、陰の奮闘を感謝する。

二階、会長室にて、日昇猊下にお目通り。直ちに、退出。

H宅にて、T、U、H、M、R君等と、一時間半程懇談……。

此の三年間、特に教学に力を入れよう。

自分には、滝の如き激しい気性がある。これが、善にゆくか、悪となるかが信心である。

心して、次の前進をしてゆこう。

十二時近く帰宅。

五月六日（木）

曇後雨

頭痛、勤めを休む。

家に居っても、落ち着かず。三時三十分、家を出る。

本部会長室にて、先生とお会いする。先生に、身体の具合報告する。

“三障四魔との戦いだ。泣いて、御本尊を拝みゆく以外に打開はないよ”と指導さる。

強く生きねばならぬ。

強く起たねばならぬ。

強く戦わねばならぬ。

自分自身と、病魔との戦いに。

青年部最高幹部と、遅くまで打ち合わせ。

帰宅、十二時近くになる。

妻、心配して居る。――

五月八日（土）

晴

本部に行く。青年部総登山の準備。

あわただしき一日であった。

七時、本部にて幹部一同と勤行。皆、張り切っている。実に頼もしい。

夜、十時――神宮外苑前にて、輸送進行の指揮を執る。

十二時出発のバスが遅れ、三時四十分となる。

バス会社に、強硬に談判する。

登山人員、五千三百名。

五月九日（日） 雨

午前九時——本山着。雨。

記念すべき大儀式が、何と雨となり、驚く。

先生、御宝蔵前にて、御祈念して下さい。吾れ、胸中で泣く。

十二時——式開催。三門前。

学会歌

男女部長の話

青年部長訓示

会長訓示

行進

豪雨——しきりなり。

雨に打たれし、嚴愛の会長の顔。

終わって、会場にて、会長はいよう佩用の金バッジをいただ戴く。

嵐あらしの如き吾が人生に、まことにふさわしき時の、先生の思い出の授与。——

終わって理境坊に行き、先生に挨拶あいさつをする。先生、皆が風邪かぜを引かぬよう、深く心配しておられる。

寒さを防ぐ方法として新聞紙を集め、身体につけるよう、指示して下さる。

最高幹部と共にげいか猊下にお目通りし、夕刻、帰路に着く。

雨上がり、晴れ間いで、絵の如き美しき世界に変化——。

五月十八日（火）

晴

真新しき背広を来て、出勤。

本部にて、I君と、種々学会の将来のことにて会談。

丈夫の心ある人、少なきを淋しく思う。

夜、S宅にて、支部幹部会出席。終わって、常在寺で開かれた第四部隊会に出席。思う存分活躍する。

学会も躍進する。支部も、青年部も、共に勝つ。

生涯、不敗の人生でありたい。勝利の連続の人生でもありたいと願う。

五月十九日（水）

高曇

蒸し暑い一日であった。

身体の調子、全く悪し。

肺病、胃病、糖尿病もか。健康になりたい。次第に、身体の衰えゆく事を痛感する。色心不二なれば、わが一念、そして、精神力が、肉体をリードし、改革出来得ぬわけがない。

強盛なる信心を確立せねばならぬことを、反省する。

宿命との戦い。自分との戦い。

これこそ、一生の信心にふさわしい尊い価値だ。

夜、鶴見に講義。講義のたび毎ごとに思う、勉強せねばならぬと。――

五月二十五日（火）

曇

身体すくぶの調子、頗る悪し。

厳しき運命を、沁々しみじみと思う昨今。

この複雑な心境に、胸が痛む。

六時、本部にて水滸会。吾人ごじん意気なし。闘魂の士が、静かなる山林に入った感じであつた。

同志は、意気盛んなり。これでよし。

先生、わが身に対し厳しき指導をされる。肺腑はいふをつかれる思いあり。

信仰。唯々ただただ、信仰あるのみ。燃え上がる一念で。――

五月二十七日（木）

晴

微熱つづき身体の調子、依然として変わらず。

啄木の「雲は天才である」を思い出す。

七時より、本部にて参謀会議。

出席者——H、R

女子部のS、Y、I、

H女史等であつた。

男女青年部の下半期の運営方法を検討。

九時三十分——O宅にて、支部幹部会。

今月の折伏世帯数、四百二十世帯。

各支部が、折伏数にとらわれることを心配する。着実に、仲良く、一人の退転者も出ず、御本尊不敬者の無き事を願う。

しかし大進軍には、少々無理も、結果的には已^やむを得ぬ事か。——
今、自分には、明快なる答えは出ない。

〔五月〕——三月に三十部隊の陣容を整えたばかりの青年部は、四月二十九日の男女合同総会に約四千人を結集し、続いて、五月九日の総登山に全国から男子三千二百人、女子二千三百人、総勢五千五百人の結集を遂げた。これは青年部の成長を物語る画期的なことであつた。また男子青年部結成の日と同じく、雨中でこの日を迎えたことは、青年部の前途の多難さを思わせた。この直後に青年部は十月に一万人の総登山を行うことを発表し、新たな躍進を目指していった。

第二次大戦終結後、独立を達成しようとするベトナム人と、植民地支配の再確立を図ろうとするフランスとの間で始まつた第一次インドシナ戦争は、二十九年五月、フランス軍の要塞^{ようさい}ディエンビエンフーの陥落^{かんらく}によつてベトナム人の勝利が決定的となる。同年七月にジュネーブで調印された休戦協定では、北緯十七度線を境に北はホー・チ・ミン率いるベトナム民主共和国が、南は親仏のバオ・ダイ政権（のちにゴ・ジン・ジエムが政権奪取）が分割統治することになった。

六月二日（水） 雨

空虚なる一日。

自分は、平穩順風を嫌う性分らしい。

人生の試練と苦難に、悠然ゆうぜんと向かつて行くことを好むのかもしれない。

夜、五月度の仕事、最高潮となり、W園にて、全体会議。

身体の具合悪く、実に疲れる。

断じて、死んではならぬ。将来の学会の為に。優秀なる後輩を育てゆくまで。

先生のお具合も、芳かんばしからず。先生亡き後の学会を思うと、泣かずにおられぬ。

六月三日（木）

曇

病やまい、弥々いよいよひどくなる様子。

夜、男子部幹部会。渋谷公会堂。

超満員であった。

汗流し、皆、意気軒昂けんこう——頼もし。

帰り、幹部達と新宿にて会食。

われ、今夜ほど、下劣な、いやな感じを受けたことはなし。早く忘れたい一夜であった。

六月六日（日） 雨

東京午前六時発の列車にて、登山すべき処^{ところ}、七時三十分となる。

身体の具合、全く悪し。死を感じてくる。

悲観——苦悩——呼吸するのさえ苦しい。

十一時三十分、やっと、総本山に着く。

十二時、お目通り、猊下^{げいか}より、お杯^{さかずき}を頂戴^{ちやうだい}。有り難きかぎりである。

一時、——お小僧さん約三十名を招待。理境坊に於て、応接の幹部数名と共に懇談

する。

二時、御開扉。小雨降り続く。

猊下の背後にて、全魂を打ち込んで勤行する。身体の健全を胸臆きょうおくより祈念する。大御本尊様にお目通りすることが、最大の楽しみである。

三時過ぎ、急いで富士駅まで、母、妻、S兄等とタクシーに乗る。

急行「玄海」二等にて、東京へ。

疲れてならぬ。早目に就寝。

六月七日（月）

曇後雨

身体の調子、深刻。

休むわけにもゆかぬ。――

秋山定輔を書いた『風と波と』を読む。誠に面白き人生なれど、彼の思考に共鳴出来得ず。

人それぞれ、悔いなき、わが道を征くことだ。彼は彼、我れは我れなり。

六時三十分より、本部にて新教授の祝賀会を開催。

出席者、約百三十名。何となく、意気の上がらぬ会合であった。

先生のお疲れのせいか――。

自分の身体のせいか――。

祝賀会をつうじて思う。大幹部の先輩が、もっと我等、後輩を大事にすべきだ。利己主義に思えてならぬ。

未来の学会の為、吾人^{てじん}は心配である。

青年達が安心して、伸びのびと成長出来る様に。それが、師の真意ではないか？

大幹部は、先生と同じ広い心で、進め。――そうでなければ、純真な、多数の有為の青年が、死んでしまう。師の心を知らず、退散してゆく。これを憂^{うれ}うるのは、唯^{ただ}われのみか。未来を思い、淋^{さび}しくてならぬ。

一人して立て――若き無冠の王子よ――。

六月八日（火）

曇一時雨

膚寒き一日であつた。

生活費逼迫する。今日の天候の如し。一日中、面白からず。

夜、先生よりひどく叱られる。側近の大幹部も、同じく叱られる。

まずい時は、一日中まずいものか。

滝を昇らんとする鯉。

踏まれて、なお咲く草花。

逆境に勝ち、大成した人々。

青年期には、こんなにも心の葛藤があるものか。

「御義口伝」に云く、

所詮中根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり、迦葉は生の相・迦旃延は老の相・

目連は病の相・須菩提^{しゅぼだい}は死の相なり、云云。

不思議に、死を予感してならぬ。

これ死魔というべきか。信心^{しんじん}茲^{ここ}に七年。

最大、最高の試練に向かう。

今夜は、とくに苦しく、淋^{さび}しい。

今、一人の友もなく応援なく、力は刻々と衰えていくようだ。

涙が、るいりいと流れる。ここで死ぬのはいやだ。

弱冠^{じやつかん}、二十六星霜。

生命の奥底も極めず、人類社会に大利益も与えず、師の恩も返さず、これで死んでいくのは、あまりにも残念だ。

これでは、自殺的行為と、同じになる。

このまま、笑われて死ぬことは、あまりにも残念だ。

六月九日（水）

曇

正午より三時間、会長室にて、先生と種々懇談する。

先生、身体の瘦^やせてきたことを心配して下さる。

私は、先生のお身体のことを、御心配申し上げる。“誠実な君の心配は嬉しいよ”と申される。

学会青年部は、誰よりも私が一番愛している。此の人達を、なんとか、日本はおろか、世界の檣^{ひのき}舞台で活躍させてあげねばならぬ。

決して、先輩達が、広布の総仕上げを遂行するのではない。

五時より、本部会長室。

最高幹部会。——六時三十分まで。

指導部、情報部の問題等有り。

七時三十分、地区講義——池袋。

Z部長の弱き心を心配する。後輩と、反目するような先輩は、意気地いけじがないように思えてならぬ。——

六月十日（木）

曇後雨

時の記念日。疲れてならぬ。

七時、別動隊大会。常在寺。

九時、本部——参謀会議。

出席者、T部長、U・M両男女部長、参謀室全員。

青年部始まって以来の大会議となる。

それは、青年部の全機能に関する最終結論に到達したからだ。

運営、企画、実践等の諸方針も全員異議なく決定された。

十時三十分、終了。

H君と、十一時三十分まで語る。善き友なり。

学会も、十年後には、必ず政治、経済、文化、教育等の分野で、社会の中核に進出せねばならなくなろう。

今こそ青年部に、真剣に専門的に勉強させねばならぬ。

それには、自分がマスターせねばならぬことだ。

指導者は、力がなくてはならぬ。ずるくては断じてならぬ。不勉強では、最早、其の価値はない。責務として、少しずつ勉強してゆこう。理性と情熱——英知と確信——。

大森駅に妻迎えに来る。共に、山王さんおうにて天婦羅てんぷらを食す。思い出の道。

六月十二日（土）

薄曇

初夏とはいえ、春光うらかな一日であった。

だが自分にとっては、何となく虚うつろな一日でもあった。

朝、H君と市ヶ谷レストランにて、法律の事について語る。

午後、三鷹のT社に共に行く。社員一同が真剣に働き、建設の息吹に燃えていることに感銘深くする。

成功を祈る。発展を祈る。広布の一つの牙城として。――

同じ職場であっても、東京都内の塵芥じんがいの中と、武蔵野の原頭に立つ違いを、深く感ずる。市街に住む人々が、大自然を忘れゆく事は、人間性を忘却してゆくに等しいことだ。――自分はそんな歯車の中に住む、機械の如き人間になりたくない。

夜、第十二部隊会に出席。皆、何となく元気なし。

読書。『プルトーク英雄伝』

遅く休む。――明日も、又、読もう。

六月十三日（日）

曇

午前中在宅。

頭痛をおして朝風呂に行く。

夕刻、田園調布のW会館にて、第一部隊の幹部百三十名と会合。

何時^{いつ}も思う事——生涯、共に戦う人たれ。将来、力ある社会の指導者たれ。広布の人材たれ——と。

夜、三時頃まで読書。妻に早く休むよう注意受く。

六月十四日（月） 雨

身体の具合、少々良好。実に嬉^{うれ}しい。だが梅雨^{つゆ}はしきりなり。

午後、戸田先生宅。教学の研究。

夕刻、九段のKにて、先生、奥様、私と、M社の支店長の招待をする。

六月十五日（火） 曇

涼しい一日であつた。

理想と現実と交錯して、複雑な心になることがある。周期的に――。人を責めなくなる時がある。自己の非を棚に上げて――。思索と反省を怠ってはならぬ。

所詮^{しよせん}、強く正義を貫き通す人生でありたい。社会の人々から尊敬され、信頼される人となつて――。

それがかなわずば、死後、歴史が証明するような人になりたい。――否、妙法に照覧され、大聖人様から賞賛される、真実の弟子でありたい。これを、最後の人生観とすべきであらうか――。

五時、支部長宅にて幹事会。

H先生も来る。全く元気なし。先輩に元氣なく、確信なくば、後輩は本当に困つてしまふ。

九時、参謀会議。なかなか意見合わず、悲しい思ひであつた。

T君、遅く参謀室に来る。幹部の自覚なきか。参謀室こそ、大事な将来を考え、広布百年の大計を立てる所、その非を厳しく注意する。U部長、なかなか元気あり。

我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我が己心中の仏性・南無妙法蓮華經とよびよばれて顕れ給う処を仏とは云うなり。

(法華初心成仏抄)

六月十六日(水)

晴

身体の具合、また悪し。

午後、家に帰り、少々休む。

組織は大事である。その体は生命であるときえいわれている。だからこそ組織のなかに、もし愚かな幹部が存在するならば、これほど恐ろしい事はない。誠実な、純真な人が、悪い幹部にいじめられる事を見聞すると、烈火の如く怒りが燃えてくる。

夕刻、鶴見の講義。於鶴見市場S宅。

少々、身体を休めたためか、力強い、良い講義が出来て嬉しい。

終わって個人指導する。京浜急行・鶴見市場駅まで二、三の同志が送ってくれる。感謝の念が心から起こる。同じ同志とはいえ、労働組合の同志、共産党の同志、はたまた社会党の、保守党の同志の結合と、どちらが深く、強く、尊いことか。比類なき同志の団結とせん。

人の心ほど尊く、美しいものはない。だが一面は、人の心ほど醜いものもないであろう。十九世紀、二十世紀と、機械文明がいくら進歩しても、人の心のこの原理には、変化はない。——十界三千、本有常住が、生命の本質であるから——。

まず、この生命観を確立しよう。それから、広布の檜舞台に、躍り出て行く事だ。青年時代の嵐を突破して。——

六月十七日（木）

曇

少々、身体の調子良好。

調子の良好な時は、声の響きにも張りがある。声にも、色心不二の生命ありと、御書には説かれている。

M専務と、一時間ほど雑談。

七時、文京支部組長会。——本部にて。

一、疑わざるを信というなりの意

一、現在の立場で、最善を尽くす事

一、信心活動は、消極性でなく、積極性であるべき事

右の要点を感想として語る。明るい、気持ちの良い会合であった。

九時三十分。京橋方面に、仕事で出張。

信心、勉強、仕事、三者を生涯、繰り返していくことだ。——

六月十八日（金）

曇

薄ら寒い一日であった。

身体の具合悪し。

午後、H君と二時間、食事をしながら会談。彼、元気なし。吾れ全魂を打ち込みて、彼を励ます。彼どこまで、その意を知るや。

先生、お身体の具合悪いとの事。午前中、休まれる。

夕刻、豊島公会堂の金曜講義には御出席。「種種御振舞御書」に入ったとの事。自分は欠席。

八時、S宅にてA部隊長並びに三十名の幹部と、経済論、政治論を語る。実に楽し。皆、博学である。

だが、革命児の将来を思うとき、あらゆる学問の必要を知らしめねばならぬ。――

帰宅十一時過ぎる。疲れた。

明日は、先生にお目にかかりたい。

六月十九日（土）

雨

一日中小雨——。

涼しい一日であつた。

午前中、本部にて、先生にお目にかかる。御多忙のところ、しかも御病氣にもかかわらず、とくに気持ち良くお会いくださる。なお公私共に、篤^{とく}と御相談や御指導を戴^{いただ}き、胸の熱くなる思いなり。

参謀会議、第二案通る。

肩の荷がおりた気がする。

参謀会議は、今は青年部内の問題ではある。だが、将来は国内、国外を問わず、政治、教育等、全般の問題を討議する会議にならねば、広宣流布は完遂出来ない。その責任の重大さは測り知れぬものなり。

夜、先生の奥様と食事。

雨が降る。終夜降り続きそうだ。

六月二十日（日）

雨後曇

午前中、在宅。

向島支部総会。十二時三十分開始。於葛飾区修徳学園講堂。

祝辞を述べる予定なりしも、用事が出来て欠席。S兄の心中を思うと、申しわけない気持ちで苦しい。結集は千四百名と聞く。

八時過ぎ、S宅による。S兄と長時にわたって語る。

只今臨終ただいまと思えば、誠実に、真剣に、仏法の真髓を語り合う瞬間があるものだ。

純真な一念で語ることばは、誰人にも暖かく深く通じゆく――。

帰宅、十二時少々前。

妻より、家計のやりくりで相談有り。

兄達の現在までの苦悩の生活をみれば、わが家は最高の幸せであろう。

六月二十一日（月）

晴

身体を大切にせねば、広布の大事は成就することあたわず。

朝の講義——西洋歴史、着々と進む。

偉大なる先生であられる。一日も早く、世界の指導者として、活躍されん事を祈るのみ。

午後より、蒸し暑い陽気となる。

六時、文京支部総会の打ち合わせ会を支部長宅で。

折伏により、多数の人が救済される。

あと大事なことは人材である。幾千人の、力ある指導者を輩出させることだ。

学会の前進を思う。学会の将来の為、先輩達よ、その点を胸奥から心配されんことを。

先生、御病氣の為、本部にお泊まりになる。遅く迄、H君とお見舞い申し上げる。談笑下さるお姿に、安心して帰路につく。

帰途、先生のお話を繰り返し思う。

一、民族移動のお話

一、新聞事業のお話

一、生命論のお話

以上三項目の御指導であつた。

先生の鋭さ、気魄、頭脳には恐れ入るのみ。――

先生がもし倒れられれば、学会の存在は無に等しくなる。会社も、わが家も倒れるに同じ。否、日本、東洋の暗黒は眼前たり。

先生の小乗教の生命観、大乘の常楽我淨の生命論を比較されたお話が、あざやかに残る。

H君、五反田まで送ってくれる。淋しそうな人だ。どこ迄も、力に頼る人か。一人の勇

者の前途を、見届けてあげたい。

就寝、一時五十分――。

六月二十二日（火）

曇

薄ら寒い日であった。

本格的な梅雨^{つゆ}か。――

太陽の照る日あり。太陽が隠れる日もあり。信心の躍動する日あり。何となく弱き信心となる日もある。同じ方程式と考えてよいのであろうか。所詮^{しよせん}、水の如く生涯信心しぬくことは、何と偉大なる努力を必要とすることか。老人であれ、平凡な人であれ、十年、二十年、営々と撓^{たふ}まず信心を貫き通す人に、心から敬意を表したい。

昼、久しぶりに散髪。N君と大宮方面に出張。

夜、水滸会。先生、アジアに連盟の組織確立の必要性を力説。アジアは、早く手を結ぶ

べしとの指導であつた。

先生、非常に疲労の御様子であつた。

水滸会員は、幸福者である。未来には、勇者の、輝く舞台が待っている。

水滸会員は、重責を負っている。師の指導を、悉く遂行せねばならぬからである。前途多難のことであらう。――

終了後、四参謀にて、部長のことを心配し語る。

人の心の、移り変わりの激しさを、憤りいまだおたくなる事がある。所詮、唯一人、強く生き抜くことだ。堂々と、伸びのびと、大地を闊歩かつぽして。

帰宅、十一時過ぎる。書を読む。

六月二十三日（水） 雨

朝より豪雨。洋服を冬物に着替える。

朝の題目の少ないことを猛省^{もうせい}する。

仕事で鶴見方面に出張。

S宅を訪う。実に生意気である。じっと耐えよう。そして三年後に勝負せんと、帰りがら一人思索する。

夕刻、池袋にて講義と指導会。十時三十分終了。

朝、少しずつでも、読書の習慣をつけたいと思う。

八月には、北海道に行こう。限りなき曠野^{こうや}、憧れ^{あこが}の大地——、大いに大気を吸ってこよう。

東京は、雑沓^{ざつとく}で窒息^{ちっそく}しそうだ。

米国へ、豪州へ、欧州へ行く日は、いつか——。遠き未来か、吾人^{ごじん}には。

だが、必ず行かねばなくなる。妙法流布の使命を果たさんために——。いろいろ思索し、夜半まで、頭が冴^さえている。

六月二十四日（木）

曇

身体の調子、少々良好。嬉しい。

学会の秘書部門の改良を一人思う。吾人が建言する以外にないだろう。

午後、三鷹にT社を訪う。初夏の武蔵野は実に良し。空気に味のあるような感じなり。夕刻まで、H社長をはじめ社員達と語る。

七時、参謀会議。

一、夏季講習会の件

一、聖教新聞の件

一、東京タイムズ社に抗議の件

Yさんと、久しぶりに語る。不運な人だ。H君、M君は、もっと成長してもらいたい。気位で信心の世界を生きることは解せない。私の最も嫌うところだ。

六月二十五日（金）

曇後雨

朝、悪夢で目ざめる。

死の夢、魔の夢——長い長い死への夢であった。

勤行の完全に出来得ぬことを猛省^{もうせい}。

午前中、K校に行く。梅雨^{つゆ}しきりなり。

五時三十分より教授会。

皆、真剣なまなじりで教学の研鑽^{けんさん}に励んでいる。皆に遅れてはならぬ。将来、指導者として、教学だけは絶対おろそかにしてはならない。

終了後、H教授と懇談。

八時三十分より、支部幹部会開催。

早く家路に向かわねば、明日の仕事に疲れることを心配する。

帰宅、十二時少々前。

六月二十六日（土） 雨

三、四日、顔剃らず、氣晴れず。

後日、先生の奥様達とT劇場に行く打ち合わせをする。

四時三十分——本部にて、所化小僧さん三十名招待の席をもうける。

学会側から会長以下大幹部が出席。

宗門の未来を背負う鳳雛ほうすうたちの、健全なる成長を心から祈る。

終了後、小雨降る。宮城前広場を、友人等と未来を語りながら、少々散歩す。
帰宅遅くなる。

疲れる。今日は何も考えたくない。

六月二十七日（日） 雨

十時まで休む。熱っぽい。T君来る。

勤行せぬうち、杉並支部第二回総会出席のため五反田・星薬科大学講堂に行く。比較的良く出来たと思う。

先生も、こよなく愛す杉並支部であり、嬉し^{うれ}そうであられた。

夕刻、神田の教育会館へ、H先生と共に。

梅雨つづく――。

文京支部の同志と、九時まで歌い、激励し、張り切って家に帰る。

明るい、暖かな家庭――六月も終わりが近づく。

六月二十八日（月） 雨

梅雨――昨日も、又今日も。

朝、先生お見えにならず、淋^{さみ}しい。先生にお会いできない一日は実に淋しい。一生涯の師を持てる幸せを深く感ずる。

生涯の師ある誇り、世界に類なし。

雨の中を世田谷に行く。K氏信心しそうである。小学校の先生も悩みが多いようだ。夕刻、支部長等と会談。

思うように話の進む時あり、進まぬ時もあり。

終わって、月例の全体会議出席のため、上野・S軒に急行。
八時終了。

S老と共に、蒲田までタクシーで帰る。

夜半まで、読書――。

六月二十九日（火） 雨

朝、先生より叱られる。われながら、実によく叱られる――。

弟、一年ぶりに来る。Iレストランにおいて会食。可哀想でならぬ。

記念に万年筆、定期券入れと、小遣いをあげる。

午後、支部長宅にて、今夜実施する教学試験・口頭試問の予行練習をしてあげる。わが支部より、幾人パスすることやら。

試験に臨んでも、不断に勉強し、実力ある人は、やはり強い。教学なき者は、将来の立派な指導者になれぬことを力説する。

わたしは、試験はいらないと思う。しかし、時代は、試験制度を必要としている。

大学の試験の合格者のみが偉いのか――。学会の教学試験に合格せし人が幸福か――。所詮、生涯にわたる人生で実験し、明確に証明するのみである。

六時――本部。口頭試問が実施さる。

自分の担当は、杉並、大阪支部関係であつた。受験者計二十六名。

最終教授会の席上、S助教授の採点に関し、先生より厳しく叱られる。私は、ありのままに正しく採点せり。先生は、立派な大将に成るためには、もっと幅広く採点せよと。

——自分が真面目すぎるのか。当然の事と吾人は思っていたが——。

淋しく、一人わが家へ。十一時を過ぎている。

六月三十日（水）

曇時々俄雨

蒸し暑き日であった。

開襟シャツに着替える。開襟は活動的である。国会も、国連も、すべての官庁も、これにしたら、じつによいと思う。

世界的に、これからの時代は、必ず一年ごとに、形式は不必要となるだろう。

私も、一段と成長せねばならぬ。安易な考えで、いつまでも子供であってはならぬ。

未来の世界が、単純な世界でなきこと明白である。そのためにも、更に苦勞し、鍛え、修行せねば……。

客観世界からの響き、自己の苦悩の波、——転々、自己の信念も、ややもすれば失いか

ける。

われは若い。未熟だ。青い。

非常に疲れ、大幹部会休む。叱られることであろう。学会一わがままな自分をもうせい猛省する。

銭湯に行く。帰りにすしを食い、おやじさんと種々語る。信心を欲している様子。

早目に床に入る。野口米次郎を読む。

明日は七月である。

覚悟をさらに決めて進もう――。

〔六月〕――弘教の上げ潮のなか、教育学部の拡充はさらに進められ第四期教育学部員候補生の任用試験のうち第一次（筆記）試験が六月十九日に東京・中央大学講堂で行われ、全国から約四百人が受験した。続いて合格者には第二次（面接）試験が六月二十九日に学会本部で行われた。その結果、新たに助教授一人、講師二十人、助師百五十九人が誕生した。この百八十人を加えて、教育学部員は三百四十人の陣容となった。

政界では、国家地方警察と自治体警察を都道府県警察として一元化し、中央集権化を強めた改正警察法をめぐって、与党・自由党と野党・両派社会党が激突した。六月三日には両党議員が議長席を奪い合って大乱闘を繰り返し、約二百人の警官が出動する事態となり、議会政治の一大汚点として世論の強い批判を浴びた。「乱闘国会」と呼ばれたこの第十九通常国会で、改正警察法は五次にわたる会期延長のうちに成立した。

また、六月九日、防衛二法と呼ばれる防衛庁設置法と自衛隊法が公布され、七月一日から施行された。この二法律の施行によって保安庁は防衛庁と改称され、以前の保安隊、警備隊は陸上、海上、航空の三自衛隊に改組されて現在の自衛隊が発足した。当初の規模は自衛官十五万二千五百十五人、非制服職員一万二千四百二十三人、艦艇五万八千ト、航空機二百四機などであった。

当時、造船疑獄が表面化し、政府・自由党の屋台骨を揺るがす事件に発展すると、自由党、改進黨、日本自由党の保守三党間に新党結成への動きが強まった。しかし、新党結成によって吉田内閣の延命を図ろうとする自由党と、吉田首相の退陣を主張する改進黨との間で話し合いがつかず、三党交渉は六月二十三日に決裂。保守合同は翌年に持ち越されることになった。

世界では、中国の周恩来首相が、インドのネール首相とニューデリーで会談し、両国間の友好関係の基礎として平和五原則を発表した。五原則とは①領土、主権の相互尊重②不侵略③内政不干涉④平等互恵⑤平和的共存である。当時、インドシナ戦争の平和的解決を目指すジュネーブ会議が難航するなかで、両首相が国際平和確立のための原則として確認し、世界に提唱したものであった。これは翌年のアジア・アフリカ会議でさらに拡充されて「バンドン十原則」となった。

七月一日（木）

曇一時雨

蒸し暑き一日であつた。

一時より、駿河台図書館に行く。五時まで世界三傑の人物論を読み耽る。

自分に定根の無いのに驚く。真剣な学生の態度に微笑がわく。唯、点取り虫になり、身体を損なうことを憂うる。

神田にて『日本経済史』を金二千円也を出して購入す。勉強せねばならぬ。

六時、支部長宅にて幹事会。

六年度の折伏数——五百三世帯なりの報告。実によく頑張つたものだ。基礎は完全に出来上がった。

十時近くまで、元気に、本尊流布と信心の厳しさにつき指導——。

皆に大功德を受けさせるために、われ一人、勇猛心を起こし、全員を叱咤激励せり。

皆、歡喜してついてきてくれる。感謝にたえず。

今夜は、火星があやしく冴えて輝いていた。

天体、宇宙の不思議を、深々と思惟せずにはいられぬ。

浮動、遠心力、引力、光年、大気、距離、円形、生物、生死……実に不思議である。妙法により、この一生を通じて自得せねばならぬ——。

今夜ほど、死後の生命を考え抜いたことはない、否、考え苦しんだ夜はない。

博正、妻の実家に泊まりに行く。

妻と遅くまで静かに語る。

妻は、願わくは、生涯、老いてもらいたくない。

永遠の青春であれ——。

七月二日（金）

曇

久しぶりに、太陽輝く。

明るい朝であつた。しかれども、朝の西洋歴史の講義がなかなか頭にはいらなかつた。惰眠があつてはならぬ。浅学は人生の恥である。

Mさんと、午後二時過ぎまで、会計のことその他、社の機構について談合する。その後、家庭の問題についても、種々話し合う。

三時少々前、東京・S軒にて、S君と会う。

S君の会社の人事機構の点、販売網の点等、私見を呈する。

愚見に対し、ひじょうに喜んでくれる。

成功を祈る――。

六時五十分――文京支部幹部会、S宅。

第十部隊歌を、創作してあげる。

自分の決意を、この歌詞に入れて託する。

怒濤^{どとう}に起^たちし 若武者よ

正義の利劍 ひっさげて

祖国のために 進みゆけ

(二) 崑崙山^{こんろん}を 目ざし行く

白馬につづき 戦うは

壮烈 義烈 尽忠の

その名を誇る 親衛隊

A君等は、真に戦い抜いてきた。功勞ある支部の幹部、部隊幹部を、大事にしてあげよう。文京の友が、栄えることの歡^{よろこ}び。——文京の友の悲しみは、身を切られる思いなり。

歸りに本部へ寄る。

戸田先生は、まだ会長室におられる。

偉大なる師の姿に、吾^われ感涙す——。

七月三日（土）

雨後曇

暑い一日であった。

熱気で、苦しい社内。身体が疲れてならぬ。

半日ほど身体を休めたい思い。

来月は、夏季講習会。

八月一日より、三日まで、参加申し込みをする。

毎年この講習会を節として、実力をつけるよう修行をしていかなば——。わがままを捨てて。

本部に三時着。

本部の御本尊様の前にすわると、尊厳さと広大さとに、力が自然に湧きいづるをおぼえる。

会長室で、先生に御挨拶^{あいさつ}申し上げる。

慈愛の瞳^{ひとみ}を交わすたびに、不思議に安心感となる。先生の長寿を祈るのみ。

夜、女房と子供を連れ、映画を観^みる。

子供は、半分以上寝ている。女房は、本当に嬉^{うれ}しかった様子。——また、連れて行ってあげたい。

明日は、登山——。

七月四日(日)

壘

仏法は、実に厳しい。

お目通りの時間に、一分遅れる。先生に厳しく叱られ、苦しい。

一時三十分より、御開扉。

妻と並んで、身体のこと、学会のこと、子供のこと、胸臆^{きょうおく}より大御本尊に願う。

父母を連れて登山し、御開扉を受けている人の姿を見ると、うらやましい。最高の親孝行できる人こそ、最高に立派な人であるといえよう。

霊鷲山^{りようじゆせん}への参詣、月一回。先生の直弟子としてこれを^{よろこ}歡び、これを実行できぬようでは、正信の人とはいいきれない。

帰り、バスで富士駅まで出て、沼津駅にて急行に乗り換え、皆と一緒に帰る。車中、疲れて眠ってしまふ。激しく、いびきをかいていたもよう。夜、心ゆくまで勤行、唱題。

本門戒壇の大御本尊様に祈念申し上げたことを、さらに御報告申し上げます。

東洋広布ということが、^{のうり}脳裡より離れない。

日本の折伏から、さらに、待ちに待った東洋の広布を思うと、心が^{おど}躍る。

七月五日（月）　　曇後雨

本日もまた小雨。

しだいしだいに、社会の暗黒の響きが、そして時代の波が寄せてくるようである。恐怖と、残忍と、野獣の声が――。

悪世末法である。

強靱きやうじんに生きねばならぬ。勇氣ある信仰しかない。

午後――社の関係の、中元を買いに行く。

会社でなすべきことだが、全部自費でまかなう。……

六時三十分、五級講義。「観心本尊抄」。

九月より、教学に全魂を打ち込まねばならぬ。

朝の研究会の時、先生より、御書の読み方を断定してゆく癖くせがあるとの注意あり。

地方折伏の打ち合わせ会を、本部にて行う。

理事室を中心に検討――決定までなかなか進まず。理事室の強化を期待する。

会長の精神、構想を、一段と深く、強く、そして公平に、もっと迅速じんそくに実践してゆくべ

きだ。

帰り、支部長等とソバを食す。

電車の中で三、四人の学会員と会う。皆、活力に満ちている。頼もし。次の時代の潮流は起こり始めた。

十年先よ、二十年先よ、世人は、我等の正義と前進に驚き、うろたえ、かつ信賴していくことだろう。

七月七日（水）

曇一時雨

一日中、薄ら寒い日であった。

大自然の運行は、科学の極中の極か。否、大生命の所作であり、妙法それ自体の作用なのだ。

故に妙法を受持し、妙法に生きる人が最高、最極の人生であることは、必定ひつじょうであり、道理である。

身体の具合良好。嬉しい。

午前中、いつものとおり社員と懇談。

平凡のみに生きると、不幸に通じてしまう感じだ。波瀾万丈の人生こそ、生きがいを感じる。

午後の電車で、保土ヶ谷に行く。

M宅の座談会に出席。二百人以上の盛況な会となる。八人入信決定。

折伏ほど楽しきものはない。

私達は実に幸福である。それは、世界の大偉人、戸田城聖先生にお目にかかれたことである。

師の恩を忘却せば、我等は、その時より、畜生より劣るなり。

師匠のためには、身命を捧げ切れる。此れ、まことの師弟である。

妻、妊娠三か月とのこと。自分も、一日一日、重責となる。

責任ある男として、妻のため、子のためにも、いかなる苦難にも、勇敢に戦い、道を開

ききつてゆこう——。

七月八日（木）

曇

涼しい一日であつた。

一日一日を、着実に建設する努力は、最も大切だと反省。

江戸っ子は性急でいけない。もっと落ち着いて、忍耐強く頑張るよう修養せねば——。

夕刻、神田にて古本屋を回る。欲しくとも高価で、思う本が買えぬので残念。七冊購入。神田は迫力のある街である。

七時、——鶴見支部の「開目抄」講義。力一杯、頑張る。

もっと成長せねば、受講者に申しわけないと思いつつ帰る。

実力。常に実力を養い、実力を持つことだ。

七月九日（金）

晴れたり曇ったり

午後、本部面接の担当。

計三十数人の指導で終わる。自己の指導が、はたして相手を納得せしめえたか、否か――。

未熟な自分を、早く成長、向上させねばならぬ。

六時三十分より十時まで参謀会議。

一、部隊強化の件

一、教学研鑽けんさんの件

一、組織拡充の件等

帰り、K氏を中野に見舞う。

七月十日（土）

曇

早朝に起き、菊池寛の著作を一冊読む。あわてて食事をし、出勤。

夜、先生宅に、お中元うちがに伺う――。

遅くまで、お邪魔し、御馳走になる。申しわけない思いなり。

女性の着物の事、料理の事、その他、女性として大事なあり方を、種々、妻に教えてくださる。

帰宅、十二時近くなる。

自宅前の路に、自動車が年ごとに激しく通るようになる。数年したら、相当騒がしくなることだろう。

七月十一日（日） 雨

朝より小雨。

爽快な涼そうかいしさに、本当に助かった。

三時より先生、ご家族と共に、帝劇に行く。

帰り、新橋にて会食。

楽しい半日であつた。

夜、本部にて参謀會議。十二時まで。

優秀なこれら参謀室が、十年後には、必ず、学会の中核となり、日本の中核となつて、勇ましく、野より山より躍り出で、突入してゆくことだろう。

帰り、皆をすし屋に連れてゆき、御馳走してあげる。

良く食べる。——頼もし。戦いには鉄の如き身体が基調だ。

七月十三日（火）

曇一時俄雨

夜、久しぶりに、一時、月が見えた。

青年詩人の心は、嬉しい。しばし天空を仰いで思索する。

——善と悪、正義と邪義、理論と実践、理性と感情、物財と魂、現在と未来、力と役職、権力と民衆——。

いろいろなことが漠然^{ばくぜん}と去来する。

一日一日、泥沼の中に引きずられるように感ずる時もある。一日一日、天空に昇りゆく感じになる時もあり。人の心は不思議なものだ。瞬間たりとも不動の時がない。

もし信心なく、師をもたざる自身であれば、今ごろ、どんな破局の人生になっているか——。恐ろし、恐ろし。

一時近くまで、雑記帳に戸田先生の指導を整理する。

七月十四日（水）

晴後曇

太陽が強烈に輝く。新しい空気を胸一杯に吸い込む。午後は、割り合いに涼しくなる。

先生、十大部講義録の原稿で、お忙しい御様子。長時間お話しする機会がなく淋^{さび}しい思

ただ、先生の不思議な力の強さを、沁々しみじみと感ずる。

次のことを、確立すること。

- 一、T支部を、最後まで応援すること
- 一、K支部を、側面から援助すること
- 一、S支部を、わが支部と同じまで成長、充実させてゆくこと
- 一、青年部を、完全に数歩前進させる企画をなすこと

常に頭の中を整頓せいとんし、次には実践だ。

七月十五日（木） 雨

梅雨つゆまだ続く。非常に身体重し。

お盆——T宅にお中元に行く。一家、全く元気なし。M女史も来ていた。なかなか小才の利きく女性である。しかし、私には何も関係なし。

自分も二十六歳。

仏法の為には、いつでも生命を捨てる覚悟ができた。思う存分、戦いもしてきた。だが深く考えてみれば、一切、戸田先生の懐ふところに包まれている中の所作か――。

先生の御招待にて、再び観劇。

新橋演舞場――五時開演。

先生の御家族、小生と妻と。

天外、明蝶等の熱演を観みる。帰りに劇場前でお別れし、二人して有楽町に出て、散策し帰宅。

静かな夜である。

七月十六日（金）

曇

朝、新しい開襟かいきんシャツで家を出る。

形式的な服装は嫌きらいだ。また無駄むだである。複雑な社会も、毎年、実質主義の服装となることだろう。

午後、B宅に、お中元に——。儀礼主義を撤廃せねばならぬと、心で思いながら——。欧米には、仕事上の、このような習慣はないと思う。日本的な良さ、伝統としてのこし
てゆくべきか——。

所詮^{しよせん}、富める者は弥々^{いよいよ}驕り^{おご}、貧しき者は益々^{ますます}氣をつかわねばなくなる。可哀想な悪循環か——。

六時、S宅にて総会内容の最後の打ち合わせ。十時まで全魂をかたむけて取り組む。

長男博正、実にいたずらっ子になる。この一子、将来はどう運命づけられてゆくこと
か——。

ただ祈る。健康で正義の人に。純信なる、正宗の信者たれと——。

七月十七日（土）

曇時々晴

城南、神奈川方面へ出張。

真夏の季節であるのに、冷害続く。

淋^{さび}しく、悲しい予感のする年だ。

米価七百六十五円とは、日本経済の将来が思いやられる。

政治家よ、指導者達よ、「しっかりせよ」と叫びたい。名聞名利をなげ捨て、苦しむ民衆のため「身命を賭^とせ」と叫びたい。

夜、先生宅にお邪魔する。

種々指導あり。厳しく叱^やられもする。己^{おの}むを得ない。己^{おの}れの非なり。叱^やられても、叱^やられても、つききって成長していくのが弟子だ。生意気になっては決してならぬ。

力も基礎も持たぬ自分が、偉くなったと思つては増上慢である。

生涯——精進、生涯——勉強。

生涯——努力、生涯——建設。

七月十八日（日）

曇

待望の、文京支部の大総会。

暑くもなく、雨も降らず、良好の日であった。

豊島公会堂に二千五百名の支部員の結集を得る。嬉しい。感激の一日でもあった。

入場式も、退場式も、張り切っていた。闘争的な総会でもあった。

第二次会——常在寺。いずれも立派であった。

皆、よくやった。非常によく頑張った。

どの顔も悔いがない。明るい——。

可愛い。本当に可愛い同志達である。

涙溢るる思いであった。

先生も、吾人以上に喜んでおられた。

私の最後の総会か——次期はいつこに行き、そして新たな法戦場で戦い、法城を築きゆくことか——。

一人、次の広布の旅路を念う——。

七月十九日（月）

曇時々雨

月曜日——この日は、なんとなく、リズムを失いがちだ。平衡をくずす感を抱く日だ。一週間の第一歩なれば、この日より順調にならねば——。

午後、臨時参謀会議——夏季折伏の決定等。

何となく調子のらず、面白からず。

——いかに我儘か、私の最大の欠点なりと、猛省する。尚、自分の、強情張りも——。

良き師——、良き先輩、良き友、良き隣人を大事にせよ。大切にせよ。尊敬せよ。

七月二十日（火）

曇

一日一日が重苦しい感じ。

久しぶりに、太陽の顔が薄く見える。

毎日の新聞は水素爆弾、原子爆弾の記事ばかり。

いささか頭が疲れる。現代は科学の粋と、修羅界と、地獄界を混同した世界である。
尚、冷害の恐るべき時代に、「立正安国論」の予言を強く感ずる。

夜、向島S宅に行く。下町は少々文化的にする必要あり。本人の自覚、価値創造、および政治による環境造りの努力が必要である。

帰路、一人、念う。

自分は戸田先生以外の者に、唯一人として頭を下げる事なし。自分が先生亡きあと、
要として振る舞わねばならぬ重責あれば――。

嵐も来い。怒濤も来い。反感、批判がなんだ。策略がなんだ。

仏法の厳しき法則に、優れるものは宇宙にはない。

遅く、O宅での班長会および慰労会に出席。十時過ぎまで。笑いの嵐に終了、全く愉快な会合であった。

先輩ヨ、後輩ヲ、己^{おの}レヨリ伸バシユケ。

後輩ヨ、先輩ヲ、追イ抜イテ進メ。

七月二十一日（水） 晴れたり曇ったり

朝、実に品格のある乙女を大森駅にて見る。良家のお嬢さんであろう。無言の中に、楽し。

新聞記事の、冷害報道に恐ろしさをおぼえる。

食糧難なきことを願う。政治家達の有能なる策を期待す。

朝の西洋歴史講義、続く。

先生、お疲れもいとわず、真剣に指導して下さい。申しわけない気持ち——。

午後、鶴見・Tにて、婦人達と会食。

皆、大變に仕事のことでお世話になり、感謝する。

夜、鶴見支部の講義。

講義の度^{たび}に思う。精進せねばと、勉強せねばと――。

七月二十二日（木）

晴

先生とお話する機会少なし。淋^{さび}しい。

先生の生命力、ご心境は、吾人^{ごじん}には解^げし難い。誠に不可思議な仏法の覚者であられる。激、静、冷、観、寛、庄、嚴、慈、様々である。

吾人は、ただ、純粹に信順すればよいのだ。

知識に頼る自己の無能を深く恥ず。

池袋で講義。――七時より八時まで。

「開目抄」の拝読を中心に行つたが、終わらず。秋より、一段と懸命に、教学に取り組

まねば――。

八時過ぎ――豊島公会堂での蒲田支部幹部会に出席。満堂を埋めて、盛況であった。
挨拶をなす。

所謂、学会第一の使命たる広布の自覚は立派である。共に、すべてにおいて、リードしていく指導者にならねば、意味がないと話す。

帰り、幹部一同にて、すし屋に寄る。

面白からず。幹部は小人物になること勿れ、^{なか}と思う。

七月二十三日（金）

曇

日のたつのは早い。

今週も、はや金曜日――。所詮、^{しよせん}すべての闘争の根本の力は、生命力であることを痛感する。

涼しい一日であった。

信心は生涯、峻厳しゅんげんにして、真実の大道を、堂々と進んで行きたい。

七時三十分——池袋・常在寺。

M部隊の会合に出席する。

一、団結の力について、

二、学会活動と職業との関係について、

三、教学、理念と実践について、

等の内容で話す。

九時三十分——先生、秋田の総会にご出席のため、上野駅にお見送りに行く。

女子部をはじめ、其の他三百名ぐらい集まっている。盛況に驚く。而ししか、これでは統一がない……。社会性、大衆性を考えた時、広布の妨げになってしまう。一人心配する。もっと実質的に、学会も訓練する必要ありと——。

帰り、先生のご家族と共に、上野の不忍池しのばすのいけを散歩する。この平和な池も、最近は恐怖の池に変わってしまったとのこと。

平凡な人が、実直な人が、そして一般の女性達が、安心して散歩を楽しめる公園であらねば、何で民主国家といえるだろうか。――

無責任と狡猾こうかつな指導者に怒りをおぼえる。

S園にて食事。

幸福な日である。幸福な夜である。幸福な一日一日でもある。

七月二十四日（土）

曇

午前中、神奈川方面に出張。

O宅、M宅、Y宅、皆、庶民の代表である。

だが宰相より、大学者より、賢明な話をする時がある。これ等の人々と交まじわることとは、天の声を聞くと思わねばなるまい。

生涯、庶民の味方になることだ。

生涯、大衆と共に生き抜くことだ。

五時ごろ、家族と、両国の花火大会を一時間程見る。

人生の栄枯盛衰も、かくあらんかと、心で思う。

七時、本部に行く。

文京支部組長会に出席する。皆、元気である。嬉しい。

ある幹部の話の中に――、

太閤秀吉にまつわる話として、最も多きは人なり、また、最も少なきは人なり云々と、身近に感ずる至言なり。

良いことを言うな……と思う。

帰宅、十一時少々前。

七月二十五日（日）

曇一時雨

午前中、新聞の切り抜き、並びに本棚の整理。

正午より、先生のご家族をお連れして、歌舞伎に行く。四時まで皆、楽しく見ていた。

夜、文京支部幹部会。五百五十八世帯の成果であった。

偉大なる、支部の前進である。C級支部より、ここにA級支部に堂々と育つ。

一、折伏後の指導を徹底すること

一、班長、地区部長を拔擢はつてきすること

一、適材適所の人事を常に考えること

一、組員、組長たりとも、心から尊敬して、自信を与えること

一、地涌の菩薩として、誰人も使命あることを、知らしめること

以上、留意すべき点なり。

七月二十六日（月）

曇後晴

信心して満七年が来る。

長くもあつた。早くもあつた。

今日、初めて夏らしき陽気を示す。

低温が続き、稲作の不作を心配する。豊作であるよう祈る。

午後、T会社に応援に行く。皆、頑張っている。いじらしい感じ。この苦境を乗り越えて、幸福な、安心できる経営であるよう、期待して止まぬ。

国も、個人も、家庭も、経済の破壊が一切の終わりであるとする世の中である。これでもいいのか。否、一念の破壊を食い止めることが、即ち魔との戦いが、終極の問題ではなからうか。

一念を壊^{やぶ}る環境。環境を再度創^{つく}り上げる一念の力……、依正の問題を思考せねばなるまい。

七月二十八日（水）

曇

暑い一日であった。

日航機の切符を、先生の分と二人分購入に行く。初めて乗る飛行機に子供のごとく楽しさが湧く。

六時三十分、本部にて教学大会の問題作成。

夜遅く、先生より電話あり、厳しく叱られる。意味深し。弁解するいとまなし。

七月二十九日（木）

晴後曇

夜、G園にて全体会議。

さびれゆくG園に驚く。かつての華やかさを先入観としてもっていた自分には、一層の淋しさを感じる。

先生より種々指導あり。

一、株価の問題

一、日銀券発行高、並びに本年度の国家予算の問題

一、日蓮宗を信奉せる、過去の偉人と称せられし人々の人物論

一、東洋広布と経済論等々

帰り、S宅に寄る。明るい一家である。福運に満ちた一家である。

七月二十日（金）

曇

大宮方面に出張。

K氏の生意気を憤る。いきどお

五年後、十年後の勝負を——と我慢する。

疲れ切って、八時過ぎ帰宅。

面白からず。身体をいたわらねばならぬ。

静かに机に向かい、雑記帳に落書き。らくが

〔七月〕——昭和二十七年十月以降、学会の本部行事として毎月行われてきた月例登山会は、弘教

の伸展にともなつて参加希望者が増加し、二十八年十月からは月二回になった。二十九年七月の登山会をみると、日帰りを合わせて約七千人の登山者があり、その三分の二以上は初登山者が占めていた。その後も参加希望者は増加の一途をたどり、二十九年九月からは月三回の登山会が実施されることになった。

また、七月二十五日付けの「聖教新聞」によると、同年五月までの全国の世帯数は、関東六万五千五百十九、北海道五百十、東北一万百十四、中部四千九百十、近畿六千三百五十三、中国五百七十八、四国三百十七、九州千二百十三など、総計約九万世帯であつた。石川、山口など八県が十世帯未満だが、全県に会員が誕生し、会員の居住地が全国化してきたことを示している。なお、戸田会長就任時から三年で世帯数は約三十倍となつた。

社会では、金融引き締めとデフレ政策が進むにつれ、企業の倒産や工場閉鎖、事業の縮小などの企業整備が続出した。一月～五月期の企業整備の件数は全国で三千四十一件、整理人員は七万八千三百五十一人にのぼり、前年同期の約二倍に達した。不況業種は紡織、石炭、卸小売、機械機器、輸送機械（造船、自動車）など。ことに石炭は、エネルギー政策の石油重視への転換もあつて、中小鉱を中心に閉山、解雇が相次いだ。

消費者米価は、精米十^キ当たり、昭和二十六年（五百五十八円）、二十七年（六百二十円）、二十八年（六百八十四円）、二十九年（七百六十五円）と年々上昇し、消費者物価を押し上げていたが、二十九年以降、デフレの影響もあつてようやく沈静化に向かう。二十九年の消費者物価指数は三一・一（昭和五十年＝一〇〇）。物価は牛肉（百^ギ）六十六円、鶏卵（百^ギ）二十五円、豆腐二十四円、ビール百一十四円五十銭などであつた。

この年、五月から七月にかけて東日本一帯は異常低温に襲われた。気温は平年より四、五度も低く、稲の生育も例年の五、六割程度に落ちた。マスコミも「前代未聞の異常低温」「稲作に冷害

必至」「照らねば大幅な減収」等と報じた。八、九月になって高温多照が続き、稲の作況も好転したものの、台風や害虫による被害、十月の早冷などが響き、全国的にこの年の作柄は「不良」だった。

昭和二十九年上半期の日本映画界は日活の製作再開や東南アジア映画祭などで大変にぎやかだった。佐田啓二、岸恵子主演の「君の名は」は、総配給収入約十億円、観客動員数約三千万人という大当たりで、黒沢明監督の「七人の侍」も大ヒットした。

八月一日(日) ～ 三日(火)

夏季講習会。

悔いなき講習会を送る。

白糸の滝に行き、滝にもあたる。

この講習会で、一步境涯を開くことに懸命になる――。

来年の講習会は、信心満八年目となる。頑張らねば――。

八月五日（木）

晴

十時五十分——。

先生と共に日航機に乗る。

天気上々。最高の飛行日びより和とのこと。

予定より十分早く、十二時三十分、大阪・伊丹いたみ空港に着く。

S氏等、二十数人、出迎えに来ていた。

直ちに花園旅館に行く。着くなり、先生は真剣に指導に入られる。

六時三十分から、夕陽ヶ丘会館にて指導、講演、質問会等あり。——八時終了。私も参謀室長講演をする。

八時より、臨時部隊長会を行う。吾人ごじんの最も縁深えにしき関西、東京に次ぐ牙城・関西、ますますの発展あれと心で祈る。

先生、二次会に出席されず。吾人一人、出席。途中、停電あり。

八月六日（金）

壘

六時三十分、起床。

非常に疲れていた。

先生のお部屋にご挨拶あいさつに行く。先生、悠然ゆうぜんと思索に入られていた。尊い姿である。

大指導者の姿であり、神々こうごうしいばかりに感ずる。

“大作、今臨終になつたら、従容しょうようとしていられるか”と語られる。また“いま総理になつたら確信があるか……”とも語られていた。

大阪九時発の特急「つばめ」にて帰京。

暑い一日であった。

八月七日（土） 晴

三十二度を越す、猛暑であつた。

わが社は、皆、健在、頼もし。安心する。

午後まで重役達と語る。

夕刻、支部長室へ。もっと支部員のために、学会のために、そして広布のために、真剣になつてもらいたいと思う。

八月八日（日） 晴

暑い一日であつた。

家の経済の事も、心配してあげねばならぬ。

十時より、夏季地方折伏の打ち合わせ会。

この闘争の一週間を、全魂を打ち込んで戦おう。札幌方面の予定とのこと。

学会の前途を考えると、頭がくらくらする。先生を護りゆかねばならぬ。運命の大指導者の子として。

暑い夜であつた。近所の銭湯に行く。

良い月夜でもあつた。

八月九日（月） 晴

本年最高の温度。三十四度。

一日じゅう社にいる。疲れる。汗が流れる。

全国に亘り、夏季折伏に出動している同志のことを思う。事故なきよう、健康であれと――。

先生、四時三十分、九州より羽田空港に帰られる。お疲れの様子。

多数出迎えに来ていた。先生と共に乗車、本部へ。明日は北海道行きである。

八月十日（火）～二十日（金）

十日Ⅱ羽田発午後二時二十分～千歳着五時二十分。

二十日Ⅱ千歳発午後七時四十五分～羽田着十時三十分。

十日間、北海道にて、札幌を中心に活躍。

我等の拠点・丸新旅館も、きつと思ひ出深き歴史を刻むことであらう。

雄大なる曠野^{こうや}。ポプラ並木。花咲く大通り公園。平和な家、平和な人々、平和な街々。

憧れ^{あこが}の北海道の香りが、多感な青年に滲^しみ透^とってくる。

特に、先生の故郷・厚田^{あつた}への旅は、印象深きものであった。

石狩川の激流。一直線の山道を疾駆する爽快^{そうかい}さ。先生も嬉^{うれ}しそうであられた。

三日間、先生の生家付近の親戚宅にて過ごす。師に、お仕えでき得たことは、最大・最

高の誇りである。

厚田の港の岬より、東洋に向かって、様々な確信を一人叫んだ。
夜の石狩ナベの美味も、忘れることはできぬ。

この歴史、いつの日か記さん。

わが頭脳に、深く刻みゆく使命であることを痛感する。

八月二十五日（水）

曇一時雨

涼しい一日であった。

身体の調子、良好。

信心を忘れてはならぬ。厳しい修行を忘れてはならぬ。自分とは、弱いものだ。自分とは、意気地のないものだ。

強き信仰が必要だ。強き先輩が必要だ。否、強き師匠が必要なのだ。そして強き弟子になることである。

午後、T会社へ行く。経営面でなかなか大変な模様。一日も早く大会社になってもらいたい。

六時過ぎ、M氏等と新宿にて会食。

八月二十九日(日)

曇一時晴後雷雨

身体の調子、良好。嬉しい。

これを転換期として、さらに人間革命してゆかねば――。

午前中、在宅。子供、うるさい。しかし、元気で良し。子供の成長をまざまざと見、驚く。生涯、老いたくない。世紀の若人^{わこうど}として送りたい。

A、S両部隊長、後にS君等多数来宅。

夕方、豪雨。落雷。

矢口ノ渡わたしのS宅に行く。明日より再び闘争だ。

八月三十日（月）

曇

先生、お元気であられる。実に嬉しい。

午前、横浜方面に出張。

午後五時より、教授会。

大阪支部に毎月、出張講義に行くことになる。勉強せねばならん。

七時、全体会議。楽しい会議であった。

早目に帰宅。勤行を忘れてはならぬ。

八月三十一日（火）

雨一時曇

涼しい一日であった。

皆より、野菜を食べるよう注意受ける。その通りだと思ふ。

薬より、毎日の食事栄養が最も身体に影響あることは、道理として納得できる。

六時三十分——豊島公会堂にて本部幹部会。

続いて、常在寺に於て大幹部会。

最高幹部が、もっと全体の幹部の意見を聞いてゆくようにならねば——と心配する。理事室の、一段の成長を期待して止まぬ。

帰り、Z氏と、とくと語る。少しは、わかったことであらう。情けない、弱き人だ。実に見損なつた。

帰宅、午前零時を過ぎる。明日より九月だ。

静かな、日本の秋がやって来る。春の到来と同じく、秋の到来は、懐かしきものだ。日本的である。秋は、日本的なものの究極といえよう。

〔八月〕——昭和二十九年の夏季講習会は、七月三十日から八月三日までの期間に総本山大石寺で実施された。参加者は前期、後期合わせて四千五百五十人に及んだ。講習会では、戸田会長を囲む質問会や御書講義、教学部員会、各部別の諸行事などを通して、行学錬磨が図られた。とくに、男女青年部は独自の企画で教学大会や青年部会などを活発に開催した。

この年の夏季地方折伏は、八月前半の約十日間、全国の主要二十都市で行われた。東京などから派遣された二百五十人の幹部は、地元会員と協力して折伏を進め、函館の二百三世帯をトップに各地で千四百四十世帯の弘教を達成し、その後の全国的発展の基盤を築いた。池田名誉会長も戸田第二代会長とともに大阪、北海道の各地を転戦した。

テレビ放送は昭和二十八年二月にNHKが、同年八月に日本テレビが開局して以来、順調に発展を続けていた。NHK開局当時千五百台といわれた受像機も、一年半後の二十九年八月には二万五千台を超えた。このテレビ人気を高めたのが街頭テレビのスポーツ実況中継であった。都内のある百貨店では集まった人びとの重みで床が抜け、重傷者を出したこともあった。

九月一日（水）

曇

待ちに待った後半の闘争期に入る。

この秋を、この年を、悔いなく送らねばならぬ。

午前中、先生と共に種々語る。

先生の信頼を心から嬉しく思う。幸せである。

統監部の事務員を一人採用したいとのこと。早急に手配する。

夜、鶴見の講義。「顕仏未来記」。

真剣に予習をした時の講義は、たしかにいい。いつもそうであらねば――。

M君と十一時近くまで、すし屋で会談。

昼間、I女史を見舞う。

帰宅、食事の用意してある。今日は家にて食事をするといって出勤したとのこと。すまぬと思う。

九月二日（木）

曇一時俄雨

小雨。

方便品・寿量品の木曜講義に出席。於豊島公会堂。毎週、必ず出席したいと思う。

帰り、先生宅に行く。

先生、理事長、私、三人して将来の学会の進み方について検討す。

十一時過ぎまでお邪魔する。先生も真剣であられた。

他の理事級、大幹部をさしおき、最も重大問題の審議を私に直接して下さる。この信頼に^{こた}えねばならぬ。

一、十一月三日、本部総会を期し、一応、折伏のテンポを^{ゆる}緩め、着実に前進はかる

一、青年部は、十月三十一日を期して、実質二万を確立し、邪宗攻撃を一旦中止する

以上

理の^{ふしやくしんみょう}不惜身命、事の不惜身命について質問する。

九月三日（金）

曇一時雨

眠たい一日であった。

涼しくなる。ここ数日、特に寝不足だった。

無理をしている人生は、必ず行き詰まる気がする。要注意。

夜、常在寺における、文京支部豊島地区総会に出席。

不愉快極まる^{きわ}感じで帰る。

帰宅、十一時少々前。『東西英雄論』を読了。

九月四日（土）→五日（日）

四日午後三時、本部前からバスにて水滸会第一回野外訓練に出発。

戸田先生をはじめ、六十四名。

夕方、氷川ひかわの溪流に篝火かがりびをたき、食事。
浩然こうぜんの氣満ち、精銳けんこうの、意氣軒昂——。

先生から感情と理智の話、並びに東洋哲学と西洋哲学の話あり。
最後に、十年後に再びこの地に集まって貰う。その時に、ぜひ頼みたいことがある——
と、不思議なる予言の講演で終わる。

見よ、二十年後の水滸会の実力を。

見よ、二十年後の水滸の活躍を。

先生と共にバンガローに一泊。楽しい思い出の二日間であった。

九月十五日（水） 快晴

先生、奥様、私と、三人してN園にて会食。

先生、ご機嫌きげんすこぶ頗る悪し。

厳しく叱られる。自分も、たしかにまずかった。……もうせい猛省あるのみ。

未来の会長、理事長のあり方の指導あり。厳しい。あまりにも、こわき師である。勉強せよ、勉強せねばならぬと、繰り返し注意あり。

先生を、ご自宅までお送りし、帰宅。

十時近くになっていた。

九月十八日（土）　十九日（日）

土曜日は嵐あらしであつた。

われも、二十六歳、人生の船出して――。

来年は早はや二十七歳。自己との戦いで、一年一年、終わってしまふ。

淋さびしい、悔くやしい。

何故、力ある師に、賞賛しょうさんされる青年になれぬものか――。

死を思う時がある。生の歡喜に満つる時がある。

妙法に感謝し、感激して指導する時もある。情性になり、義務感で指導、折伏する時もある。先生に飛び付きたい時がある。先生を心の底で避けたい時がある。

孤独なる青年。多感なる若人^{わこうど}。宿命の青春。前進のみ、ただひたすらに——。
ともあれ、苦しくとも、楽しくとも、学会っ子として、前に進むことだ。

〔九月〕——水滸会の第一回野外研修が行われた氷川のキャンプ場は、多摩川の上流、東京・奥多摩町にある。戸田第二代会長の提言を受けてから十年を経た昭和三十九年、水滸会のメンバーは池田名誉会長のもとでふたたび同地に集った。五十七年にはキャンプ場から多摩川をややさかのぼった地に氷川池田青年研修塾が完成した。五十九年五月には同塾で野外研修三十周年を記念する集会が盛大に開催されている。

十月八日（金）

曇後雨

秋深し。

夕月、清し。わが心に鏡の如く映ず。

仏法は厳し。

師弟の道の峻厳しゅんげんさを、沁々しみじみとかみしめる夜である。

先生を離れて自己はない、師弟不二なれば。他の友人等の自由の姿がうらやましくなる時がある。

だが、十年後は、その力の相違が、いちじるしく明確にされゆくことか。

日々新たなる目的に進む決意で生きてゆくことだ。今日一日も全力をあげよう。それしかない。如何いかなる山にさしかかっても――。

白雲飛び、大河流々。「自然」と題し、詩を雑記帳に記しるす。

夜、S宅にて支部幹部会。

七時過ぎ、本部会長室にて参謀会議。

議題

一、交付金の件

一、一万名総登山の件

一、本部総会の件

一、体育大会の件

右の行事が終了せば、立宗七百二年の、わが使命は終わる……。

十月九日（土）～十一日（月）

八日午後九時五十分発、夜行列車に乗車——上野駅。仙台の指導である。車中にて良く眠る。

第六回仙台支部総会は立派であった。S支部長の、調子に乗る姿が、将来、多少心配である。

五千名の結集とのこと。スポーツセンターを埋め尽くした感じ。

出席メンバー、先生、理事長、F支部長、I女史、Mさん、A君と、私であった。

第二次会——「日本男子の歌」の指揮を、先生より指名さる。二度繰り返させられ、疲れ切る。

先生は、大作も弱いのに、これだけ精力を使い切っては、長生きは出来ないあと、悲しげに側近に語っておられた由。題目をあげ、宿命打開あるのみ。

九日——午前中、部隊幹部面接。午後、支部総会。

十日——秋空の下、青葉城址にて、十三部隊の運動会。

午後、先生の法華経講義。

深淵なる仏法の真髓を、千名の学会員は如何に聴聞せしや。

終了後、仙台銀座を一人歩み、旅館に帰る。街に品物が少ないのに驚く。

十一時二十八分、準急にて帰京。先生の切符の寝台車に、かわりに休むように申されるので、一人休ませて戴く。

上野の朝は、小雨がしとたと降っていた。目黒に先生をお送りする。自分は、その足にて出勤する。早すぎて困った。

この三日間の闘争も、歴史に残る闘争であった。

十月十三日（水）

快晴

秋晴れ。

日本晴れの日であつた。

内外共に、自分に対し激流の如き批判の声あり。口を真一文字にして進め。恐るるな。おじけるな。そして己が信念と正義のため、突き進みゆけ。

青年らしく。学会の先駆者の如く。まさに、東洋の王子らしく。革命児らしく。かつは先生の第一の弟子らしく――。

午後、先生にお会いしに行く。

先生、叱って下さらぬ。全くつまらぬ。

五時三十分、下高井戸、日大グラウンドに、T、M、R君等と共に、体育大会の会場視察。

帰り、皆して、渋谷にて映画を観る。面白からず。

一人、蒲田駅より徒歩で帰宅。

秋月、皓々たり。青春の息吹、清く、尊く——。雑踏の社会に、妙法護持者は蓮華でなくてはならぬ。

淋しくとも、悲しくとも、つらくとも、悩み多き時代に遭遇しても、戦いに疲れても、われらには妙法がある。月を忘るな、緑がある、自然がある。皆、友達である。

十月十四日（木）

快晴

午後、本部にて面接担当。

元気で責任を果たす。一人の人の悩みを根本的に解決する。尊いことだ。偉大なことだ。実に有り難いことだ。百千万の立派な理論にも勝る。大政治家の議会報告にも優れている。その名は——折伏。

一万名総登山、本部総会、体育大会——この三大行事を成功させるか否か——皆、自分の責任である。御本尊様に大成功を祈る。

駅より家路に——。澄みわたる空の月の光り、胸奥に輝く。大月天に祈りたい気持ち。

十月十八日（月） 雨

昨日は月例登山。

午後、F君、W君を連れ、小金井のS宅を訪う。

夕、文京支部ならびに、男女部隊幹部一同と懇談。ゆっくり、信心、人生、生活、職業等、すべてにわたり聞いてあげる。たまには大事なことだ。

その人の悩みがどこにあるか。川の流れが止まるのは、どこかにゴミがつまっているからだ。その機微を知らずして、信心の指導は通じぬ。

一、九思一言、これは孔子の指導。而し吾人も、少々言語に気を付けて発言せねば

一、言行一致、誰人も欲し、出来得ぬこと。吾人は、これを達成してゆかねば――

十月十九日（火）

曇後晴

五時、豊島公会堂にて志木支部総会。

M氏と共に、来賓として出席。

A新聞社の記者T氏と、新橋にて談合、十一時過ぎまで。

学会も社会的な第一步を、踏み出してゆかねば――。

秋夜、すがすがしき、静かな気持ちで帰宅。

十月二十日（水）

曇後雨

秋の、静かな夜が続く。

しがし、次第に菊花散り、極寒の冬も近い。

H氏と午前中、T会社の建設再建の相談。

午後、城南方面に出張。その帰り、新宿に回り、体育大会用のストップ・ウォッチを見て、本部に行く。

体育大会、情報部、支部のこと、渉外部、賞品部、会計部等々、繁多な仕事をさばく指揮で疲れる。

帰宅、午前零時。

十月二十一日（木）

晴

秋晴れの日であった。

午前中、調べごとをするため、駿河台図書館に行く。満員なのに驚く。

六時、本部にて大幹部会。七時三十分終了。

八時過ぎ、支部長宅に行く。

地区部長、幹事等の任命決定をする。

終わって、風呂に入れてもらう。久しぶりである。爽やかな気持ちで家に帰る。

帰宅、午前零時を過ぎる。身体を大事にしなくては――。

十月二十七日（水）

曇後雨

小雨あり。

先生、熱海に旅行。お身体の具合が悪いと様子――。自分も頗る悪し。
如何せん、如何せん。

A新聞社のW記者と会う。I記者は来たらず。残念なり。

夜、参謀會議。皆、それぞれの意見、我見、偏見強く、なかなか、まとまらず。中心者の強力な人格と、信念と、予見とが必要である。

十月二十八日（木）

雨後晴

小雨より、秋晴れの天気となる。

午後零時二十分、本部に行く。先生と懇談、二時間。身体の具合、やや良好の由。君も長生きできる身体をつくらねばいかんぞ”と注意あり。

指導方針立案についての会議、第二会長室にて実施。意見、なかなか合わず、困る。理事室陣の一步成長を期待したい。先輩が境涯を開かずして、後輩いずくんぞ喜ばんや。

強く生きよう、未来の人々の味方になるために。強く戦おう、誠実な人々の味方になるために。強く進もう、保守を破り、革新の建設のために――。

十月三十日（土）→三十一日（日）

三十日夜、午後九時三十分、バスにて、信濃町・明治絵画館前を出発。朝五時、一万名の青年部員、富士大石寺に到着。

三十一日——七時三十分、天気晴朗。

総本山近くの、高校校庭にて、男女二万名総登山の儀式開催。

先生も、本当に嬉し^{うれ}そうであつた。

“経済、文化、教育、科学の根底に哲学がなければならぬ。その最高の哲学こそ日蓮正宗であり、これを広宣流布することが、われわれの使命である”との講演あり。

終わって行進に移る。痛快な一日であつた。

新時代の青年の縮図ここにあり。新時代の青年の先駆ここにあり。未来に輝く若人の象徴、ここに存するなりと——。

午後四時、全員下山の途につく。

帰り、吾人等は三島に、日大のA部長を訪う。

帰宅、十一時三十分。

無事、大任を果たす。――

〔十月〕――昭和二十九年の十月末から十一月初めにかけて青年部では、一万人総登山、第一回体育大会と大きな行事が続いた。「世紀の祭典」と銘打ち、十一月七日に東京・日大グラウンドで行われた体育大会は、障害物競走など多彩な競技で沸いた。以来各地で「若人の祭典」が活発に繰り広げられ、のちの体育祭、文化祭へと発展していくことになった。

この年の日本経済は、戦後社会の復興にともなって輸出が順調な伸びを示し、国際収支も黒字が続いた。しかし、輸出の内実は「メイド・イン・ジャパンは、安かろう悪かろうの代名詞」との風評が海外で立つほど、粗悪な製品が多かった。ことに機械、雑貨、繊維、農水産物などの品目に品質不良、着荷不足が目立ち、海外からクレーム、損害賠償の請求が相次いだ。

痛ましい事件も起こった。前月の九月二十六日、青函連絡船洞爺丸が台風15号下の函館港外で座礁転覆し、死者・行方不明千四百数十人を出した。これはわが国最大、世界では一九一二年のタイタニック号遭難に次ぐ大きな海難事故となった（洞爺丸事件）。その記憶もさめやらぬ十月八日、相模湖で遊覧船が沈没し、修学旅行中の麻布中学生二十二人が死亡した（相模湖事件）。相次ぐ災厄に国民の悲しみもつづいた。

十二月二十日（月）

快晴

春の如き暖かな一日であった。

身体具合悪し。宿業の深きを悩む。

恐ろしいことだ、宿命とは――。

肉体年齢は五十代を過ぎている感じ。

あと幾歳生きることか。感傷的になる日がある。

午前中、矢口中学校にS校長を訪う。

昨日、女子部総会を明大記念館講堂にて行う。

その席上、正式に渉外部長に就任。嬉しくもなし、楽しくもなし。実際は毎日実践していることなれば。

総会は三千余名が参加して、盛況であった。

四時より、会長代理として、M銀行本店での、頭取更迭式こうてつに出席。
三階講堂にてカクテル・パーティー。財界人、政界人、約四百名が出席していた。
彼等、社会の首脳部こそ一丸となって国家再建に進まねばならぬ。

若き革命児の胸は、様々さまざまなことを思う。

夜、T支部長宅へH氏と共に行く。常在寺の第十部隊の総会に出席する。疲れる。疲れ切る。

十二月二十七日（月）

快晴

昨日、先生宅に、お歳暮うかがにお伺いする。

先生より、泰山たいざんも裂さけんが如く、叱咤しつたさる。

巖父の怒り、先生の激烈なる大音声に、身のすくむ思いなり。

嗚呼、われ過^{あやま}てり。先生の仰せどおりなり。人生の落伍^{らくくて}者にならぬためへの嚴愛。敗戦の將軍とならざるための訓戒。

ここ数日、自己の罪業、宿命をみつめ、泣き、憤^{いまだお}り、思索して、先生のご期待に応^{こた}えんと決意する。

先生の力、仏力の如し。先生の眼、仏眼の如し。真実の師弟の情、今ここに肺腑^{はいふ}につきささる。お許しを乞^こい、生命を賭^として、更に広布の先陣に立つのみ。

一日中、木枯^{こが}らし吹く、寒き日であつた。

わが胸臆^{きょうおく}と同じ暗さで――。

十二月二十八日（火）

快晴

本年も、あと二、三日となる。

大鵬^{たいほう}が、この一年、飛び、戦い、巢に帰り、今、休んでいる感じである。二十六歳の青春も去りゆくか。

時は去り、時は来る。歴史は創られて過ぎゆき、又、われらは、今後の歴史を創らんとす。

「人生如何に生きるか」——実に、難しい事である。正しい師。正しい信仰。しかし、自分の強い一念が、更に大切ではあるまいか——。

午後、本郷・東大赤門前のS書房に行く。聖教新聞へ寄贈の、仏教書購入のため。——本の少ないのに全く驚く。

夜、忘年会。「黒田節」の第二節を歌い、先生より激憤を受く。

この二節目の歌が、恩師牧口先生を殺したのではないかと。——涙さえ浮かべて居られた。申しわけなし。

心重し、何と愚かな自分よ。

師の心、知りしつもりが、何も知らざりしなり。

帰宅、午後十一時半。

十二月二十九日（水）

曇後晴

雲垂^たれ、朝寒く、午後より小晴れとなる。

朝、漢詩を手にする。

身体の調子、頗^{すこぶ}る悪し。苦しい一日であった。

午後一時より、K君等と会食。午後四時より、新橋O店にて、M君等と会食。

七時過ぎ、半年ぶりに実家に帰る。われを育てし大事な父、母がおわす家である。――
父母の、一日も長生きくだされんことを願い、失礼する。

八時、R宅へ。参謀室の友と共に。生意気な一家、特に女房に怒りをおぼえる。

午後十一時三十分、帰宅。

来年度の予定を、色々決定していく。

学会誹謗ひぼうの記事をみる。

なんとあさはかな言論よ。なんと責任なき批評か。思い上がりの評論家たちにあきれるだけ。

ともあれ、正義の言論により、十年先、二十年先に、その勝負を決するのみ。

就寝、午前一時を過ぎる。疲れる。

十二月三十一日（金）

晴

午後二時、社を出る。散髪し、爽快そうかいな気分。色心は不二であることが、その度たびに実感される。

午後四時。本年最後の全体会議。

先生、少年時代、青年時代、壮年時代等の懐古談かいこだんをしてくださる。波乱の生涯であら

れた。

——幾多の偉人もいた。幾多の先駆者もいた。しかし、庶民と共に、今、これだけ青年をひきつけ、新時代を建設している人は、先生をおいて断じてない。

権力なく、財力なし。背景なく、地位もない。所詮は人間の裸はだかになった力。全生命よりほとばしる信心の力。十年後、否、二百年後をめざしての英知。

われ、無量の思いあり。

夜、同志と共に、本部にて勤行。終わって、待望の大石寺へ出発。

一、八〇〇名の、友と共に。——

〔十二月〕——昭和二十九年の政界は、造船疑獄、自由党の内紛によって大揺れに揺れた。大勢は吉田茂首相の退陣に向かって動き、十二月七日には内閣が総辞職し、五次にわたった吉田長期政権にピリオドが打たれた。十二月十日には、日本民主党の鳩山一郎総裁により第一次鳩山内閣（三十一年一月二十四日）が発足した。早期解散を条件に左右両派社会党の支持を受けての成立であった。

昭和三十年

——一九五五年——



元旦(土)

快晴

総本山大石寺にあり。

多宝富士大日蓮華山――。

今日よりは かえりみはせじ 御仏に

仕えまつらん 決意も 新たに

暖春。この一年を、青年らしく、学会っ子らしく精進しゆくことを、御本尊様に祈念する。健康のこと、家庭のこと、父母のこと、仕事のことも含めて――。

夕六時、戸田先生、登山。

部隊長、参謀、部長全員にてお迎えする。

理境坊において、約一時間、お話あり。

なお、年頭の歌を、一人一人朗吟^{ろうぎん}。

妙法の 広布の旅は 遠けれど

共に 励まし 共に征かなむ

八時、久成坊二階にて部隊長会。

皆、可愛い。楽しい一夜を送る。参謀等と久成坊に寝る。

一月二日（日） 晴

大石寺にあり。

二十七回目の誕生日。

過去の人あり、現在の人あり、未来の人あり。常に未来の人でありたい。

二時三十分、下山。狭い小さなわが家に向かう。

夕、七時前に帰宅。

疲れた、早く寝よう。

一月三日（月）

快晴

寒い正月であつた。

午前中、休息。身体の調子、悪し。

幸せな家庭である。もったいないほどである。

これ皆、先生のご恩である。この恩、生涯、忘却すべからず。

午後、T支部長宅に挨拶^{あいさつ}に行く。支部幹部等、集まっている。共に食事をする。皆、楽しそう。

大幹部に一詩をおくる。意義ある一夜であつた。

皆、正月であるが、服装、質素なり。

法華経は後生^{ごしやう}のはぢをかくす衣なり、経に云く「裸者の衣を得たるが如し」云云。

帰宅、午前零時を過ぎる。静かなる家庭。

一月四日（火）

晴れたり曇ったり

午前中、在宅。身体の調子、悪し。悔しき思い。

来客——多数。正月なれば、快くお会いし、挨拶あいさつをする。

午後、支部長等と共に、T宅に行く。

支部及び部隊の幹部、多数集合している。種々打ち合わせ、共に雑談。皆して、古典音楽を聞く。続いて詩の朗読をする。

帰路、星座輝く。無量の恩を忘れるなど、教えるが如く。——小さなことにとらわれすぎると、さとするが如く。

一月五日（水）

煙霧

学会の世界、即仏法の世界は、真面目な人が最後は勝つ。いずれの社会も又同じ原理と云える。

吾人も、二十七歳となった。いつまでも、子供に非ずだ。

恩師の下に、強く、立派に育って死にたい。

立派な、広布の人材といわれて死にたい。

立派な、戸田先生の弟子の鏡といわれて死にたい。

立派な、大信者なりといわれて死にたい。

世間なぞ恐れることはない。人の批判なぞこわくはない。しかし、仏法は恐ろしい。大聖人様は、恩師は、実にこわい。

夜、妻と映画を観る。

一月六日（木）

晴一時曇

いよいよ、本年度の火蓋は切らる。

十時より、先生を中心に種々打ち合わせ。

先生、とみに、おふけになられていく。

夜、学会本部にて、同志と共に勤行。

終わって、T会社の会合に出席。思い切り、大車輪で動くことにする。

同志は若い。潑刺^{はつらつ}としている。学会は、永遠性が存在している。未経験もある。だが、大完成の要素は、さらに大である。大胆^{だいたん}に、勇敢に、旧^{ふる}き殻^{から}を破って、新しい道を切り開こう。

此^{この}法門を日蓮申す故に忠言耳^{さから}に逆う道理なるが故に流罪せられ命にも及びしなり。

(曾谷殿御返事)

就寝、午前一時少々前。

一月七日(金)

快晴

夜六時。年中行事の子供会。会場——N園。

多数の夫妻、子供達が集合。皆、楽しそう。

一夫妻、遅刻し、先生より厳しく指導さる。当然なりと思う。

子供会に集合できえぬ人々のことを思うと、私の心は暗くなる。楽しんでいる人がいる
半面、必ず淋^{さび}しがっている人がいる。このことを生涯忘れぬ人でありたい。

公平な人になりたい。いや、陰^{かげ}の人、淋しい人、悲しんでいる人の味方でありたい。

学会歌を、五丈原を、大楠公を、日本男子の歌を、歌いまくる。

この夫妻、この子等が、一人ももれなく、学会の中核になる責務があるのだ。

一月八日（土）

晴時々薄曇

夜、Y店にて、社員達と共に新年宴会。

終わって、正月輸送班として倒れたY君宅にM君（H君）、F君、三人して挨拶あいさつに行く。
香典、金二十万円也を、父親に差し上げる。

青年部員達の誠心の香料である。この父親達が、信心を立派に貫き通しゆくことを、心配しながら帰る。

一年毎ごとに、広布の法戦が激烈になることを、想像する。新しい決意で、若き指導者らしく指揮を執とらねば――。

一生はゆめ夢の上・明日あすを期ごせず・いかなる乞食こつじきには・なるとも法華経にきずをつけ給うべからず。

（四条金吾殿御返事）

一月九日（日）

曇

Y君の支部葬。

常在寺において、午後一時より開始される。約六百人が参列。

青年部長代理として、弔辞を述べる。

全員、感涙と感激の同志愛を、まのあたりに見る。学会のこの清らかな異体同心のある限り、前進は限りなく、さえぎるものはない。

六時三十分。学会本部にて、青年部班長会。

未来の部隊長、大幹部の勢揃いせいぞろを思わせる様子であつた。“後生畏る可し”こうせいおその感を深くする。

K君、夜遅く来宅。可愛い青年だ。しかし、どうも骨がない感じ。心配あり。

一月十日（月） 曇一時晴

六時、R亭において、銀行招待の新年宴会。

酒を飲まぬ自分には、何も面白からず。

無駄な時間とも思う。これが社会か、世間かとも思う。

年配者達と付き合わねばならぬ機会の多いことよ。自分の宿命でもあるのか。

社会の中堅リーダーは、ぜんぶ四十代、五十代のようだ。二十代の自分には、ちょっと年齢が離れすぎている。

帰宅、九時半。読書。

一月十二日（水）

快晴

午後三時三十分、本部にて、聖教新聞社友会会議。

堀米尊師をはじめ、数名の各部の代表で、なごやかに、懇談的に打ち合わせを進める。先生も楽しそう。

言論界の先駆、「聖教」の発展を期す。これ、広布の進展を決定づける基準なれば――。

素人しろうと一名乃至二名ないしで始まったこの紙弾。今、数十万部に近い勢力となる。人々は笑った。素人になにが出来るか、と。先生のいわく「素人も、五年たてば玄人くろうとになつてしまふ」と。

堀米尊師の、お身体を心配申しあげる。

一月十三日（木）

快晴

五時三十分、所化小僧、招待。於本部広間。身体の具合、悪し。

帰り、T宅に、教学の勉強に行く。皆、真剣そのものである。恥はずかしい思いである。いかに幹部たりとも、真剣に勉強せねば、どんどん後輩に抜かれてしまふ。恐るべし。

「行学の二道をはげみ候べし」とは、万人等しくいいわたされた、大聖人の御聖訓である。一人として、別人はなきはずだ。

一月二十二日（土）

快晴

朝九時、特急「つばめ」にて大阪に向かう。

先生と、細井尊師、ならびにI理事、I婦人部常任委員と私の五人であった。

天氣晴朗。車中にて、御書の話、その他、指導多々あり。
大阪一泊。

一月二十三日（日）

晴

八時四十分、伊丹^{いたみ}飛行場より、S、A、T氏をまじえ、極東航空にて、高知へ。

九時五十五分、野原の如き高知飛行場に着陸。戦時中、海軍の飛行場であつたのと
と。

出迎えの車、三台にて、三翠園に着く。

高知地区総会、一時三十分、開催。

先生、ルソーの『民約論』を思想とした、自由民権で起^たち上がった板垣退助、中江
兆民等の革命の講演。——新時代の平和革命の大思想は、この日蓮大聖人の仏法あるのみ
と——。

自分は、渉外部長として挨拶^{あいさつ}。高知の広宣流布は、皆さんの手でとの意を話す。

七時より祝宴、四国全土の僧侶と共に。十名以上の僧侶等であつた。

十一時三十分発夜行にて、大阪に向かう。疲れた。この長き旅、夜行列車は、生涯忘れられぬだろう。

一月二十四日（月）

晴

朝、甲板上に起^たつ。瀬戸内海の金波銀波の絶景に胸すがすがし。絶妙の色彩。無量の音律。極微の朝風。多感の青年には、宇宙に没我せし一瞬なり。

十二時十分、大阪着。

午後、大阪総会に臨む。盛大。

帰宅、午前零時を過ぎる。静かなる家庭。

一月四日（火） 晴れたり曇ったり

午前中、在宅。身体の調子、悪し。悔しき思い。

来客——多数。正月なれば、快くお会いし、挨拶あいさつをする。

午後、支部長等と共に、T宅に行く。

支部及び部隊の幹部、多数集合している。種々打ち合わせ、共に雑談。皆して、古典音楽を聞く。続いて詩の朗読をする。

帰路、星座輝く。無量の恩を忘れるなど、教えるが如く。——小さなことにとらわれすぎると、さとすが如く。

一月五日（水）

煙霧

但し、^{ただ}広布の為、学会の為には、全財産を、捧げること。

一月二十六日（水）

曇

夕、五時三十分、先生宅に集合との事。
何の会合やら、私にはわからなかった。

K、I、H、T、U、そして、私のメンバーであった。

何時、^{いつ}何処^{どこ}の会合でも、最下端の自分。先生の深き指導、面白し。

学会の、批判の嵐^{あらし}も、日増しに強くなって来る。各先輩も、よく戦っている。

先生の胸中は、此の波を、更に一步乗り越え、次期の学会の安定、飛躍を考えていらっ
しやるのだ。皆は、明確に、先生の意中が、わかったであろうか。難し。

海苔屋^{のり}の貧乏息子、大作。糞^{ふん}を黄金にかえられる、この妙法。なんで、生命が惜しかろ

う。真に生命を賭した時、悠然たる力が湧く。

一月二十七日（木）

快晴

常在寺にて、支部幹部会。

支部長の更迭を公表。新支部長を迎え、大歡喜の幹部会であった。

新しい支部の段階となる。時代は激流の如く流れゆく。此の支部に、私は全力を傾注して来た。意義すこぶる深し。

御本尊様に、悔いない報告が出来得る。

帰り、すし屋にて、幹事以上によって、小宴会を催す。文京の人々の善人の眷属たるを沁々と知る。

人事は特に大切。しかし、去る人も、新たなる人も、信心で、楽しく去来して貰い度いものだ。尚、人事の責任者も、公平に、適材適所を旨に、運営しゆくことだ。それには、先生の指導通りが間違いない。

真夜中、妻が陣痛とのこと。大森・山王さんおうのアパートより、矢口の実家に、車にて移す。車のないことを心配したが、ちょうど、一台、アパートの前を通りかかる。諸天の加護と思う。矢口に泊まる。

一月二十八日（金）

曇

午前四時二十分、第二子誕生。

五体満足の由、安心する。御本尊様に感謝の気持ち。

生命の不可思議。学者も、医者も、科学者も、首相も、大臣も、此の宿命ある子に対し、寸分も解決と確信なきなり。所詮しよせん、生命の根本解決は、仏法の真髓のほかは、断じてない。

今日より、更に子の親とし、更に家庭の責任を自覚する。力を持たねばならない。子等と家庭を護りまも、幸福にしてゆかねばならぬ。

帰宅、十一時少々前。一人読書。

一月二十九日（土） 雨

小雨。

何となく灰色のような一日。

午後より、千葉誕生寺の調査に行く予定を取りやむ。雨である故に。

三時三十分より、本部にて、渉外関係の仕事。

人は何も、責任が無いように見える。責任は、何でも自分一人にあるように思えてならぬ。愚癡か——。

一月三十日（日） 晴後曇

暖かな一日であった。

十時、床より出る。頭脳が疲れてならぬ。

勤行、遅くなる。やはり、早い方が良いと思う。

六時よりの財務部会を間違え、午後一時に行く。思い違いの恐ろしさ。

六時、幹部会と財務部会。

支部旗返還式を、支部長代理として、私が行う。

帰路、友と三国志等を語りつつ――。

曹操そうそうの勇を思う。項羽こううの大勇を念おもう。関羽かんうの人格。張飛ちようひの力。孔明こうめいの智。孫権そんけんの若さ。是非論、善悪論、多々論じあった。

王道の人たれ、霸道の人になる勿なかれ。

民衆の王たれ、権力の将になること勿れ。

大衆の友たれ、財力の奴隷どれいになる勿れ。

善の智者たれ、悪の智者になること勿れ。

一月三十一日（月）

晴

午後一時、東大に。

〇助教授および東大生四名と座談会。

宗教の研究との事。

六時三十分、全体会議。疲れる。非常に疲れてならぬ。

早目に帰宅、床につく。

〔二月〕——一月四日、正月登山会の帰路の整理・輸送の任務に当たっていた輸送班員のY青年が、身延線の富士駅構内で列車とホームとの間にはさまれて瀕死の重傷を負う事故が起こった。Y青年は、両親と輸送班員の見守るなかで五日に死亡した。入信八カ月、十八歳の彼が最後に残した言葉は「広宣流布です」の一言であった。葬儀は九日に中野支部葬として盛大に行われた。

第二次世界大戦の終結から十年。この年、戦後世界は東西両陣営の対立、冷戦から、緊張緩和、平和共存の模索へと動き出す。国内では戦後経済の復興が順調に進み、生産・流通の水準が戦前を上回るまでに回復する。政局も秋には両派社会党の統一、自由民主党の結成が行われ、いわゆ

る「一九五五年体制」が成立した。こうして昭和三十年は戦後政治の転換点となった。

戦後十年たっても、日本政府による遺骨の収集は遅々として進まなかったが、ようやく一月十二日に戦後三度目の政府派遣団が出発し、ソロモン群島、東部ニューギニア地域での初めての遺骨収集に当たった。また、この月、沖縄戦で命を落とした「ひめゆり部隊」八十八人の戦死公報が発表され、戦後十年にしてようやく遺族へ年金が贈られることになった。

世相を見ると、戦後ベビーブームのあおりをうけて、昭和三十年には小学校の教室不足が深刻な課題となった。東京都では、二十九年度にすでに千八百教室不足のところを、三十年度には約五万三千人の児童の増加が見込まれ、さらに千教室が不足となった。とくに人口増加の激しい地域では、一学級を六十人以上にしたり、午前、午後で生徒を分ける二部授業を実施してもなお教室が足らず、対策に頭を痛めた。

この月、米海軍は世界初の原子力潜水艦「ノーチラス号」の試運転に成功した。同艦の能力は水中平均速度が二十ノット以上で従来の潜水艦の約四倍、さらに九十時間の連続潜航が可能であった。これを機に世界の海は原子力時代に突入したが、同月には原水爆禁止世界評議会がウィーン・アピールを発表するなど、原子力兵器の禁止を求める声も高まっていった。

二月一日（火）

快晴

六時より、渋谷公会堂に於いて、分隊長会。満員——熱気はらんでいる。頼もし。

近所の、不良少年であった、S君の顔がみえた。立派に更生したのだ。嬉し。母親も、さぞ満足のことか。

挨拶——釈迦時代の実践、天台、伝教時代の実践、末法の日蓮大聖人の実践等の相違を話す。更に、化儀の広宣流布の闘争の段階を語る。

戒壇建立の意義、並びに過程を、もう少し、明確に話すべきであると反省する。

終了後、近くの中華料理屋に集まり、部隊長会。

小雨降りはじめ。淋しき吾が家へ。

帰宅、十一時五十分。

二月二日（水） 晴

平凡な一日であった。

大事な建設期に、悠長な一日であっては済まぬような気がする。自分自身に。

『鴻門の会』を読む。『四面楚歌』を読む。

『虞美人草』の、悲哀——史詩に胸懷そぞろなり。

六時より、教授会。非常に、神経疲れる。明日より、先生に左記の御書の教示をお願いする。

一、百六箇抄

二、本因妙抄

三、御義口伝

四、観心本尊抄

五、開目抄

六、六卷抄 以上

二月三日（木）

晴

寒い一日であった。

自分の性格に困る時がある。自己の性格を、これで良しと思う時もある。詮^{せん}ずる所は、誰人に批判され、誹^ひ謗^{ぼう}されようと、師につききり、妙法を唱え切ることだ。自身に恥^はじぬ仏道修行を、忍耐^{にんたい}強く日々続けゆくことにつきる。

一級講義出席。豊島公会堂。幹部の出席少なし。先生存命中に、此の不思議なる、法華經の妙義、原理を究^{きう}めたきものだ。

二月四日（金） 雨後曇

六時、臨時幹部会（青年部幹部室以上）。於本部。

R寺問題に付き、集合。

一、六十名、代表として出勤。

二、七十七か寺に分散して、話し合う事。

十一時、解散。

小生、明日は仙台・仏眼寺に行くことに決まる。

疲労重なる。疲れたるこの姿。

二月五日（土）

晴

九時五十分、急行「みちのく」にて、仙台に出発。先生の随行。他にK、Y、B夫人、Y、A等であつた。

先生の厳しき指導。そして愛情深き振る舞い。真剣に給仕を為す。三時四十九分、仙台着。

多数の人々が、出迎えに来ていた。非常に寒し。胸が痛み困る。

法華経は冬の信心なり。冬は必ず春とならん。吾人の人生も又、斯くあるらん。

四時三十分、東北放送局において、小島アナと、戸田先生の対談あり。小生は唯一人、その中に入る。

師匠の語る、録音をまのあたり見る。

六時、「方便品」の講義。労働会館。

二月六日（日） 晴

十時、労働会館に於いて、昨日に引き続き、講義。「寿量品」に入る。

一時より、第三回目の講義あり。用事か、お身体の具合故か、先生二時間遅れてお見えになる。その間、吾々^{われわれ}、派遣部隊一同にて、指導をする。

私も、生命力、罰論、利益論の話をする。

四時三十分、S宅にて、青年部班長会開催。苦しき生活の中、よくも頑張つて来たと感嘆する。此の中より、偉大な大幹部が必ず出現することであろう……と。

土性っ骨、忍耐力、強き男性の完成。この風土、この環境。

六時三十分、仏眼寺に、S尊師を訪ねる^{たず}。S住職の事に付いて意見を種々伺う^{うかが}。驚くべ

き資料を多数、お教え下さる。

十一時二十八分発にて、仙台駅を離れる。東京へ向かう途中、つぶさに、先生に報告。先生、深く黙し、思索しておられた。

自分の使命は、達成した様子。

二月七日（月）

曇後雨

朝六時三十五分、上野着。

先生は、直接本部へ。私は、床屋へ行き、八時十分、出勤。

小雨降る。久し振りなり。一雨ごとに、春の光の到来を感じる。

先生の指導、お話等を、書き留めておく必要性を深く自覚する。

五時三十分、本部。

先生に、各寺院派遣隊の結果を、詳細に亘り報告する。先生の、真剣な態度に恐れ

入る。

帰り、T支部長、婦人部長と三人で、五反田にて、うなぎを食う。雨やまず。

二月八日（火） 雨後曇

平凡なる一日であつた。

決して傲らず、自己の、社会に尽くすべき任務を、真面目に考えねばならぬと反省。

明日より、一段と心を引き締め、何事も処理していこう。惰性と建設、義務と権利、消極と積極。更に、規律と放縦ほうじゆう、土性どせいと骨と意気地なし。偉人といわれる連中は、どこが偉く優れていたのか。——結論は、自分自身に克かつたことか。そして、所期の目的に進み抜いたことか。

一、教学を徹底的に致す事

二、読書し、将来の糧かてとしゆく事

三、自己の建設を、常に忘れざる事

六時、本部、部隊長会。これで良しといえる、指導がしたいものだ。

会長室にて、先生より、T精工の文化棚だなのことにて、ひどく叱ならる。已やむを得ぬ。友を助け、友を守るためだった。

御本尊様に、恥じざるなり。

帰り、S宅へ。おやじさんの威張りすぎにはよわるなり。困ったことだ。いくつになっても、人は調子に乗るものか。――

誰もいない、淋さびしき吾わが家へ。

帰宅、十二時一寸前ちよつと。

二月九日（水）

晴後曇

午前中、在社。

戸田先生に、お詫^わび申し上げること多々。自身に鞭打^{むち}ちて、前進することだ。

青年は、過去にとらわれるな。現当二世が、大聖人の教えではないか。

過去にとらわれすぎるは、老いの心、死の心である。笑われても、輕蔑^{けいべつ}されても、断じて前に進め。

六時三十分、文化部会。吾人^{ごじん}は、無冠、草莽^{そうもう}にあるなり。王仏冥合の先驅をゆく、彼等の前途に、祝福あれ。道違^{たが}わず、後輩のために、強く、広く、堅固な道を築かれん事を。

終わって、参謀会議。皆、疲れている様子。吾人も――。

二月十日（木）

薄曇

全身疲れきる。

苦しい一日であった。罪業か。

「衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す」の經文を、自身が色読することだ。

正午より、三越及び伊勢丹に、明日の先生のお誕生日に贈る品を買いに行く。

Yシャツ、ネクタイ二本、真珠のカフスボタン、靴ベラ等を購入。誠心込めた贈り物と確信する。

二時、本部面接担当。

疲れたせいか、元気ある指導出来得ず、残念。

七時、一級講義出席。

八時三十分、常在寺に、意見書伺い。

九時三十分、班長会。

疲労のため、T宅に泊まる。

二月十一日（金）

晴一時曇

先生、満五十五歳の、お誕生日。

小生、二十七歳となる。

項羽^{こうう}は、三十一歳にして自殺。アレキサンダー大王は、三十一歳にして世界の統一。ナポレオンは、又、三十歳にして皇帝。誰人が、真に偉大なのか。その根底に持つ思想か。実現せる、偉業の価値内容か。その人の持つ、宿命的、先天的な力か。

自分は、平凡でよし。されど、大宇宙の本源力たる妙法の流布に、生涯生きゆく事だ。波もあれ、風もあれ、曲解もあれ。されど、末法万年、尽未来際^{じんみらいさい}まで、功力^{くりき}ある大法則に、此の人生を捧げきる事だ。

社会の風波、栄枯盛衰^{えいこせいすい}は、迹^{しやく}の中の迹であり、幻影にすぎない。妙法嚴護の人生のみ、本^{ほん}の中の本である。ここに真実がある。その人々が栄えゆくことは、必定^{ひつじよう}である。

人生、二十七歳。倒れたくない。

二月十二日（土）

快晴

寒き一日であつた。

朝、遅目^{おそめ}に起床。非常に疲れていた。

常に思うことは、教学に力を注がねばならぬという事である。

六時、本部へ。勤行をする。題目が順調な声であがらぬことが困る。

六時三十分、部隊長会議。第一応接室。文化部の件について、打ち合わせ。帰り、大森駅にて、Z氏、他二人と会食。

二月十三日（日）

曇後晴

九時、起床。

寒い朝であった。一人で、朝風呂に行く。

正午前後、S氏、M女史、子供のお祝いに来てくれる。お茶も出せぬので困った。

一時、蒲田支部、第五回総会。

四、五〇〇名集合との事。頼もし。

渉外部長祝辞として、二、三分程度の挨拶。

六時三十分、S宅にて、祝賀会。淋しい、つまらぬ会であった。

終わってH氏と共に、支部の会合に出席。戸田先生のお具合、かんばしからずとの連絡あり。早速、学会本部に。

二月十四日（月）

快晴後薄曇

夕刻、先生お休みのところ「百六箇抄」の講義をお願いする。快く、床の上から、指

導、講義して下さる。かたじけな 忝い。

四級講義、出席。

教授陣、助教授陣の、見事なる進歩に、いささか驚く。地味な人ほど、着々と、実力をつけている。本当に嬉うれしくもあり、油断のならぬことだ。

M君、H君等に、帰り、食事を御馳走する。

二月十五日（火）

快晴

先生、朝より厳咤。

吾わが心、峻岳しゅんがくの氷雪を踏む思いあり。

寒風、裸者らしゃを刺す如し。申し訳なし。

精神年齢、肉体年齢、共に革命せねば。色心しきしん連持れんじで、仏法の実践、実証をなす事だ。

夜、「百六箇抄」の指導、講義。着々と進む。

終わって、常在寺にて、組長会。大盛況。歓喜に集う、民衆。利害、名誉、権力等々、皆無の会合。これこそ、真実の民主主義である。後世の歴史家よ、心して見よ。

十二時、帰宅。一人読書す。

二月十六日（水）

快晴

大聖人様の、御聖誕日。心豊かに唱題する。

『隊長ブーリバ』を読み始む。脳裏に去来するものあり。

正午、会長室へ。厳しき指導に、心痛し。I君、A君と三人して、Y新聞社に、二月九日付け埼玉版の批判記事に、抗議に行く。事実無根のデッチ上げ記事を追及。A編集長、反抗強し。これが、公平なる言論かと、怒りおさまらず。引き続いて、浦和支局で、K局長と会い、訂正を申し込む。最後に、一往非を認めさせ、目的達成して帰る。

夜、地区部長会。皆の真剣さに応えるべく、真剣に指導。皆、良く戦ってくれる。
涙溢れる。

帰り、本部へ。先生に、新聞社への抗議の報告。
先生、吾等の戦いを、飲んで下さる。安心せり。

二月十七日（木）

晴後曇

出離生死の問題を、真面目に考える昨今である。

午後、会長室へ。R寺問題で、私が先生より、厳しく叱られる。何時でも、私が、叱られてしまう。理事長や、理事は、あまり叱られぬ……。思うように敢然と指揮がとれれば、やりいいのだが……。進退窮まれる立場なり。

早速、緊急理事並びに参謀会議を開く。終了後、引き続いて、参謀会議。真剣に、作戦

及び、編成を考える。

夜半に帰宅。大阪関係に電話連絡をする。

二月十八日（金）

曇

朝六時、起床。

早朝の空気は、万金に優る。余裕ある、朝でありたい。

先生より、電話あり。厳しく叱らる。R寺事件の新聞記事を知らぬとは、何事かと。
早速、御自宅に伺い、お詫びする。種々、指導を賜る。

魏徴の「述懐」の詩を、電車の中で読む。

中原還逐鹿

中原 還 鹿を逐い

投筆事戎軒

筆を投じて戎軒を事とす

縦横計不就

縦横の計 就らざれども

慷慨志猶存

慷慨の志 猶存せり

仗策謁天子

策を仗いて天子に謁し

驅馬出関門

馬を驅つて関門を出づ

請纓繫南粵

纓を請うて南粵を繫ぎ

憑軾下東藩

軾に憑りて東藩を下さん

鬱紆陟高岫

鬱紆として高岫に陟り

出沒望平原

出沒して平原を望む

古木鳴寒鳥

古木に寒鳥鳴き

空山啼夜猿

空山に夜猿啼く

既傷千里目

既に千里の目を傷ましめ

還驚九折魂

還 九折の魂を驚かす

豈不憚艱險

豈 艱險を憚らざらんや

深懷国士恩

深く国士の恩を懷う

季布無二諾

季布に二諾無く

侯嬴重一言

侯嬴は一言を重んず

人生感意氣

人生じんせい 意氣いきに感かんず

功名誰復論

功名こうみょう 誰たれか復また 論ろんぜん

愛誦またの詩、亦また樂し。

二月十九日（土）

晴天

先生、朝、登山会に御出発。お見送り出来ず、残念。

自己の愚を思う、昨今である。

大御本尊様に、おすがりする以外になし。

十一時の列車にて、本山へ。

T部長、U部長、M参謀と共に。車中、良く眠る。

本山三時着。各坊の住職に、R寺のこと、先生の登山止めの、宗務院の通達のこと等に

関し、話し合いを重ねゆく。

夜半、かがり火を燃やす。青年部の登山者達のことにつき、先生より、ひどく叱らる。側近のつげ口はこわい。

二月二十日(日)

曇

於本山。

早朝、四時頃より、風速二十米^{メートル}以上の風が吹く。嵐^{あらし}である。

十時、Y君の納骨式。

先生のお墓に入れて下さる。

師の慈悲深きこと、海よりも深し。

誰人も、思ったことであろう。広布の途上、先生に抱かれ、死してゆきたしと。

十一時すぎの夜行列車にて、富士駅より、二十四名の同志と共に、大阪へ直行。

京都付近より、真白き雪、頻りに降り始む。印象的である。……外は厳寒であつた。

朝八時十六分、大阪着。

直ちに、寒き中、二班に分かれ、R寺、R会に行く。宗門の師子身中の虫、恐るべし、
恐るべし。猊下^{げいか}を外護^{げご}申し上げる、唯一つの、正義の陣営、学会の偉大さよ。

なにもいとわず、清純に、強信に動く同志先輩の姿、有り難し。美しき、絵図の如し。

二月二十一日（月）

晴

厳寒。

五時三十分、起床。

四班に分かれ、それぞれ行動を起こす。

宗門、第八教区関係の僧侶と会う。

正蓮寺、住職とも会う。

警察にも、足をはこぶ。

仏法に照らし、吾等^{われら}の行動の、絶対正しきことよ。

悪人は、どこまでも、凶太く、卑怯^{ひきよう}であり、悪智慧があるものだ。

仏の軍と、魔の軍の相違。仏の眷属^{けんぞく}と、提婆^{だいば}の眷属の相違。永久に、この縮図は存するものか。――

二月二十二日（火） 快晴

九時二十四分、三等車にて、東京着。

即刻、先生に、御報告に行く。先生、病院に行かれ、お会い出来ず。残念。

一時過ぎ、あらためて本部に、報告に行く。先生、良く聞いて下さらず、困る。その理由、全くわからず。いたたまれず失礼する。

先生の意の如き結果出ず。さぞや、先生も、悩んでいらつしやる御様子と思う。否、我等の未だ青い姿に、残念と思っていらつしやる様子か。――

二月二十三日（水）

快晴

春の如き陽気を思わせる。

午前中、平々凡々に過ごす。頭がまとまらぬ思い有り。妙は頭こうべなり。頭の乱れは、謗法に由来するか。唱題あるのみ。

三時より外出。春光の小路を、社員達と共に、御徒町おかちまちより上野まで散歩。様々さまさまな相の人在る。戦後、特に形相が悪くなって来たように思う。修羅道の故か、畜生道の故か。

早目に、大森の我が家に。ぐっすり休むことにする。

二月二十四日（木）

快晴

「当流行事抄」の講義を休む。

先生と、談合の機会少なく、いと淋^{さび}し。

一、御本尊様に、恥じぬ信心をしたい。

一、師匠に、賞讃される弟子になりたい。

一、同志に、信頼され、尊敬される人になりたい。

夜、日大の事務長宅へ。

常在寺の幹部会に、遅れて出席。

早目に帰宅。

一人、机に向かう。

二月二十五日（金）

薄曇

暖かな一日一日である。

どうも、自分は、落ち着きが足らぬ。

信心ということが、次第にわかって来た。

一時、目黒の先生宅へ。

三時四十分、A君と、M新聞社へ。

六時、本部へ。先生、お見えになって居られる。直ちに、報告。
T氏、先輩なれど、どうも困ったものだ。狭量なる人よ。

志木支部の幹部会に出席。遅くまで、個人指導をして帰る。
就寝、一時三十分を回る。

二月二十六日（土）

曇後快晴

天氣の模様、悪化して来る。

希望も、歡喜もなき日がある。進歩と、前進を感じずる日もある。所詮、いかに調子悪しき日なりとも、自己の修練は続けるべきだ。況んや、永劫の生命会得の、仏道修行においてをやだ。

本年第二回目の全体会議。

一、生命力、生活力について

二、一日の生活のあり方

三、有能な指導者とは

等々の、先生の指導あり。

終了後、A町に、H氏を訪う。義弟の大学の先生宅である。

矢口のS宅に寄る。理事長、H氏らも来る。おやじの、狭小さに驚く。

現実の生活、給料少々足らなくなる。

資本主義、共産主義、社会主義。理想はいかにと、経済機構を考える昨今なり。

二月二十七日（日）

薄曇

八時、起床。

気兼ねをしながら、生きる青年でありたくない。自身の生命力、自己の責任をもった、信念の行動が大事なのだ。

十時より、第二部隊葬。横浜久遠寺。T部長と共に、出席。

午後、常泉寺にて、N君の結婚式に出席。同志に幸あれ。

先生より、

一、功德の事につき、お話あり。

一、一念という事につき、指導あり。

厳しき、お話であつた。

疲れる。倒れるような半日であつた。

帰り、葛飾の連合地区座談会に出席。集合人員、二百三十名とのこと。
久しぶりに、折伏を敢行。爽さわやかなり。

二月二十八日（月）

雨後晴

八時まで休む。勤行出来ず。

六時、幹部会。豊島公会堂。

終わって、大幹部会。常在寺。

先生の、大幹部への指導たるや厳なり。

私は、私の力の限り、頑張ることだ。

「本因妙抄」に曰く、

仏界の智は九界を境きようと為しな九界の智は仏界を境と為す境智互たがいに冥薰みようくんして凡聖ぼんしょうじようどう常恒なる是を刹那成道せつなと謂いう、三道即三徳どうと解れば諸惡たちまち儻に真善なる是を半偈成道はんげと名なづく。

生活が、日毎ごとにきつくなる。題目を唱えることだ。

十二時、帰宅。

〔二月〕——二月一日から、新憲法下で四回目にあたる衆議院議員総選挙の立候補届出が開始され、千五十八人の候補者が四百六十七議席を争う選挙戦が始まった。この総選挙は、前年秋の乱闘汚職国会の後に成立した鳩山内閣が、早期解散を公約して実施したものであった。

このころデフレ政策の影響を受け、失業問題が深刻化していた。前年末で統計上の完全失業者は六十二万人だったが、実際には百万人に達するものと見られていた。半失業ないし潜在失業者も、六百万人を数え、新たに増加する要雇用労働力は、六十万人を超え、失業者は増大する一方であった。この影響は進学にも及び、順調に伸びていた高校進学は戦後はじめて頭打ちとなり、就職希望者が増えた。また、大卒者の就職戦線も混乱した。とくに地方の大学が大きな影響を受けた。

教育面では、大学受験者の数が毎年増加、昭和三十年には四十万人に達していた。それに対し、国・私立大学の募集人員は約十一万人にすぎず、すでに入試は「狭き門」であった。大学浪人が増え続けるに従い予備校も誕生し、三十年には都内に二十一校の予備校があった。

一方で、中華人民共和国からの第十次邦人帰国船・興安丸は、二月十九日に天津市近郊の塘沽^{タンク}港を発ち、二十四日に京都府の舞鶴港に着いた。戦後十年にしてようやく祖国の土を踏んだ帰国者は一般邦人、元軍人・軍属など九百四十九人であった。この人びとは四川省など中国の西南、西北部で新中国の建設に携わってきた技術者が多かった。これで二十八年の北京協定締結以降、二年間の帰国者合計は二万八千百七十五人に達したが、戦犯など未帰国者もまだ数千人に上っていた。

海外では、二月八日、ソ連のマレンコフ首相が経済政策の遅れの責任をとって突然辞任し、世界を驚かせた。マレンコフ氏はスターリン氏の死後すぐに首相となったが、在任期間は二年たらずであった。後任の首相には国防相であったブルガーニン氏が就き、重工業重視などの方針を打ち出した。

また、東南アジア条約機構（SEATO）が発効し、バンコクで第一回の理事会が開かれた。これは前年九月にダレス米国務長官の主導でマニラで調印された東南アジア集団防衛条約に基づくものであった。条約の署名国は米、仏、英、豪州、ニュージーランド、タイ、フィリピン、パキスタン、の八カ国である。しかし、その後、米のベトナム戦争介入が深まるにつれて内部の不一致と各国の離反が強まり、同条約機構は、昭和五十二年に解体した。

三月一日（火）

晴後曇

第六天の魔王の所作か。

背、重痛。苦しい一日であつた。

薬王菩薩の湧現を、梵天・帝釈の働きを、御本尊様に願うのみ。

会長室にて、夕刻「百六箇抄」の講義を賜る。

自分の頭の悪きことを、つくづくと知る。

足立区の連合座談会に出席。

約二百五十名の出席との事。力出ず、思う存分の活動出来ず。悔いある会合として、
まいった。

三月二日（水）

曇

午前中、Y新聞社浦和支局に、再度、M氏、A君と共に、最終的交渉に行く。
成功した模様。

帰り、葛飾区役所裏の、保健所での会合へ行く。

N氏の選挙の応援。出席者、約三百五十名であつた。当選は、必至とみる。

大森駅まで、M女史らと共に来る。

様々さまざまな話あり。様々さまざまな意見あり、様々さまざまな質問あり。

「四条金吾殿御返事」

「賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、
利うるおい・衰おとろえ・毀やぶれ・誉ほまれ・
称たたえ・譏そしり・苦くるしみ・楽たのしみなり」云云。

浅き友がいる。深き友もいる。縁薄き友もある。苦楽を分けあう友もある。人それぞれ、信ずるのは、自分自身という。これ利己主義の異名。本能なのか。

我が学会のみは、深く強き、異体同心を實現したいものだ。全世界に唯ただ一つ。

三月三日（木）

晴後曇

桃の節句。

正宗では、妙法五字の法の一字のまつりに当たるなり。

若芽が伸びゆかんとするに、病弱の、何と淋^{さび}しきことか。くやし、悲し。健康であつたら、どれだけの大仕事が出来ようか。

十一時、W君、T家の結納^{ゆいのち}に行く。

両家に幸^{さち}あれ。

夕刻、本部へ。

先生、お元気の様子。床屋へ行き、さっぱりして来たと仰^{おつ}しやる。

俺も、お前も、男らしい戦いをやり抜いて来たなあ……と、暖かい激励の言葉を下さる。

夜、葛飾へ。

多数のブロック員集合。今日は、思いきって、指導激励する。

生きよう、広布のために。生きねばならぬ、りようほうくじゆう令法久住のために。学会のために。後輩のために。妻のためにも、子供のためにも。いや、一生成仏のために。地獄へ行かぬために。

帰宅、十二時を過ぎる。疲れる。心身共に。

三月四日（金）

曇

学会批判しきりなり。

弱き者は、退す。強き者は、喜ぶ。

大聖人も、

賢者ハヨロコビ、愚者ハ退スルナリ、と。

感情の批判、無認識の誹謗。ひぼう当分の間、いや、一生涯、大聖人の弟子なれば、批判はあ
ることだろう。

御金言なれば——覚悟は盤石。ばんじやく

戦時、軍部と対抗して来たのに、軍隊調なりと。笑止千万^{しょうしせんばん}。

他宗教を、邪宗呼ばわりするから、暴力的なりと。正は正、邪は邪と、基準を持し、大確信で叫ぶことは、最も大事なり。利害と卑怯^{ひきよう}なる世界では、肝^{きも}を冷やさん。

月皎々^{こうこう}。

秋ノ月モ可。春ノ月モ亦^{また}可ナリ。

大月天、大明星天、共ニ己心ニ。不思議ニ思フナリ。宇宙又、神秘。生命モ亦^{また}、神秘。

三月五日（土） 曇後雪

遅刻する。極^{きま}り悪し。

一時三十五分、東京発の列車に乗り、登山。

車中、一人思う。

自分ニ鞭打^{むち}テ、強ク、嚴シク。

自分トノ戦イダ、他人ノ責任ニスルナ……と。

三月六日（日） 晴

朝七時、起床。

在本山。

昨夜は、理境坊住職に、懇々^{こんこん}と、長時間に亘^{わた}って、学会の使命、大聖人様の予言、宗門のあり方等を、話す。御書を引き、情熱と誠意を込めて。

他の大幹部も、それぞれ各坊で、同じように、活動する。宗門も、次第に、広布の夜明けの如く、目覚めゆくことだろう。

八時、先生を迎え、水滸会。——『三国志』。

十時三十分、御開扉。

終わって、御法主上人^{げいしか}猊下の御目通り。並びに堀御隠尊^{ごいんそん}猊下の御目通り。

四時、雪山坊落成式。——六時、終了。

堀日享^{にちこう}御隠尊猊下を、皆して、「日本男子の歌」を歌いながら、お送り申しあげる。
非常に、嬉し^{うれ}そうであられた。

七時、下山。沼津經由にて帰る。

教学を身につけねばと、いつも思う。自分は学者に非ず。されど、真実の実践には、
透徹^{とうてつ}した大理念を裏付けとすべきである。

三月七日（月） 快晴

信心、自信、確信——ふと実践の中より思惟^{しゆい}する。人生の根源の力とは——。

運命、宿命、宿業——生涯を決定するものは何か。何が最も力のある作用となるのか。

今世の努力との関係を思念する。

夕刻、H君と会食。ゆっくり休む。

もう少し、益友と思っていたが——。名誉主義と、利己主義に落ちゆく性分か。彼もまた。

六時三十分、緊急支部幹部会。皆、疲れている。元気なし。可哀想に——。

将が、人間性豊かなところは、後輩が幸福である。

将が、政治性と、権威主義のところの、後輩ほど不幸これなし。

学会の幹部も、まだまだこれからだ。もっと苦勞せねば——。

帰宅、十一時。楽しきは、吾^わが家。

三月八日（火） 曇一時雨

会長室にて、緊急会議。……部隊長会。作戦、企画を発表。

小樽^{おたる}での身延派との法論の事。

先生の力の入れ方、一方^{ひとかた}ならず。

先発部隊は、直ちに、夜行にて、北海道・小樽に向かう。

責任教授、

K、T、I、Rと私となる。

三月十一日（金）

晴

朝、七時三十分発、日航機で北海道へ。

千歳着、多少遅れ、十一時三十分になる。

先生と、K、T、私の四人であった。

小樽^{おたる}まで、札幌より汽車。現地到着、午後三時、駅前旅館に入り、直ちに作戦の打ち合わせ。

四時三十分、小樽公会堂に、先発として着き、先発部隊と種々打ち合わせ。
吾人^{ごじん}が、実質の指揮者である。

身延側と、登壇順位、討論、質疑等の打ち合わせをする。I氏と共に。
私の作戦通りに、すべて決定されていく。楽し——。

旭川、函館、札幌、小樽等の学会員も、約七五〇名、先発部隊の指導・激励により、集合。

七時ちょうど、歴史的法論に入る。

最初に身延側司会者、松井氏、三分の挨拶^{あいさつ}。
次に、私の挨拶。

講師は、

長谷川義一、次に辻武寿、

室住一妙、次に小平芳平、

の順で、各十二分ずつ、自宗の主張。

引き続き、長谷川、辻、室住、小平の順にて、各五分ずつ、補足法論。

次に、質問会。二十分。四人の講師の中、誰人を指名して、質問するも可。
最後に対決。

学会側講師、身延側講師、共に二人が一体となって、各七分間の自由登壇。特に、急所の本尊論、本仏論等の四問題を中心にして、戦闘的な論戦の火花が散らされた。

九時十分、一切終了。

学会側の勝利は、理上にも、実相の上でも、厳然たるものがあつた。

先生、非常にお喜びの御様子。

三月十二日（土）

曇時々晴

雪の北海道。

愛する、詩の北海道。

八時三十分、起床。

九時五十分の汽車にて、小樽^{おたる}を発^たつ。札幌へ。

直ちに、三菱札幌寮にて、御巡教途上の水谷日昇^{げいか}下^かの、御招待にあずかる。

先生以下、大幹部、青年部、計十九名。

六時三十分より、札幌班の人々、数十名、グラント・ホテルに集合。幹部挨拶^{あいさつ}をなし、先生に質問会を少々して戴^{いた}く。

淋^{さび}しい、元氣のない班である。

三月十三日（日）

曇

八時、起床。在グラント・ホテル。

先生に、御挨拶^{あいさつ}に行く。非常に、お楽しそうであった。嬉^{うれ}し。

九時四十八分発で、^{げいか}狎下お発ちの札幌駅へ、代表としてお見送りに行く。

旭川へ御巡教の御予定との事。

「お身体を、大切になさって下さい」と申し上げる。

雪の大路を踏み、〇工業所の会合へ、指導に行く。班員二十数名、集合の由。T部長と共なり。

四時、日航営業所前へ。

五時五十五分の便に搭乗。羽田空港に、九時三十五分到着。疲れた。先生、割り合いにお元気の御様子。

空港、出迎えの方々に挨拶し、先生を、御自宅まで、お送りする。

三月十四日（月）

薄曇

朝から、非常に疲れていた。

五時半、本部へ。

六時半より、小樽^{おたる}法論の模様、実況を、テープレコーダーにて聞く。教授、助教授一同と共に。

次期の司会の時を考え、色々、反省する。もっと、勇気を。もっと、迅速を。

帰り、T宅へ——緊急幹部会（青年部）。

皆、元気なし、疲れているのか。やる気がないのか。宜^{よろ}しい、自分が一人起^たとう。

帰宅、十二時近し。

多情・多感——。英知——。理性——。慈悲——。勇氣——。包容——。福運——。

力——。

人間革命とは。宗教革命とは。社会革命とは。政治革命とは。文化革命とは。

つれづれに……漠然^{ばくぜん}と考える。

三月十五日（火）

曇りがち

身体具合、非常に悪し。

寿命を考える。宿命を考える。背痛し。背重し。

夜、文京支部組長会、出席。

元気出ず、悲しい。

八時過ぎ、築地支部、蓮沼の総合座談会に出席。集合者、三百名内外。非常にやりにくい会合であった。

理事長、統監部長来る。十時、終了。

御書に曰く、

天もさだめて・しろしめし地もしらせ給いぬらん殿いかなる事にもあはせ給うならば・
ひとへに日蓮がいのちを天のた^断たせ給うなるべし、人の命は山海・空^{くう}市^しまぬかれがたき事
と定めて候へども・又定業^{じようごうやくのうてん}亦能転の経文もあり・又天台の御釈にも定業をのぶる釈もあ

り、云云。

(四条金吾殿御返事)

吾^われ、内外共に、嵐^{あらし}の如し。病魔と闘え。嫉妬^{しつと}せる者共と戦え。青年らしく。戸田先生
の愛弟子^{まなでし}らしく。

三月十六日(水)

壘

身体^{しんたい}の調子、全く悪し。

宿命^{しゅくめい}か。罪業^{ざいごふ}か。謗法^{ぼうぼう}か。如何^{いか}にせん。

精気なく、意気なく、死せる寸前の人の如し。人生の青春。人生の桜花。今、散りゆく
は、いと淋^{さび}し。

題目をあげきること^{こと}に尽きる。仏法の厳しさ、自己の一念の厳しさ、実証のため、自ら
奮起あるのみ。

大法弘通に、名誉ある死を遂げたい。そして、永久に、ゆっくり、休息したい。

静かに、深く。

生じようト死し。成住じようぢゆう壊空くわくう。生老病死じようろうびよくし。常樂我淨じようらくがじよう。久遠くおんノ生命せいめい。永遠えいゑんノ生命せいめい。瞬間即永遠しゆんかんすくえいゑん。
生死しじふじふ不二ふに。色心しきしん不二ふに。三世常恒さんぜじようごう。

実感シ、会得セズシテ、去ルハ、正信ノ徒トシテ情ケナシ。頑張レ。頑張レ。

三月十七日（木）

快晴

身体しんたいの具合ぐあい悪し。

顔色がんしき、悪しと、妻よりいわれる。

無理して、出勤。車中、気持ち悪くなる。

七時、O氏のために応援。区議会議員選挙である。

常在寺、約四百名集合。当選は間違いなからう。

〔三月〕——二月度本部幹部会（二月二十八日、東京・豊島公会堂）の席上、二月の弘教の成果は一万一千四百七十五世帯と発表され、学会は躍進の息吹に満ちていた。ちょうどこのころ、北海道・小樽では学会の班長と身延派日蓮宗の僧とが法論したことから、学会を過小評価した身延側が正式に公開法論を申し込んできた。「小樽法論」の発端である。この「小樽問答」は日蓮正宗の正義を証明し、学会側の圧倒的大勝利で終了した。冒頭、あいさつに立った司会者の池田名誉会長（当時、参謀室長）は「この法論によって身延派の教義の誤りは、決定的に天下に宣揚されることになる」と強調して講師を紹介した。学会側が身延派の誤った教義と歴史性をつき、終始攻勢に立つたのに対し、身延側は感情論を述べるのみで、学会教学陣の鋭い質問や文献的証拠の求めに狼狽するなど醜態をさらした。

三月八日、前年の十一月に設置されたばかりの文化部に、新たに教育者や社会の第一線で活躍するメンバーを中心に、十三人の文化部員が任命された。戸田第二代会長は、広宣流布の伸展にともない、あらゆる分野で社会に貢献する学会員が誕生していくことを願って、文化部の拡充に人知れず心を砕いていた。小樽問答という広布史に残る事件と相前後して、学会はさらなる活動の展開に向けて、着実に歩みを進めていたのである。

三月度本部幹部会（三月三十一日、東京・豊島公会堂）の席上、三月度の弘教成果が一万三十九世帯と発表された。支部の成果順位では、大阪支部が蒲田支部を抜いて第一位になった。また、「聖教新聞」は四月三日付け第百六十八号から、高速輪転機による印刷を開始した。それ以前、平版印刷機でまる一日の時間を要した印刷が約一時間で完了するようになり、より新しいニュースが迅速に読者の手元に届けられるようになった。

政治面では、三月組閣した第二次鳩山内閣は日ソ国交正常化、住宅四十万戸建設計画等、意欲的な政策を掲げた。しかし、与党・日本民主党が衆議院の過半数を占めなかったため、安定政権

を維持することが困難だった。一方、財界はこの年、輸出船受注量を世界一に押し上げるなど、生産・流通のレベルを戦前のそれまでに回復し、政治への影響力を強めていった。こうして日本民主党と自由党を統一し、日本初の保守単一政党Ⅱ自由民主党を設立する動きが日増しに高まっていた。

四月七日（木）

快晴

暖かな一日であった。

一日中、身体の具合悪し。注射を打って貰う。

二時十五分、久里浜行き電車にて、横須賀へ行く。――

Y支部幹事、K幹事、M女子部隊長、U女史と共に。

自分が元氣なき故、皆に迷惑を掛け、済まぬ気持ちであった。

国際色豊かな、横須賀の街を、初めて見る。

七時より、会合。盛況。

地区部長挨拶、部隊長決意等のあと、自分が挨拶。静かに十五分ほどにて失礼する。

四月十日（日）

晴後曇

朝九時過ぎまで休む。

心落ち着かず。

十一時、K氏の選挙事務所へ行く。何となく、いやな感じであった。

学会初陣の、文化闘争の幕が開かれたのである。自分が、先生より、印綬いんじゆを渡された、城南、横浜の総司令である。

学会の、王仏冥合のための、選挙に、思う事多きを痛感した。

信心ある人、力ある人、人々を心から大事にする人、即ち、有能にして高潔なる人物を送り出すことだ。威張る人、利用根性の人、出たくてたまらぬ人、これらを、断固防がね

ばならぬ。責重大なり。

特に、上層幹部に世辞をいい、へつらう小人には、重々、注意。

一時より、街頭演説に行く。四時過ぎまで。

世間の選挙通顔して、罷り通っている幹部。そののみ信用して、信心、学会を忘れんと
してゆく候補。愚や、愚や。

その内、眼が醒めゆく事であらう。

四月十一日(月)

快晴

春光、瞳にまばゆし。

本部へ、夜行く。長時間、唱題。

不退転。——勇猛精進。——

帰り、選挙事務所、I宅に寄る。

樂觀許さじとの事。皆、真剣になつてきた様子。互いに意見、囁々として、まとまりなくなつてきたとの事。

戸田先生も、非常に心配のご様子。

小生、最後の勝利の鍵は、団結と。私の示す編成にせよと、強く主張。

新たなる、前進の息吹を知る。一安心。今夜より、事実上の指揮者となる。
苦勞多し。

四月二十七日（水）

雨後曇

具合悪し。

五時より、神奈川の橋本へ行く。I女史の個人演説会に出席。

全魂を打ち込み、彼女のため、熱弁して帰る。当選、間違いなしと確信する。

皆、勝たしたい。負ければ、本人も、家族も、応援した多数の人々が悲しむ。可哀想

だ。負ける戦は、^{いくさ}させてはならぬ。勝負は時の運、とはいいいながら。――

支部長と、車中、他の支部出身の、区議会議員候補達のことを心配し、語りつつ帰る。

帰宅、一時近し。疲れた。

此の一家、諸天善神の、加護であれ。

〔四月〕――戦後の経済再建も軌道に乗り、復興期から豊かさを求める時代へと社会はゆるやかなカーブを描き、庶民の生活にも活力があふれていた。この年、配給米の公定価格は一・八^{トリツ}で一〇七円だった。歌謡曲では島倉千代子が「この世の花」でデビューし、他に「月がとっても青いから」「別れの一本杉」などが流行した。映画では木下恵介監督の「野菊の如き君なりき」や、ジェームス・デイーン主演の「エデンの東」などが若者たちの大きな話題を呼んだ。

世界では四月十八日から二十四日まで、インドネシアのバンドンで、アジア・アフリカ会議が開催された。平和地域を拡大し東西間の緊張を積極的に緩和^{なやむ}することを目指して、セイロン（現スリランカ）、インド、パキスタン、インドネシア、ビルマ（現ミャンマー）の「コロombo・グループ」が招聘^{しょうへい}したこの会議は、日本、中国を含むアジア十五カ国、中東八カ国、アフリカ六カ国、計二十九カ国が一堂に会したものであった。これは反帝国主義、反植民地主義を基調として「平和十原則（バンドン十原則）」を採択するなど歴史的な会議となった。

五月二日（月）

晴後曇

身体の調子、刻々と悪し。

次第に寿命の尽きる感じあり、淋し。^{さび}悲し。

先生、非常に、私の身体の事、心配して下さっている。申し訳なし。

堂々と修行、実践することだ。虚偽や、虚飾の、信心、生活は、最後は、亡びるなり。

文化部員、全員当選決定。秋田のI氏を除きて。先生、嬉し^{うれ}そうであられた。一同も、喜色満面。

未来の文化闘争の幸先^{さいさき}よし。本末究竟^{ほんまつくきやうとう}等の原理から。――

但し、勝^{ただ}って終わったのではない。これからの社会、日本、王仏冥合の活動の、出発であることを忘れるな――と提言したい。

天暖く、胸中、亦晦し。

あと一步で、大海に落ちゆく運命を感じず。病魔との戦い、死魔との戦闘に入る。終幕即開幕。烈火の如き一念を起こし、御本尊様に、すがりきることだ。

明日の本部総会の準備に、夕刻より、陣頭指揮をとる。十一時過ぎに、終了。

立派に準備完了したと思う。無理な身体に、無茶な振る舞いである。
為さねばならぬ、自分の責務。

T氏、自宅まで、送ってくれる。済まぬ。

五月三日（火） 曇後雨

午後より小雨となる。

十二時三十分、小岩支部の主催にて、第十二回本部総会を開催。

参加人員、一万五千名突破との事。

偉大なる前進。限りなき前進の縮図であつた。

入場出来ず、淋し^{さび}そうに帰つた多数の人のあることを耳にした。可哀想に。

何の事故もなく、思った通り完了し、安心する。陰の青年部員達に、心から謝す。

大幹部の面々も、常に、運営にあたる陰の人々の力を、忘れないで貰いたい。

強く^{おも}念う。——将来のためにも。

五時三十分より、二次会。

N園、——大幹部全員出席。僧侶多数。

司会、自分達。

身体の具合悪し。今生で一番苦しい一日であつた。

十二時、死ぬが如く、床に入る。

五月四日（水）

曇時々小雨

身体の調子、全く良からず。

先生、本部に。御挨拶あいさつに行く。

共に、猥下げいかの御下おんもとへ、御挨拶に上る。

先生も、実にお疲れの御様子。昨夜は、お吐はきになったとの事。

先生の、この数年の活動は、凡人の幾百年にも通ずる。肉弾の如く、広布の陣頭指揮に。弟子の育成に。――

他の指導者達が、ゴルフに、麻雀に、温泉にと、休息している間に。――

一般人は、前者を狂人といい、後者を賢明な人なりと云う。

五月五日（木）

晴

一日中、晴天。

晴朗なる大氣、天下に満つ候。

会社、休み。朝九時、起床。朝風呂に行く。

午後より、先生宅へ。

H夫妻、M夫妻、私達夫妻であった。

先生より、沢山、御馳走になる。尚、指導を賜る。忝い。

帰宅、十時少々前。本棚を整理し、一人早目に、床につく。

五月六日（金） 晴天

身体の具合、少々取り戻す。

皆の、遅しき、元気な姿が、うらやましい。

妻も、無理を通し、疲れているらしい。最近、元氣なし。

健康であらねば。

皆に心配を懸^かけ、自分も仕事^かが成就出来ぬ。

一、唱題。二、睡眠。三、養生。

重々、注意。実行。忍耐。

“仏法ハ道理ナリ”

五月十五日（日）

小雨後曇

午前中、在宅。

久し振りの休日である。

午後、M女史来る。続いて、H部隊長他三名の幹部来宅。

ベートーベンの「運命」「幻想曲」等を、共に鑑賞。苦悩と戦いゆくこの調べ。自己の胸中にも似たり。

夜、矢口のS宅へ。夕食を御馳走になる。親戚しんせきの社会主義者と、二時間程、語る。折伏になる。……可哀想な人なり。確信なき、青白き、虚無的な人生の姿を、まざまざと観みる。

五月十六日(月)

晴

気持ち良き、朝であった。

元気、多少回復して来る。嬉うれし。

妻も、少々元気を取り戻す。

二時、先生、旅行よりお帰りになる。

早速さつそく、お出迎えし、本部に着く。種々、御報告申し上げる。

先生より、二、三、聞き返されしも、良く説明出来ず、汗をかく。情けなくなる。

六時三十分。

堀米先生の御講義。「御義口伝」。

帰り、月清し。

「荒城の月」を歌いたい心境。

『ホイットマン詩集』（前出）を開く。

私は方向を転ずる、だが私自身を救ひはしない

過去の解説は他を混乱させた、然もなほ闇黒である。

磯辺は刃のやうな氷の風で断たれ、難船を告ぐる砲が響く、

嵐は止み、月は難破物の中からよろめき昇る。

私は船が助けなく船首の端を露はしてゐるを見る、

私はその衝突する時の爆発を聞く

私は驚愕きょうがくの怒号どごうを聞く、それらは次第に弱りゆく。

(秋の小川 眠れる人々)

阿部次郎の『三太郎の日記』をちよつと読む。面白からず。
早目に床につく。

五月十七日(火)

曇

先生、午前中、お休み。

御自宅に、種々御報告に。

晴天。健康回復の徴。嬉しうれし。

陶淵明とうえんめいの「帰去来」を暗誦しながら、道を歩んだ。

歸去來兮

歸りなんいざ

田園將蕪胡不歸

田園 將に蕪れなんとす なんぞ歸らざる

.....

.....

舟摇摇以輕颺

舟は 摇摇として 以って軽く颺り

風飄飄而吹衣

風は 飄飄として 衣を吹く

七時三十分、常在寺。

第六部隊会出席。弱体なり。

一人一人の、信心確立、組織の充実、指導層の具体的内容の指導等が不備なり。

終わって、S君の送別会に出席。品川の妙光寺。

吾が心境を、巖として語る。T氏等のやきもちには、ほんとほと困る。弱き男性よ。

五月十八日（水）

小雨

少々疲れ増す。

午後、月島で催す、国際見本市に行く。H君等と共に。

偉大なる、産業、科学、工業の進歩発展に頼もしく思う。

帰り、皆して会食。

夜、教授会を変更して、聖教新聞代理店を決める打ち合わせ会となる。

先生より、種々、厳しき指導を受く。

胸痛し。

小林秀雄の『批評家失格』『罪と罰』について』を面白く読む。

どの本を読んでも、結局は、自己が一番優れ、偉いといっているようだ。

『ホイットマン詩集』（前出）を読む。

宇宙の大道をゆく男女の靈魂の進歩にとりて、
凡^{あら}ゆる他の進歩は必須なる表号と營養とである、

永遠に生き永遠に進め、

人々が容れ人々が棄てた權威、嚴肅、悲哀、卑怯^{ひきよう}、無益の争、
乱心、騷擾^{そうじよう}、柔弱、不満、絶望、倨傲^{きようごう}、嗜好、疾病。

彼等^{かれら}は行く、彼等^{かれら}は行く、私は彼等^{かれら}の行くを知る、

然^{しか}し何処へ彼等^{かれら}が行くかを知らない。

然し私は彼等^{かれら}が最善の方へ行くを知る、或る偉大の方へ。

(カラマス 大道の歌)

時計二時を回る。眠くなる。

夢は——詩人か。財界人か。大政治家か。平凡なる哲人か。力ある革命児か。民衆の無
冠の王か。

五月十九日（木）

快晴

身体の調子、良好となる。

午後、先生の使いとして、横浜に、Y相互銀行の営業部長K氏に面会。久方振りである。

日増しに、社会の濁乱を感ずる。

悪世末法そのままである。正法を受持した幸せを沁々しみじみと知覚する。

夕刻、本部へ行く。先生に、K氏への伝言をなせし、報告にあがる。

終わって、国鉄当局、旅行会等と、輸送、登山会の事について、会談。

日進月歩、大発展を続ける吾わが学会に、先手、先手を打つ、対外折衝への組織が急務。

支部長宅に回り、幹事達と打ち合わせをし、帰宅。十二時を回る。

五月二十日（金）

雨

先生、全くお元気なし。

注射を打たれる。良く、もんで差し上げる。

一、弟子の道を、過^{あやま}たず進みたいものだ。

一、先生の慈悲を、私共は、どれだけ知っているか。

一、先生の構想を、いかほど身に付けたか。その実践、ありや否^{いな}や。

妙法^{もと}の下、大師匠の下には、純真なる人、必ず勝つ。

群雄割拠^{かつきよ}の時代、社会は、力と才と、策の人が勝つだろう。

一、人生の目的——即ち一生成仏なり。

一、宇宙即生命——自由自在の境涯なり。

一、色心不二——精神、肉体、智慧、財、総^{すべ}て、満足せるなり。

子供二人になり、大森山王のアパートを、出る事に決まる。契約なれば止むを得ず。

知り合いの家屋を、月賦、金壹百万円也で購入することになる。半額は、親父より借金。半分は、毎月壹万円ずつの返済で結構との事にて、交渉落着。

坪数、十八坪。敷地、借地、五十八坪五合との事。来月中旬に引っ越しの予定となる。

小生、留守多き故、妻の実家の近くと願ひし通りになり、安心。

五月二十一日（土） 晴天

午前中、多忙。

十二時三十分発の特急にて、大阪へ講義に。

「法華初心成仏抄」を終わる。自分の勉強不足を、つくづくと嫌う。

終了後、堺支部班長会に出席。

非常に明るい会合。

終了後、共に、立宗七百二年、十月の、青年部、男女二万名総登山の記録映画を観る。

将来、国宝的記録ともなるであろう。

乱世に、これ程多数の青年達が、求道心に燃え、自己の確立と、日本再建に、活動しているのだ。これを、愚かな評論家共は、狂信といい、貶すのみに終始。憐れなり、幼稚なり、増上慢たり。

五月二十二日（日）

曇

昨夜、遅かったため、眠かった。

朝七時、起床。心身共に疲労加重。

小生の講義の、下手な事をもうせい猛省する。

正午まで、研究会を続行。

正午より、支部幹事、部隊長等と、人事、組織等の、打ち合わせ。

来阪の度^{たび}に思う。関西の成長発展を。

夕飯を、S兄に、御馳走になる。

夜行にて、帰京。

五月二十三日（月）

薄曇

午後、Mさんと共に、新築のI宅に、挨拶^{あいさつ}に行く。たいして事業も軌道に乗っていないのに、虚飾の建物かと思う。

夕刻、四級講義。先生、御出席。於本部。

真剣だ。求道の別世界に、身の引き締まる思いなり。此の姿、此の環境のある限り、学会は、大盤石であらう。欠席者、全く無し。

終了後、先生に呼ばれる。

沼津方面で、共同事業を企て、学会利用を計った元市議のことを、指摘される。全般の、動向の見えぬ、参謀室、ありや否やと。

恐縮する。

次第に、信心利用者が、多くなることだろう。和合僧を、破壊し、利用することは、天魔悪鬼の所作にほかならぬ。

仏と魔との勝負。これ仏法なり。

五月二十四日（火）

晴後曇

横浜方面に出張。

非常に、良好な天気であった。

身体の具合、漸次良し。

夜、S君の結婚式。盛大。

祝辞を述べる。友が、次第に家庭を持つ、年齢になって来た。

よろこぶべし。——初志を忘るべからず。

近頃、自分の愚鈍が、わかつてきた。

生涯、決して、精進努力を忘れぬことだ。

未だ得ざるを、これ得たりと思ふこと勿^{なか}れ。

宗教革命論、政治と宗教論、科学と宗教論、文化と宗教論等を、立派に書き上げる勉強を着々とせねばならぬ。

丈夫^{じょうぶ}、若人^{わこうど}、若武者、健児、青年、青春。今、吾人^{ごじん}は、その中に、時代に、現実^{げんじ}に、生きる。

夢を、大志を、情熱を、忘ること勿れ。

五月二十五日（水）

晴一時雷雨

I君の結婚式に出席。

妙光寺、盛大。

不幸な一家が、これほどまでに、幸福になったか。功德か、努力か、時代か。――
品川の食堂にて、H、T夫妻等と、支部の運営について懇談。
真剣なのは、自分のみ。面白からず。

夜、「白鳥の湖」を観^みる。

空想ト幻想ノ色彩、鮮^{あざ}ヤカデアツタ。儚^{はかな}シ。

支部の幹部、O氏達、指導を受けに、来宅している。深刻な悩みの様子であった。
帰りは、安心して帰った。本人が悪いと思う。

五月二十六日（木）

晴天

一日中、気分、勝れず。

S宅にて、座談会。二人入信。何よりも嬉し。

引き続き、幹部会出席。成果、先月より上がらず。

皆、明るい。元気。勝っても、負けても、快活でなくては。……信心している人は、地涌の菩薩は、平和の革命児は。

来月、再び真剣に指揮を執ろう。

学会本部も、そろそろ多数の人が出入り出来る様、いつか新築する必要ありと、一人考える。広布の本丸らしきものを。――

支部の会館も、多数必要のことであろう。将来、十年後――。幾百の支部になることか。凡下には、全くわからず。而れども、そうあらねば、広布の実現ということは、思考出来得ず。

幾人の人が、未来のビジョンを、真面目に、責任を持して、考えている事か。

五月二十八日（土）～二十九日（日） 雨

青年部総登山。

豪雨。全員、びしょ濡れ。

御本尊様の厳しさ。謗法ほうぼうの徒、多き故か。

重々、信心を猛省もうせいす。

五月三十日（月） 曇

夜、全体会議。

先生の指導、特に厳し。

吾が胸に、雷の如く響くなり。

一、本質論と形式論

一、化儀と化法

一、強信と名譽主義

大要、以上の指導。

偉大なる師匠。

慈悲の指導に、頭垂るのみ。

先生の、足下にも及ばぬ自己を、一日一日と、知って来た昨今。嗚呼。

五月三十一日（火）

曇

昨日の、先生の指導が、脳裡に刻みつき、一日中、離れぬ。

先生の、指導訓練、日増しに厳し。

耐えるのに、精一杯の一日一日。

夕刻、神田通りへ。古本、三冊購入。

買いたい本は、山ほど有る。財政難。

白雲も、樹々の服装も、皆、夏型に移る。

〔五月〕——五月三日、両国国技館において春季本部総会が行われた。席上、昭和三十年度内に三十万世帯達成の大折伏戦を展開すること、そのために座談会を充実し指導の徹底を図ることの二点が発表された。また、これに先立つ四月三十日から五月一日には、全国の女子部の代表約六千人が登山会を実施した。これは前年十月に行われた女子部の登山会より約二倍近い参加者であり、女子部の目覚ましい発展を示すものであった。

当時の教学試験には、かならず論文審査があり、この五月末日は、教学部助師・講師の教学論文の提出日になっていた。まさに、果敢なる折伏の実践のなかで「剣豪の修行」のごとき、峻厳な教学研鑽が繰り広げられていた。

五月二十九日に男子青年部一万人の総登山が豪雨について行われた。総本山大石寺の三門前に結集した代表一万三百六十人は、戸田会長の「力ある広布の人材に」との指導に男子部魂を燃え立たせ、学会嚴護と民衆勝利の旅立ちを誓い合った。席上、池田名誉会長（当時、参謀室長）は、青年部は戸田会長の弟子としての自覚と誇りを持ち進もうとあいさつした。広布推進の牽引力としての男子部の活動は、この日以来、一段と勢いを増した。

社会に目を転ずると、五月十一日、国鉄宇高連絡船紫雲丸と第三宇高丸が衝突し、百六十八人

が死亡した。続いて岩手県、福岡県でバスの大事故が連続して発生した。さらに十七日には東海道線で団体臨時列車と米軍トレーラーが衝突し炎上するなど、交通機関の事故があいついで起こった。乗客はいずれも修学旅行を楽しむ小・中学生である。痛ましい事故は社会に暗い影を落とし、修学旅行の見直しなど大きな社会問題に発展していった。

政界では、五月二十三日、野党の進出に備え、保守結集の目的で民主党の岸幹事長、三木総務会長と自由党の石井幹事長、大野総務会長の四者会談が開かれた。その焦点は、鳩山首相引退の時期であった。さまざまな派閥の思惑が見え隠れする討議に、国民への公約などは上の空であった。

世界では、敗戦から十年目のこの年、西ドイツは五月五日、パリ協定が発効して占領状態が解かれ、ふたたび主権国家として世界の舞台に登場した。パリ協定の成立は前年十月であった。パリに集った西欧十五カ国は西欧連合を結成し、そこで西ドイツの主権国家、再軍備化、さらに北大西洋条約機構（NATO）加盟を決定したのである。一方、五月十四日には、ソ連と東欧七カ国がワルシャワ条約機構を締結した。これには、東ドイツも含まれ、一九九〇年まで三十五年にわたる東西ドイツの分裂の固定化を招くことになる。

六月十三日（月）

快晴

昨日は、先生と共に、水滸会員、八十名にて、河口湖、山中湖に行く。

帰り、目黒の先生宅まで、皆してお送りする。

昨日の、厳しき指導に、小生、更に疲れる。反省、又反省。

午後、江東方面へ出張。

陽気、日増しに暑し。身体、非常に疲れる。

夏は、若人わこうどの季節なり。頑張らねば。

夜、四級講義。出席。

深淵しんえんナル大哲理。甚深ナル大法門。自己ノ無能ヲ、見セツケラレルノミ。

帰り、T兄来宅。面白からず。

家庭が、不安定な人は、安心して、つきあえぬ場合多し。

キャンプ場での第一回に続いて実施されたもので、戸田第二代会長生前の最後の訓練であった。一泊二日で使用した宿舎は、河口湖畔のバンガロー風の簡易な旅館であった。戸田会長の意向は、第一回と同様の野外キャンプにあったことから「水滸会も懦弱になった」との叱咤があり、それを池田名誉会長（当時、参謀室長）が一人受け止めて深く反省された経緯があった。

七月十七日（日） 快晴

引越して、早、一か月半になる。

今日は、久し振りの休息。昼間、庭に水をまく。

徳富蘆花の『自然と人生』を思い出す。

Yさん、K君等、来宅。一緒に食事を。

新聞を、ゆっくり読む。

社会トハ、複雑トイウ、代名詞力？

世界トハ、動乱トイウ、形容詞力？

夜、I宅に、指導に行く。帰り、S宅に、御中元の挨拶あいさつ。

背が痛くて困る。

就寝、十二時を過ぐ。

〔七月〕——この年から学会の組織に画期的な変化があった。池田名誉会長（当時、参謀室長）の提案により、従来の折伏弘教による組織形態に加え、今日の地域単位の組織が構築されたことである。また、七月二十九日から八月二日の五日間にわたって実施された夏季講習会には、二千人が参加し、勤行・唱題、教学を中心とした幹部養成がすすめられ、人材育成に拍車がかけられた。

九月八日（木） 晴天

蒸し暑き、一日であった。

身体の具合、誠に悪し。悲嘆。

先生の、期待、恩義、遺言に応えずば、今生の使命、いづくにぞあらんや。

燃えあがる、宿命打開の信仰あるのみ。これなくば、自身の敗北は、決定さる。

午後、日大講堂へ、総会等の準備に行く。

一番苦勞して、推進せねばならぬ、宿命。

冥^{みよう}ノ照覽ヲ、信ズベシ、と御聖訓にある。

終了後、木曜講義（方便・寿量）に出席。

豊島公会堂。新入信者が多い様子。

久しぶりで、妻と共に、帰宅。

九月二十日（火）

晴

六時、本部、先生を囲んでの会合あり。

厳しき、先生の質問、訓練あり。

剣豪ノ修行、正ニ此ノ姿ナルカ。

帰り、理事長等と、I宅へ、指導に回る。先生の指名なれば、責重し。

涼しくなる。……

明日より、日記を、新しいノートに誌そう。

小樽^{おたる}法論の、記念に下された歌。

空を飛び 小樽の海に

敵ぞつく

若き姿は

永久に残れり

「開目抄」の本に下された歌。

大鵬の 空をぞかける

姿して

千代の命を

くらしてぞあれ

夜半まで、静かに読書。

就寝、二時近くになる。

九月二十一日（水）

雨後曇

日誌の、第一枚目に。

生命は、悠久ゆうきゆう、永遠えいゑんにして、一生は、夢の如くである。朝露に似たり、冬霜に似たり。太陽昇りて、一瞬にして消えゆかん。

自己の、一期の歴史、将来、活動は、善に付け、悪に付け、細胞より極小なりといえども、此の土に、此の宇宙に、一つの足跡を、残すことであらう。

而れども、その因果本質の足跡を、誰人が観^み、思念してくれるであらうか。

人事は、小なり、あまりにも極小なり。無辺なる方円、久寿無始^{くじゅむし}の時間より望むれば。――

即ち、自己の感情、自己の思惟^{しゆい}、自己の追憶、自己の秘密、更に、自己の激憤等を、つれづれに、一書に誌^{しる}すこと。これ面白く、意義あり。孤独の世界を伸ばしゆく所以^{ゆえん}なりと思ふ。

一つの自己と、又、もう一人の自己との、交渉、対談、激励ともなるか。記録の日記、事務的のみの日記は、強く嫌うなり。

未完成の、翼^{つばさ}を飛ばすまで。未完成の、建設を大成するまで。自由の空、自由の世界、自由の活躍の、夢を胸奥^{きようおく}に秘めながら。

二十七歳――秋。

九月二十二日（木）

晴

非常に、涼しくなる。

秋風、吾が胸に、深々たり。

〇社も、茲に五年を経過。

幾度の、苦難も越え、安定、又安定。

幸福、満足。一人驚く。

冥益——巖然と証明される。

一、我儘な自己を振りかえりと、冷汗。

一、現実を、樂觀視せぬこと。

一、常に、修養を忘れざること。

二時より、参謀会議。五時三十分まで。

① 指示系統の徹底。

② 仏立宗、急襲の作戦決定。

③ 立正交成会、破折攻撃の決定。

立宗七百三年、最終の闘争を、立派に飾りたし。自身の一念あるのみ。信心、決心あるのみなり。

法華経講義——出席。豊島公会堂。

先生、お身体の具合、宜^{よろ}しいとの事。これ程、嬉^{うれ}しき事はなし。

秋霜の如く、厳しく、自己をみつめ、戒^{いまし}めて、人生を送ろう。

九月二十三日（金） 晴一時曇

本部、会長室に於いて、先生と、三十分程お話しする。自分の報告が、精密でないので悩む。

六時三十分より——第一回、教学部員候補生の研究会。

「如説修行抄」第二段まで。

下手な講義となる。

——無技術、技術、芸術の三段階あることを、深く思い出す。

無技術の、自分の講義は、未だ教授の資格なし。

実力、勉強、鍊磨^{れんま}。——精進あるのみ。人よりも、誰よりも。

人生の船出して、二十七歳。

あと、三星霜にして、三十にして起^たつ、の年齢。

強く生きよ。

九月二十四日（土）

曇時々雨

彼岸の中日。

両親の事を思念する。

仏法は厳し。弱く、ずるい信心だけは、したくなし。

午前中、在宅。先生の御写真を沁々しみじみと仰ぐ。慈愛、温情、嚴格。激励し、見守って下さる。

一時、小岩支部総会。中央大学講堂。

盛大な、意義ある総会であつた。前途、逞たくましく進軍されんことを祈る。四時、終了。帰り、H、T夫妻、O夫妻と共に、お茶の水にて、会食。

六時三十分、常在寺。細井尊師と、法華講、檀家等の件に付き、会談。

僧俗一致、異体同心なれば、広布の大目的に共に進むべきだ。小細工の策は、やめるべきだ。

文京支部の座談会に出席。久し振りなり。

可愛い支部である。幾多の英才が、輩出することか。

疲れて帰る。十二時少々前。

九月二十五日（日）

曇後晴

七時四十六分の、品川発にて、本山へ。

妻及び、両子も共なり。

信心の歡喜、人生の意義、現実への凝視等々ぎようしを、登山ごとに考えるようになった。

泥沼に咲く、蓮華の花とは、吾々われわれのことである。

十一時四十分——本山着。

秋晴れ。本山に、生氣満つ。

二時、御開扉。三時より、猊下げいかのお目通り。

先生の、本山への忠誠。全宗門も、深く、早く、知悉ちしつ、嘉賞かしょうされたし。

先生の壮健を、先生への諸天の加護を、心から念ずる。

九月二十六日（月）

曇一時小雨

朝、長男、高熱。小生も又、身体実に苦し。一日中、灰色の如し。

肉体の限度は、わかる。而し、生命力しかという力は、肉体力、精神力を、超越し、かつより強く作動させゆく、不可思議な力と思う。その生命力の湧現は、一念の所作による。いや、妙法の力、信心の力に依つてのみ、無限に、出ずるわけだ。その実践。実験。実証。……

四級講義を休み、四谷のA病院へ、診察を受けに一人ゆく。血沈、検尿、レントゲン等の――。

灯火親しむ候に入る。

帰り、神田にて、食事。古本数冊、購入して帰宅。

読書ト、文筆ニ、励ミタシ。

九月二十七日（火） 雨

戸田先生は、私にとって人生の主であり、師であり、親である。年、十九歳より、生涯、おそばに仕え、指導、訓練され、一人前にして下さる。奇しき縁を、深く念う。生涯、お供することこそ、吾が本望。これで、今世の使命達せられん。

叱咤、訓育、慈愛。なべて、吾が色心に、刻印せしなり。

六時、水滸会。

先生、御出席。『三国志』今夜にて、終了。

東洋広布の進め方、日本の広宣流布の仕上げ方等の、遺言にも似た、指導となる。帰り、第一部隊の隊長会に出席。

厳しき、指導を為す。已むを得ん。

帰宅、十一時三十分。……家で、少々食事を出して貰う。妻、嬉し^{うれ}そう。

九月二十八日（水） 雨

台風、接近との事。

それることだろう。

本年は、戦後、初めての豊作とのこと。――

朝の講義『政治学』終了に近づく。

頭の中に入るは、全くなきが如し。

午後、先日の、病院に行く予定を、止^やめる。結果を知りたいとも思うし、知っても、自分でおす以外ないとも思う。面倒になり、中止。

夜「末法相応抄」三分の二、終了。次第に、明瞭になって来た。二度、三度と、勉強せ

ねば、本当には、わからぬものだ。

十一時まで、講義あり。疲れる。
而し、頑張る。

遅くまで、寝られぬ。

九月二十九日（木） 雨一時曇

一日中、疲れ切った日であった。

六時、全体会議。九時近くまで、種々、検討、及び打ち合わせ。
先生も、お疲れの様子。

帰り、社員、友等と、有楽町まで行き、会食。つまらぬ。この時間を、本でも読めば
と、悔いる。

学会も、大勢になった。先生の、指導、目の届かぬ人々が、多くなつて来た。

政治家あり、経済人あり。——亀裂と、分裂を恐れる。吾人^{ごじん}が、毅然^{きぜん}とすることだ。

先輩、後輩にも、数名の、力ある学会守護の人あるを信ずる。

夜中、輸送班のことで、M君と、種々連絡を取りあう。頼れる、真剣な人。彼の前途に、祝福あれ。

二時過ぎまで、起きている。自分が、すごく老^ふけて来た感じ。

九月三十日（金）

晴後曇

蒸^むし暑き一日であつた。

天候の作用は、万事を動かす。沉^いんや、人体は敏感である。

参謀会議——本部、六時招集。

全く、結論が出ぬ。各人、各様な主張。大使命、大目的を、忘れ勝ちになっている、力のみの各人の意思。先生の下^{もと}だったら、早く結論も出ることだろうに。――

それが恐ろしい。それでは、先生より託された、参謀会議の意義は、最早、なしだ。

続いて、常在寺へ。

緊急輸送班会である。学会の、陰の任務。この人達を、大幹部は、大事にすべきだ。

帰り、T宅へ。地区部長会、出席。

人の心は、常に変わる。自己が、強くなることだ。

南無妙法蓮華經。

〔九月〕――戦後十年のこの年は、日本が内外ともに一つの転機を迎えた年でもあった。外交面では、八月三十一日の日米ワシントン会議で在日米軍撤退計画の作成を考慮することで意見の一致をみている。このころ東京・砂川町では基地反対闘争が燃え上がり、“心に杭は打たれない”の名文句も生まれた。一方、鳩山内閣は対ソ国交回復に力を注いでいたが、北方領土問題で難航し、九月二十三日には日ソ交渉全権団が交渉休止の共同声明を発表した。

海外では、軍縮問題、原子力の平和利用など重要な課題をかかえた国連の第十回総会が、九月二十日からニューヨークの国連本部で開催された。参加国は六十カ国であった（日本は翌年加盟）。ソ連は初日に中共の代表権獲得を提案したが、この問題をタナ上げする動議が賛成多数で可決され据え置きになった。一方、米国は、ダレス國務長官が演説を行い、次の十年を真の平和の時期とするよう国連が一致して努力すべきことなどを訴え、世界の緊張の緩和（かんわ）へ意欲を示した。

月末になって、アメリカ映画の「エデンの東」「理由なき反抗」「ジャイアンツ」等に出演し、ジミーの愛称で世界中の若者に親しまれていたアイドル、ジェームス・ディーンが事故死しファンの衝撃を与えた。愛車でのスピードの出し過ぎによる交通事故だった。演技において若者の孤独と寂しさを巧みに表現し観客の共感と呼んだ彼は、死後も「五〇年代の青春の象徴」としてスクリーンの中で生き続けることになる。

十月一日（土）

雨後曇

台風、二十二号とやら。

新潟大火の事。

向島支部関係の、新潟における世帯数、千数百とのこと。その中で、罹災者は一軒との

報告を受ける。

今更^{なが}乍ら、妙法の法力の、偉大さに驚く。

六時、M新聞のH記者に会見。

暴力行為云々のことにて、強く否定する。本人は、納得せり。だが、五段抜きに報道され、あきれる。

信なき言論。社会を更に悪化させゆく。

言論の暴力。言論の独裁。

弱き者は、常に、哀れなり。

不公平極まる、民主主義。

本部。「如説修行抄」講義。

全部、終了する。割り合い良く講義できた。但^{ただ}し、候補生たちの浅学には、驚く。自分も、初めは、そうであつたか。

十月二日（日） 雨

午前中、休息。疲労、全く取れず。残念。死魔との戦いの如し。

吾人は、人々に誤解される宿命らしい。不徳のいたすところか。修養の足らざるか。――

一時過ぎ、志木支部の総会に出席。

小雨、降る。三千四百余名の結集。不安定ながら、無事終了。

帰り、支部長宅へ。支部長と共に、京王地区の総合座談会に、出席。

力の限り、指導し、激励して帰る。

指導して、意気揚々と帰る自分より、これ程まで結集させた、中堅幹部の人々に深く思いを致すべきである。

本当に、吾れは、若い。先生を、思い出す。先生なかりせば、どのように育っていったか。嗚呼。

十月三日（月） 雨

又、雨。

身体疲れ、暗き淵^{ふち}に沈むが如し。

信心、強盛になるのみ。打開、打破、轉換。自己の力、能力のなさを、悲しく思う。

正午、郵政省に、I君を訪う。

商業学校、大世学院の友である。食事を、地下食堂で、ご馳走になる。

信心の方は、二、三遍、題目を、唱えている様子。困った友。

大風のため、日航機飛ばず。先生、夜行「銀河」（十時三十分、東京発）にて出発。お見送りに行く。下関の指導であられる。

I秘書部長の策と、小才は、宜^{よろ}しくないとと思う。随分、私も、人々も、いじわるをさ

れ、讒言^{さんげん}され、曲解されて来たことか。

側近達は、誰一人、思い上がるべからず。

先生を、利用すべからず、である。

特に、女人は、恐ろし。未来、重々、注意。

I 婦人部長、並びに、U 女史を、厳しく叱る。増上慢と――。多数の人々が、遠慮し、伸びのびと信心出来ぬことを恐れて。――

H 先生と、東京駅まで行き、帰宅。

十二時近くなる。疲れてならぬ。実に、疲れる。しやくだ。

秋深し。夜半の街、静寂^{せいじやく}。

孔明^{こうめい}を思う。正成^{まさしげ}を憶^{おも}う。竹中半兵衛^{おも}を念^{おも}う。頼朝^{らいしやう}を、清盛^{せいせい}を、秀吉^{ひでよし}を。――

十月四日（火） 晴

秋晴れ。

世界中で、最高に澄み切った、秋か。

M君、W君を、嚴重に注意する。

不真面目な人達だ。吾^わが陣営を、軽々しく考えている。甘く見すぎている。

Y君、N君を、やはり、強く指導すべき時期に来たと感ずる。

六時三十分、豊島公会堂、男子青年部会。

前半、皆、元気なし、後半より、次第に盛り上がる。男子部の底力。あわてゐることは、決してない。だが、緊張すべき時である。

長として、幹部としての自覚につき、約三十分、指導。元気出ず。疲労か、老いか。

第二部隊の隊長会に出席。若い。弱い。未熟だ。これでは、未だ、革命は出来ぬ。

訓練、訓練。

T部長と共に帰る。

帰宅、十二時。疲れた。

Mさんは、立派な人と思う。賢い人である。

十月五日（水）

晴

秋晴れの日であつた。

先生の御事は、一刻たりとも忘れられぬ。実に、私の一生の運命は、先生にお会いして決定し、左右され、終幕となろう。

嬉しいことだ。貧しき、自分の生涯を見て戴いたければ、これ程の栄光はない。

幾多の雑誌に、学会批判記事あり。

次第に、第三類の敵人ある感じ。断じて、恐るるな。不退転の心、今こそ大事なり。

六時より、会長室にて「御義口伝」の講義を受く。

八時三十分。

第一応接室。——邪宗の実態に関する、座談会。聖教新聞主催。記者達も、次第に成長して来た。勇敢である。革命児の信念、頼もし。

邪宗の害毒、他宗派の実態、魔の姿に、痛憤を覚ゆ。

一人、強く強く、闘争の決意を固む。

人、見ざれども、俱生神くしょうじんあり。妙法の照覧おもえば、心樂し。

十月六日（木）

曇一時雨

法華經の講義、休む。

中野支部の『折伏教典』の研究会指導のため、荻窪の古物商会館へ行く。
元気に、指導して来たと思う。

健康が——、体力が——、強ければ、今の、五倍、十倍の闘争が出来るのだが。

夜、身延攻撃を指示。

立宗七百三年、最後の闘争である。

大成功に終了せんことを、御本尊様に祈る。諸天善神に、申し付けて下されと。

秋の清気、日増しに深まる。

一、人を、慈愛を込めて、面倒みよう。

一、暖かく、包容しながら、進もう。

何故か。自分は、あまりにも、激情家だ、厳格である。……と思うからだ。

日本一、世界一、これを望むは、幸か、不幸か。どのような人生行路が、日本一、世界一か。反問。

人生二期ナレバ、悔イノミハシタクナシ。

十月七日（金）

曇

最近、少々失敗多し。

過去の、欠陥、失態、それを^{へんどくいやく}変毒為薬していけば、決して、恥^{はじ}にあらず。

本部講義、……会場の都合で、中止。

先生と、映画「新・平家物語」を、^み観に行く予定なりしも、緊急部隊長会議のため、残念にも、行けず。先生のおさそいに、大きな意味を感じた。奥様より、あとで、見ておくように、との連絡を^{いただ}戴く。

立宗七百三年の、掉尾^{とうび}を飾る段階。

部隊長会、庶務主任会、教学部員候補生の勉強等、六時より、全部出席。
戦いがあると、元氣湧現。不思議。あたりまえ。

最後に、皆して「白虎隊」の歌を、歌う。悲嘆の気持ちになる。可憐な少年達の純情、
尽忠を。……

新たななる、学会の、福運ある、紅顔の少年、青年達には、断じて同じ轍てらを踏ますべきにあらず。

十月八日（土）

晴後曇

先生、今朝、仙台へご出発。講義のため。

自分は、大阪講義に。

先生、非常に、ご疲労の様子。

私は若い。私は死んでも、大きな波はない。先生は、東洋の、世界の柱であられる。長寿を祈るのみ。八十歳代までは――。

十二時三十分発特急「はと」にて、大阪へ。一人、静かな旅であった。

大阪、堺さかいの支部、共に、実に親しみ深いところである。

講義終了後、Y宅に寄る。付近の学会人と、親しく懇談する。一泊。

ほんねじようじゆう 本有常住、じようらくがじよう 常楽我浄、しゆじゆくだつ 種熟脱、みらいき 未来記、等々、質問多々。

十月九日（日） 晴

非常に寒くなる。

日本アルプスに、初雪との記事。

十時より、講義。「顯仏未来記」。出席約四百人。

終了後、質問会。

午後二時より、「妙密上人御消息」。

四時三十分、終了。

六時より、支部長、幹事、部隊長と共に「新・平家物語」を観^みる。平清盛の、夢、建

設、栄華、衰亡を、考える。

日本に遊行^{ゆぎよう}した、権力の役者。

特に、青年期を大事に思う。

理想、勇氣に満ちた、前進。

而^{しか}し、それよりも大事なのは、晩年の人生である。心すべし。心すべし。

八時二十分発、夜行「明星」に乗る。

十月十日（月） 雨

朝、七時三分、新橋に着く。

東京は、小雨。東京温泉の朝風呂に入り、さっぱりして出勤。

朝の、先生の講義、頭が重く、身に入らず。

学会の闘争も、月々、年々、熾烈^{しれつ}を極めて来る。肌に沁^{しみ}々と感ずる。

覚悟、決意、……。瞬時も、忘るべからず。死を決意してのみ、吾人の力は湧く。

五時、本部。

先生に、種々報告。青年部のことで、又、失敗あり。先生に、厳しく叱らる。よし、男らしく、責任を負い、叱られよう。

参謀会議。及び「当体義抄」の勉強を、蒲田支部の助教授達と共にする。

此の十年。全く、無茶な程、心身を消耗して来た。

帰宅、十二時となる。

十月十一日（火）

雨後曇

先生、少々不機嫌。淋し。

お疲れか。

又、吾人の、反省と、指導とを含まれた、厳愛か。一日一日、安定の心となる。

六時、本部。部隊長會議。

先生、非常にお元氣なし。

八時三十分頃より、臨時幹部会。

種々、指示を下す。

一、明日、十月十二日、午前七時を期し、一斉に、全身延山、及び周辺に、聖教新聞

(編注・身延破折特集)を配る。

一、無事故であること。

一、部長以下、六百二十名。

青年部の歴史、学会の歴史に、不滅の歴史を止めん。この作戦。

十一時三十三分東京発にて、参謀一行と共に、富士へ、身延へ向かう。

富士駅前の旅館に一泊。

十月十二日（水）

晴後曇

五時三十分、起床。

六時、小型タクシー二台して、身延へ。

身延の周辺は、暗く、寒く、静まりかえっていた。続々、青年部が、山門に集合。
意気揚々たる革命児。強い。遅^{たぐま}しい。

学会の未来は、無限に明るいと思う。

七時三十分、第一班二百五十名が、一斉に身延本山内へ向かう。

同時に、他の部隊、第二班等は、大町方面、波木井^{はきり}、塩ノ沢等、五か所へ。

同時作戦は、立派に十時完了。

坊主の、あわてふためいた姿が、目に残る。

増上慢の寺。仏に弓を引きたる、墮地獄の源の寺。

吾^{われわれ}々は、民衆の覚^{かく}醒^{せい}のため、害毒の根を切るため、言論戦によって、戦ったのだ。

必ずや、この実践、一念を因となし、身延は、近く崩^{くずれ}れゆくことだろう。

日興上人様は、心から、お喜びのことと信ずる。

一時二十六分、富士駅より、帰京。

皆、戦った後の、勝利の喜びで一杯。

自分は、これほどのことだと、心で思う。

四時五十分、会長室へ、報告。

私は、作戦、実践の人だ。

十月十三日（木）

晴後曇

一日中、落ち着かぬ日であつた。

二時より、本部面接。

三十数名の人来る。自分としては、精一杯の指導をする。

終了後、会長室へ。

先生、お元気なし。而れども、大師匠の、氣風、凜々たり。

吾れ、第一の弟子として——起たねば。進まねば。

一級講義の重要なことを、沁々と知る。

天台、妙楽の教義をも、大聖人様の御観心より拝しゆく、師の厳しさを、——永遠に、正宗学徒は、学会員は、寸毫も忘れてはならぬ。さなくば大謗法の失、免れ難しとなる。

師弟の誠を——猛省。

師匠の言々句々を、深々と——、色香美味出来る自分に、弟子にならねば、無慚なるべし。

O社も、T支部も、K支部も、青年部も、B支部も、全部、師の命により、広宣流布の建設と勝利を、遂行出来たことを^{よろこ}歡ぶ。

十月十四日（金）

曇後雨

身体の調子、少々良好。珍しき日であつた。而し、良くなれば、すぐ無理を^な為す、悪い^くせがある。

夕刻、伊勢丹で、先生の奥様と、買い物。帰り、Tにて、食事。

「観心本尊抄」の講義さぼる。苦しきなり。

自宅にて、S兄と語る。

非常に元気なし。来春の、参議院選の初陣は、小生にとりても、S兄にとりても、運命の戦^{いくさ}とならん。

敗戦あれば、広布の駒足がにぶる。自己の為でもなく、名誉の為でもなく、王仏冥合の第一戦を、断固勝ちたい。自己の使命、重^か且大となる。

此の一戦を本とし、未来の選挙戦を末とする。所詮、本末究竟して等しき故に、勝ち戦にせねばならぬ、運命の一戦。――

「兵衛志殿御返事」

過去遠遠劫より法華経を信ぜしかども仏にならぬ事これなり、しをのひると・みつと月の出づると・いると・夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり、云云。

十月十五日（土）

曇

昨夜は、実に、いやな夢を見る。朝まで、感じ悪し。

午前、荻窪のS宅訪問。

国土世間の作用によるのか、そこに住する人々の様子まで、多分に決定されているようだ。

品の良い家族を、今更、不思議に思う。

夕刻より『折伏教典』の講義。

場所、中野桃園会館。盛況。全力を傾け、講義をする。嬉し。此の中より、未来の大指導者いでよと。――

帰り、新宿にて、妻と遇い、帰宅。

蒲田駅より、徒歩。途中、お好み焼きを食す。楽し。

先生、本山。

先生のお姿、いつも心に消えず。

東洋の王子は

馬上に剣あげ

指揮とる日をば

待ちてはげまん

十月十六日（日）

快晴

秋晴れ。

雲一点なし。

博正、城久、共に可愛くなる。親子の感じ全くなし。若年の故か。小生の我儘故か。わがままされど、二人とも、正義の人となり、広布の、金の翼つばさもち、飛びゆく事を、胸臆きようおくより祈るのみ。

五時、W君の結婚式。於常在寺。

小生、初めての、仲人なり。

久し振りに、モーニングを着す。

自分の、年重なりゆくを、淋さびしく思う感じ。

先生の、御出席いただを戴く。他に来賓出席。約六十名。

式、並びに小宴終了、八時三十分となる。非常に疲れる。

十月十七日（月）

晴れたり曇ったり

秋空なれど、一日中、頭痛あり。

最近、多忙にかこつけ、勤行せぬ罪を思う。

心身共に、疲れてならぬ。

吾人は、いかにして、様々に評価され、反感をもたれるのか。已むを得ぬ。大胆に一人進む故に。先輩の嫉妬、同僚の反目、当然、当然。

総て、大御本尊が、決定し給う。

師匠が、厳しく、決定しゆかれることだ。頼もし、楽し。

何も恐るな、人々の批判なぞ。断固進め、そして、見よ、世紀の青年の指揮を。

勇猛、更に、邁進。宗教革命と、政治革命の為に。

笑うものは笑え。誹る者は、勝手に誹れ。後になり、後悔しゆくらむ。

夕刻、「大白蓮華」座談会。教学について、K教学部長中心に、約二時間。終わって、身延攻撃の報告を、会長室にて聞く。

立派に目的果たす。皆、^{よろこ}飲んでいる。

吾人思う。あまりにも小さな戦なりと。

幾千万倍の勝利なければ、吾^われは、心安からずと。

十月十九日（水） 雨

一日中、小雨。

今朝、国土開発論を発表することになっており、病氣をおして出勤す。

先生、お見えにならず。残念、^{きび}淋しい。身体、死するが如し。三時まで、会社にて休む。

四時、本部へ寄り、自宅に帰る。

一日中、沈痛な、苦悩あり。体温三十八度五分とのこと。頭痛し。背痛し。一体、何の病氣であらうか。

題目を、千遍、二千遍と、元気に唱えゆくことだ。生命力の源泉を造ることだ。断じて病魔に負けてはならぬ。死んでたまるか。

求道者は、常に、若く、逞^{たくま}しきなり。

知識のみに捉^{とら}われて、自惚^{うぬぼ}れし者は、最早^{もはや}、過去の人生となるなり。

妙法の智慧、価値創造のための知識、これが、未来の、青年の理想像なるか。

十月二十日（木）

雨後疊

色心共に、調子悪し。

今朝も、先生と、お目に懸^かれず。私は残念である。淋^{さび}しい。

幸・不幸の基調は、生命力なるか。これ第一義のこととも明確である。此の実証と、解決をする、自己の実験が、これから数年のことと考えたい。

健康、丈夫^{じょうぶ}の人よ、——感謝を忘却せざれ。

夕刻、本部へ行く。

「御義口伝」の講義を欠席し、I参謀と、青年部の将来のことで、打ち合わせをする。

先生と、会長室にて、三十分程、お話し合い出来た。嬉しい。

先生の、おやせになっていくお身体を憂う。衰弱気味の狀態も、亦、^{また}悲し。

N支部の二級講義を、高田寺の白木屋にてする。終わって、八時過ぎ、舞踊家、O宅へ。女子第十部隊の会合に出席。

実に、疲れる。品川まで、車で帰る。

乱世、無責任、利己主義の、今の世に、清純な、妙法の乙女に、^{さち}幸多かれと祈らずにいられない。

十年間、一人も退転するな、と。――

十月二十一日（金）

晴

秋晴れ。

疲労多し。宿命の打開、運命の転換、過去世の謗法ほうぼうの、厳しさを知る。実に、生命は、永遠なることを、身をもって感ずる。さなくんば、此の生命を納得するに、矛盾むじゆんだらけとなるなり。

一日中、在社。身体を休め、且かつ、種々思考。

一生は夢の上。なれば、全力を傾注けいちゆうし、これで良しとの、一日一日、更に、一生を送りたいものだ。

実業家もよし、政治家もよし、平凡なれども、深き人間として、生きゆくも亦また、良からん。

本部講義。

日蓮大聖人の仏法の真髓「観心本尊抄」を、完全、且かつ、精密に、勉強せねばと、痛感

する。

立宗七百三年、秋季大総会の打ち合わせを、理事会にて、理事長中心に行う。

小生は、^{ぶつちよく}“仏勅実現の日まで”と題して、講演することに決まる。

帰り、部隊長等と共に、串かつを食べに行く。皆、嬉し^{うれ}そう。楽し。

十月二十二日（土）

快晴

早、週末をむかえ、土曜日となる。

明治の人は、半どんという。ポルトガル語の“ドン”とは休みを意味し、日本流で、半日休日と通称されるようになったものか。

誰人も、止めようとして、止めることの出来ぬのが、時の流れである。

大自然、大法則の力、このリズムに則^{のつと}っていくのが、妙法の人生である。

欧米は、土曜、日曜と休日。将来は、日本も、模倣^{もほう}をするようになるか。

――

秋風千里——。秋になると、特に、大自然の流転るてんの不思議を、感ずる。

午後、一人して、中国見本市を觀みにゆく。幾千万の波、民族意識の熾烈しれつを響かせている。新中国の、三千数百点の製品を、早足にみる。工業製品は、未だしとの感じを受く。日本民族の偉大さと、優秀性を、更に感ずる。

夕刻、教学部員候補生の講義に出席。「頭仏未来記」。真剣なる受講者に、頭の下がる思い。講師の資格なしを、済まぬと思う。

十月二十三日（日） 晴

総本山、大石寺に詣でる。

大御本尊様にお目通りすると、確かに、生命力が湧く。これは、厳然たる事実である。自己の体得、万人の体験。——愚かな、不信の徒の批判——あわれむべし。悲しむべし。

旭日、昇る、厳肅なる本山。

衆生所遊樂の源泉地、大石寺。

富士を、背に画きし、総本山。

靈鷲山、いま、茲^{ここ}に有り。

東洋の民も、必ず来る。世界の指導者も、必ず来る。いま、この、吾^われ起^たてる所に。

登山をかさねるごとに、生涯、成長の節とせん。

下山の途中、富士宮に寄り、T部長、参謀等と、I社長宅、並びに、I氏宅を訪う。
自宅着、八時近くとなる。城南方面は、樹木少なし、水少なし。環境可とせざるか。

一時間程、子供をつれ、妻と共に、付近を散歩。食事、美味、楽し。

十月二十四日（月） 雨一時曇

先生の、限りなき境涯、構想等を、沁^{しみ}々、深く偉大なりと、知る一日一日である。

自己の浅はかさを、^{もうせい}猛省することしきりなり。

午後、一時二十分東京発にて、沼津へ。着、四時十分。T氏、R君、A君と共に、実業家、政治家T氏を訪う。

一時間程、待たされ、九時少々前まで、懇談。充分に語る。

国土開発の事、中央道、経済、政治等の件に付き、意見交換。

結論として、深入りして語る人にては無きと思う。

相当、科学的、具体的に、自己の主張をせしも、何となく、神懸^がりのである。

九時五十分発、上りにて東京に着く。

十二時五十分、吾^わが家に。

政治家も、学者も、科学者も、実業家も、総て、^{すべ}一人の力によって、偉くなったとは思えぬ。どうも、対人間関係から、恵まれた環境から、伝統上から、そして、閥^{ぼく}から、組織から、家柄から——等々、多分に、偶然的に、決定され、演出されゆく如くに見えてな

らぬ。

十月二十五日（火）

曇一時雨

朝、先生、お見えにならず。

淋^{さび}しいものだ。心奥の空虚^{くうきょ}――。

一日中、平凡に在社。頭痛しきりなり。

夕刻、本部へ。会長室に、昨日の、T氏の報告をなす。

水滸会。六時。

来春の参議院選挙の、候補の発表あり。胸躍^{おど}る。
五名。

H 統監部長。K 指導部長。T 青年部長。S 大阪支部長。H 文化部最高顧問。（編注・後日、一名が追加される）

右の者なれば、妥当の感を抱く。

帰り、常在寺へ。支部班長会に出席。元気ある会合であった。なつかしき人々である。十二時、帰宅。無理矢理に、身体をこわしては、ならぬ。

遅くまで、読書。本を読まねばならぬ。若いうちに。老いて、後悔せざる為にも。――

十月二十六日（水） 雨後曇

一日中、薄ら寒いぐらいであった。

凡人なれば、刻々心境が、めまぐるしく変化するものだ。

修羅界しゆらになる時。地獄の苦悩。天上界ようての歓び……。

信心根本なれば、常樂我淨じょうらくがじょうの、人生、生活に、自然に則のつとっていることか。

来春の政界進出は、学会の歴史的 first 歩となることだろう。是非とも、勝利へ導きたい。必ずや、未来の栄光ある足跡となろう。

学会の華も、大きく、たくましく咲いて来た。全幹部、来年より、再び、心を引き締め、新時代建設に、自覚して貰いたいものだ。

油断は大敵である。有頂天は、必ず、悔いる時がある。

学会丸も、東京湾より、太平洋へ向かったのだ。黒潮に乗るか――。怒濤どとうに揺れるか。波浪を、乗り越えるか――。

夕刻、T兄妹に、渋谷にて食事を御馳走する。可愛い人達だ。立派に育って貰いたい。

帰り、腹痛しきりなり。その儘まま、帰宅。薬をもらい、読書。静かな夜。

平和な夜。幸福な夜。暖かな夜。

有り難い。

十月二十七日（木）

晴れたり曇ったり

身体を、大切にせねばならぬと思う。

午後まで、在社。社会は不景気である。

恵まれた環境を謝す。

一級講義出席。豊島公会堂。

先生、非常にお疲れのご様子。

左記のことを思う。

一、弁解する人物になるな。

一、人の榮譽、人の幸福を喜べ。

一、人に、干涉かんしょうするな。

講義の帰り、矢口のS宅へ寄る。皆、よろこんでくれる。

帰宅、十時少々過ぎ。二人の子供、静かに寝ている。可愛い。広宣流布の、立派な人材になれよ、と想おもう。

秋月万観の詩を作る。

地上の葛藤^{かつとう}、豈^{あに}、小饑^{しょうき}の動なり

栄楽も空し 一風^{いつふう}に去る

名財も消滅せん 大流の一泡

.....

十月二十八日（金） 雨

読書の秋。否、三百六十五日、読書の日にしたいものだ。

一、御書を、完全に読み切ってゆく事

一、六巻抄を、熟読すべき事

一、古今東西の、良書を精読すべき事

特に、この三年……。此の三年によって、私の生涯は決定するなり。

運命、宿命——。大河の流れの如し。

誰人に語らん。誰をか、うらまん。

午後、齒科へ行く。どうして、こんなに、方々悪いのか。

夜「觀心本尊抄」の講義出席。信心で、講義を受けねばならぬ。更に、精読、思索をせねばならぬ。

問うて曰く、

十界互具の仏語分明なり然りと雖も我等が劣心に仏法界を具すること信を取り難き者なり今時之を信ぜずば必ず一闡提と成らん願くば大慈悲を起して之を信ぜしめ阿鼻の苦を救護したまえ。

答えて曰く、

汝既に唯一大事因縁の經文を見聞して之を信ぜざれば釈尊より已下四依の菩薩並びに末代理即の我等如何が汝が不信を救護せんや、然りと雖も試みに之を云わん仏に値いたてまつつて覺らざる者・阿難等の辺にして得道する者之れ有ればなり、其れ機に二有り一には

仏を見たてまつり法華にして得道す二には仏を見たてまつらざれども法華にて得道するなり、其の上仏教已前は漢土の道士、云云……。

（観心本尊抄）

自宅にて、種々将来のこと、身体のこと、家庭のこと等を思索。運動不足。生命力が、欲しい。

十月二十九日（土） 晴

上天気。爽快な、秋の朝であつた。

芸術の極の感あり。否、種々の芸術が、この大自然の粹より、有為の形となるか。

先生より、朝、電話あり。最近、度々なり。ある時は、やさしく、ある時は、厳しく。いずれにせよ、幸せなことである。

先生の指示により、山喜房版『富士宗学要集』のことで東販に行く。

午後四時。本部第一応接間にて、社友会。何もしゃべらず悪いことをした。

夜、先生と共に、N中華料理店にて、会食。二人の外部の人を、紹介して下さる。先生、相当お酔いになる。

帰り、先生を自宅までお送りし、帰宅。

疲れる。若いくせに、困った生命。

十月三十日（日）

晴れたり曇ったり

九時まで休む。

疲労、全く取れず。

三時よりの、M君の結婚式に、出発しようとする、T部長が来る。共に、池袋まで、同車。弱い人である。可哀想な先輩でもある。

静閑な、式であり、宴会であつた。出席者と、密着なき人であることを感ず。これ又、可哀想でならぬ。随分、この数年、支援してあげたが、本人は、どれほど自覺しているとか。何も感じていない人のようにも思える。

六時、支部長宅へ。支部の地区総会に、共に行く。文京地区——二百七十名、出席との事。場所、豊島公会堂新館。二十分程、激励する。皆、元氣であつた。こちらが激励されることの多きことよ。

終了後、H兄と共に帰る。

自己のことを、深く考える事は損なのか。それは、絶対必要なことなのか。

自己を批判しすぎて、消極的になる人あり。自己を、深く思索、反省して、勇然と、突進出来る人もあり。愚かな自己批判より、青年らしく、常に、あたつて砕けゆく根性が、大切な時代なのか。

所詮、^{しよせん}妙法あれば、自分らしく、考え、進み、行動すればよし。……人には、迷惑をかけずに。――

十月三十一日（月）

曇

形式に走り、形式に流される心を、保守というか。又は、過去のみを重んじ、未来への改革を欲せざる心をいうか。

革新——俗に世間でいう言は別として、真実の革新とは——形式に流されざるを得ぬ社会の中より、真実の生氣を出しゆく、即ち、妙法を唱え、新たなる、みずみずしい生命力を湧現して、自らを革命し、環境をも変えゆくことといえよう——。

本部幹部会——豊島公会堂。

時間、六時三十分より。

終わって、常在寺において、大幹部会。

先生より、深い功德論の話あり。我々は、幸せである。

自宅にて、種々反省。

厳しく、御本尊様に、お詫^わび申す。

来春の参院選のことを、心配する。

運命戦でもある。仏天の加護を信ずるのみ。いや、美名にかくれた言語でなく、全魂を傾け、全霊を尽くして、初めて、仏天の加護を願うことだ。

自己流の、価値論——自我流の、信心利用の言語は、厳禁すべきだ。さなくんば、将来、広布の大道に、妄想の御書用語で、邪魔されることは、必然である。

〔十月〕——この年の三月十一日、創価学会と日蓮宗身延派の間に行われた「小樽問答」は、学会側の圧倒的な勝利であった。しかしその後、身延派は学会対策を強化し、学会批判を出版するなど、敗北を覆い隠そうと必死の反撃に転じてきた。学会側は、こうした動きに対し、十月九日付け「聖教新聞」全面にわたって、身延派の邪義を破折する記事を集集し、すでに決定的であった勝利を動かぬものとした。

広布の進展とともに、学会歌が諸会合で活発に歌われるようになった。「聖教新聞」では全国の会員の要望に応え、九月十八日付けから学会歌の楽譜を一曲ずつ掲載している。担当は、前年に誕生した音楽隊であった。十月九日付けには女子青年部歌が紹介されている（この歌は、昭和二十六年の同部結成直後に臨時総会で発表された創作曲）。また、各地の支部歌等も相次ぎ生まれていった。この年に作られた京都地区歌は、のちに全国で愛唱される「威風堂々の歌」である。

異常気象のため、前年の稲作は例年の五、六割程度だったが、三十年産米に関して農林省は

“空前の豊作”を予想した。五日発表の作付面積と第二回作況予想によると、全国で約七千六百万石余の収穫が試算されている。これは、前年を約千五百万石、過去最高（昭和八年）を約六百万石上回る大豊作であった。この大豊作は、いわゆる“特需景気”とあいまって、生活面での豊かさの足固めとなった。

政界では、十月十三日、左右両党に分裂していた社会党が四年ぶりに統一され、委員長に鈴木茂三郎が就任した。また、約一カ月後の十一月十五日には、自由・日本民主両党が合併し保守も合同した。こうして日本ではじめての単一保守政党・自由民主党が結成され、総裁代行委員に鳩山一郎、緒方竹虎、三木武吉、大野伴睦が就いた。これ以後、昭和三十年代の自社二大政党時代が始まることになる。

世界政治の動向も東西両陣営のせめぎ合いのなかで大きな動きを見せた。十月十一日、アイゼンハワー米大統領がブルガーニン・ソ連首相に書簡を送り、軍備管理を提案した。十五日には、オーストリアから駐留米軍が撤退した。二十六日には、北緯十七度線以南を占めていたベトナム国政府（南ベトナム）のゴ・ジン・ジエム首相がベトナム共和国の成立を宣言し、自ら初代大統領に就任した。

十一月一日（火）

快晴

秋晴れの日であった。

一日中、元気なし。老兵にも似た表情。

身体を健全にせねばならぬ。自己の身を、大事にする工夫をすることだ。

夜、男子青年部会。中野公会堂。

開会前、理事長及び、U部長を誘い、うなぎを馳走する。満腹。

七時少々過ぎ、開会。

千数百名の精鋭なれば、実に頼もし。

壇上に席する自分より、勝れ、優れる人がいかに多きかと、胸奥きようおうで念う。嬉しうれ。

今朝、先生よりお話あった、保守、革新の定義、並びに、組織、日本の潮流等の指導をする。

盛況であつた。九時少々前、終了。

帰り、S支部長等と、品川まで共に。

毎夜、遅く帰る。——妻、淋さびしそう。

私は、私らしく、堂々と、強く、広布の先陣を駆けることしかない。若々しく。男らしく。責任者らしく。

十一月二日（水）

快晴

一時より、後楽園スタジアムにて、総会の予行演習を行う。

中心になって、種々、指導、指揮をとる。皆、疲れている感あり。多忙な中、済まぬ気持ち。幹部が皆、後輩を、大事にしていくことだ。役職や、組織のみで、左右することは、危険であり、禁すべきだ。人間性を、第一義にすべきである。

特に、旗手の人々に、何かしてあげたいと考える。自分に、金がなく、何も出来ず、淋しい思いであった。

四時終了。M君、H君、Y君、及び部隊長級と、散歩しながら帰る。

本部へ、先生に、お目に懸^かりに行く。一時間ほど、指導賜る。

蒲田駅前にて、妻と時間を約束したことを、二時間以上も忘れ、叱られる。

夜遅く、Y夫妻来る。家屋の事であった。複雑な人である。T部長来宅。楽しからず。

十一月三日（木）

晴

待ちに待った、秋季、第十三回総会。

菊花かおる晴天。

創価学会も、最^{もはや}早、日本の潮である。

激浪に進みゆく、力強き、大総会であった。

九時二十分、後楽園の会場へ着く。

七万の同志の顔は、紅潮し、歓喜を包んでいる。見事なる前進、躍進の学会、新時代の潮。

瞬間の姿でなく、限りなく永遠に発展しゆく、因であることを信ずる。

新聞社、報道関係、警察関係、百人を超える。渉外部も、忙しい。

僧侶、約八十名。最高に集合の員数とのこと。未来、幾百、幾千人の、僧侶の巢立つことを期待する。さなくんば、広布の達成はあり得ない。

十二時、劇的な、入場式に移る。

「日本男子の歌」「憂国の華」「学会の歌」の順に、参謀室、男女部隊旗、部隊長、本部旗、会長、理事、支部旗、支部長の順で、中央壇上に向かい行進。

新しい足音。新しい感激。新しい思潮。新しい人間性。――

参謀室、初めて、壇上に席する。

一步、一步、我等の指揮とる時代に入るのを、胸奥きょうおうに感知する。

“ぶつちよく仏敎実現の日まで”

御本尊様にお尽くしするに、何の遠慮があるか。何の卑屈があるか。

師子の子よ、吼ほえろ、

師子の子よ、進め、勇然と。

N園にて、二次会あり。

司会をする。——疲れた。

今朝、先生より、直じき々に、お電話にて、総会を記念し、和歌を戴いたく。

三類の 強敵あれど

師子の子は

広布の旅に

雄々しくぞある

師子王の 雄叫おたけび 聞いて

奮たい起つ

広布の旅の 子等ぞ勇まし

雄々しくぞある、は、雄々しくぞあれ、か、又は、雄々しくぞ起て、の方が、吾等われらとしては、宜よろしいと思う。

十一月四日（金）

快晴

午後二時。

理事長と共に、警視庁へ行く。

昨日の総会、警備の御礼かたがた旁、挨拶あいさつ。

S係長、S次席、K課長に面会。

S係長の曰く「恐ろしき力になり、驚いた」と。

S次席は、高慢な態度で、注意する。末端の事、選挙違反の事等。

K課長には、典型的な官僚臭あり。医師法、不敬罪、共産思想の侵入を恐れ、注意している、と。

学会の本質も知らず、見おろしての言葉に、反発を強く感ず。勇ましく戦って帰る。

先生の友人？ K氏と語る。二時間ほど。不可思議な、注意すべき人物と思う。

一、先生を、表面は尊敬しているようでも、心底は、小馬鹿にしきっている。

一、身延など、会長のいう如く、決して、減びることはないとの事。

一、金銭を、利用出来ねば、側に行く必要なしとの事。

人の心、恐ろし。嗚呼^{ああ}。

「観心本尊抄」講義。六時半、本部にて。

教学、仏法の真髄は、本尊論にあることを、痛感する。

十一月五日（土）

快晴

午前中、在社。

身体疲れてならず。大事にせねば。

六時三十分、本部講義。

「顕仏未来記」終了。

講義は、

一、熟読すること。

二、明確に、解釈すること。

三、理論的であること。必ず、体験を通し、幅広く講義をなすこと。

終了後、Kさん等、三人して、Bにて、夕食。

仏法は体なり、世法は影なり——と。真実の体とは、強き、強き、信心に尽きるか。真実の体を、確立しきるために、一生涯、自分らしく、若い人らしく、歩もう。魔風魔浪に、流されぬように。

帰宅、十一時を過ぎる。友、数名来ている。

十一月六日（日）

晴

日曜日は、いつ、先生より、電話連絡あるかも知れぬ。自宅に、午前中、待機する。

青年部員、十数名来る。

第一部隊、世田谷地区関係の人々。

人材が欲しい。人物が足りぬ。

私の指導法を、よくよく反省してみる。

- 一、指導は、明確にして、焦点をつかむこと。
- 二、指導は、何を指導するのかを、即ちその目的を、示すこと。
- 三、指導は、所詮^{しよせん}、慈悲を持ち、確信に満ちて、為^なしゆくこと。

二時少々過ぎより、家中にて、多摩川園に遊びに行く。

四時頃まで、思う存分、子等と共に遊ぶ。

途中で別れ、常在寺の座談会へ。久し振りの座談会であつた。而し、一日の内で、一回、何等かの学会行事に出る事が、絶対必要であると痛感する。

苦惱。当然、求道者にはあろう。反面、早く、天真にして、大空に飛び、独朗どくろうにして、闊歩かつぽしゆく、人生になりたし。

蒲田駅西口より、妻と共に帰る。途中、お好み焼き——。詩情多々。

十一月七日（月）

高曇

身体かんばの具合芳し。

休息も大事、行動も大事、共に、健康には。

先生と、奥様と、三人して、種々、将来の、社の在り方等で打ち合わせ。

夜、中野桃園会館にて、二級講義。

『折伏教典』の、生命論に入る。自分としては、気持ち良く終了したと思う。事前に勉強することが、大事。帰り、N支部長宅へ寄る。

刻一刻と、寒さ増す。

湯タンポを入れて休むとは、若いくせに、困ったものだ。

十一月八日（火）

曇後快晴

長谷川如是閑の話。“貫録とは、頭に非ず、才に非ず、その人、本性の人間性なり”と。けだし、一切の根本の解決、革命は、妙法による以外になかろう――。

精進根も、念根も、定根、慧根の確立も亦、^{また}これ、最大の人間革命の、縮図である。

夜、部隊長会。皆、全く元気なし。

疲れか、指導者の不得手か、経済的な悩みか。もっと吾等^{われら}は、掘り下げて、皆を激励し救済する、慈愛が大切だ。

君等よ、伸びのびと進め、歩め。そして、生き生きと、自由の大空に羽ばたけ、と心で祈る。

無駄な神経など、使うな。もっと、大胆に、社会を闊歩^{かつぽ}し給え、と云^いいたい。

青年を、窒息^{ちっそく}させてゆく社会、機構、制度。誠実な青年が、実力に応^{こた}じて、栄進出来ぬ、本末顛倒^{てんとう}の社会。

指導者も悪い。社会も悪い。而^{しか}し、それらをおしのけて起^たち上がらぬ、青年も悪い。この解決が、今、吾等が、実践している一日一日なのである。頑張れ、青年よ。

吾等は、君等は、世界最高に、強いのだ。

参謀室にて、I君をまじえ、仏教伝来の話にふける。北方伝説、南方伝説等、議論尽きず。I君の学識の深さを偉いと思う。

T部長、M君等と、新橋にて、やき鳥を食す。一本二十円と思いしを、五十円也と聞き、驚く。計八百八十円也と。持ち合わせがあつたので、恥をかかずに済む。

帰宅、十二時三十分。疲れてならぬ。

二、三日、朝、遅刻している。気のゆるみか。

十一月九日（水）

快晴

今日も、朝寝坊してしまふ。

先生、お元気で、さきに来ておられた。

極^{きま}り悪し。

学会のことについての報道、しきりなり。中傷あり、曲解あり、無認識あり――。

このことで、退転する人もあると聞く。情^{なさ}けない人だ。縁に紛動されて、誰人が、確信をもつて救ってくれると思うのか。――

批判した雑誌や、新聞や評論家が、その救済の結論を持っていると思うのか。
愚や、愚や。

夕刻、社員達と共に、ニュース映画を観覧。自界叛逆ほんぎやくの世相に、思うこと多し。
帰り、皆して、すき焼きを食う。実に美味なり。

早目に、帰宅。「大白蓮華」の原稿を書く。

法華経に曰く、

「世は皆牢固ろうこならざること 水沫泡焰すいまつほうえんの如し」

又曰く、

「以何令衆生いかりようしゆじよう 得入無上道とくにゆうむじようどう」

十一月十日（木）

曇後晴

朝の勤行は、最も大事。

一日の勝敗を決し、一日の人生の盛衰をも決する故に。因果俱時の哲理の、実践の上か

らも。

日増しに、寒し。

二時より、本部面接。人間には、順調、不順等が、誰人にもあると思う。だが、その人に力あれば、その差はないこととなるであらう。

自分の指導力のないことを悔む。

先生は、昨日より、御子息をつれ、登山。本夕、お帰りの予定。

私、最後の一級講義。方便品、寿量品、観念文等、三か月に亘る講義終了せり。毎自作是念。

帰り、支部長宅へ。

「末法相應抄」につき、支部幹部及び、女子部幹部と語りあう。

遅く、先生宅に呼ばれる。

種々、厳しき指導あり。自身に、強く火花の如く響くなり。

夜中、“人間革命”の詩を記す^{しる}。

悪業、皆、重々と黒く、

奈落、修羅、又、鬼畜に徨はん^{さまよ}、

業、又、業を重ね、感果亦^{また}厳しく悲し

此の社会

此の人類

人生の航路、無始たり、宇宙の原動、又、永遠

天に旭日昇り、生命に、若芽の生息始動せり

妙法の力、動源の力

巖をも砕き、悪業をも、霧散^{むさん}せしむ

十一月十一日（金）

快晴

今朝は、先生にお目にかかれず。淋^{さび}しかった。

私の人生は、激動を欲し、激動に生き、更に、求めて激流に向かい、激浪に向かうが如きなり。

信心とは何か。

社会とは何か。

国土とは何か。

政治とは、経済とは、文化とは何か。

つれづれに、何の気なしに思うことがある。思索も大事。しかし、私は、未完成の自分を、自分らしく、真面目に反省し、もうせい猛省して、生涯生きたいと思う。

人に対しては、その人の真価、その人の福運、その人の本質を、見極めるよう努力しよう。そして、その人が、強く、たくま逞しく、少しでも、大善の方向に向かうよう、最善を尽くそう。

金曜講義。先生の大確信、教学の力に、恐れ入るのみ。……この儘まま、いついつまでも。

帰り、友等と、池袋にて、うな井を食す。

「佐渡御書」

日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮が斯かくなれば疑ををこして法華經をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢しかしこと思はんびやくにん僻人等が、云云。

牧口先生の、常に、拝読なされた御書と聞く。学会の、大信念の依文なるか。――

十一月十二日（土）

秋晴

いずこに行く処もなき、秋の土曜日。

三時まで在社。

六時、本部。教学部員候補生の講義。「妙密上人御消息」終了。全員真剣。頼もし。今の学者が、此の古文書を、幾たり完全に解釈出来ることか。今、幾百千万の庶民が、

これと取り組んで、生活の源泉としているのだ。尊し、尊し。

週刊誌の文化とは、輕薄けいはくこの上もない。次の、深く、輝く文化は、必ずや、この大衆を土壤にしたところに、永遠の金字塔の文化が、樹立しゆくことだろう。ああ、第三文明。

今日で、朝の、先生の勉強——政治学、法律、化学、漢文、天文学、経済学等、終了する。

一生涯、勉強してゆかねばならぬ。生涯、謙虚に。決して、教学に、学問に、慢の人になること勿なかれ。

帰り、妻と共に、神田のT宅に寄る。帰宅、十二時近し。

家静か。幸福、平和、精進、希望、福運等に、満ち満ちてり。

十一月十三日(日)

快晴

八時起床——寒い。

先生の御親戚の引越しに行く。タクシーにて、妻と共に。堂々たる邸宅である。夕刻まで、真剣にお手伝いする。夕飯、御馳走になり、失礼する。

梅ヶ丘の、京王地区の総会に出席。盛会であった。四十分にも亘る講演をする。

一、仏道修行とは

一、折伏の意義

一、誇りある学会人たれ

概略、以上の内容にて――

帰宅、十二時。寒い一日であった。

十一月十四日（月）

快晴

先生に、お目に懸り、指導を戴く幸せを、沁々と感ずる昨今――。

朝、「依義判文抄」の講義を、お願いする。

文段、六卷抄の大事を痛感する。此の三か年において、勉学、徹底せねばならぬ。

本部——五時三十分。

先生と、新任部隊長のこと、地盤（編注・翌三十一年の参院選）のこと等について、お話しする。

六時三十分より、参謀会議。

一、第一部隊の編成の件

二、総会の運営問題

三、予算の件

四、来春の参院選への対策

九時少々すぎに、終了。

帰り、S理事、T部長、自宅に来る。

心身共に、大事にせねば——。自己を反省し、けんさん教學を研鑽し、そして、これからの大切な戦いをせねばならぬ。

〔十一月〕——十一月三日、第十三回秋季総会が東京の後楽園球場で七万人が参加して盛大に行われた。当時の学会世帯数は二十七万二千世帯で、この年の目標、三十万世帯へあと三万というところまでできていた。八月の地方折伏の大勝利により、それまで東京を中心としていた活動から、全国に盤石な組織が構築されたことで、あらゆる活動が全国規模で展開されはじめ、この日は一斉に広布への戦いを開始する出陣式ともなった。

社会では、十一月一日、憲法違反であると「收容認定通知取消」の訴えがあつた立川基地に隣接する東京都下砂川町の自衛隊滑走路一万九千九十四坪の拡張工事に伴う精密測量が開始された。しかし、地元住民の反対阻止によって測量は延期を重ねていた。それに対し五日、東京調達庁の要請を受けて、武装警官隊千四百五十人、私服警官二百人が動員され、強行測量を実施した。そのため、警官隊と反対派住民及び応援労組約六百人とが衝突し、双方の負傷者は百人を超えた。予定の測量は完了したが、全国の基地問題に大きな影響を与えることになった。

国連では、十一月七日、国連政治委員会が放射能科学委員会を設置した。同委員会は米、英、ソ、日本など十五カ国で構成され、放射能の影響を調査することになった。また、この日「原子兵器の実験中止をすべての国に要請する」との修正案が出されたが反対多数で否決された。さらに、放射能に関する情報収集についても否決されるなど、核兵器の脅威や核物質の危険性を証明する機関と期待されたが、「核に依存した国益主義」という暗い側面ものぞかせるものとなった。

一方、十月二十七日から十一月十六日までの三週間、ダレス米國務長官、マクミラン英外相、

ピネー仏外相、モロトフ・ソ連外相による四カ国外相會議がスイスのジュネーブで開かれた。ここでは、同年七月の四カ国巨頭會議において示された欧州安全保障とドイツ問題、軍縮問題、東西交流の發展の三問題について広範に討議された。しかし、そのいずれについても期待された成果を上げることができず、會議は「完全な失敗」という印象を残して終わった。

十二月十七日(土)

晴

年の瀬というのに、心落ち着いている。また、気持ち少しも騒がず。他の人々が、苦しそうに^{あくせく}催促しているのを、傍観している思い。これで良いのかと思う。

青年部總會を明日にひかえ、二時より、その準備に行く。青年部自体に、何となく隙^{すき}がある感じ。青年部の前途を^{おも}念い、厳しく指導す。叱られし人よ、君達のことを憂い思う心を知ってくれ。

寒さ厳しくなる。身体具合、少々良し。嬉^{うれ}しきこと、この上もなし。

夕刻、会長戸田先生に、総会へのご出席の御願ひにあがる。——慈眼。

おそくまで、I理事と、短期指導の打ち合わせ。また、M部隊長と、種々打ち合わせ。

来年は、深い、落ち着いた功德をうけゆく信仰でありたし。先生の御存生中に、立派な自己の革命をしてゆきたい。念願。

右にも、左にも、縁に紛動されず、真一文字に、信行学に励みゆきたし。——努力。

十二月十八日（日） 晴

第四回 男子青年部総会。

場所、蔵前国技館——。時、一時二十五分開始。一万五千名の同志結集。

割れんばかりの拍手——。人々は世紀の総会と喜ぶ。しかし、わが胸は悲し。淋し。苦し。精銳の一万名でなかったこと。吾が師、戸田先生の、力弱き歩みを見て。

四時二十五分終了。引きつづいて、部隊長だけで小宴を開く。労をねぎらうと共に、真実の青年部の構想とは、いまだほど遠きことを訴う。

われも、心ひそかに、厳しき闘争の決意をする。

十二月十九日（月） 晴

戸田先生、お疲れか、お姿見せず。

われも、身体の調子、再び苦し。淋し。^{さび}

来年は、青年部の充実と、機構の改革、訓練に全力をあげよう。

堀米尊師の講義出席。「当体義抄」。

教学の徹底的究明ほど、最大事はなし。

十一時すぎ帰宅。

妻、非常に美し。

十二月二十日（火）

晴

朝より、なんとなく、あわただしき気持ち。

男女の総会も終わる。本年最大の行事は、いっさい終わったわけだ。

午後、会長室にて、I君、H君、F君と四人にて、先生と懇談。第三代会長の事、学会の未来性について、お話あり。

先生に褒められる人あり、先生に媚びる人あり。

妙法、信心の奥底は、甘言にて左右しゆくものに非ず。

夕刻、短期指導の件にて、部隊参謀と打ち合わせをす。青年達の心、清くして、生命、
遅し。

十二月二十一日（水）

雨後曇

吉川英治作『宮本武蔵』を再読。小学四年の頃をなつかしく偲しのびつつ。

剣の人。技の人。この一念、この心理、この人生修行、この生命の躍動も、現代社会にフィットするなりと思いて。

六時三十分より、先生と共にRにて、銀行招待のため、会食。

十時すぎ帰宅。此の一星霜のことを、種々念おもう。

反省、勇氣、高杉晋作、同志、先輩、そして、未来、十年、二十年先の吾わが人生を。

十二月二十二日（木）

晴れたり曇ったり

M重役より、ネクタイいただ戴く。ありがたい。先生亡きあと、生涯まも護りゆく人、戦いゆく人が自然に決まっていこうである。

先生と、丸半日ご一緒。

先生より指名された人物論を読むことにする。

先生の御身体の具合、悪しき様子。先生は「『説せつ己こ心しん中ちゆう所しよ行ぎ法ほう門もん』を色読できるなり」と笑う。

先生の曰いわく「大ちゃん、人生は悩まねばならぬ。悩んではじめて、信心もわかる、偉大な人になるのだ」と。

われ、わが浅はかなるを恥ず。

夕、妙光寺——。三部隊誕生式に出席。

本年最後の指導として、十時まで、真剣に指導をなす。

友が憂いに 吾われは泣き

わがよろこびに 友は舞う

を口ずさみながら、同志と、駅に向かう。

十二月二十七日（火）

晴

小春日^{びより}和を思わす一日であつた。

十時東京発「玄海」にて、総本山へ。先生と共なり。

霊鷲山に似た、荘厳なる富士大石寺。信心のみに八年半。信仰ということを、やや知得。

昨二十六日―月曜日は、第二の学会の柱、I君、Z君、U君、K君、H君、M君と共に、先生宅に集まる。三時間余にわたり、指導あり。厳、そして暖に。

ネールも、周総理も、蔣介石も、いずれは総本山に呼ばねば、また世界の、次代の指導者たちも――。アジアを指導するは君等なりと――。雄にして大の指針あるなり。

心身共に、疲れゆく。

十二月二十八日（水）

晴

今年も、はや、あと数日。

人生の花、二十代との訣別も、一年ごとに近くなる。淋しく、未来の憂い、社会の厳しさ、交錯すること多々。

若い。まだまだ若い。自己を鍛え、磨かねば。(1)読書 (2)書くこと。

夜、忘年会。九時すぎまで、友と歌い、そして舞う。

二十七歳も、あと三日か。三年後には三十代に。運命の人、多感の人、青年の前途は、何が待っているか。

性格は運命なり、といった哲人がいた。

十二月二十九日（木）

晴

暖かな一日であつた。気分爽快。^{そうかい}嬉しい。

夏季闘争の功德なりと、しきりに思う。

色心不二ということを、深く思索し、実感し、自己を本物にせねば。

真実とは、と考える時がある。変転極まりなき人の心。真実の基準とは、と考える時がある。複雑、変動の社会にあつて。

六時三十分より、参謀会議、本部にて。楽しい会議であつた。皆よく戦つてくれた。来年も、この調子で進みたい。

帰宅後、三人の友来る。来年は、人生の栄光の年にしようと語る。

十二月二十日（金）

晴

春暖の如き陽気。

近年にない、安定しきつた年末。感激少なきともいえるか。

自己は、激動が好きのようだ。静かに、平凡に暮らすことは苦痛のようだ。身体が弱いの。自由奔放に、大空に羽搏く^{はばた}のが、最も適した人生であるらしい。

しかし思う。英知で、人の本質、社会の動向、世界の未来を、じっと観察することも大事なりと。

二十七年を反省する。よくここまで進んでこられた。幾度か累卵^{るいらん}の如き、人生の多かつたことよ。

謝す。妙法、師、両親、友人——。

身体だけは、何とか丈夫じょうぶにせねば。広宣流布の、その日まで生き抜きたい。

夜、文京の最後の会合へ行く。機嫌悪く、みんなに非常に悪いことをした。反省。

自宅まで、タクシ―。

静かな、吾わが家。質素の中に、尊い幸福が輝いている。どの部屋にも、花がさしてある。心暖かし。

〔十二月〕——昭和三十年十一月二十三日、総本山において奉安殿ほうあんでんが完成し、御遷座式ごせんざしきが挙行された。また、十二月十三日には関西本部の落成入仏式が行われるなど、広布の飛躍への歩みがしるされていった。青年部でもこの年の掉尾とうびを飾り、十一日には第三回女子青年部総会が中央大学講堂で開かれ、続いて十八日、第四回男子青年部総会が、蔵前国技館で盛大に行われ、戸田第二代会長のもと広布拡大への前進を期した。

この年を締めくくる十二月度本部幹部会が二十三日、東京・豊島公会堂で開催された。席上、一年間で十九万四千世帯の弘教が実り、全学会世帯数が年間目標の三十万世帯を超えたことが発表された。最後に登壇した戸田第二代会長は、奉安殿落成をはじめとする同年の広布の足跡を振り返りつつ指導した。また翌三十一年を展望して五十万世帯の新たな目標を示すとともに、全学会員が「ことごとく功德に包まれ」ゆくことを望み、さらなる広布の前進を期待した。

三十年は、生産・流通の水準は、ほぼ第二次大戦前の水準に回復し、更にそれを超える勢いになった。輸出船は受注量が世界第一位となり、主要輸出品は、鉄鋼が綿織物を押さえてトップになった。戦後経済最良の年といわれたこの年末の外貨保有高、輸出額はともに戦後最高を示した。輸出入の不均衡が大幅に改善された。死亡率も低下し、二十七日に発表された厚生省の戦後十年動態白書によると、平均寿命は女性が昭和二十二年の五十四歳から六十八歳に。男性は同五十歳から六十四歳にとアップした。

後記

「池田大作全集」刊行委員会

創価学会創立六十周年記念出版として『池田大作全集』の中に、「日記」を上下二巻として収録することを計画・立案し、その旨を著者にお問い合わせしたところ承諾を得ることができ、ここに、その「日記〔上〕」を、意義深き五月三日を期して発刊する運びとなった。今回の配本は第七回、通巻にして第三十六巻である。

この日記は、最初、雑誌「週刊言論」に、昭和二十四年五月（二十一歳）から昭和三十年一月（二十七歳）までの記録が「若き日の日記から」と題して、昭和四十年一月から六十回に分けて連載され、大きな反響を呼んだ。

それが、単行本化されたのは、著者が創価学会第三代会長に就任して七周年の佳節を迎えた昭和四十二年五月三日を期してのことである。この時、読者からの強い要望があつて未発表の日記・昭和三十年二月から昭和三十五年五月（三十二歳）までが加えられ、十一

年間の記録が『若き日の日記』と題し全五巻にまとめられて発刊された。ただし限定出版（非売品）であった。

さらに、昭和五十八年一月から青年を対象に発行された旬刊紙「創価新報」（聖教新聞社発行）の創刊に当たり、青年部からの強い要望のもとに『若き日の日記』（既刊本全五巻）の転載が開始され、現在も連載は続いている。

このような経緯を経て、今回、本格的に単行本化の運びとなり、本全集の中に組み入れることができた。著者の思想をまとめた書は多いが、著者自身を自ら語った書は、この「日記」をおいてない。しかも、著者を知るうえで、その人間形成の土台というべき「青春期」の記録はまことに貴重であり、本全集に欠くことのできない一編である。ここに待望久しかった本書の出版を、青年諸氏ならびに同志と共に心から喜び合いたい。

*

本全集では「若き日の日記」を、次のように二巻に分けて収録することとなった。

第三十六巻「日記・上」（昭和二十四年五月～昭和三十年十二月 六年八か月）

（戸田理事長経営の日本正学館入社 二十一歳～二十七歳）

第三十七巻「日記・下」（昭和三十一年一月～昭和三十五年五月 四年五か月）

（二十八歳～三十二歳 第三代会長就任まで）

なお、本編の収録に当たって、著者の了解を得て、次の諸点について改訂・整理を加えたことをお断わりする。

- 一、御書の引用は、『昭和新定日蓮大聖人御書』（日蓮正宗総本山・富士学林発行）、『新編日蓮大聖人御書全集・日蓮正宗大石寺版』（創価学会発行）に依った。
- 一、読者の理解を助けるために、毎月の末尾に、その当時の時代背景を入れた。
- 一、登場する人名については、大体、イニシャルで表記した。
- 一、読みやすくするため、改行・行あきを整備した。
- 一、引用文の旧字体は新字体に改め、読みがなは適宜^{てきぎ}ほどとした。

*

この「若き日の日記」は、著者が人間形成のうえで重大な影響を受けた戸田城聖創価学会第二代会長に巡り会い、最も多感な青春期の十年間を師事し、日蓮大聖人の仏法広宣流布という大事業に身を挺^{てい}し、奮闘してきた十一年間の日々をノートに刻んだ「青春の碑^{いし}」である。

日記は、その性格上、断片的に走り書きに綴^{つづ}られたものである。だが、その日々の行動と胸中の心情を凝結^{ぎようけつ}した片言隻句^{へんげんせきこ}は、時としてありの儘^{まま}の、生々しい、赤裸々な姿を浮き彫りにして、躍如^{やくじよ}たるものがある。

そこには、一人の青年が峻厳^{しゅんげん}なまでに師を求め、広宣流布への壮大なロマンと、烈々^{れつれつ}たる確信を貫いて、夜間通学、仕事、生活、経済、病氣、弘教、組織活動等々のさまざまな困難と戦いつつ、青春の嵐の中を、日々、懸命に生き抜いてきた姿が滲^{にじ}み出ている。

四十年後の現在も、著者は、新しき人間世紀を開くために、世界を翔^かけ、仏法者として、他者に惜しみなく、慈愛の全生命を注ぎ込んで、ダイナミックに走り続ける。その深い強靱^{きやうじん}な信念と行動力の原点・原形こそ、青春の日々に鍛え、育^{はぐ}んだ師弟共戦の求道のなかにあったのである。読者は、いまに変わらざる信念、情熱、勇氣に感動と共感を覚えずにはいないであろう。

*

「日記〔上〕」の時代背景を理解していただくために、簡単に解説しておきたい。

著者は、昭和三年一月二日、東京都大田区の大森に生まれた。十九歳の時に、当時、創価学会の再建に着手していた戸田城聖理事長（後に第二代会長）に、友人に誘われて参加した創価学会の座談会で知遇を得て、その深い確信と優^{すぐ}れた人格に感動を覚え、日蓮正宗創価学会に入信した。時に昭和二十二年八月二十四日である。

入信後一年有余の昭和二十三年の秋、戸田理事長の経営する日本正学館に入社が決定し、その編集部で働くことになった。昭和二十四年一月三日から勤務し、少年雑誌「冒険

少年」の編集に携わ^{たずさ}っている。この年の五月から日記は始まっている。

昭和二十五年、日本経済の激動のなかで戸田理事長の事業が行き詰まり、社運が傾いた時には、多くの人が去っていくなかで、一人その支えとなつて懸命に戦った。

元来、著者は身体が弱く、肺結核にも冒^おされ、病魔と戦いながら、社業と、学会活動の激務にすすんで当たった。このため、一時は、体重が四十五キロにまで減少するという危機に見舞われたが、ついに病魔を克服しつつ、事業をも再建していったのである。

昭和二十六年五月三日、戸田理事長が第二代会長に就任してからは、いよいよ本格的な折伏弘教の戦いが展開されて、創価学会が大きく発展を遂げていく。

昭和二十七年二月、蒲田支部の支部幹事として活躍し、二百世帯を越える弘教の成果をあげ、各支部が百世帯の壁を越えられなかった弘教の突破口を開いたのである。

昭和二十七年五月には香峯子夫人と結婚、師の下^{もと}に活動はますます加速度を増していく。

昭和二十八年一月には男子第一部隊長に、昭和二十九年三月には参謀室長の要職に就任する等、学会の中枢に重きをなし、一切を託され、未来の礎^{いしずえ}を築いていくのである。

一方、戸田会長の健康は優^{すぐ}れず、その師に仕えて一人立つ著者の病魔との格闘も、いまだ止まず、さらに激しくなっていた。昭和二十八年ごろには、死を予感するほどに病状

は悪化していたのである。

昭和三十年三月には、北海道小樽市おたるにおいて、身延派日蓮宗との歴史的な「小樽問答」が行われた。この時、双方が司会を立てて進行に当たったが、著者は創価学会側の司会を担当し、日蓮正宗創価学会に勝利をもたらす原動力となったのであった。また、この年は、本格的な関西指導が開始され、いくたびとなく東京・大阪間を往復した。こうしたなかであって、病魔との戦いも続いていた。しかし、戸田会長の信頼を一身に受けて、身の休まる暇もない激闘の日々であった。

*

人は、よき師に巡り会い、求めていくならば英知を開き、またよき友が身近にいれば喜びも倍加するであろう。だが、いつ、どこにあって、そうした師や友と行動を共にすることは不可能である。そうしたなかで、この一書を座右の師とも、友とも思っしよくはって語り合えば、心を打つもの、光るものを感じ、明日への活力が蘇生し、希望と勇気を触発しよくはっされるであらうことを確信するものである。

池田大作全集 第三十六卷 日記

発行日 一九九〇年五月三日

著者 池田 大作

発行者 秋谷栄之助

発行所 聖教新聞社

〒一六〇 東京都新宿区信濃町一八

電話〇三―三五三一六一―(大代表)

振替口座 東京五―七九四〇七

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

*

定価はケースに表示してあります

© 1990 D.I.keda Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えます